鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　7

平成２年度発掘調査報告

平成３年３月

鎌倉市教育委員会

口　絵　1

1．大倉幕府周辺遺跡・調査区全景
（雪ノ下字大倉耕地565番４外地点）

2．長谷小路周辺遺跡・台付甕
（由比ガ浜三丁目194番24地点）

3．北条泰時・時頼邸跡・若宮大路東側の大溝
（雪ノ下一丁目369番地点）

4．由比ガ浜中世集団墓地遺跡・調査区全景
（由比ガ浜二丁目1034番１外地点）間

序　　文

鎌倉市教育委員会
教育長　尾崎　實

近年、鎌倉の街は、古い家屋や店舗の建て替えが相いついでいます。その中で、埋蔵文化財に影響を及ぼす様な大規摸な工事も多く数も多くなりました。このため昭和59年度からは国庫・県費の補助を受けて個人専用住宅等については鎌倉市教育委員会が独自に発掘調査を実施するようにして来ました。

しかし急速な都市化・再開発が進む中で調査が順調に進んできたとは言えません。

郷土の文化財を守るということは市民の責務でありますが、当市のように市街地の中心と遺跡の中心が全く重なってしまうという条件のもとでは、特に市民の皆様のご理解なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査は不可能であるといえましょう。皆様の御協力をお願い申し上げる次第です。工事計画作成に当ってはできるだけ早くから当委員会との協議を行い、文化財の保護の方策を煮つめて行って頂きたいと思います。

本書は平成２年度に国庫・県費補助を受けて、鎌倉市教育委員会が実施した、個人専用住宅・店舗併用住宅建設等に伴う発掘調査の記録です。本書が鎌倉の歴史を明らかにするのに少しでも役立つことを祈念すると共に、調査実施に際してお世話になった調査員をはじめ多くの方々に、心からお礼申し上げます。

例　言

1．本書は平成元年度及び平成２年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査にかかわる発掘調査報告書である。

2．本書所収の調査地点は別表のとおりである。

3．発掘調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財保護課が実施した。

4．出土遺物及び写真・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会文化財保護課が保管している。

5．各調査内容の詳細は、各々の報文を参照されたい。

目　　次

口絵１ …… i

口絵２ …… ii

序　文 …… iii

例　言 …… iv

平成２年度調査の概観 …… 1

１．長谷小路周辺遺跡 …… 11

第一章　遺跡の位置 …… 15

第二章　調査の概要 …… 16

第三章　検出遺構と出土遺物 …… 17

第１節　層序 …… 17

第２節　検出遺構 …… 19

第３節　出土遺物 …… 20

第四章　まとめ …… 24

２．若宮大路周辺遺跡群 …… 33

第一章　調査地点の位置 …… 37

第二章　調査の概要 …… 38

第三章　検出した遺構 …… 38

第四章　出土した遺物 …… 41

第五章　まとめ …… 42

３．浄妙寺旧境内遺跡 …… 45

第一章　調査地点の位置と歴史的環境 …… 48

第二章　調査の経過 …… 50

第三章　検出した遺構 …… 51

第四章　出土した遺物 …… 53

第五章　まとめ …… 58

4．大倉幕府周辺遺跡 …… 63
第一章　遺跡の位置と環境 …… 67
第二章　調査の概要 …… 69
第三章　層序と検出遺構 …… 70
第１節　層序と生活面 …… 70
第２節　トレンチⅠ検出遺構 …… 70
第３節　トレンチⅡ検出遺構 …… 73
第四章　出土遺物 …… 75
第１節　トレンチⅠ出土遺物 …… 75
第２節　トレンチⅡ出土遺物 …… 81
第五章　調査成果と問題点 …… 83
《附篇》大倉幕府周辺遺跡の溝内堆積物の花粉分析 …… 85
5．由比ガ浜中世集団墓地遺跡 …… 101
第一章　地理的・歴史的環境 …… 103
第二章　調査の概要 …… 105
第三章　検出された遺構と遺物 …… 106
第１節　第１面 …… 106
第２節　第２面 …… 112
第３節　第３面 …… 114
第４節　第４面 …… 115
第５節　第５面 …… 118
第四章　まとめ …… 120
6．長谷小路周辺遺跡 …… 129
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 132
第二章　調査の経過と堆積土層 …… 135
第１節　調査の経過 …… 135

第２節　堆積土層 …… 136
第三章　検出された遺構 …… 139
第１節　第１面 …… 139
第２節　第２面 …… 143
第３節　トレンチによる下層の調査 …… 146
第四章　出土した遺物 …… 150
第１節　第１面 …… 150
第２節　第２面 …… 157
第３節　トレンチ …… 162
第４節　近現代建築基礎壙 …… 166
第五章　付編 …… 169
第六章　まとめ …… 179
7．材木座町屋遺跡 …… 197
第一章　調査地点の位置と環境 …… 202
第二章　調査の経過 …… 203
第三章　層序と検出された遺構 …… 203
第四章　出土した遺物 …… 207
第五章　まとめ …… 213
8．理智光寺跡 …… 221
第一章　地理的・歴史的環境 …… 224
第二章　調査経緯 …… 225
第三章　検出遺構 …… 226
第四章　出土遺物 …… 228
第五章　まとめ …… 231
9．北条泰時・時頼邸跡 …… 239

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 242
第二章　調査経緯と堆積土層 …… 244
第三章　検出された遺構と遺物 …… 246
第四章　まとめと考察 …… 269
10. 桑ケ谷療病院跡 …… 281
第一章　歴史的環境 …… 285
第二章　検出した遺構 …… 288
第三章　出土した遺物 …… 291
第四章　まとめ …… 293
11. 桑ケ谷療病院跡 …… 301
第一章　調査地点の位置 …… 306
第二章　調査の経過 …… 307
第三章　層序と検出した遺構 …… 307
第四章　出土した遺物 …… 309
第五章　まとめ …… 311
12. 妙本寺遺跡 …… 317
第一章　調査地点の位置と歴史的環境 …… 320
第二章　検出遺構 …… 320
第三章　まとめ …… 325

平成２年度調査の概観

平成２年度の緊急発掘調査実施件数は12件で、対象面積は、4445㎡であった。前年度の10件、790㎡と比較すると件数・面積共に増大し、ことに面積の大幅増が目立つ。これは、２年度調査地点一覧表の№５由比ヵ浜中世集団墓地遺跡が広大な面積を占めることに起因する。同調査は区分所有法に基づく共同住宅の建て替えに伴うもので、同事業で調査を伴うケースとしては全国的にも始めてであり今年度調査の大きな特徴である。その他自己用専用住宅に関わる調査例の増加傾向は変わらず、また設計内容も地下駐車場を取り入れるなどの土地の多用的有効利用を志向する事例が多い。この傾向は事業者負担の調査でも同様であり、国庫補助事業調査を含めた調査の総件数・面積は増加している。この傾向は今後暫くは続くものと思われるが、昨年度の報告書でも提起した有効な対応方法の策定がますます急がれよう。

１　桑ケ谷療病院跡

国宝銅造阿弥陀如来（大仏）が坐す浄土宗高徳院の南側、東に開口する谷戸は極楽寺開山忍性が社会事業の一環として設けた療病院が存した跡と伝えられる遺跡である。調査地点は谷戸入口近くの長谷三丁目630番１に所在する。平成元年11月、自己用住宅等建設の開発行為に係わる事前相談があり、埋蔵文化財包蔵地内であり試掘調査を実施の上協議を進めることとした。同調査は翌２年３月８日に実施され、数面にわたる中世遺溝面が良好な状態で遺存しているのが確認され、掘削深度が深い駐車場区域については本調査の実施が不可避であると判断された。試掘調査後直ちに、設計変更の可否等についての検討をするが、不可能であると判断された。このため県教育委員会と協議し、土木工事面での協力を得たうえで国庫補助事業調査として実施すべきとの指導を得た。これを受け本調査の実施を前提とした協議を開始することとした。

３月13日、文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、同月19日調査方法等についての打合せを行い、続いて４月20日付けで県教育長から調査実施を本旨とする通知書が事業者宛に送付された。その後数次に及ぶ調査実施方法等に関する打合せを重ねた結果、６月に入ってから調査を実施することで合意した。以上の経過を経て５月24日事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、６月20日から６月30日にかけて発掘調査が取り行われたのである。

調査により13世紀後半から14世紀前半に至る時期の石垣・道路等の諸遺溝が、種々の遺物と共に検出され、貧民救済施設という希有な遺跡を解明する端緒が開かれたのであった。

2　政所跡

鶴岡八幡宮境内の東外郭線から小町大路までの横大路に南面する区域は、鎌倉幕府の庶務全般を執務する政所が存したと目される遺跡である。調査地点は小町大路の北端に面した、遺跡北東隅にあたる雪ノ下三丁目966番１に所在する。

平成元年７月、店舗併用住宅建設に係わる事前相談があり、周辺の調査例に鑑みて試掘調査を経た上で協議を進めるべきである旨を説明した。その上で同月19日試掘調査を実施し、地表下60cmで中世遺溝が良好に残存している状態を確認した。このため、事業者と協議し杭工法による現設計の下では、調査の実施は不可避である旨を説明した。その後、協議の中断期間をおいて平成２年３月調査についての協議を再開した。この中で設計内容の変更がないことが明らかになったため、県教育委員会と対処方法について協議したところ自己用住宅分を対象に国庫補助事業調査として実施するべきとの指導を得た。４月６日、文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、続いて４月20日付けで、県教育長名による発掘調査実施を本旨とする通知書が事業者宛に送付された。４月27日既存建物の解体作業の終了に伴い、具体的な調査方法を協議した後５月８日に事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、６月23日から８月18日にかけて現地調査が行われたのである。

調査により13世紀から14世紀代の建物跡や道路・大溝等の遺溝と、多数の出土品を得て、比較的調査例が希薄であったこの地域の、特に地割に関する考古学的様相を解明する上で多くの成果が得られたと評される。

3　北条泰時・時頼邸跡

平成元年度に実施した先行調査に続いて、建物主体部を対象に行った本調査である。

先行調査区域の杭打ち作業の終了を待って、平成２年７月２日から８月18日にかけて実施された調査により、若宮大路沿いの大溝を中心とする多様な遺溝が発見されるなどの成果が得られた。

4　桑ケ谷療病院跡

遺跡内の№１地点の南側、長谷三丁目630番17に所在する。

平成２年８月、自己用住宅建設に伴う駐車場付設に関する事前相談があり、隣接する№１地点で検出された遺溝等が連続して遺存する確立が高いため、事前調査の実施は不可避であると判断された。このため設計変更の可否についての検討を事業者に依頼したが、設計内容の変更が不可能であると確認されたため、県教育委員会と取り扱い方について協議したところ、国庫補助事業調査として実施すべきとの指導を得たので、文化財保護法第57条の２の届出書の提出を求め調査方法等に関する打合せを継続した。９月４日届出書が提出され、続いて９月13日に県教育長名で調査実施を本

旨とする通知書が事業者宛に送付され、さらに事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出された。以上の経過を経て、9月25日から10月3日にかけて発掘調査が行われたのである。

調査により13世紀から14世紀にかけて築造された3時期に亘る地形面が検出されるなどの諸成果が得られ、療病院に関する新たな考古学的資料がもたらされたのである。

5　由比ヵ浜中世集団墓地遺跡

滑川河口の西側区域は、埋葬人骨の出土例が他に比べて格段に多く標記の遺跡名が付される所以でもある。調査地点は、由比ヵ浜二丁目1034番1外に所在する。

平成元年7月、開発事業計画に係わる事前相談があり既存の鉄筋造建築物が建っている所ではあるが周辺の調査例等から推して遺構が残存する可能性も高いものと判断されるため、試掘調査を実施のうえ協議を進めることとした。8月10日、試掘調査を行なったところ古代から中世にかけての遺構が良好に遺存していることが確認された。9月7日、事業者から工法及び工程等について具体的な説明がなされ、施工範囲全体を対象とした掘削を伴う計画であることが明らかになった。このため設計変更の可否を検討依頼するが、不可能であるとされたため直ちに調査の実施方法等についての協議を開始したのである。その後の数次に亘る協議の中で、同事業が建物の区分所有等に関する法律（区分所有法）に基づく事業であり、実質的には専用住宅の建替えと同様の扱いが妥当であることが判明した。このため取り扱い方法を文化庁・県教育委員会と協議した結果、現居住者分の建替え戸数が占める区域（3800㎡）を対象にした国庫補助事業調査を2年度に亘って実施すべきとの指導を得た。これを受けて直ちに調査方法等の協議を開始し居住者の移転等が終了した後の、8月30日に文化財保護法第57条の2の届出書が提出され、続いて9月19日付けで県教育長名により調査実施を本旨とした通知書が事業者宛に送付された。さらに、事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、既存建物の解体及び土留作業の終了後の10月5日から今年度分の発掘調査が開始されたのである。

現在までの調査により13世期末から14世紀後半期に亘る約200軒の方形竪穴建物跡や道路・埋葬人骨などが多種多量の遺物と共に検出され、いわゆる前浜の考古学的様相が具体的に判明されつつあり、平成3年度の調査結果が期待される。

6　政 所 跡

遺跡内の№2地点の北側に隣接する、雪ノ下三丁目965番に所在する。

平成2年4月、自己用店舗併用住宅の建設計画に係わる事前相談があり、№2地点の調査結果に鑑みて、発掘調査が必要であることを説明した。そして直ちに設計変更の検討も含む協議を開始するが、変更が不可能であると判明したので県教育委員会と協議し、国庫補助事業調査として実施す

べきとの指導を得た。5月17日文化財保護法第57条の2の届出書が提出され、これを受けて同月21日に調査方法等を協議し、杭打箇所及び布基礎区域以外は掘削深度が遺構面まで達しないことが判明したため、当該域を対象にトレンチを設定し調査することと定めた。6月7日付けで県教育長名による調査実施を本旨とする通知書が事業者宛に送付された。8月20日、工事に係わる工程表が提示され、続いて8月22日に事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出された。そして既存建物の解体を待って10月14日から11月6日にかけて調査が行なわれたのである。

調査により道路状の地形面などが検出され、同遺跡に関する新たな資料が得られたのであった。

7　若宮大路周辺遺跡群

若宮大路を中心とする広大な遺跡内の、大路の西側に並走する通称小町通り沿いに位置した小町二丁目12番15に所在する。

平成2年3月、店舗併用住宅建設に係わる事前相談があり、隣地での調査結果から事前調査の実施の可能性が高いため、引き続き協議をすすめることとした。4月18日、事業計画の概要を示す資料が送付され、直ちに設計変更の可否を協議する変更が不可能であると確認された。5月30日に文化財保護法第57条の2の届出書が提出され、対処方法を県教育委員会と協議したところ貸店舗部分を除く区域を対象に国庫補助調査とすべしとの指導を得た。6月19日、調査実施方法等を事業者と協議し、杭打箇所を対象に先行調査を実施し杭工事終了後本調査を行なうことでほぼ協議を整えた。6月22日付けで県教育長名による調査実施を本旨とする通知書が事業者宛に送付され、続いて8月9日に事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出された。その後、細部の調整協議を経て建物解体、土留工事後の11月2日から11月16日にかけて先行調査が、12月25日から平成3年3月30日の間に本調査がそれぞれ実施されたのである。調査により、13世紀から14世紀代の建物跡や平安期の井戸等が発見され、同遺跡に関する新たな資料が得られた。

8　台山遺跡

鎌倉市内でも最も原始・古代遺跡が豊富な台山遺跡内のほぼ中央域、台字西の台1624番3外に所在する。

平成2年8月、自己用住宅建設に係わる確認申請の相談があり、試掘調査を経たうえで協議をすすめることとした。9月19日、同調査を実施したところ地表下50cm～80cmで中世遺構面が検出されたため、地下駐車場区域については事前調査の実施が不可避であることが判明した。このため設計変更の可否についての検討を依頼したところ、困難である旨の回答を得た。これを受けて、県教育委員会と協議し国庫補助事業調査を実施すべきとの指導を得たので、直ちに全体工程等の調整を図った。10月1日、文化財保護法第57条の2の届出書が提出され、同月15日に調査実施方法につい

ての協議を整えたのである。10月22日、県教育長名の調査実施を本旨とする通知書が事業者宛に送付されさらに事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出されたのを受けて、平成２年11月８日から13日にかけて発掘調査が実施されたのである。

調査によって14世紀代の、溝状遺溝等が発見され、同遺跡内の中世に関する新たな資料が得ることができた。

9　妙本寺遺跡

日蓮宗長興山妙本寺の旧境内域と目される比企ケ谷を中心とする遺跡内の、常栄寺北側に隣接する大町一丁目1158番５に所在する。

平成２年10月、自己用住宅建設に係わる事前相談があり、試掘調査を実施し協議をすすめることとした。11月19日に行われた試掘調査によって地表下120cmに良好な状態で残存する中世遺構が確認され、現設計内容では２ｍ以上の掘削を伴う車庫区域を対象とした事前調査の実施が不可避であると判明した。しかし計画変更が困難であるとの回答を得たため、県教育委員会の指導により国庫補助事業調査をすることとし、その具体的実施方法の協議を11月27日に行なった。11月29日、文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、全体の工程を調整した後に調査実施依頼書が事業者から教育委員会に提出されたのを受けて、12月３日から19日にかけて調査が実施されたのである。

調査により14世紀から15世紀代にかけての６枚に及ぶ道路遺構が発見され。62年度に北側地点で行なわれた調査結果と併せ、中世町割りに関する新たな成果が得られたと評されよう。

10　田楽辻子周辺遺跡

大御堂ケ谷前（勝長寿院跡）から釈迦堂ケ谷・犬懸ケ谷前を経て報国寺方面へ抜ける小道は田楽辻子と称され、周辺には田楽師の居住域と想像されている。調査地点は遺跡内の杉本寺に北面する浄明寺字宅間562番33に所在する。

平成２年７月、自己用住宅建築に係わる事前相談があり、周辺の調査状況から推して試掘調査を実施の上協議をすすめることとした。８月20日、同調査を行ったところ地表下50cmで中世・古代の遺構面を検出したため、掘削を伴う地下駐車場区域を対象とした事前調査が不可避であると判明した。これに基づき設計変更の可否について検討を依頼したが不可能であると明らかになったため、県教育委員会の指導により国庫補助事業調査として実施することとした。平成２年９月13日、文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、続いて同月27日調査実施を本旨とする県教育長名の通知書が事業者宛に送付された。その後調査実施方法を巡って数次に亘る協議を重ね、11月26日、事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出されたのを受けて、12月５日から19日にかけて調査が実施されたのである。

調査により13世紀代の溝状遺溝が検出されるなどの成果が得られた。

11　無量寺跡

鎌倉時代の有力御家人、安達氏と関係の深い無量寺跡内の御成町39番6に所在する。

平成2年3月、自己用住宅建設に係わる開発行為の事前相談があり、試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。5月22日、同調査を実施したところ家屋建設予定地内は攪乱を受けた部分が多いものの、防災工事等を施工する背後の山腹域にやぐら等の存在が確認されたため、設計変更も含めた協議を行った。ここで設計変更は不可能であるであると判明したため、やぐらを主とした区域を対象に国庫補助事業調査を実施すべきとの県教育委員会の指導に基づき調査方法等の打合せを開始した。しかし、開発計画の調整等に日時を要し、工程の概要が決定した後の12月4日文化財保護法第57条の2の届出書が提出され、12月26日に県教育長名による調査実施を旨とする通知書が事業者宛に送付された。そして、調査実施依頼書が事業者から教育委員会に提出されたのを受けて平成2年1月25日から3月30日にかけて発掘調査が行われたのである。

調査により建物跡と4穴のやぐらとが発見されるなどの成果が得られたのである。

12　若宮大路周辺遺跡群

遺跡内のJR横須賀線ガード南側、御成町872番14に所在する。

平成2年8月、店舗併用住宅建設に係わる事前相談があり、試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。8月27日に同調査を実施したところ、中世遺構面が検出されたため設計変更の可否を検討依頼したが、変更が不可能であると判明したので、貸店舗部分を除く区域を国庫補助事業調査を実施すべきとの県教育委員会の指導に基づき調査実施方法等の協議を開始した。10月15日、文化財保護法第57条の2の届出書が提出され、11月26日県教育長名による調査実施を旨とする通知書が事業者宛に送付された。その後調査方法の細部に関わる協議を重ね、平成3年1月21日に調査実施依頼書が事業者から教育委員会に提出され、2月13日から3月30日にかけて調査が実施されたのである。

調査により、若宮大路沿いの大溝や建物跡が発見されるなどの成果が得られた。

平成２年度調査地点一覧

（※印は本書所収遺跡）

No.	遺跡名	所在地	事業者	調査原因	種別	面積	調査期間
※1	桑ケ谷療病院跡（No.294）	長谷三丁目630番１	朽木　彰	専用住宅	療病院	50m²	2.6.20～2.6.30
2	政所跡（No.247）	雪ノ下三丁目966番１	西山富美江	店舗併用住宅	官衙	60m²	2.6.23～2.8.18
※3	北条泰時・時頼邸跡（No.282）	雪ノ下一丁目369番	西山　弘	事務所併用住宅	城館	100m²	2.7.2～2.8.14
※4	桑ケ谷療病院跡（No.294）	長谷三丁目630番17	多根　伸彦	専用住宅	療病院	50m²	2.9.25～2.10.3
5	由比ガ浜中世集団墓地遺跡（No.372）	由比ガ浜二丁目1034番１外	岡田　雅雄	自己用兼共同住宅	墓地	3800m²	2.10.5～3.3.30
6	政所跡（No.247）	雪ノ下三丁目965番	石井　豊美	店舗併用住宅	官衙	70m²	2.10.14～2.11.6
7	若宮大路周辺遺跡群（No.242）	小町二丁目12番15	竹内　一	店舗併用住宅	都市	80m²	2.11.2～2.11.16 2.12.25～3.3.30
8	台山遺跡（No.29）	台字西ノ台1624番３外	長谷部尅彦	専用住宅	散布地屋敷	17m²	2.11.8～2.11.13
※9	妙本寺遺跡（No.232）	大町一丁目1158番５	中丸　京治	専用住宅	寺院	18m²	2.12.3～2.12.15
10	田楽辻子周辺遺跡（No.33）	浄妙寺字宅間562番33	酒井　敦生	専用住宅	屋敷	30m²	2.12.5～2.12.19
11	無量寺跡（No196）	御成町39番６	神田　原卓	専用住宅	寺院	100m²	3.1.25～3.3.30
12	若宮大路周辺遺跡群（No.242）	御成町872番14	松田　正次	店舗併用住宅	都市	70m²	3.2.13～3.3.30

本書所収の平成元年度調査地点

No.	遺跡名	所在地	事業者	調査原因	種別	面積	調査期間
13	長谷小路周辺遺跡 (No.236)	長谷二丁目252番1	大石 雅樹	自己店舗併用住宅	都市	60㎡	元.7.6～元.7.20
14	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目69番6外	阿部 卓也	事務所併用住宅	都市	20㎡	元.7.24～元.7.31
15	浄妙寺旧境内 (No.408)	浄妙寺90番1	宮本 耕一	専用住宅	寺院	50㎡	元.9.19～元.9.30
16	大倉幕府周辺遺跡 (No.49)	雪ノ下字大倉耕地565番4外	大塚 武雄	専用住宅	都市	100㎡	元.10.5～元.10.31
17	由比ガ浜中世集団墓地遺跡 (No.372)	由比ガ浜二丁目1015番29外	水谷源太郎	専用住宅	墓地	130㎡	元.10.11～元.11.15
18	長谷小路周辺遺跡 (No.236)	由比ガ浜三丁目194番24	矢島 豊	店舗併用住宅	都市	80㎡	元.11.20～2.2.23
19	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目144番3	森本 千代	専用住宅	都市	100㎡	2.1.16～2.2.6
20	理智光寺跡 (No.265)	二階堂字稲葉越802番7	西山 太吉	専用住宅	寺院	70㎡	2.3.1～2.3.12

平成２年度の緊急発掘調査地点（１～12）と本書掲載の平成元年度調査地点（13～20）（遺跡名は一覧表参照）

1．長谷小路周辺遺跡（No.236）

長谷二丁目252番1地点

例　言

1．本報は、鎌倉市長谷二丁目252番１地点に所在する遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は国庫補助事業として、平成元年７月６日～７月20日にかけて実施された。調査対象面積は60㎡である。

3．本報の執筆・編集は菊川英政が、図版作製は長田夏子、片岡睦枝が担当した。

4．本報に使用した写真は、遺構を菊川が撮影し、遺物は木村美代治が撮影した。

5．現地での調査体制は以下の通りである。

主任調査員　菊川英政
調　査　員　関口真理
調査補助員　南保由利
協 力 機 関　（社）鎌倉市高齢者事業団

6．出土品等の発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

例言 …… 12
目次 …… 13

本 文 目 次

第一章　遺跡の位置 …… 15
第二章　調査の概要 …… 16
第三章　検出遺構と出土遺物 …… 17
　第１節　層序 …… 17
　第２節　検出遺構 …… 19
　第３節　出土遺物 …… 20
第四章　まとめ …… 24

挿 図 目 次

図１　調査地付近の遺跡 …… 14
図２　調査範囲 …… 16
図３　トレンチ東壁土層図 …… 17
図４　遺構平面図 …… 18
図５　第１面上包含層出土遺物（１） 20
図６　第１面上包含層出土遺物（２） 21
図７　第２面上包含層出土遺物 …… 23

図 版 目 次

図版１　調査地点近景・調査風景 … 25
図版２　第１面全景 …… 26
図版３　第２面全景 …… 27
図版４　井戸・鉄滓出土状態 …… 28
図版５　柱根・下駄出土状態 …… 29
図版６　出土遺物（１）…… 30
図版７　出土遺物（２）…… 31

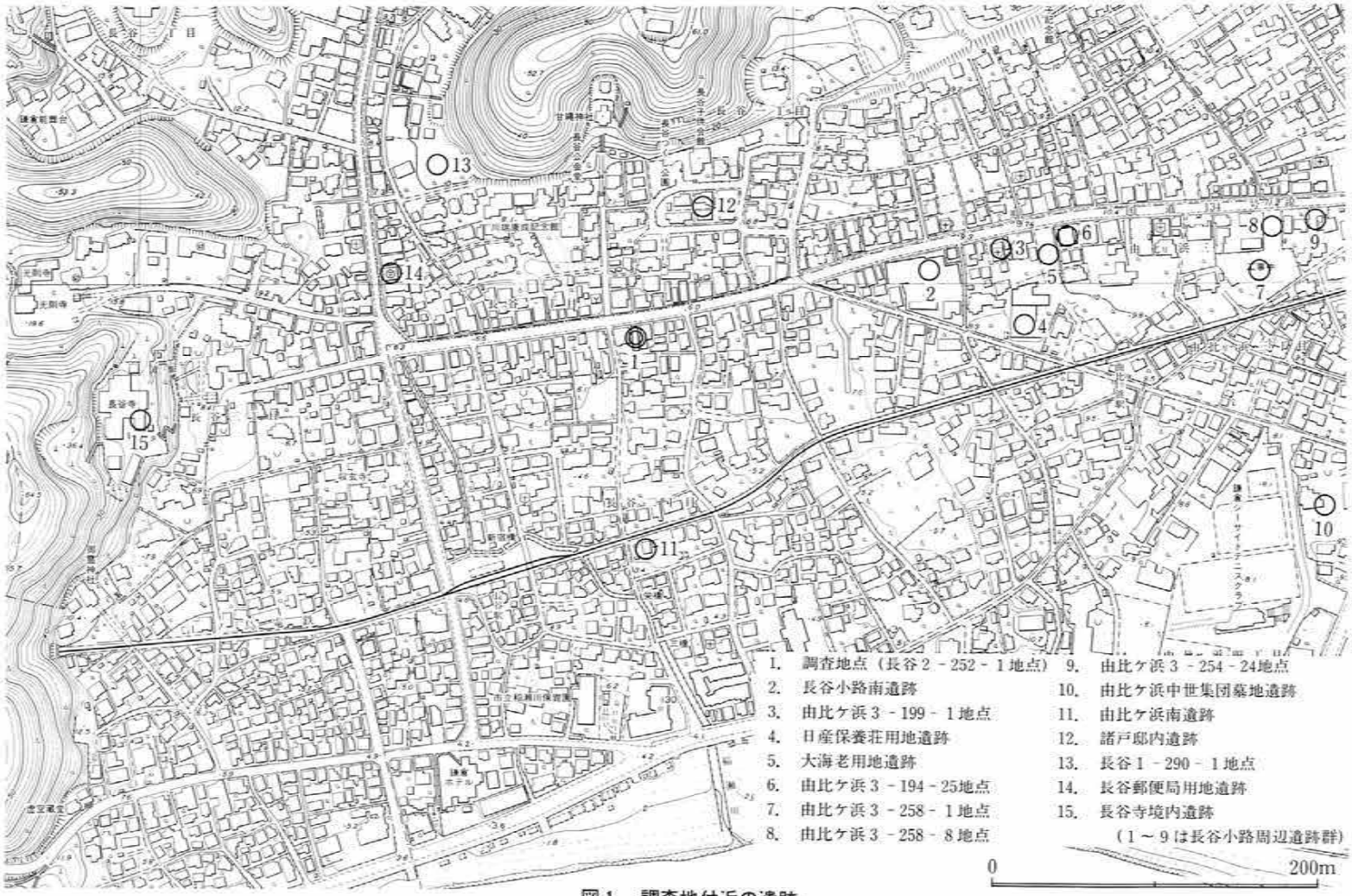

1. 調査地点（長谷２－252－１地点）
2. 長谷小路南遺跡
3. 由比ケ浜３－199－１地点
4. 日産保養荘用地遺跡
5. 大海老用地遺跡
6. 由比ケ浜３－194－25地点
7. 由比ケ浜３－258－１地点
8. 由比ケ浜３－258－８地点
9. 由比ケ浜３－254－24地点
10. 由比ケ浜中世集団墓地遺跡
11. 由比ケ浜南遺跡
12. 諸戸邸内遺跡
13. 長谷１－290－１地点
14. 長谷郵便局用地遺跡
15. 長谷寺境内遺跡
（１～９は長谷小路周辺遺跡群）
0
200m

図１　調査地付近の遺跡

第一章　遺跡の位置

若宮大路の下馬交差点から国道134号線を西に進み、長谷寺へと突きあたる少し手前、ちょうど甘縄神社の前面に遺跡は所在する。神奈川県遺跡台帳によれば、国道134号線と江ノ島電鉄線路とに挟まれた地域は、長谷小路周辺遺跡（No.236）として一括されており、今回調査された地点は、同遺跡範囲のなかで最も西側に位置している。

遺跡名に冠された“長谷小路”という名称は、『吾妻鏡』には見られず、“長谷”・“長谷寺”という名もでてこない。長谷寺は天平八年（736）の草創と伝えるが、寺に残る記銘資料からは、同寺が鎌倉時代中期にはできており、末期頃はかなり大きな堂であった事が知られるだけである。おそらく、長谷小路の名は、長谷寺が広く人々に信仰され有名となった後に生まれた名称であろう。鎌倉時代、由比ガ浜とその背後に広がる砂丘地帯は“前浜”と呼ばれ、西は稲瀬川、東は滑川を境としていたようである。現在の稲瀬川は遺跡地の西約140mを流れている。

中世においても、遺跡地付近は鎌倉の西端部ともいうべき場所であった。『吾妻鏡』から関連記事を拾うと、元仁元年（1224）十二月に北条義時が四角四境祭を行った時、鎌倉の四つの境として東六浦・南小壺・西稲村・北山ノ内をあげている。稲村は遺跡地西方、長谷寺のある丘陵尾根を越えた地で、建長六年（1254）四月十八日条によれば、相模国大庭御厨であったことがわかる。また、遺跡地の前方、甘縄神社のある辺りも大庭御厨の飛地ではなかったかとされている。更に、甘縄神社の北西方向、大仏（高徳院）のある谷は、暦仁元年（1238）三月二十三日条をみると、相模国深沢里と記されていることから、丘陵西側に本拠を置く深沢の一部に属していたようである。

このように、遺跡の所在する地点は、いわば鎌倉のはずれにあたり、“前浜”と呼ばれる砂丘上に位置している。前浜での生活状況は、多くの屋敷が建ち並ぶ都市部分とは一線を画し、職能集団の居住を主体とした比較的自由な空間であったらしい。近年発掘を実施した近隣の遺跡からは、そうした生活を裏付ける資料が多く発見されている。遺物としては骨角製品やその未製品、鉄滓や鞴の羽口といった鍛冶・鋳造関係遺物の出土が目立ち、建築址では半地下式の方形竪穴（住居 or 倉庫 or 作業場？）が集中する傾向があり、街中とは大きく異なる様相を呈している。

現時点までに、概要報告ないし報告書の刊行された遺跡を以下に掲げた。頭に付した番号は図１中の遺跡番号である。参照されたい。なお、本文作製には、高柳光寿『鎌倉市史・総説編』を参考としたことを付記しておく。

2. 斉木秀雄『長谷小路南遺跡』　同遺跡発掘調査団　昭和61年
3. 斉木秀雄『由比ケ浜三丁目199番１地点遺跡調査報告』　同地点所在遺跡発掘調査団　平成２年
6. 斉木秀雄『由比ケ浜三丁目194番25外遺跡調査報告』　長谷小路遺跡発掘調査団　1990年
8. 斉木秀雄「長谷小路周辺遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書６』　鎌倉市教育委員会　平成２年
12. 松尾宣方「伝安達泰盛邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』鎌倉市教育委員会　昭和58年
13. 斉木秀雄『長谷１丁目290－１地点遺跡』　高徳院周辺遺跡発掘調査団　1989年
14. 玉林美男「長谷小路周辺遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書４』　鎌倉市教育委員会　昭和63年
15. 玉林美男『海光山慈照院長谷寺』長谷寺観音堂改築工事出土文化財調査団　昭和60年

第二章　調査の概要

発掘調査は平成元年７月６日から開始され、同年７月20日を以って終了した。当初、調査対象地の東西両側端に２箇所のトレンチを設定し、順次発掘を行なう予定であったが、東側トレンチで地表下２ｍまで発掘した結果、周囲の地盤が軟弱な砂質土であり、西側トレンチを発掘する際に、調査区外の部分まで崩落する危険が予想された。また、幅1.5～２ｍという狭小な範囲では遺構検出もままならず、大した成果も期待できないと判断された。よって、東側トレンチのみを発掘し、調査を終了することとなった。

調査は地表下90cmまで重機で掘削し、以下は手掘りで進められた。地表下２ｍまでに２枚の生活面が確認され、上位のものを第１面、下位を第２面とした。中世基盤層は、トレンチの両端を深く掘り下げて検出に努めたが、予想以上の湧水量と壁面崩落の速さのため、途中で断念せざるを得なかった。

遺構の実測は、任意の点（HP１・HP２）を設定し、その各点から平板測量で記録した。位置関係は図２に示してある。

以下は調査に関する日誌抄である。

７／６　重機による表土掘削。立ち会い。
／７　調査開始。
／10　台風のため壁面崩落。水抜き作業。
／11　崩落箇所の復旧と第１面精査。
／15　第１面調査終了。第２面検出作業。
／17　井戸写真撮影。
／19　第２面調査終了。全景写真。
／20　中世基盤層確認作業。各種図面類の点検。遺物・機材類の撤収。調査終了。

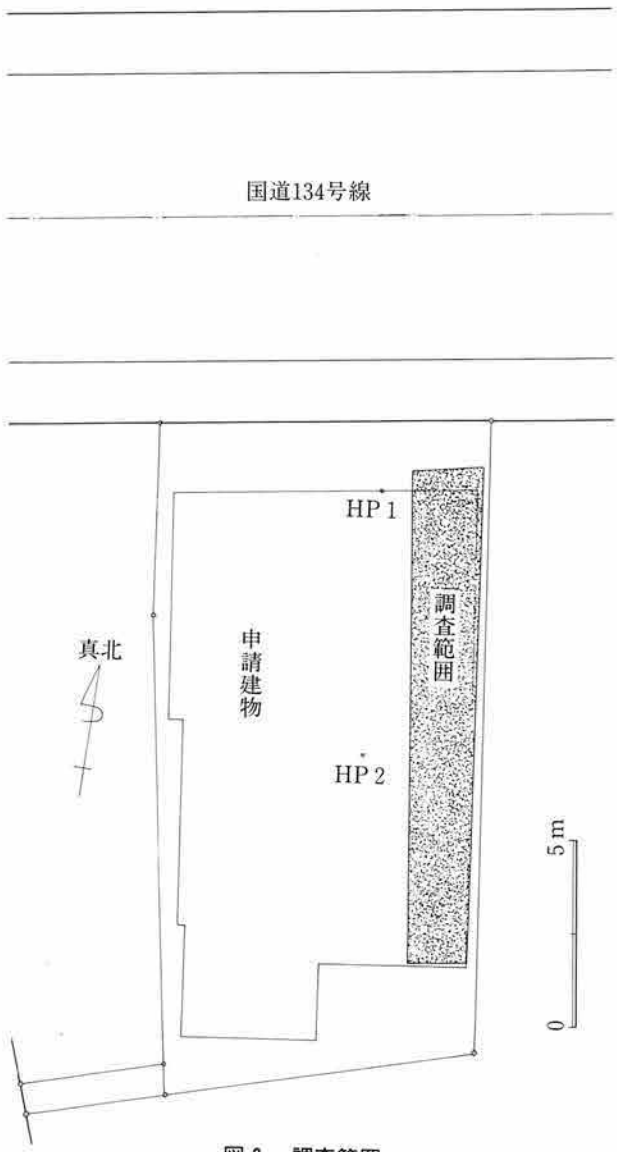


図２　調査範囲

第三章　検出遺構と出土遺物

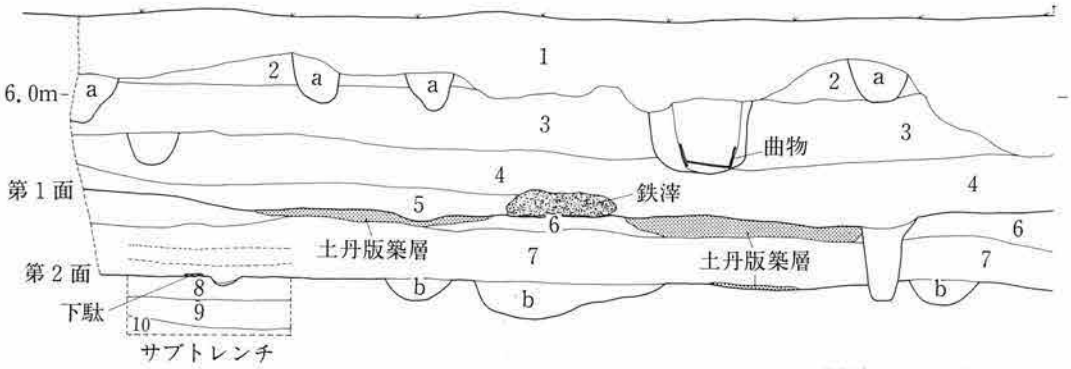
第１節　層序

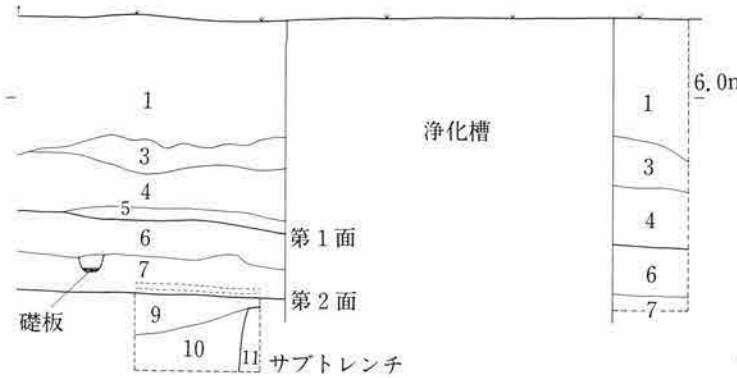
トレンチ壁面の土層観察によって、堆積層は緩く南へ傾斜していることがわかった（図３）。細分した各層のうち、２層中からは幕末以降の染付片、３層を切り込む土壙中からは結桶と板ガラス片が出土している。４層以下が中世遺物包含層となっており、７層から砂を主体とした土層に変化する。11層は粒子の粗い灰白色砂層で、中世基盤層ではないかと考えている。

生活面としたのは６層上面（第１面）と８層上面（第２面）で、土丹を潰した版築面が部分的に存在し、また、第２面上には紛砕した貝殻粒が一面に撒かれているのが特徴といえよう。第１面の標高は約5.0m、第２面は約4.5m の所で検出された。

第１面と第２面との間、つまり７層中には、極く薄い炭層が最低２枚は確認することができる。しかし、面としての広がりは不明瞭で、正確な炭層の枚数も把握するに至っていない。生活面としては成り立たないものと思われる。

蛇足ではあるが、調査地点での湧水は標高5.2m 程から始まり、5.0m 以下では常時水中ポンプ





1. 茶褐色土　土丹塊、ガラス、コンクリート片を含む。（表土）
2. 暗茶褐色砂質土　土丹粒を微量含む。締り弱い。染付小片を混入。
3. 暗茶褐色砂質土　２層に似る。締り強い。
4. 暗茶褐色土　小～中形土丹を多く含む。（中世遺物包含層）
5. 暗褐色土　炭化物を多く混入。鉄滓、羽口が多く出土。
6. 暗茶褐色土　小～中土丹を多く含む。部分的に土丹版築層がみられる。（第１面）
7. 暗茶褐色砂質粘土　最低２枚の薄い炭層を挟むが、部分的なため、分層は不可能。下部に木片を多く含む。
8. 暗灰褐色砂質粘土　茶褐色粘土ブロックを含む。上面に貝殻粒子がみられる。（第２面）
9. 暗茶褐色粘土　木片を含む。
10. 暗青灰色砂　茶褐色粘土ブロックを含む。

a　小～中形土丹を主体とする覆土。
b　粘土を主体とし、木質腐蝕土を挟む。

0　2m

図３　トレンチ東壁土層図

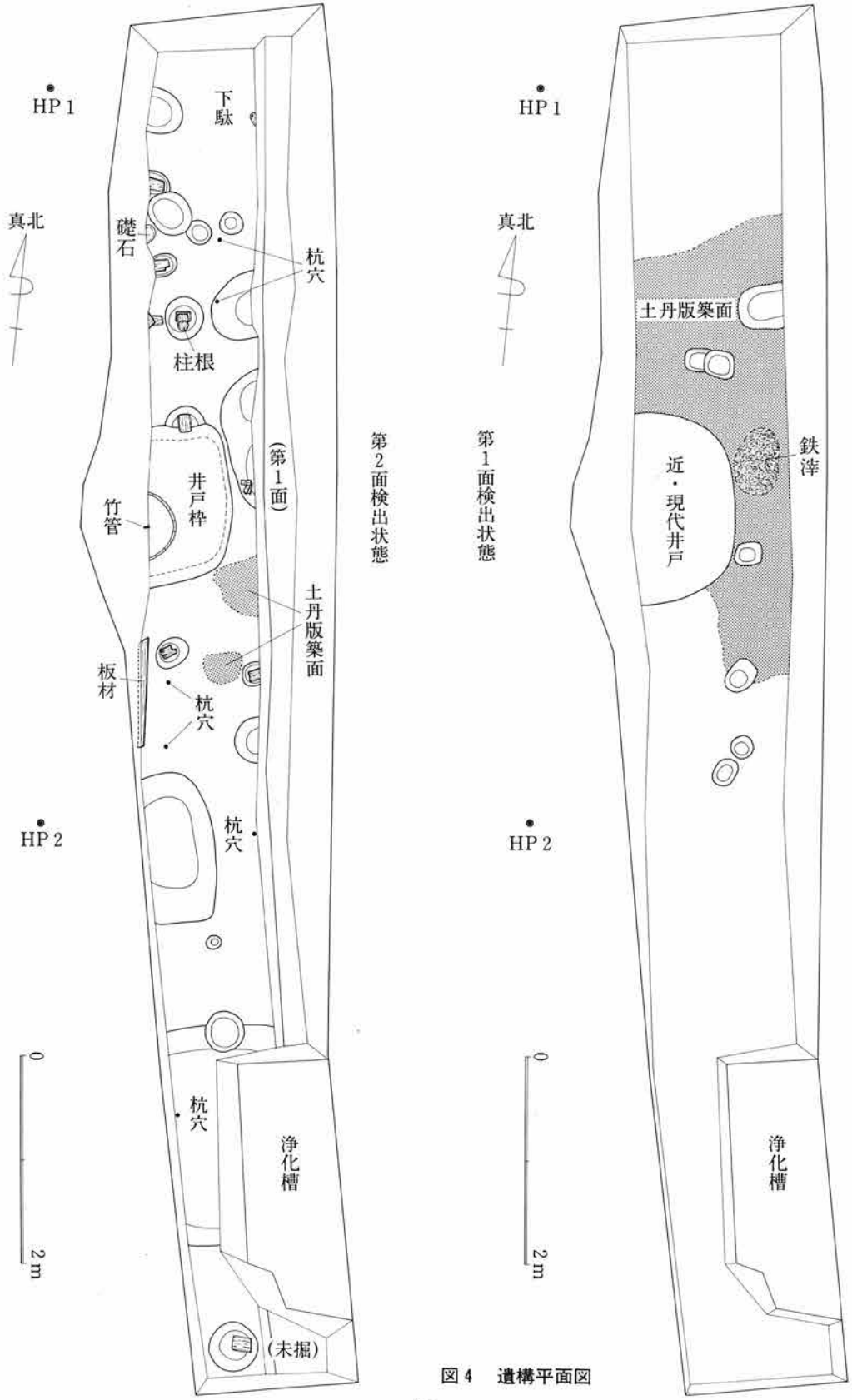

HP 1
真北
下駄
礎石
杭穴
柱根
井戸枠
竹管
(第1面)
土丹版築面
板材
杭穴
杭穴
HP 2
杭穴
浄化槽
(未掘)
0
2 m
第2面検出状態
HP 1
真北
土丹版築面
鉄滓
近・現代井戸
第1面検出状態
HP 2
浄化槽
0
2 m

図4　遺構平面図

で排水しなければならない状態であった。今後の調査の参考としてほしい。

第２節　検出遺構

第１面は地表下1.6m、標高5.0m程の所で検出された。上面には極く薄い炭層が乗り、一部に土丹版築面もみられた。中央部より北側は面として明瞭に識別できるが、南側部分は軟弱で、遺構も検出されなかった。南端の掘り残し部分は現代の浄化槽である。

柱穴は小数であるがみつかっている。多くは１辺20～30cm程の長方形プランを呈し、確認面から30cm前後の深さをもっている。柱の並びに関しては不明といわざるを得ない。第１面での大きな特徴は、土丹版築面上に残された鉄滓の塊とトレンチ北端部付近の包含層（図３－５層）から多量に出土した鞴の羽口にあるといえる。鉄滓は小塊を寄せ集めて、一つの塊状になったもので、取り上げの際にはバラバラに分れてしまった。土壙等の遺構が存在したのかも知れないが、確認はできなかった。いずれにしても、第１面上の鍛冶・鋳造関係遺物の多さから、付近に関連遺構が存在することは確実であり、調査地点はそのゴミ捨て場的な性格をもっていたのかもしれない。

第２面は第１面の下、標高4.5m程で検出された。土丹版築面は一部にみられるが、全体に細かく破砕された貝殻粒をまき、生活面としていたようである。検出された遺構には、井戸・柱穴・杭穴・土壙がある。

井戸はトレンチのほぼ中央部西壁寄りにある。既に表土掘削時点で存在が確認された近代以降の井戸であるが、第２面精査の際に井筒の上部が露出したため測図することにした。井戸掘り方は１辺約1.5mの方形で、井筒は若干南寄りに埋置されている。井筒は幅11cm、厚さ４cm、長さ45cm以上の板材を直径約67cmの円形に組み、上端面から５cm下と35cm下の２箇所を竹皮製のタガで止めている。残念ながら、それ以下の井筒の状態は調査することができなかった。なお、井筒のほぼ中央、トレンチ壁面にかかって“息抜きの竹”が検出された。長さ56cm程が遺存しており、井戸埋めの儀式が行われたことを示している。井筒内からは針金、ガラス製のおハジキ、瓦片が出土した。

柱穴はトレンチ中央部から北部にかけて検出された。滞水していたためか柱穴内に礎板・柱根が遺存するものが多い。礎板は短辺10～12cm、長辺15～19cm、厚さ1.5cm程の板材を主体とするが、厚さ３×５cm程の台形状のもの、一部に矩形の抉りが入ったものもみられ、何かの残材を利用したと考えられる。柱根は井戸の北側にある柱穴内に遺存した。直径10cmの円柱で約27cmが残る。柱穴相互の関連性は不明である。

杭穴は６箇所で検出された。杭自体はほとんど腐蝕していたが、かろうじて計測できた杭は、短辺２cm、長辺４cm、先端から10cmまでを尖らせており、約30cmが遺存した。杭は約60cmの間隔で打たれた２箇所を除き、規則性や他の遺構との関連性を見出せるものはない。

土壙は概して浅いものが多く、覆土中には通称“馬糞土”と呼ばれる木質腐蝕層が堆積し、遺物はほとんど出土していない。トレンチ南部に大形の土壙がみられる程度で、調査範囲が狭小なため完掘できたものはない。

第３節　出土遺物

包含層中から出土した遺物がほとんどであるため、そのなかから測図可能な遺物を選んで図示した。小片を含めて極力多くを掲載したかったのであるが、時間的制約の都合上、小数にとどめざるを得なかったことが残念である。図示した遺物には通し番号を付し、１～19までが第１面上包含層出土、以下が第２面上包含層出土の遺物である。

１～５はかわらけ皿。１は器壁の薄いタイプである。

６は山茶碗窯系捏ね鉢。内面に磨耗痕が残る。

７は瀬戸窯産の卸し皿。内外面に薄く灰釉がかかる。

８は二彩盤。舶載品である。内面には文様の一部らしき３条の沈線がみえる。内面下部に黄釉を施し、その他の部分は緑釉をかけている。推定口径32cm。

９～10は常滑窯産の捏ね鉢。９は口唇端部を下方へ引き出している。10は口縁部内面にスタンプを押捺している。推定口径32.6cm。

11～12は常滑窯産の甕。小片のため口径不明。 12は時期的に後出するタイプである。13はかわらけ皿。完形品である。内面に鉄滓の塊が付着しているが、かわらけ皿自体は火熱を受けた形跡がない。第１面上で検出された鉄滓塊の中から出土したものである。14～16は鞴の羽口。ある程度の形状を残すものは６本出土したが、そのうちの３本を図示した。先端部は溶解物が厚く付着し

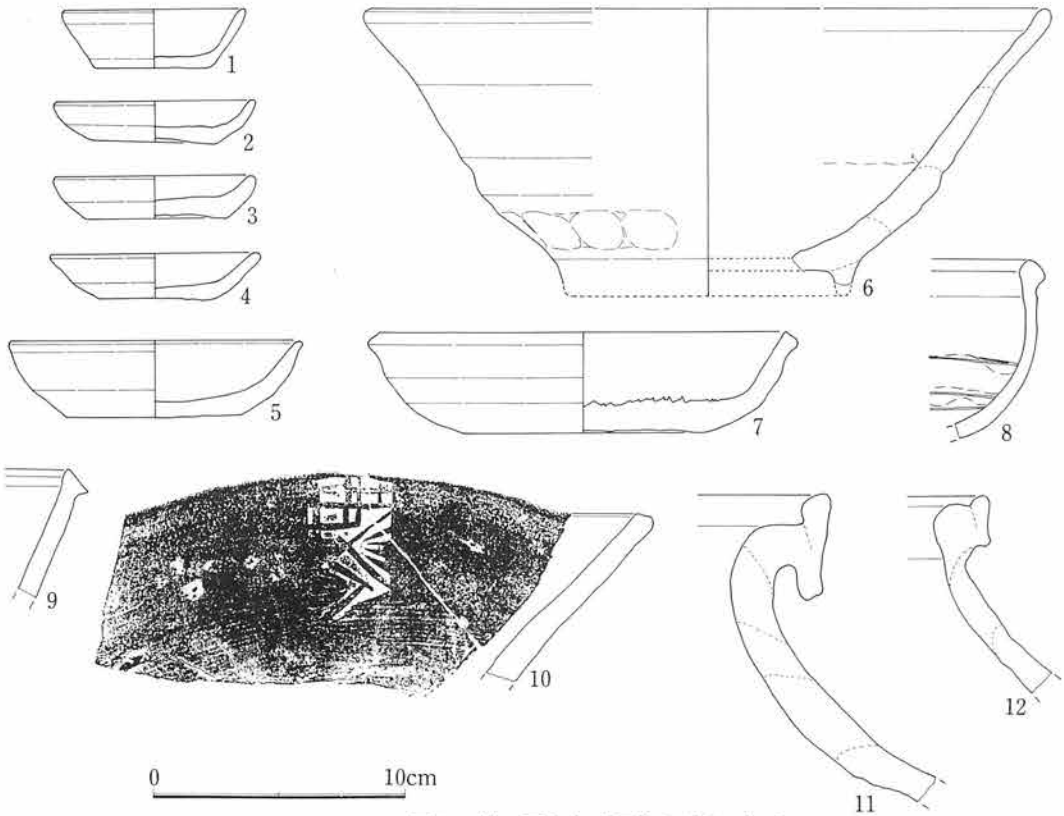


図５　第１面上包含層出土遺物（１）

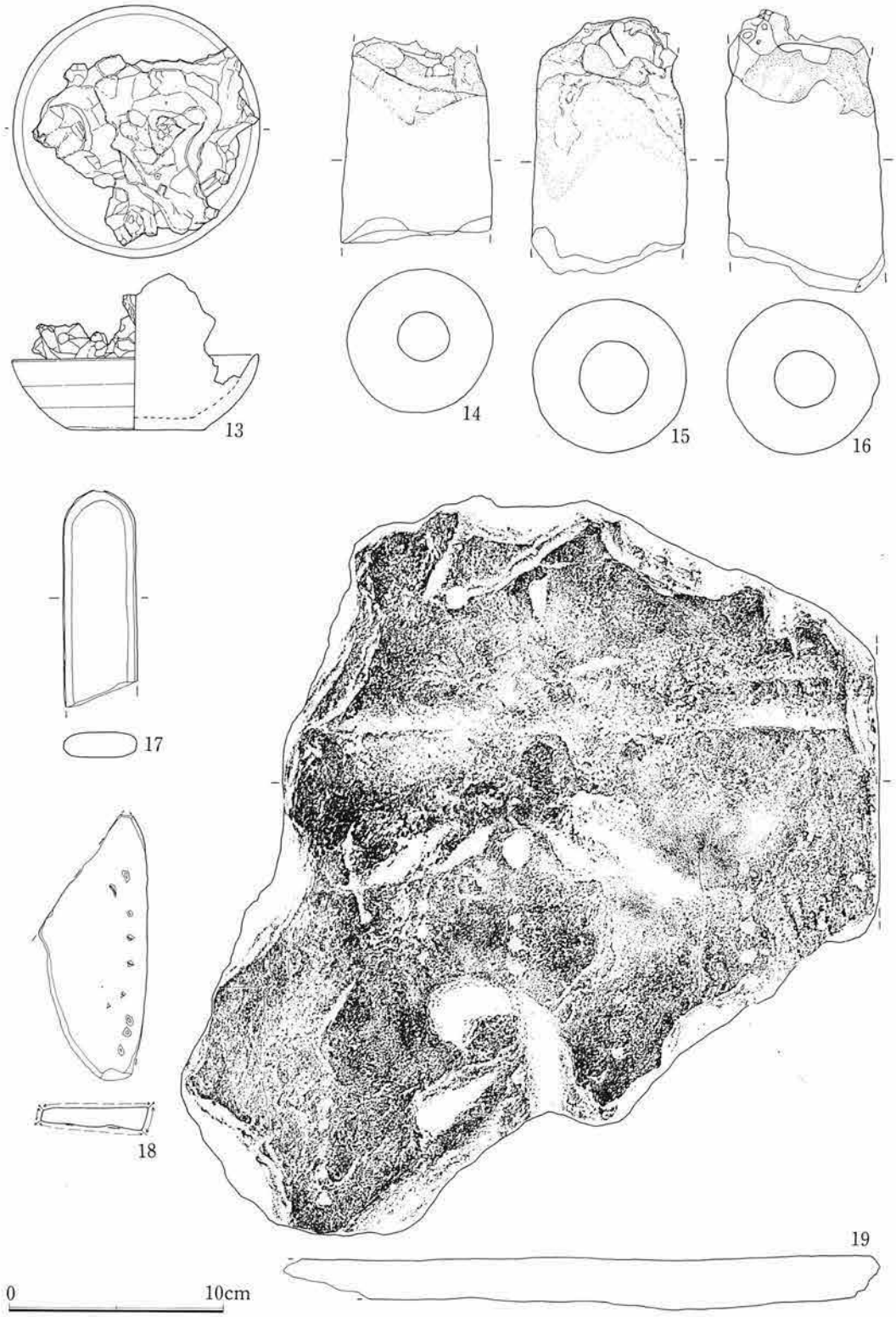


図6　第1面上包含層出土遺物（2）

ている。トレンチ北端部で比較的集中して出土した。

17は砥石。仕上げ砥に分類される。第１面上検出の鉄滓塊の上に乗った状態で出土した。扁平であるが、先端部は丸味を帯びている。粘板岩製。

18も砥石。粘板岩製の仕上げ砥である。右側面は加工痕を残す。上端部分には、裏面から糸鋸状の工具で厚みの半分程まで刻みを入れ、打ち割った痕跡がみられる。

19は緑泥片岩製の板碑断片。右側面を残して周縁部は欠失している。表面には２条の沈線下に天蓋と瓔珞を刻み、更にその下には阿弥陀如来とおぼしき梵字を配している。裏面は粗いノミ痕をそのまま残す。

以下は第２面上包含層出土の遺物である。木製品（箸・下駄・板草履）も出土しているが、測図が間に合わないため写真図版にだけ載せておいた。

20～27はかわらけ皿。すべて糸切り底。20～25は小皿であるが、そのうち、22までが灯明皿として使用されたものである。20は薄手タイプで口径も他に比して特に小さい。23は口縁部を二次加工し、平坦に仕上げている。何に使用したものかは不明である。

28は青磁鎬蓮弁文碗。単弁である。推定口径は11.7cm。

29は白磁口兀げ皿。推定口径15.4cm。

30は砥石。粘板岩製の仕上げ砥である。

31～32は常滑窯産の甕。小片のため口径は不明。31は縁帯部が頸部と密着しており、時期的にはやや後出するタイプであろう。

33は常滑窯産の捏ね鉢。付け高台を有する。外面は丁寧にナデられている。内面下部は使用による磨耗が著しい。

34は山茶碗窯系の捏ね鉢。口縁部を捜したが、同一個体と思われる破片はみつからなかった。高台部近くにヘラ削り痕を残し、内面下部には磨耗痕が看取できる。特筆すべきことは、内面の体部下半に火熱を受けて黒色化した部分が明瞭であ、手焙り等の代用品として使われた可能性が考えられる。他にも同様の破片が１点みつかっている。

35も山茶碗窯系の捏ね鉢。小片どうしの図上復原である。推定口径27cm。34と異なる特徴は、外面のヘラ削り痕が、高台部際までナデ消されており、また、高台畳付け部には、籾殻ないし藁状の圧痕が多くみられる点である。

36～37は鉄釘。36は全長14cmを測る大形の角釘で、断面形状は長方形、頭部は直角に近く折り曲げられている。37は小釘。先端部を欠損する。頭部は平たく潰してから、折り曲げている。

38は鉄製品。おそらく紡錘車の軸と考えられる。下半部が大きく曲がっているが、意識的に曲げたものか偶然によるものかは判断しようがない。

39は銅銭・錆が多いため、文字は判読できない。おそらく北宋銭であろう。「□□元宝」

図示した遺物については、以上で説明を終えたい。なお、他の出土遺物については、写真図版に多くを載せてあるので、そちらを参照して頂きたい。

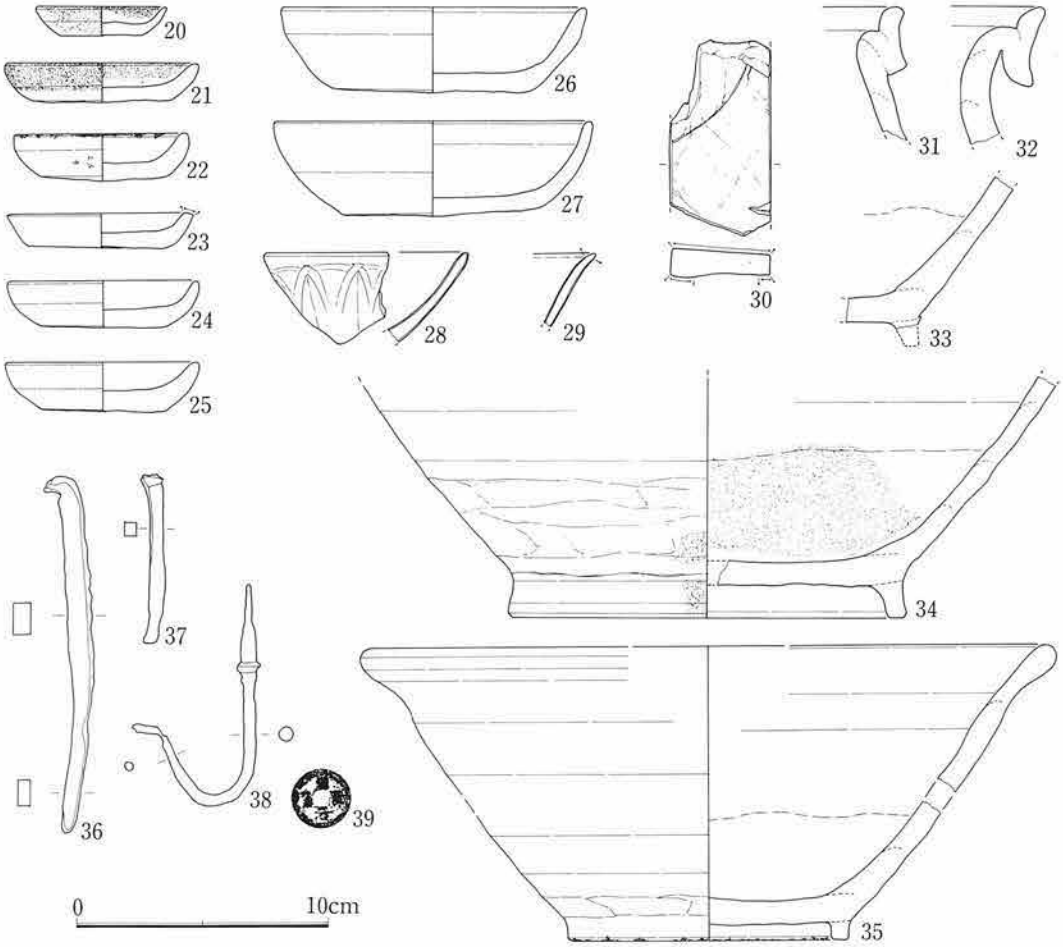


図 7　第 2 面上包含層出土遺物

第四章　まとめ

今回の調査は、幅２m×長さ13m という狭小な範囲内で行われたため、検出された遺構については十分な検討ができなかった。しかし、出土した遺物の面からは、遺跡の性格の一端を知ることができ、多少なりとも成果があったと考えている。

第１面・第２面での出土遺物は、年代的に大きく隔たることはなく、大体14世紀中葉を前後する時期の所産と考えられる。日常雑器類では、やはりかわらけ皿が多く、山茶碗窯系捏ね鉢も比較的まとまって出土している。捏ね鉢のなかには、内面に火熱を受けたものが２個体みつかっており、手焙りの代用にでもしたのであろうか。常滑窯の製品では、捏ね鉢と甕があるが、１個体にまで復原できたものはない。瀬戸窯の製品および舶載陶磁器は数量・器種とも少なく、瀬戸では卸し皿、舶載品では二彩盤、青磁碗、白磁皿などが小片で出土したに過ぎない。全般的にみて、長期にわたった居住というイメージからは程遠く、同時期の市街地での遺跡と比べ、日常雑器種の器種・数量とも極めて貧弱であったといえよう。

遺跡の性格を具体的に示す遺物には、第１面上で出土した多量の鉄滓と鞴の羽口、砥石といった生産関係遺物があげられよう。遺構に伴って出土したものではないが、本調査地点の東200～500m に所在する長谷小路南遺跡（註１）、秋山ビル用地遺跡（註２）、河合ビル用地遺跡（註３）でも同種の遺物が多量にみつかっており、当該地域での砂鉄を利用した鍛冶・鋳造工房の存在と職能集団の居住を裏付ける資料として貴重といわねばならない。

近年実施された発掘調査の成果から、中世に前浜と呼ばれた海岸砂丘地帯での生活は、次第に明らかになってきている。それによると、13世紀代にまで遡る遺構・遺物の出土はなく、14世紀中半頃から人々の集住化が開始され、方形竪穴建築址に代表される大形の遺構群が密集し、多量の遺物が残されることになる。遺物のなかには、鉄滓、羽口をはじめ、骨角製品やその未製品が含まれ、職能集団の活動が盛んであったことを物語っている。ところが、15世紀代に入るとこうした遺構・遺物は姿を消し、一部には土壙墓を主体とした墓域が形成されたようである。また、中世以前に遡ってみれば、奈良～平安期の土師器・須恵器が広範囲の遺跡で出土しており、古東海道沿いに展開した大集落の存在さえも想定される。特に赤彩盤状坏が多量にみつかた長谷小路南遺跡（註４）は今小路西遺跡（註５）で検出された鎌倉郡衙との関連性を考える上で、興味深いものといえよう。

註１　斉木秀雄『長谷小路南遺跡』同遺跡発掘調査団　昭和61年

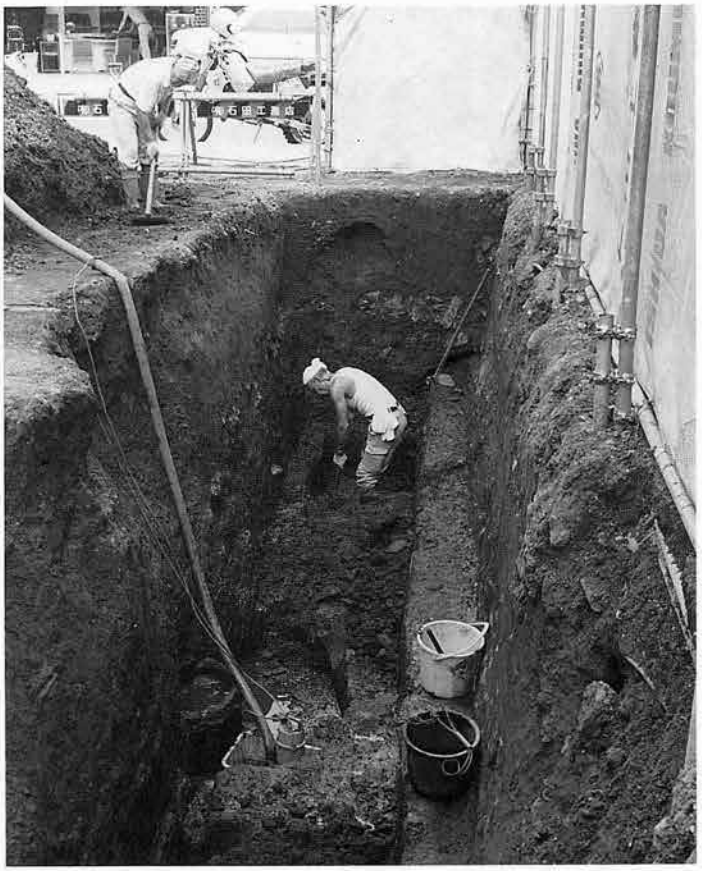
註２　斉木秀雄『由比ケ浜三丁目194番25外遺跡調査報告』同地点所在遺跡発掘調査団　平成２年

註３　斉木秀雄氏の御教示による。

註４　古代遺物については、現在整理中である。

註５　河野眞知郎『今小路西遺跡（御成小学校内）』鎌倉市教育委員会　1990年

調査地点近景

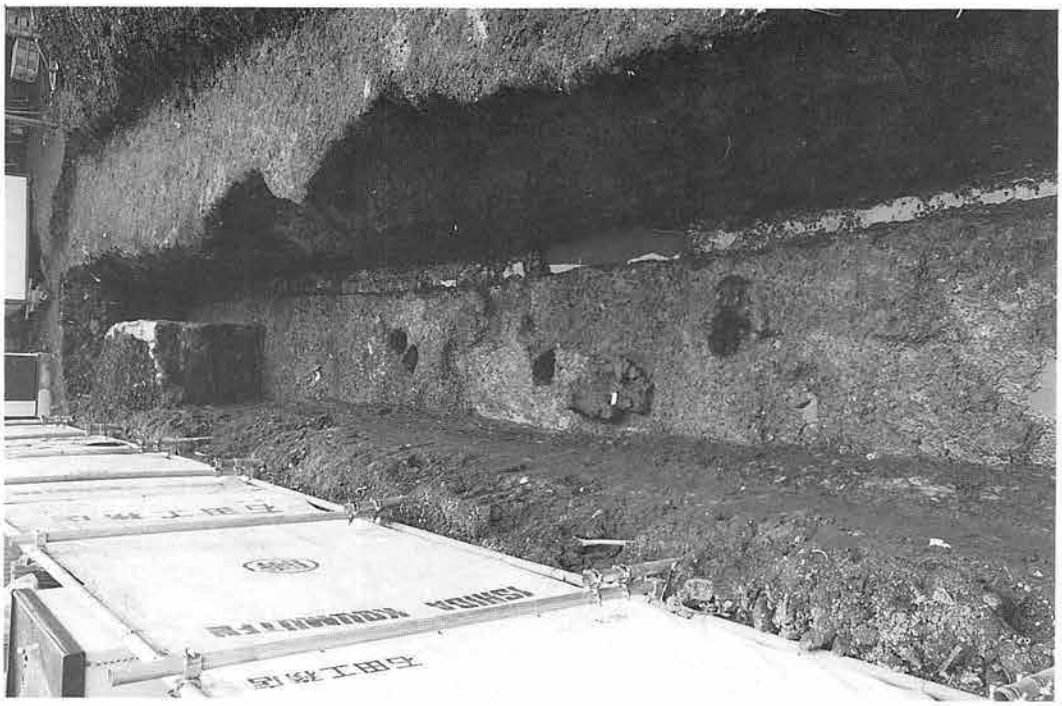


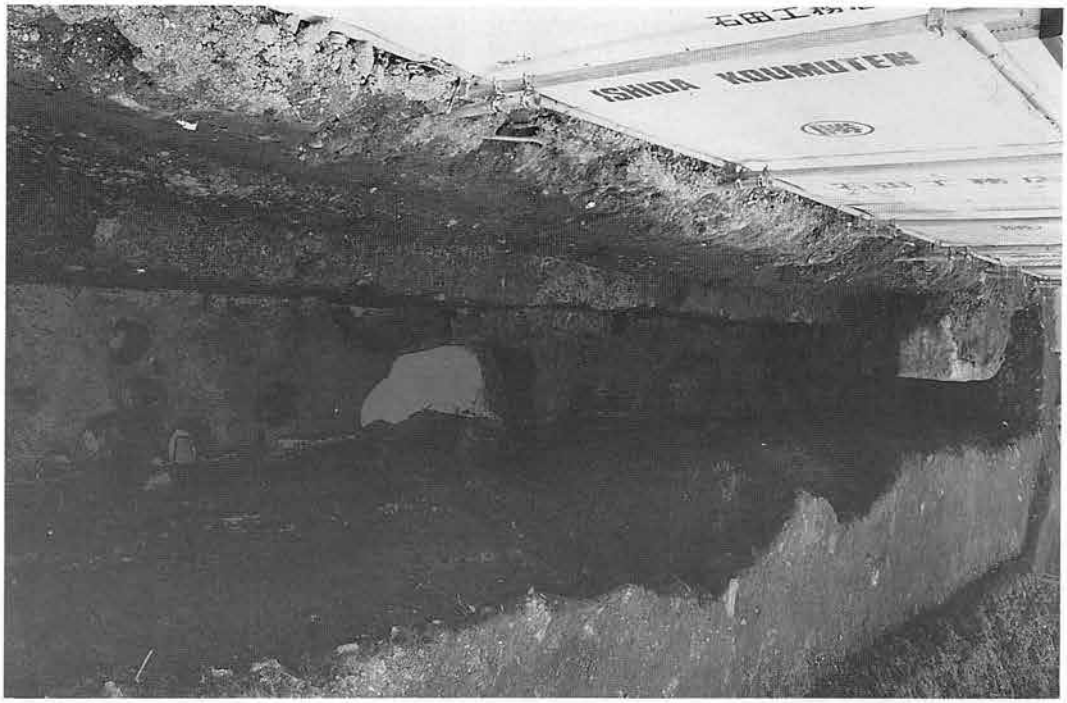
調査風景

図版 2

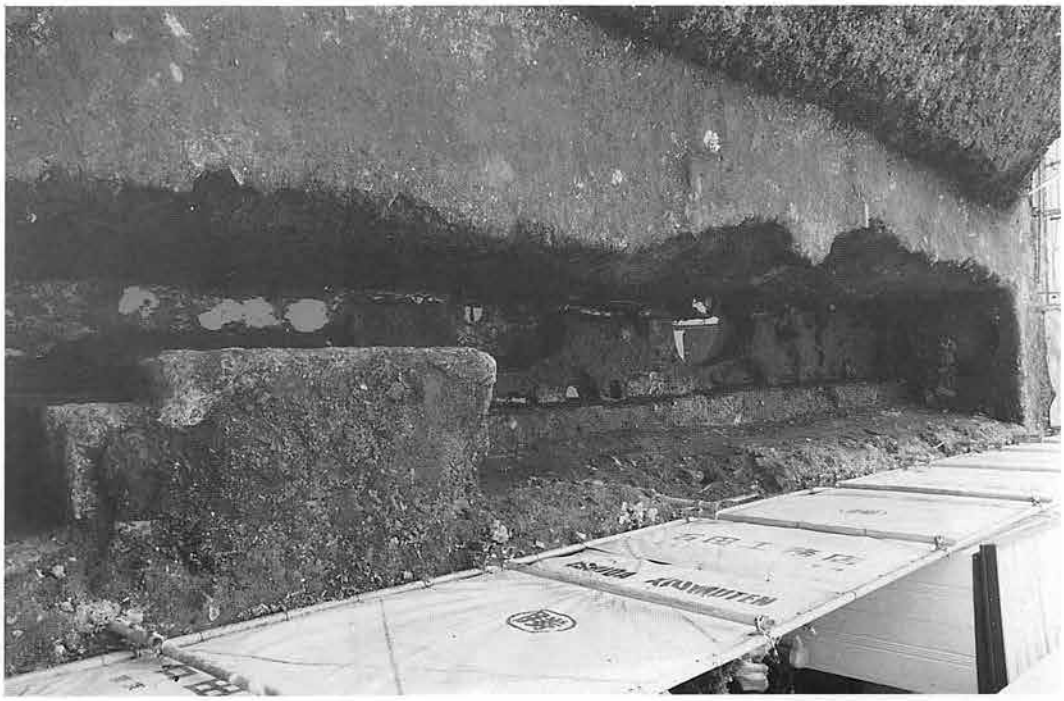
▲第 I 面全景（南から）

▼同（北から）





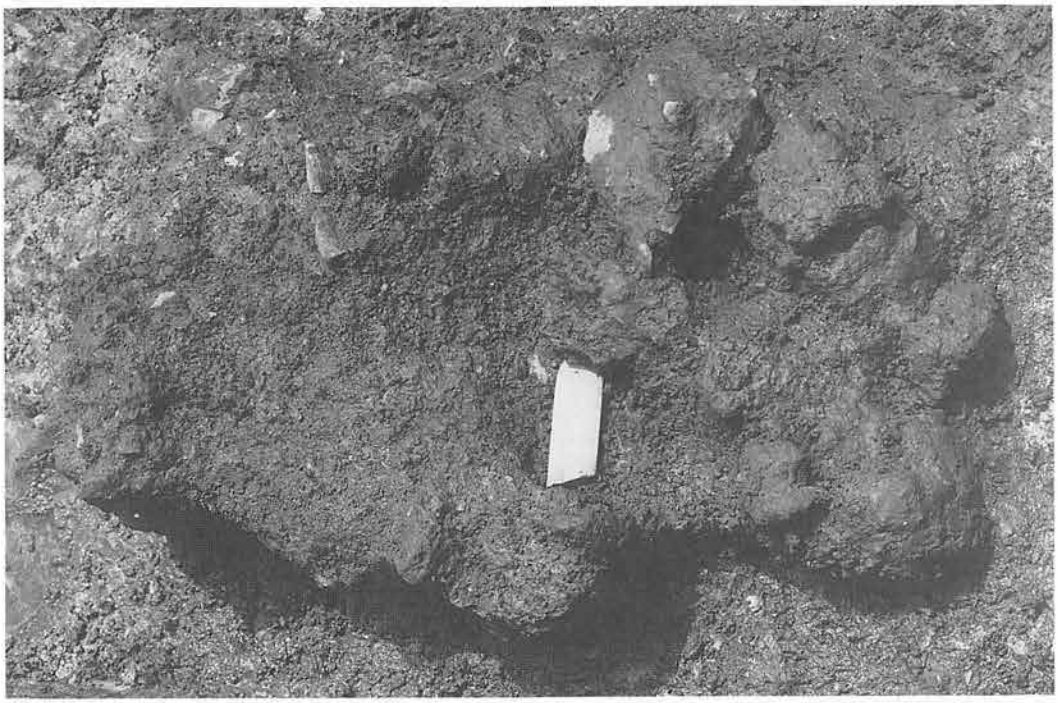
▲第 2 面全景



図版 4

▲井戸

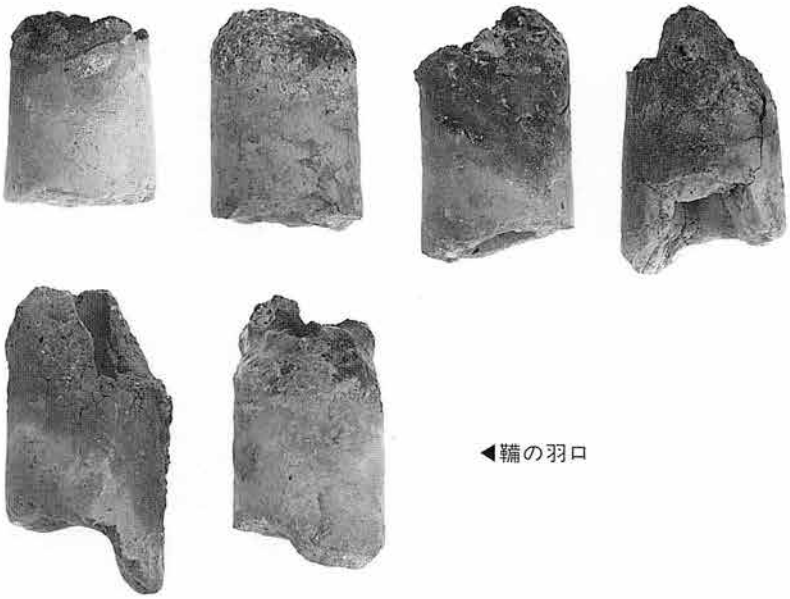
▼鉄滓出土状態



▲柱根

▼下駄出土状態

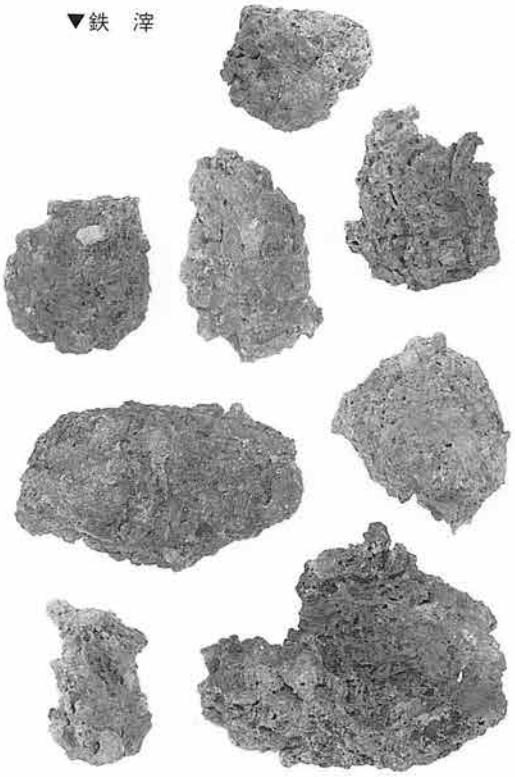
図版 6



◀鞴の羽口

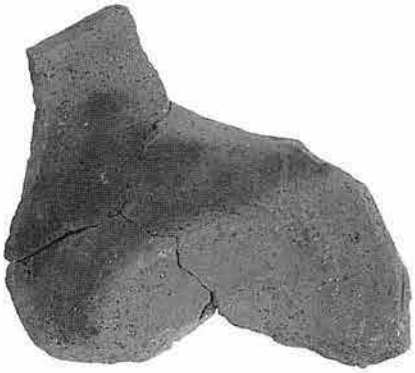
◀鉄滓の入ったかわらけ皿

▼鉄　滓



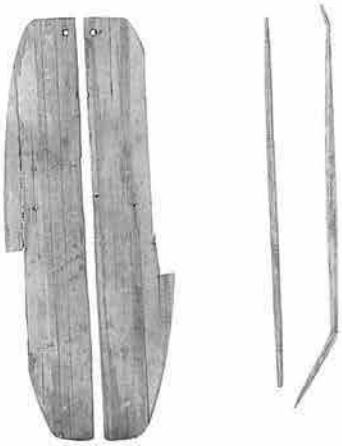
◀軽石・石英

▲砥　石



▶内面に被熱痕のある捏鉢

◀下駄（大・小）



◀板草履・箸

▼板　碑

2．若宮大路周辺遺跡群（No.242）

鎌倉市小町二丁目69番６外

例　言

1．本報は鎌倉市小町二丁目69番６外に於ける事務所併用住宅建設に伴う発掘調査報告である。

2．発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施し、調査期間は平成元年７月24日から７月31日までである。

3．本報の執筆は田代郁夫・原　廣志が行った。

4．本報に使用した写真は遺構が原、遺物は木村が撮影した。

5．資料整理、報告書作成には、継　実・佐藤仁彦・伊藤朋子・丸井宏予の協力を得た。

6．調査体制は下記の通りである。

主任調査員　田代郁夫・原　廣志
調　査　員　汐見一夫・継　実
調査補助員　佐藤仁彦・伊藤朋子・丸井宏予
作　業　員　（社）シルバー人材センター
鎌倉高齢者事業団

7．出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

本 文 目 次

第一章　調査地点の位置 …… 37
第二章　調査の概要 …… 38
第三章　検出した遺構
（1）　Ａトレンチ …… 38
（2）　Ｂトレンチ …… 38
第四章　出土した遺物 …… 41
第五章　まとめ …… 42

挿 図 目 次

図１　近辺の主な調査地点 …… 36
図２　トレンチ配置図 …… 39
図３　各トレンチ平面図及び土層図 …… 40
図４　出土遺物 …… 41

図 版 目 次

図版１－１Ａトレンチ …… 43
図版２－１Ｂトレンチ …… 44
２出土遺物 …… 44

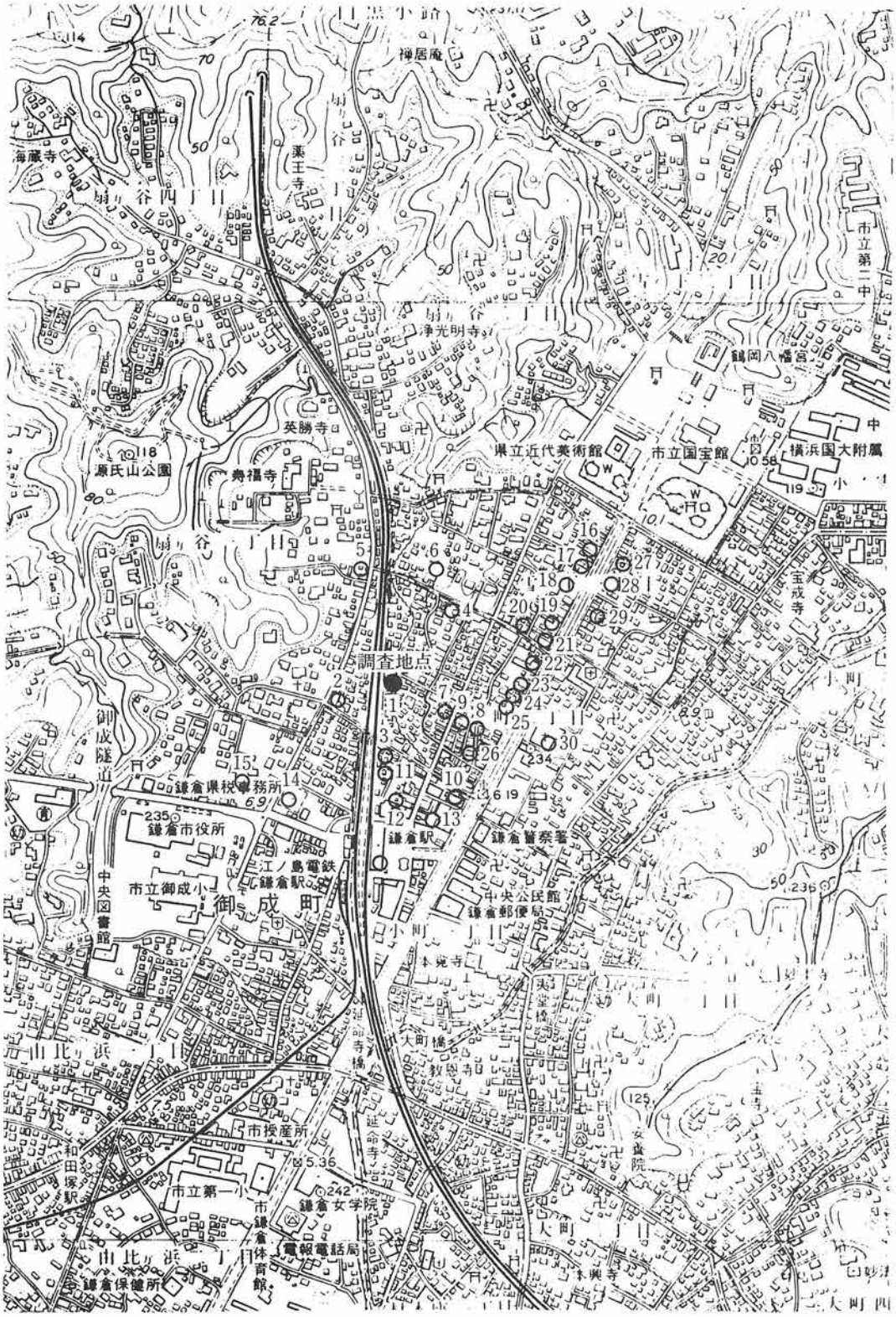


図1　近辺の主な調査地点

周辺の主な発掘調査地点名

1. 調査地点　小町二丁目69番６外
2. 扇ケ谷一丁目74番８外地点
3. 小町一丁目120番１地点
4. 小町二丁目39番他地点
5. 扇ケ谷一丁目131番１地点
6. 雪ノ下一丁目210番他地点
7. 小町二丁目12番18地点
8. 小町二丁目４番２他地点
9. 小町二丁目５番23他地点
10. 二ノ鳥居西遺跡
11. 小町一丁目116番地点
12. 小町一丁目106番地点
13. 小町一丁目75番１地点
14. 千葉地東遺跡
15. 千葉地遺跡
16. 雪ノ下一丁目265番３地点
17. 雪ノ下一丁目268番３地点
18. 雪ノ下一丁目271番１地点
19. 雪ノ下一丁目234番ロ地点
20. 雪ノ下一丁目233番９地点
21. 雪ノ下一丁目274番２地点
22. 小町二丁目276番他地点
23. 小町二丁目279番２他地点
24. 小町二丁目280番２地点
25. 小町二丁目282番地点
26. 蔵屋敷遺跡
27. 雪ノ下一丁目371番１地点
28. 雪ノ下一丁目372番１地点
29. 雪ノ下一丁目375番１地点
30. 小町二丁目345番２地点遺跡

第一章　調査地点の位置

調査地点は鎌倉市小町二丁目69番６外に所在し、「若宮大路周辺遺跡群（県遺跡台帳番号242）と呼ばれる遺跡地の西北隅にあって、JR鎌倉駅線路沿いを北（東京方面）に約250mほど進んだ東側、扇ケ谷川に接してその左岸に当たる場所である。東の若宮大路まで直線距離で約200m、西の今小路までは、同じく約70mほどを測る。この付近は旧市街地西北域に大きく開析された谷戸、扇ケ谷の前面に当り、この谷戸を水源として流れ出したのが扇ケ谷川となる。

調査地点の西に走る今小路は、『吾妻鏡』などにその名は見えず、『快元僧都記』天文八年（1539）の条に記すのが初見である。それ以前は「今小路」と呼んでいたとも、「武蔵大路」と呼んだともいう。『新編鎌倉志』には巽荒神より北を今小路、南を長谷小路というとある。何れにせよ長谷方面から化粧坂を抜けて鎌倉街道に通じる幹線道路であったことは確かであろう。調査地点西北には、開山明庵栄西、開基北条政子と伝える鎌倉五山の第三位亀谷寿福金剛禅寺があり、扇ケ谷川を隔てて西には無量寺ケ谷があり、『新編鎌倉志』には名刀工正宗の子孫である綱広の邸宅がこの地にあったとも記す。この付近の調査地点は、今小路沿いの扇ケ谷一丁目120番１地点があり、この調査では「町屋」と覚しき長屋風の建物や今小路側溝などが確認されている。小町一丁目120番１地点の調査では旧扇ケ谷川河道が検出され、流路はもともう少し南側を流れていたことが判明した。

第二章　調査の概要

本調査地点に対する発掘調査は、鎌倉市教育委員会により、予定地の１箇所の坪掘による試掘調査をへて実施され土層の堆積状況、遺構の様相が把握された。この結果、予定地内では地表下100～110cm余りは近・現代の客土が厚く認められ、その下には旧水田耕土の床土と思われる青みを帯びた灰褐色粘土が堆積していた。試掘調査の結果をもとにＡトレンチ（２×2.5ｍ）、Ｂトレンチ(2.5×６ｍ）を設定し、合計20㎡を調査した。現地発掘調査は、平成元年７月25日に重機を導入して最近の客土と旧表土を排除することから始めた。旧水田床土以外は人力によって掘り下げ、砂利を含む荒い砂層が散布する面（第１面）を各トレンチで検出した。出土遺物からみてこの面はかなり時代が降ると思われたので、記録を取ったのち、部分的なサブトレンチを入れて以下を探査した。扇ケ谷川が隣接した地点で湧き水が非常に多く、軟弱な土質のため降雨後調査区壁面が崩落し、その排土・排水作業等で調査はかなり苦労をよぎなくされた。同年８月５日までの間で雨天の日を含み10日間を費やして、必要な記録を取り現地における調査を無事終了した。

第三章　検出した遺構

（1）Ａトレンチ（図２、図版１）

西端に設定したトレンチで境界線に近接している。現地表下100～110cmは近年の盛土で、それ以下が旧水田耕土の粘質土となっている。この粘土層の下部には宝永年間の富士山噴火によると思われる火山灰が、ブロック状に点々と認められた。現地表下120cm前後（標高6.5m程）で砂利を含んだ粗い砂による混合層が見られ、大小土丹塊を含めた面で、上面はあまりきれいでなく凸凹が多い。

トレンチ中央に鎌倉石の切石を検出したので、河の護岸か建物の地覆施設であるのではないかと思い周辺を精査したが、それらしい証拠は見出せなかった。この面上より出土する遺物はかわらけ・常滑などの細片でしかも著しく摩滅したものばかりである。

（2）Ｂトレンチ（図２、図版１・２）

敷地中央部で扇ケ谷川に向かって東西方向のトレンチを設定した。現地表下70～110cmは近・現代の客土が入っており、これを排除すると旧水田耕土の粘土層が見出せる。さらに掘り下げていくと小型の土丹と砂利の混合層の軟弱な地業面を検出した。この地業面は西側では確認できたが東では薄く弱くなり消滅してしまうので、サブトレンチを入れ下方を探査した。地業の切れる位置には鎌倉石切石と大形土丹を並べた石列があり、そこから東に急な傾斜を示し石材が乱雑に落し込まれた凹地となる。石の上には土丹が水摩し丸くなった砂礫が厚く堆積しており、強い流水のあったことが考えられる。このことは河の存在を思わせ、石材は護岸施設に伴うものと推察された。

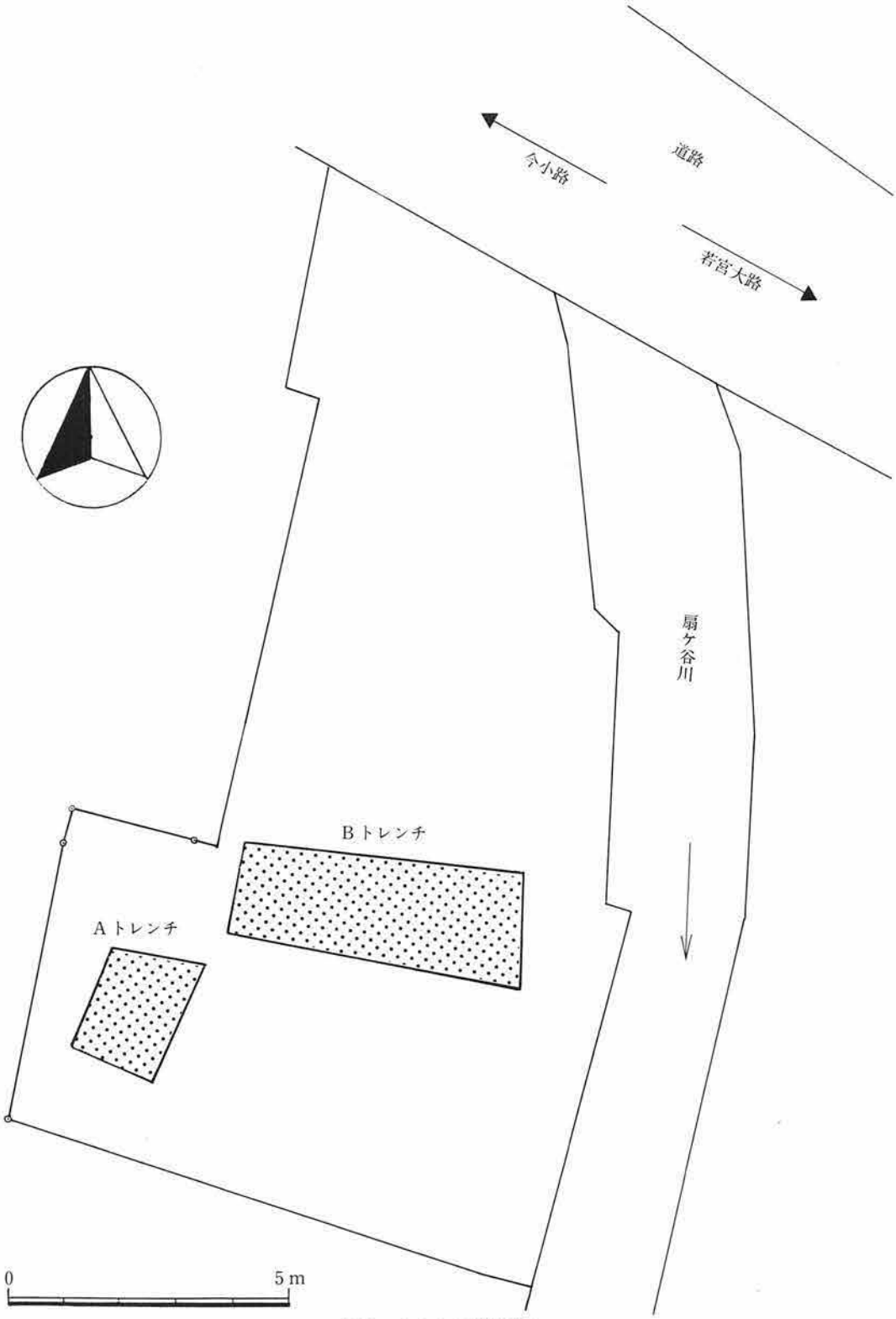
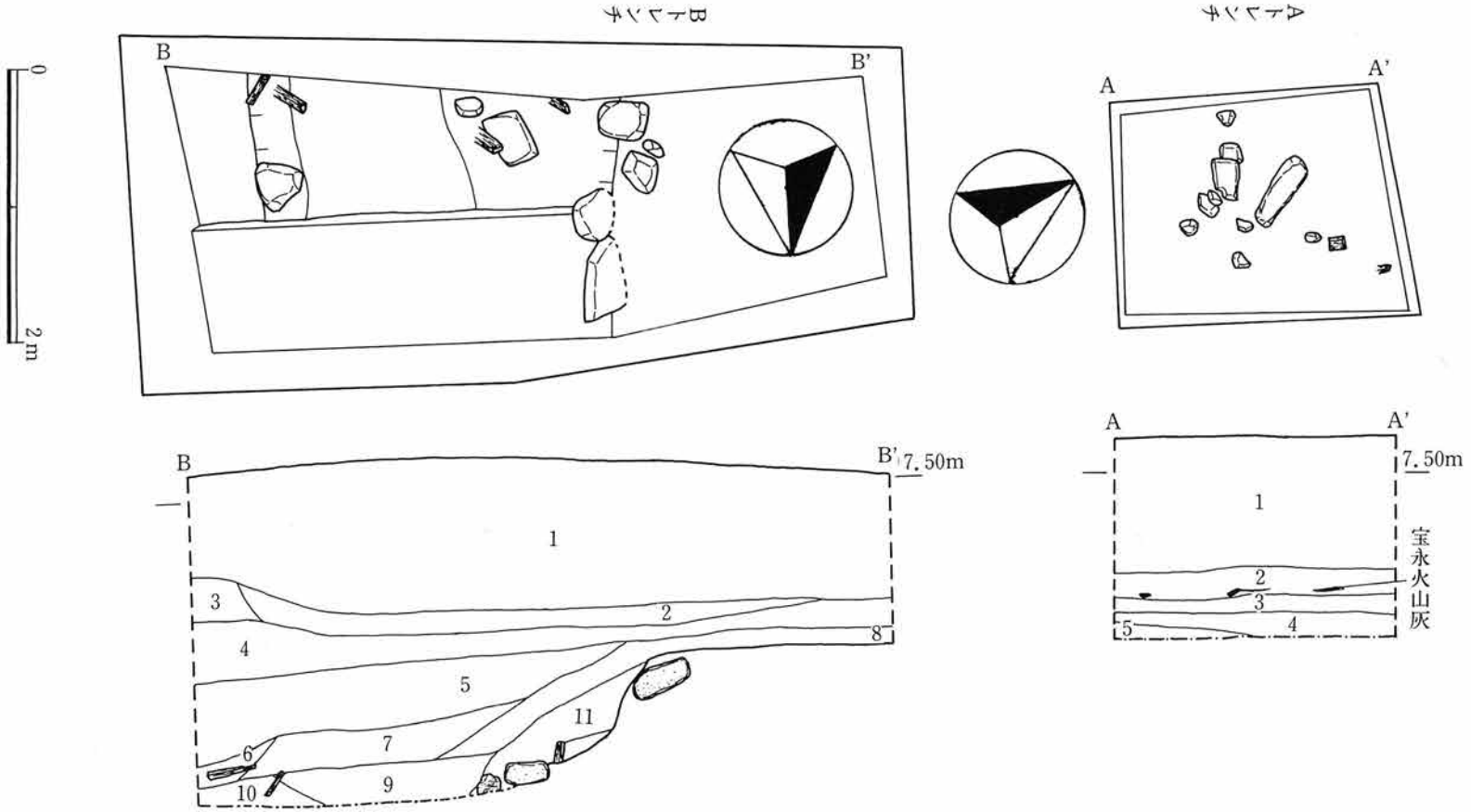


図2　トレンチ配置図



1. 近・現代の客土
2. 暗青灰色粘質土（水田耕土）
3. 暗青灰色砂質土　（炭化物混入、締り有り）
4. 〃　〃　（土丹粒少量、締り無し）
5. 〃　〃　（土丹塊多量、締り無し）
6. 暗青灰色砂層土（純粋な砂層）
7. 暗青灰色砂層土（大小土丹塊、砂利多し）
8. 暗青灰色砂質土（粘質土を含み、締り有り）
9. 明茶褐色砂質土（有機物腐食土）
10. 暗青灰色砂層土　（小土丹塊、砂利多目に含む）
11. 暗青灰色砂層土　（小土丹塊、砂利多量に含む）

1. 近・現代の客土
2. 灰褐色粘質土（水田耕土）
3. 茶褐色砂層土（河砂）
4. 灰褐色砂層土（砂利含む荒い砂層）
5. 灰褐色砂層土（〃　〃）

図3　各トレンチ平面図及び土層図

第四章　出土した遺物

河川覆土内から少量の遺物が出土している。多くは摩滅しており実測に耐え得るものは少ない。遺物には中世から近世にかけての製品が見られた。

1は青磁碗底部で、高台部畳付以外に灰青色の釉を施す。2は所謂白磁口兀小皿片で口唇部以外に乳白色の釉を厚く施す。3は瀬戸・美濃窯の灰釉小皿で、連房期の所産である。復元口径13.0cm、底径7.1cm、器高2.9cmである。灰黄緑色の釉を薄く施す。4は瀬戸・美濃窯擂鉢口縁部片で、内外面に鬼板が施されている。口縁部近くであり条線は不明。胎土は灰黄白色で粉っぽい、同じく近世の所産である。5は常滑甕の口縁部である。肩部近くに自然降灰が見られる。口縁部の形態は折り返しが少なく縁帯は狭い。13世紀代の所産。6～8はかわらけである。6は口径7.4cm、底径3.4cm、器高2.4cm、7は口径8.0cm、底径5.3cm、器高2.0cm、8は口径12.2cm、底径5.3cm、器高2.0cmである。いずれも底部糸切りでスノコ状圧痕を有し、内底に横方向のナデがある。6の横方向のナデは粗い。9は女瓦で永福寺第II期（寛元・宝治年間）に比定される。埼玉県児玉郡美里町の水殿瓦窯の製品であろう。

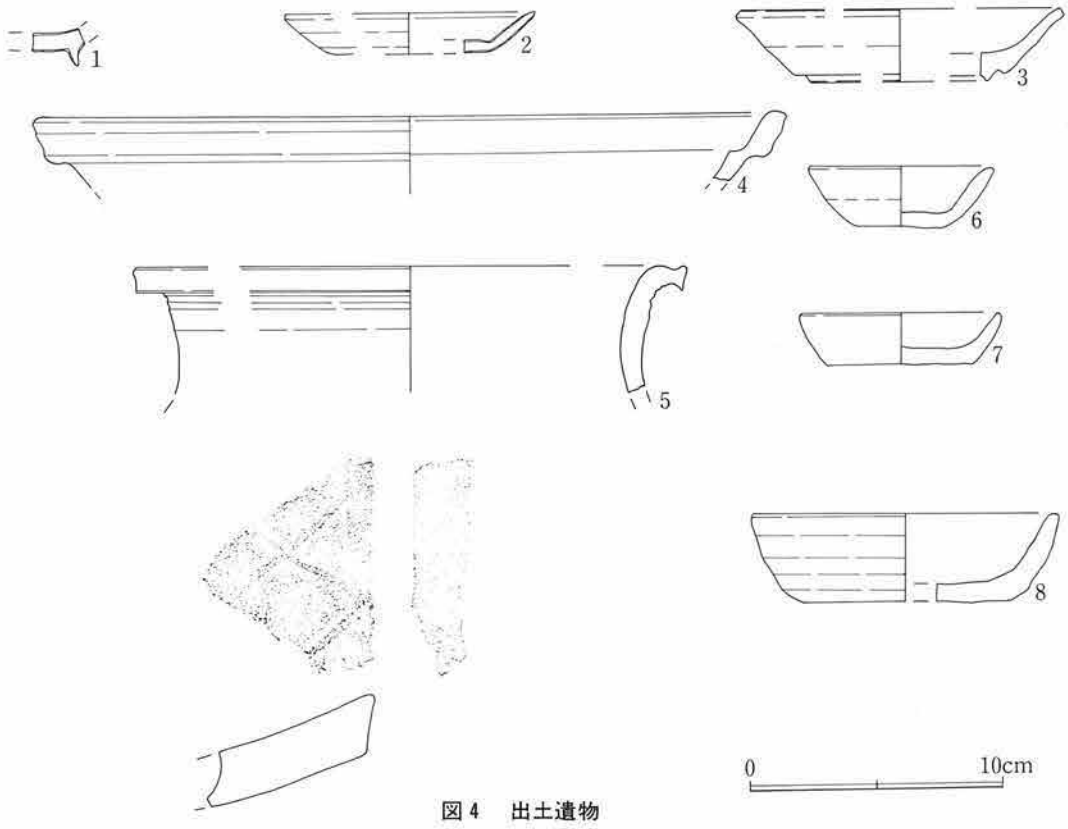


図4　出土遺物

第五章　まとめ

今回の調査は、極めて狭い範囲であったが、河川の一部を検出することができた。これは調査区の東側を現在でも流れる扇ケ谷川の旧河道と思われるが、調査範囲に制約を受けていることから河川の幅、方向等は確認することはできなかった。

本調査地点と道路を隔てて東方に位置した雪ノ下一丁目210番他地点（若宮大路周辺遺跡群 No. 242）でも、やはり旧扇ケ谷川と思われる旧河道が発見されており、今回検出した河道はこの河道の西側の下流に位置している。またこの河道の下流域に当たる小町一丁目120番１地点の調査でも14世紀代の旧扇ケ谷川河道が検出されている。現在の流路の方に移動している可能性もあり、今後の付近の調査を期したい。

次に本河道の時期についてであるが、河床出土遺物という性格から考えて、出土遺物だけをとって速断することはできないが、近世におけるものとも思われる。中世遺物も含まれてはいるが、中世に遡るとしても、果たしてどこまで遡れるかは不明といわざるをえない。

図版 1

◀1.Bトレンチ

1.Bトレンチ（東から）

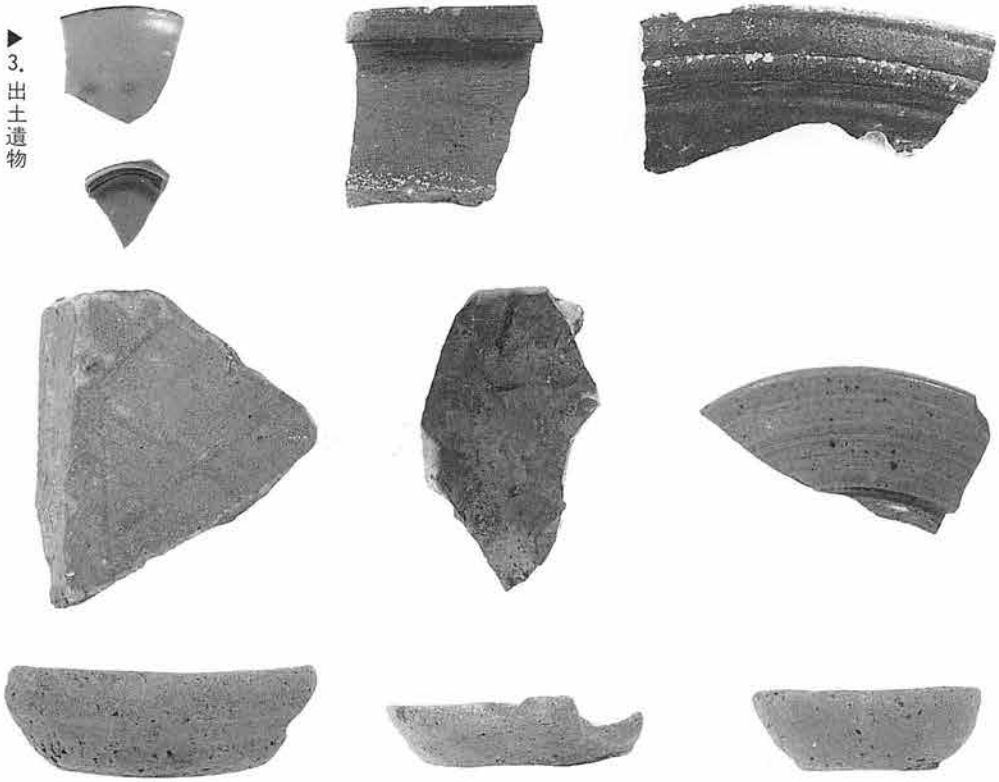
2.Aトレンチ（西から）

3.出土遺物

図版 2

▲2. Bトレンチ

▶3. 出土遺物



3．浄妙寺旧境内遺跡（No.408）

じょうみょうじきゅうけいだい

鎌倉市浄明寺向小路90番１地点

例　言

1．本報は鎌倉市浄明寺向小路90番１における住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。

2．本報の執筆は田代郁夫・原　廣志が行った。

3．図版写真は遺構を原が、遺物は木材美代治が撮影した。

4．調査体制は以下のとおりである。

主任調査員　田代郁夫・原　廣志

調　査　員　継　実

調査補助員　村上和久・中嶋充雄・大畑明子・伊藤朋子・丸井宏予

5．出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

本 文 目 次

第一章　調査地点の位置と歴史的環境 …… 48
第二章　調査の経過 …… 50
第三章　検出した遺構 …… 51
（1）　第1面 …… 51
（2）　第2面 …… 51
（3）　第3面 …… 51
第四章　出土した遺物 …… 53
（1）　第1面下及び2面上出土遺物 …… 53
（2）　北側1・2溝覆土中出土遺物 …… 53
（3）　南側1溝覆土中出土遺物 …… 55
（4）　北側3・4溝覆土中出土遺物 …… 55
（5）　北側5溝覆土中出土遺物 …… 55
（6）　南側2溝覆土中出土遺物 …… 57
第五章　まとめ …… 58

挿 図 目 次

図1　調査地点位置図 …… 49
図2　調査区配置図 …… 50
図3　第1～3面平面図及び土層図　52
図4　出土遺物（1） …… 54
図5　出土遺物　2 …… 55
図6　出土遺物　3 …… 56
図7　浄妙寺古絵図 …… 58

図 版 目 次

図版1－1　第1面全景 …… 59
　　2　第2b面全景 …… 59
図版2－1　第2面全景 …… 60
　　2　第3面全景 …… 60
図版3－1　東壁土層堆積 …… 61
　　2　陶磁器類 …… 61
図版4－1　かわらけ …… 62
　　2　瓦類 …… 62

第一章　調査地点の位置と歴史的環境

調査地点は鎌倉市街地の北東部浄明寺地区にあたり、鎌倉市浄明寺向小路90番１に存在する鎌倉五山第五位臨済宗浄妙寺の旧境内に位置する。浄妙寺の北には杉本城のある大蔵山が西から張り出してきており、南は衣張山丘陵北端がせまる。この丘陵を縫うように東から西に向かって滑川が流れている。滑川は六浦街道に沿い、上流は六浦荘に通ずる朝比奈峠にその源を発する。浄妙寺の西方には平安時代創建と伝える古刹天台宗大蔵山杉本寺があり、東側には胡桃ケ谷の大楽寺旧蹟や足利公方屋敷跡が続いている。西南には臨済禅の功臣山報国建忠禅寺があり、今日でも法燈を伝える。当地付近の調査事例は、南側東寄りの六浦街道を挟んで稲荷小路遺跡があり、昭和56年に発掘調査が実施され、側溝を持つ六浦路と思われる道路状遺構、武家屋敷の掘立柱建物などの遺構群が確認されている。一方、浄妙寺旧境内地の発掘調査も一箇所で実施されている。発掘面積が狭小なため全体像は不明であったが、確認された遺構・遺物から見て塔頭群の一部に当たると思われた（註）。

浄妙寺は山号を稲荷山と称し、開山は退耕行勇と伝える。草創については、寺蔵される『稲荷山浄妙寺禅略記』では開創文治４年（1188）、開基足利義兼、開山退耕行勇で、寺号を当初極楽寺と称したという。『鶴岡八幡宮寺供僧次第』や『延宝伝燈録』では開山を退耕行勇とする。また『本朝高僧伝』も開山を行勇と伝えているが、開基は北条泰時という。開創を文治４年と記すのは、『稲荷山浄妙寺禅略記』のみであり、『鎌倉市史　社寺編』ではこの書の記事を疑問視しており、開創年代については不明としたい。浄妙寺をもと極楽寺といったことについては「正嘉之元住相之極楽寺今浄改名」と『元享釈書』月峯了然の伝に見られるので確かであろう。また宋僧大休正念の語録である、『大休録』には「浄妙宣公和尚東炬唐漳州人」とあり、大休正念は正応元年（1288）に寂している。従って、寺号は正嘉元年（1257）から正応元年の間に浄妙寺となったものであろう。

足利貞氏の法名は浄妙寺殿と呼ばれ、当寺との間には深い繋がりのあったことが窺えよう。『鎌倉市史　社寺編』は貞氏の法名からして浄妙寺の中興開基であろうと指摘している。また尊氏も庇護したようで、南北朝以降、足利氏の世になるとその縁故によってこの寺が最も栄えた時期を迎えたものと思われ、そのことは鎌倉五山の第五位に列されたことからも知られる。隆盛期の伽藍規模については史料が乏しく不明であるが、寺には近世所産の紙本淡彩の『浄妙寺境内古図』が所蔵されている。この古絵図が14世紀当時の様子をどこまで正確に伝えたものか定かでない。参考のために記すと、総門・山門・仏殿・法堂が南北に一直線上に並び、法堂後方に方丈、その背後には開山堂と大檀那霊廟を描く。山門西側に文殊堂・禅堂・経堂があり、東側に浴室・鐘楼・荒神堂などを配し、禅宗様伽藍配置を示す。塔頭は、西に直心庵をはじめ十庵、東に聴泉庵を含む六庵が見られる。古絵図にある参道が現在の道筋とさほど変わっていないとするならば、その東側に面した調査地点には塔頭などの建造物が何も描かれていない。

（註）　大三輪龍彦・原　廣志・福田　誠「浄妙寺旧境内遺跡―鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書１―」鎌倉市教育委員会、1985年

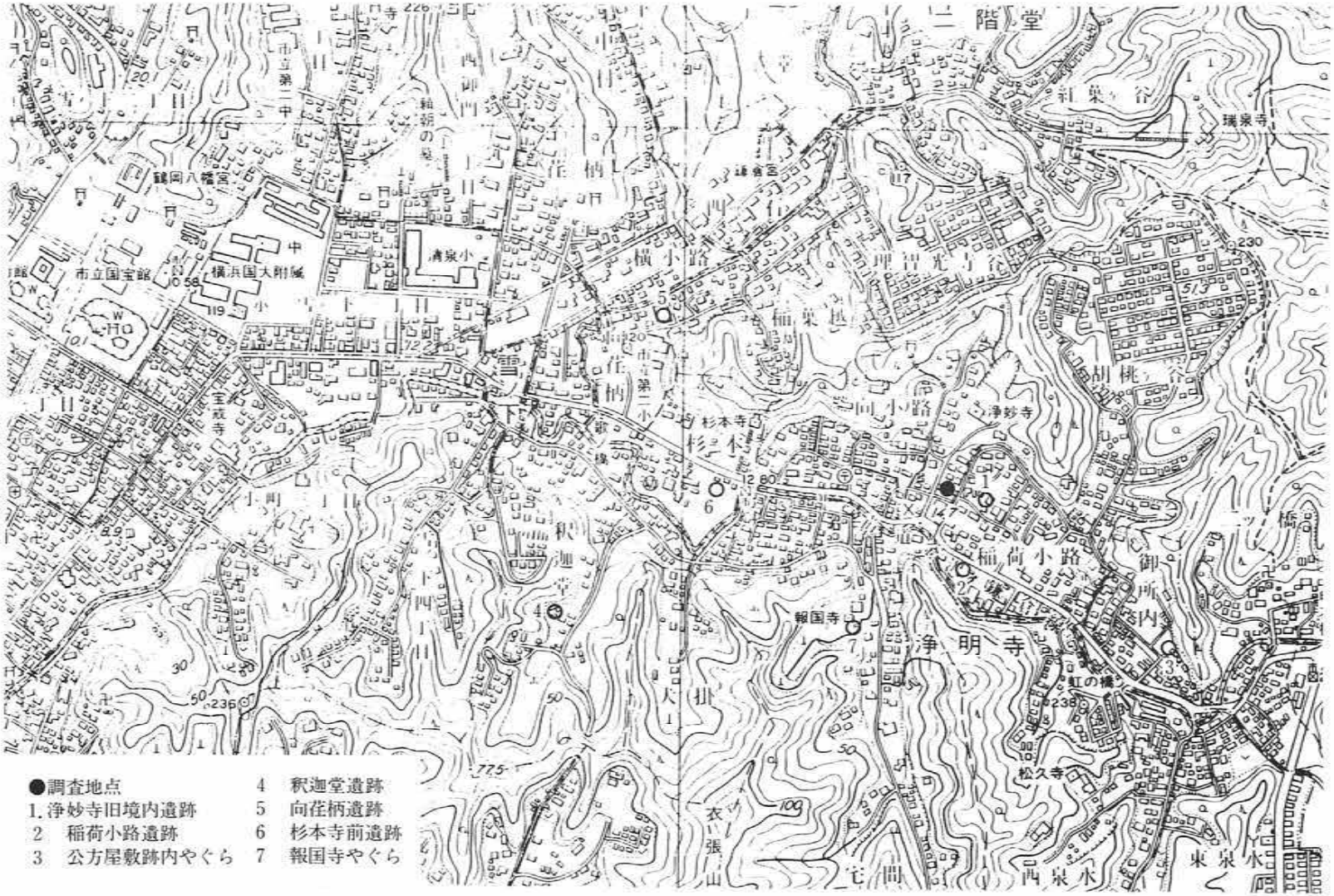

●調査地点
1. 浄妙寺旧境内遺跡
2 稲荷小路遺跡
3 公方屋敷跡内やぐら
4 釈迦堂遺跡
5 向荏柄遺跡
6 杉本寺前遺跡
7 報国寺やぐら
鶴岡八幡宮
横浜国大附属
市立国宝館
宝戒寺
清泉小
横小路
杉本寺
浄妙寺
報国寺
稲荷小路
浄明寺
松久寺
瑞泉寺
二階堂
西泉水
東泉水

図1 調査地点位置図

第二章　調査の経過

本遺跡に対する発掘調査は、鎌倉市教育委員会による試掘調査を経て実施した。

試掘調査の結果をもとに、現地発掘調査は平成元年９月19日に重機を導入して最近の客土と旧表土を排除することから始められた。旧水田床土以下は人力によって掘り下げ、調査区全域に土丹を敷き固めて構築した地業面（第１面）を検出した。出土遺物から見てこの面はかなり時代が降ると思われたので、図面と写真による記録保存を行った後、引き続き以下の遺構確認をするためさらに掘り下げを実施した。その結果中世地山の遺構を含めて三枚以上の生活面が検出された。検出遺構には鎌倉石や土丹塊による石列、溝７条、その他に土壙や礎板を持つ柱穴が若干見られた。現地調査は同年９月30日までの間で雨天を除く10日間を費やして、必要な記録を取り無事終了した。

なお、鎌倉石と土丹塊は鎌倉地方の呼称であり、それぞれは凝灰石質角礫岩と泥岩のことである。

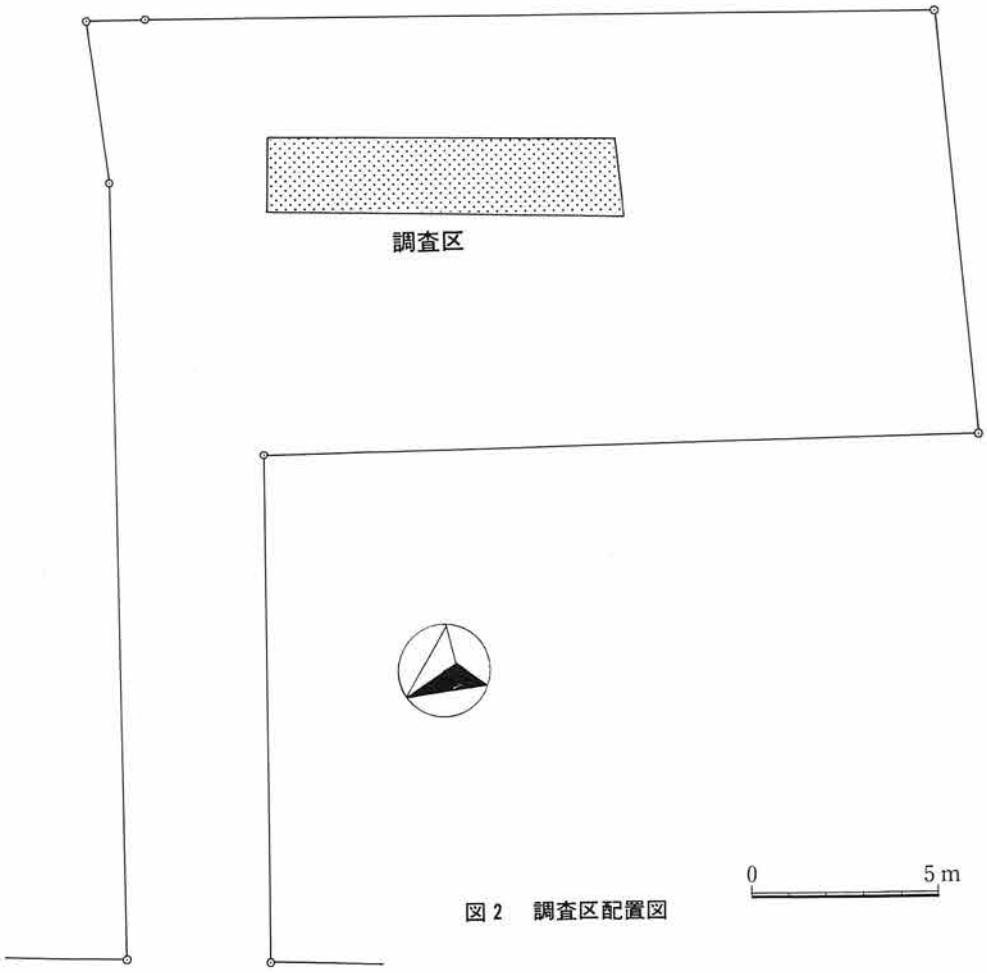


図２　調査区配置図

第三章　検出された遺構

（1）　第1面（図3—a、図版1—1）

現地表下15～30cmは近年の盛土で、それ以下が旧水田の耕土と考えられる青味を帯びた灰色粘土層となっている。この粘土層下には厚さ10～25cm程の黄褐色砂質土による中世遺物を含む包含層が堆積し、これを除去すると現地表下40～70cmで土丹をつき固めた地業面である第1面に達する。第1面は北側では堅固な地業面であるが南側ではやや薄く弱くなり、その標高は北端が16.10m、南端が15.90mと南側へわずかに傾斜するだけで、この面からは顕著な遺構を検出することはできなかった。第1面より出土する遺物はかわらけ・常滑・瀬戸等の小片で摩滅したものがかなりあり、第1面の使用時期は相当降るものと考えられる（15世紀中～後葉以降）。

（2）　第2面（図3—b・c、図版1—2・2—1）

第1面の生活面を構築する厚さ10～20cm程の土丹版築による地業面下には、砂と小土丹塊から成る茶褐色の砂質土が10～25cm程の厚さで認められ、さらにこの層を掘り下げたところ、再び土丹と砂をつき固めて互層をなす極めて良好な地業面を検出した。これを第2面と称する。この面を覆う砂質土層は北側で厚く南に行くに従って薄く堆積しており、この層から掘り込んだ遺構も認められた。調査区の北側では、鎌倉石の切石による石列を検出した。これは第2面を覆う堆積土層を切って設置されたものとも、第2面構築時に地業によって脇を固められたものとも、セクションからは判断できなかった。しかし、東西方向石列の北側にはやや固く締まった土（裏込土か）が石の上端の高さまで堆積しており、第2面上に築かれた一種の地覆施設と考えておきたい。また石列北側にある偏平な鎌倉石が建築物に伴う礎石であるかも知れないが、今回の調査範囲ではそこまで明らかにはしえない。調査区中央部では両側に溝を有する東西方向の道路状遺構と思われるものを検出した。その幅は1.6m程で、上面は堅固な土丹版築を施し北端は土丹塊を並べた段差が認められる。両側の溝は素掘りでU字形を呈し、ともに第2面上層より切り込まれている。

第2面の地業層を取り除くと間層を挟まずにやや弱い地業面が認められ、出土した遺物などから見ても両者にはさほどの時期差がないと判断されたので、この面をB面として捉えた。B面の遺構としては調査区北側で溝の側壁から肩に鎌倉石の切石や大型の土丹を乱雑に積んだような石組溝と、それを壊すかたちで南側に浅い溝1条が検出された。

（3）　第3面（図3—d、図版2—2・3—1）

中世地山である暗茶褐色粘質土を掘り込んだ遺構群を第3面に当てたが、調査区内では地山の殆どが新しい遺構によって削平を受けており、調査区北側と南端でのみ溝、土壙、柱穴が僅かに検出されたに過ぎない。これらの遺構の覆土は概ね中世基礎層をなす暗茶褐色粘質土を多く含んだものと、茶褐色弱粘質土の有機物腐植土であり、またこの中からは手捏ね成形タイプのかわらけが多く出土することから、13世紀中頃までの掘削にかかる遺構群と考えられた。

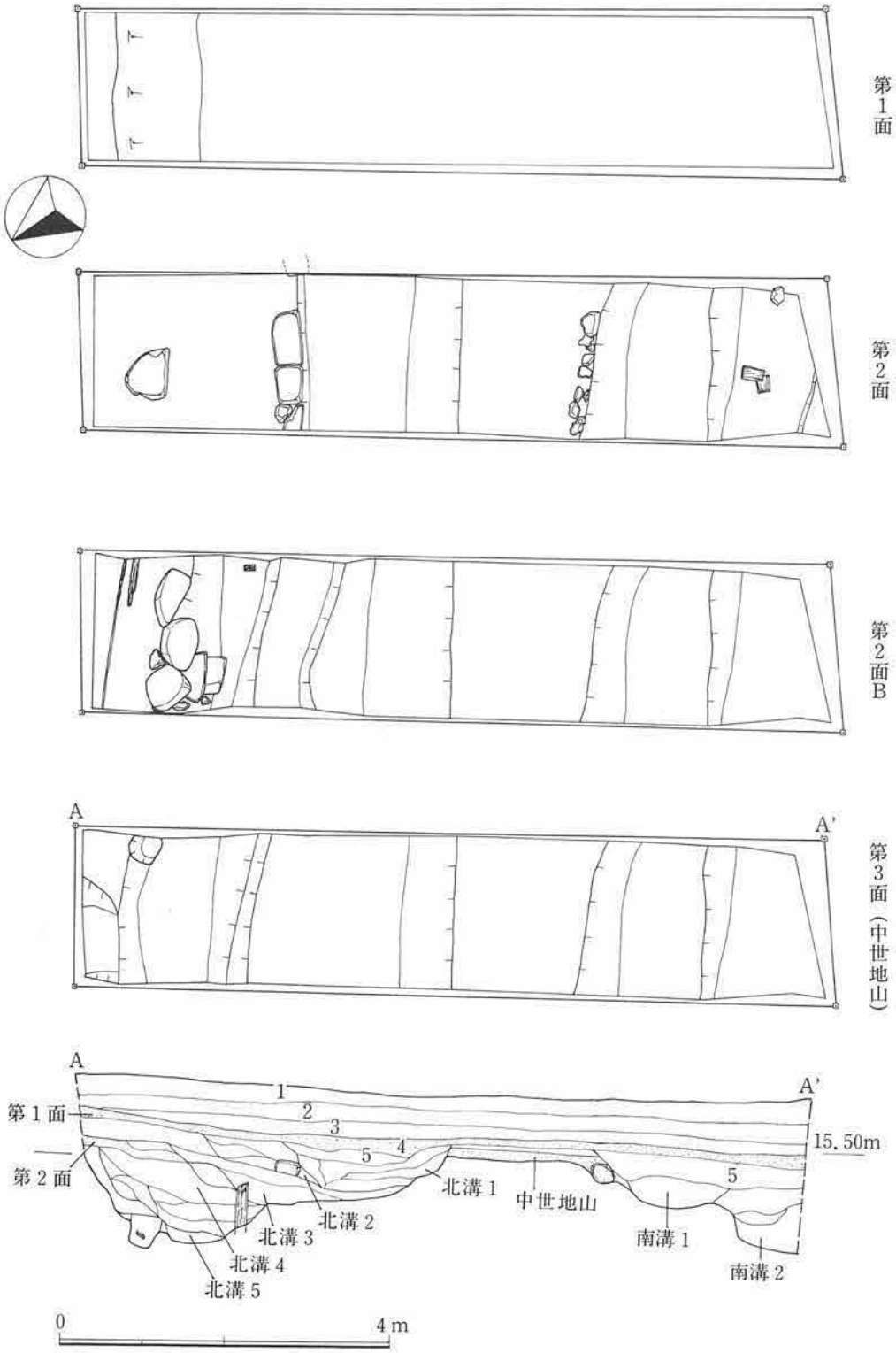


図3　第1～3面平面図及び土層図

第四章　出土した遺物

（1）第1面下及び2面上出土遺物（図4－1～7）

5～7はかわらけである。いずれも底部糸切りで、スノコ状圧痕を有し、内底面は横方向のナデ調整が施される。5は口径8.4cm、底径3.8cm、器高2.5cmである。体部立ち上がりは直線的で、中程に稜を持ち口縁部は外反する。6は口径11.4cm、底径6.0cm、器高3.0cmである。この法量は所詮中世前半に一般的な大型品の法量よりも小さく、14世紀代に出現する薄手精製タイプの中型品に近い。しかしその系譜を引くものとは思われず該期（15C代）に出現し、出土かわらけの多数を占めていくものと思われる。7は口径12.2cm、底径7.2cm、器高3.4cmである。比較的厚手で体部中程に稜を持ち口縁部は外反する。

1は瀬戸鉄釉縁釉小皿である。口縁部内外のみに鉄釉を施す。口径11.0cmである。胎土は灰白色を呈し、やや粘性がある。

2は瀬戸灰釉卸し皿の小片である。体部下端に卸し目が僅かにかかる。体部外面に灰釉が僅かに飛んでいるが、本片はほとんど露胎である。胎土は黄白色を呈し、やや粉っぽい。口径13.4cmである。

3は瀬戸鉄釉天目茶碗で半分程の破片である。口縁部のくびれは僅かで、底部は内反りの削り出し高台である。鉄釉は外面腰部から内面に施され、口縁部及び外側釉部分の下端は淡く茶褐色を呈する。全体には黒褐色の釉調を見せる。底部高台内部に墨書が認められた。口径11.6cm、底径3.2cm、器高6.5cm。

4は常滑甕口縁部である。口縁部はN字状に大きく切り返され、幅広の縁帯を構成する。胎土は長石、石英を多く含み、ガサッとしている。

（2）北側1・2溝覆土中出土遺物（図4－8～15）

11～15はかわらけである。法量は13が口径12.6cm、底径6.0cm、器高3.2cm、11が口径8.0cm、底径5.1cm、器高2.0cm、14が口径12.6cm、底径7.0cm、器高2.9cm、15が口径15.4cm、底径9.6cm、器高4.6cmである。11～13は体部外側下方に腰を持ち口縁部の外側に引き出されるタイプで、11は内面の体部立ち上がり部が肥厚し断面三角形を呈する。14・15は体部側面観の直線的なタイプである。いずれも底部糸切りでスノコ状圧痕を有し、内底面には横方向のナデ調整が施される。

8は青磁碗である。口径は17.0cm、底部を欠損する。釉は灰黄緑色を呈し、胎土は灰黄白色を呈しやや粘性に欠ける。明代の所産であろう。

9は瀬戸鉄釉天目碗である。口径12.8cm、底径4.4cm、器高6.6cmである。口縁部のくびれは弱い。高台脇を削り出しておらず、高台内の削りは浅いが輪高台となっている。外側面腰部から内面に鉄釉がたっぷりと施される。口縁端部は淡くなり茶褐色を呈する。胎土は灰白色を呈する。

10は常滑捏鉢である。小片であるが体部側面観は直線的で、口縁端部は内側へ僅かに、外側へ強

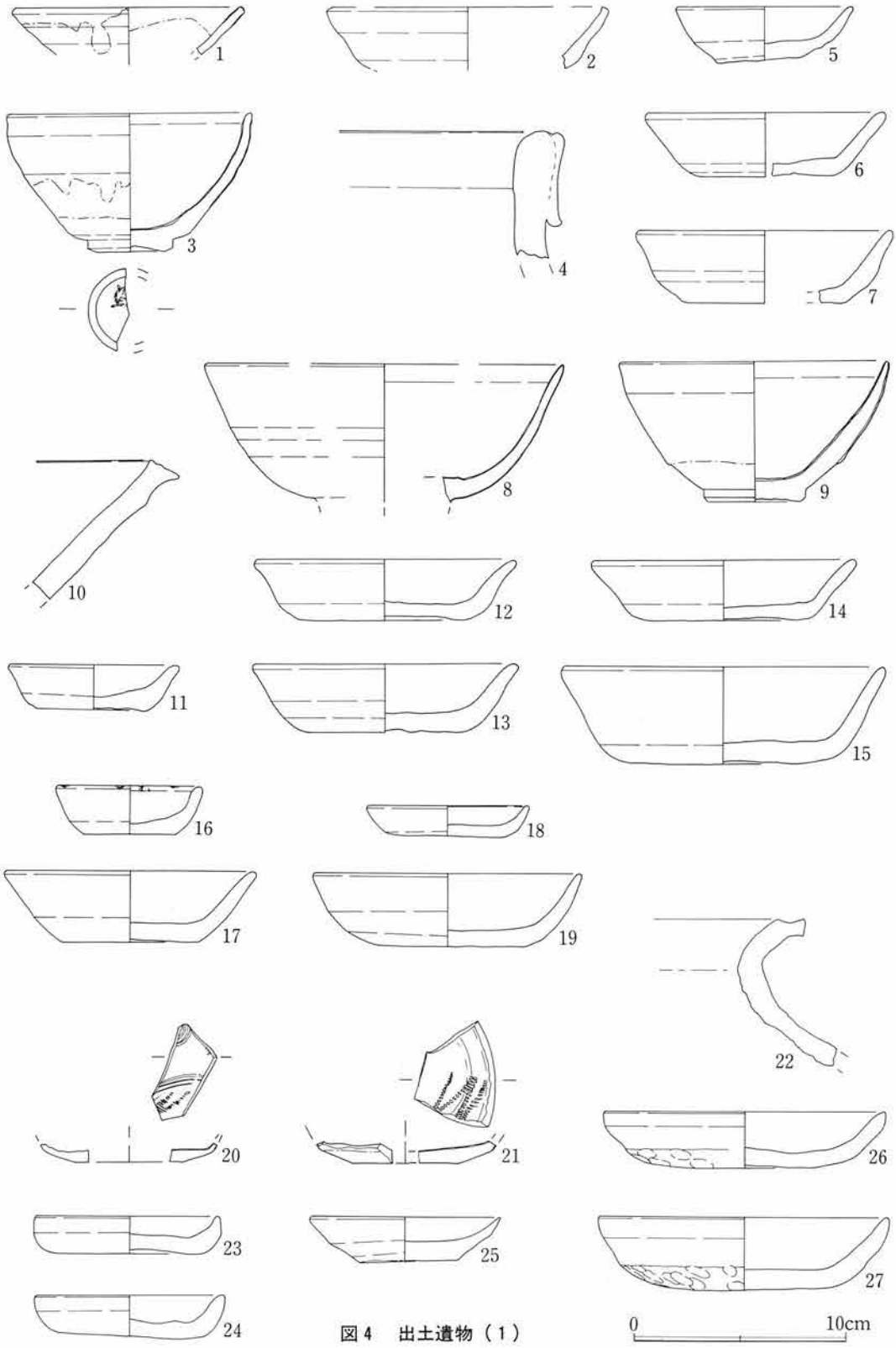

1
2
5
3
4
6
7
8
9
10
12
14
11
13
15
16
18
17
19
22
20
21
26
23
25
27
24
0
10cm

図4　出土遺物（1）

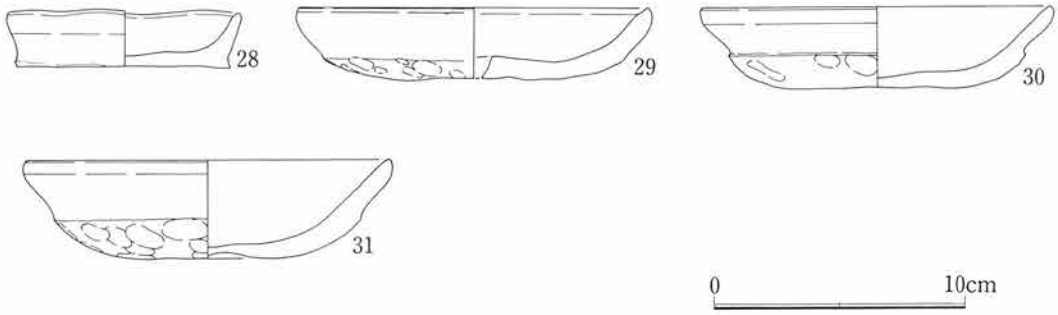


図5　出土遺物（2）

く引き出される。胎土は長石、石英、小石を多く含みザックリとしている。

（3）南側1溝覆土中出土遺物（図4—16・17）

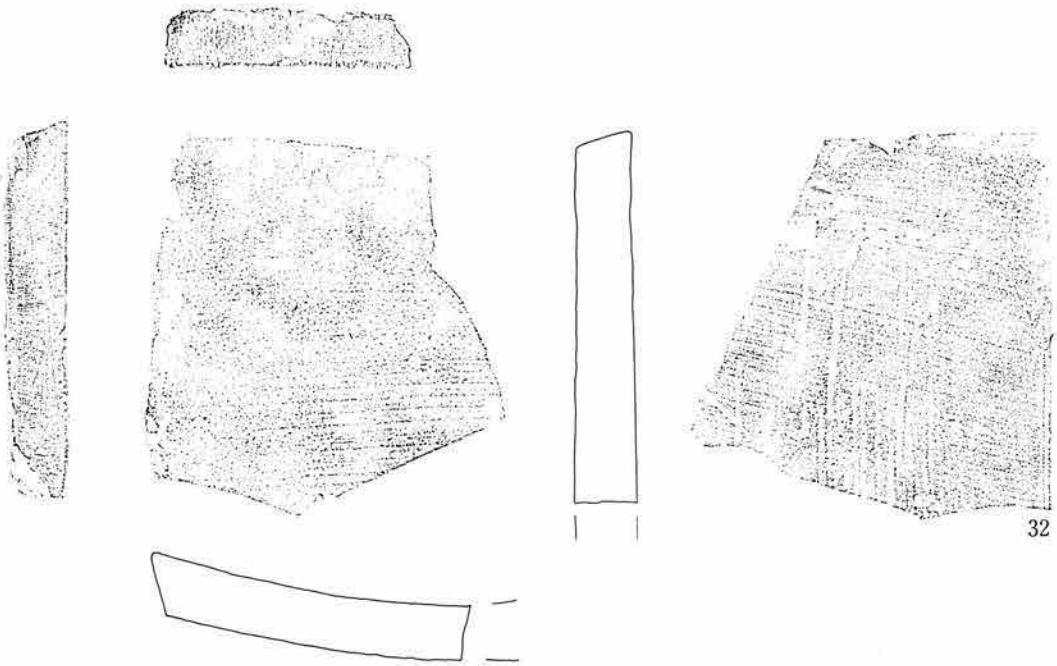
16・17はかわらけである。16は口径6.9cm、底径4.3cm、器高2.3cmである。17は口径11.9cm、底径6.5cm、器高3.4cmである。16は口径と底径の差が少なく、器高が高いタイプである。口唇部に5ケ所タールが付着する。17は体部が直線的に開くタイプで内面立ち上がり部の肥厚は認められない。いずれも底部糸切りでスノコ状圧痕を有し、内底面に横方向のナデ調整を施す。ただし16のナデ調整は雑である。

（4）北側3・4溝覆土中出土遺物（図4—18・19）

18・19はかわらけである。18は口径7.6cm、底径5.3cm、器高1.4cmである。19は口径12.7cm、底径7.2cm、器高3.2cmである。18は器高が低く底部から体部立ち上がりが、横方向に張り出し体部下方に稜をもって直線的に立ち上がるタイプである。19は緩やかに内湾しながら立ち上がりそのまま直行するタイプである。いずれも底部糸切りでスノコ状圧痕を有し、内底面には横方向のナデ調整が施される。

（5）北側5溝覆土中出土遺物（図4—20～27）

23～26はかわらけである。23は口径8.6cm、底径7.0cm、器高1.8cm、24は口径9.0cm、底径7.0cm、器高1.9cmである。共に底部糸切りで、21にはスノコ状圧痕が認められ、内底に横方向のナデ調整が施される。24は内底に同心円状のロクロ目が顕著で、中心部の凸部に軽いナデが施される。22の糸切り痕は粗い。27・26は手捏ねで、27は口径13.6cm、器高2.8cm、26は口径13.4cm、器高2.7cmである。ともに手捏ね底部と体部の境の稜線は明瞭でない。25は溝最下層から出土している。口径9.0cm、底径4.8cm、器高1.8cmである。底部は静止糸切りである。内底面は器形に添って円周状に調整されている。体部外面はロクロ目が強く、底径と口径の差が大きい。砂混じりの胎土である。同安窯系青磁小皿片（20・21）を伴っている。22は常滑の甕片である。口縁部から肩部にかけての小片で口縁部の形状は口端を僅かに上方に引き上げただけで縁帯部は8cm程である。胎土は長石粒、少量含み比較的粘性がある。



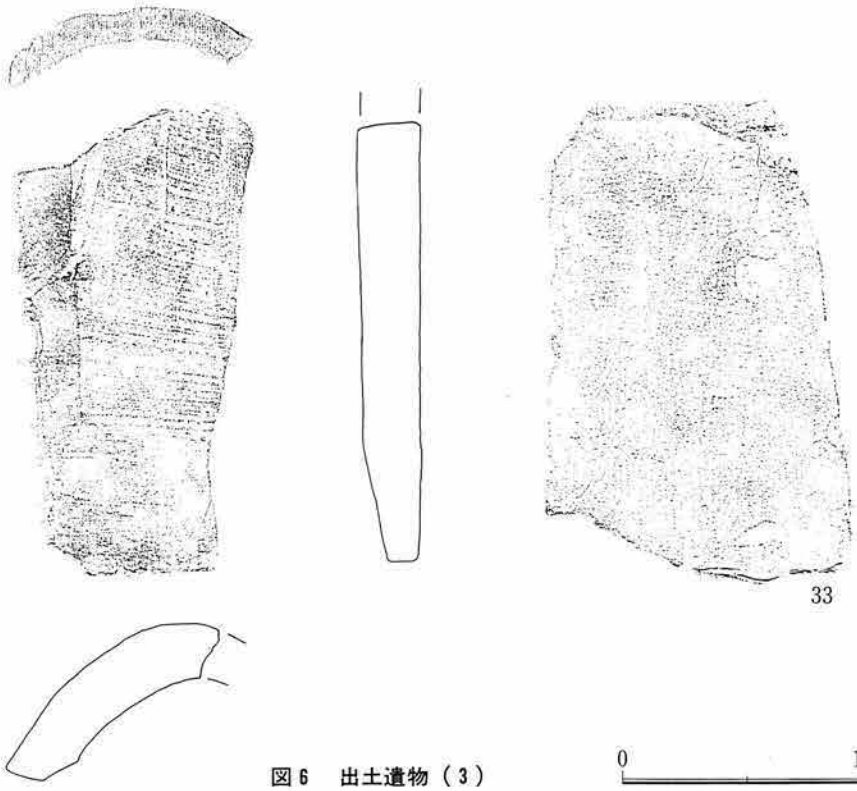


図6　出土遺物（3）

0　10cm

（6）南側2溝覆土中出土遺物（図5—28～33）

29～31は手捏ねかわらけである。30は口径14.2cm、器高2.8cm、29は口径14.0cm、器高3.2cm、31は口径14.9cm、器高3.9cmである。いずれも手捏ね部と体部の稜が明瞭である。28は底部糸切りで、スノコ状圧痕を有し糸切りの目は粗い。内底面は横方向のナデ調整が全体に施されている。口径と底径の差が殆どなく、体部は直立している。胎土は砂混じりで器表はザラザラし焼成は良好である。

瓦が2点出土している。32は女瓦で、33は男瓦である。ともに永福寺創建期の瓦類と同類の製品である。

第五章　まとめ

今回はトレンチの限られた範囲の調査であったが、幾つかの成果を得ることができた。第１面は出土遺物から見て15世紀末以降と思われ、遺構と言えるものは検出されなかったが、第２面以下には幾つかの遺構が検出された。即ち、トレンチ内北側から縁辺に土丹列を持った平坦な面があり、その縁辺下に溝が穿たれ、その更に南側にも同様の溝が穿たれ、この溝と溝に挟まれたところに道路状の遺構が検出された。これら遺構の位置は第２面Ｂ、第３面でも殆ど変化していない。ただ、第３面では土丹列が見られない。この変化しない遺構の位置関係を出土遺物の年代観から、時期的に見ると13世紀前半から15世紀前半までということになる。調査区の周辺の状況をこの狭小なトレンチ内から想像するのは少々無理かも知れないが、道路の両脇に溝があり、この溝は幾度か改修され、また道路の北側には溝を挟んで縁辺に土丹列を置いた平地が拡がっているのではなかろうか。この様にして遺構の関係が400年近くの間殆ど変化していないのは寺院の境内であるからであろうか。

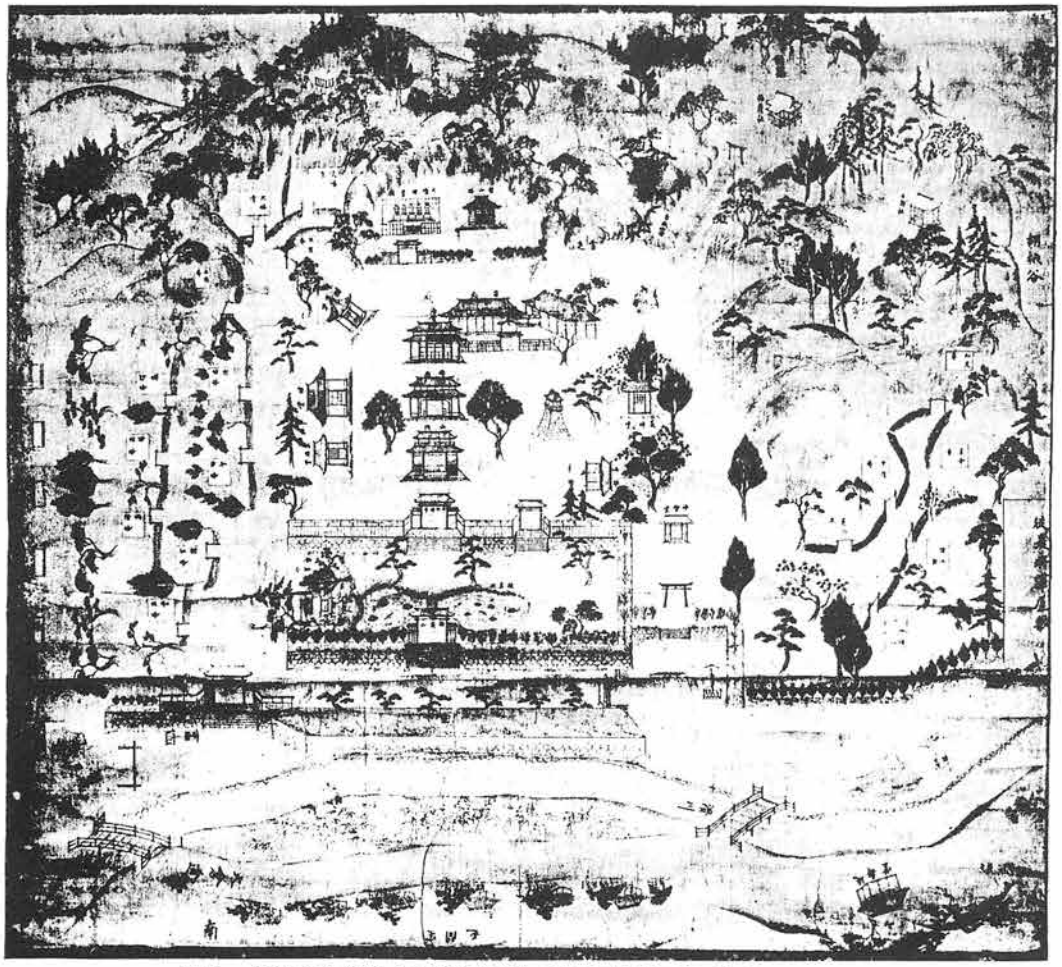


図７　浄妙寺古絵図（浄妙寺所蔵）鎌倉国宝館図録（15）より転載

◀1. 第1面全景（南から）

▶2. 第2面全景（南から）

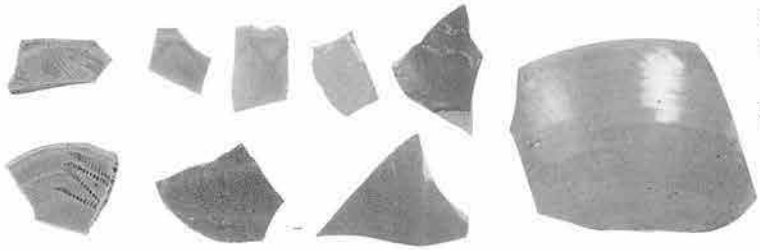
図版 2

◀1. 第2b面全景（北から）

▶2. 第3面全景（北から）

◀1. 東壁土層堆積

▼2. 陶磁器類



◀青磁・白磁

▼瀬戸天目茶碗

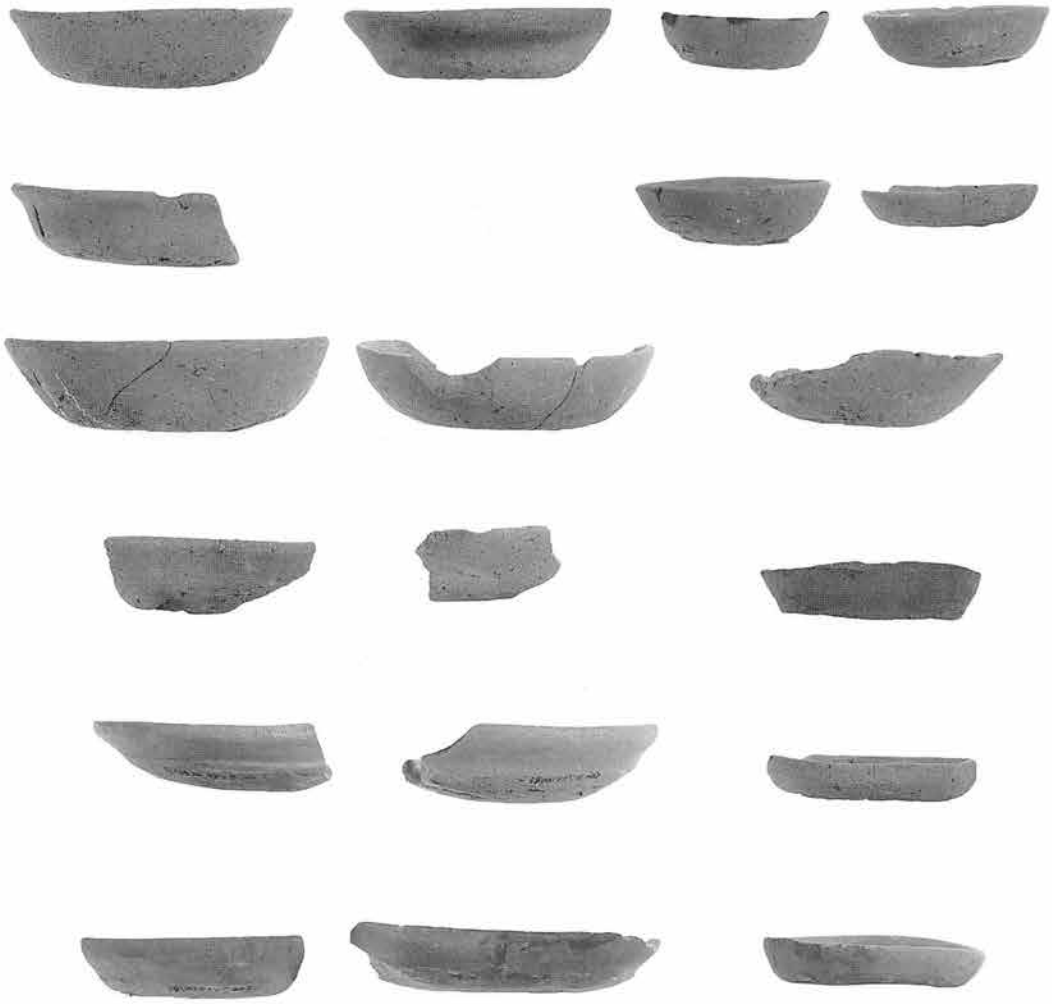
▼瀬戸灰釉皿・御し皿

▼瀬戸鉄釉皿

▼常滑甕

▼山皿

図版 4



▲1. かわらけ

▼2. 瓦類

4．大倉幕府周辺遺跡（No. 49）

おおくらばくふしゅうへん

雪ノ下大倉耕地565番４地点

例　言

1．本報は、鎌倉市雪ノ下大倉耕地565番４地点に所在する大塚邸新築工事に伴なう発掘調査報告である。

2．調査は国庫補助事業として、平成元年10月５日～10月31日にかけて実施された。調査対象面積は100㎡である。

3．本報の執筆・編集は菊川英政が、図版作製には長田夏子があたり、土壌中の花粉分析は、(株) パレオ・ラボに依頼した。

4．本報に使用した写真は、遺構を菊川が、遺物は木村美代治が撮影し、遺跡遠景は、(株) シン航空写真に依頼した。

5．調査体制は以下の通り。

主任調査員　菊川英政

調査補助員　折茂芳則、南保由利

協　力　者　吉田文一、吉田茂夫、吉田茂、鎌倉市高齢者事業団、(株)パレオ・ラボ

6．出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

7．発掘調査に際しては、大塚武雄氏御一家より暖かい御援助を賜わり、心より御礼申し上げる次第である。

目　次

例言 …… 64
目次 …… 65

本文目次

第一章　遺跡の位置と環境 …… 67
第二章　調査の概要 …… 69
第三章　層序と検出遺構 …… 70
　第１節　層序と生活面 …… 70
　第２節　トレンチⅠ検出遺構 …… 70
　第３節　トレンチⅡ検出遺構 …… 73
第四章　出土遺物 …… 75
　第１節　トレンチⅠ出土遺物 …… 75
　第２節　トレンチⅡ出土遺物 …… 81
第五章　調査成果と問題点 …… 83
《附篇》　大倉幕府周辺遺跡の溝内堆積物の花粉分析 …… 85

挿図目次

図１　調査地周辺の遺跡 …… 66
図２　幕末頃の荏柄天神社 …… 67
図３　調査区の設定 …… 69
図４　土層堆積状態 …… 71
図５　トレンチⅠ遺構平面図 …… 72
図６　井戸平面図 …… 73
図７　トレンチⅡ遺構平面図 …… 74
図８　第１面上包含層出土遺物(トレンチⅠ) … 76
図９　第１面上包含層出土遺物(トレンチⅠ) … 77
図10　第１面上包含層出土遺物(トレンチⅠ) … 78
図11　第１面上包含層出土遺物(トレンチⅠ) … 79
図12　第２面上包含層出土遺物(トレンチⅠ) … 80
図13　第３面上包含層出土遺物(トレンチⅠ) … 81
図14　土塁構築層出土遺物(トレンチⅡ) … 81
図15　包含層出土遺物(トレンチⅡ) …… 82
図16　調査地点の断面模式図 …… 83

図版目次

図版１　遺跡遠景 …… 92
図版２　荏柄社参道と庚申塔 …… 93
図版３　トレンチⅠ検出遺構 …… 94
図版４　井戸 …… 95
図版５　土塁状遺構 …… 96
図版６　土塁状遺構断面 …… 97
図版７　出土遺物 …… 98
図版８　出土遺物 …… 99

図1　調査地周辺の遺跡

1. 調査地点（雪ノ下大倉耕地565番1地点）
2. 大倉幕府周辺遺跡（雪ノ下大倉耕地569番1地点）
3. 横小路周辺遺跡（二階堂荏柄9番1地点）
4. 大倉南御門遺跡
5. 向荏柄遺跡
6. 浄明寺釈迦堂田楽辻子遺跡
7. 浄明寺釈迦堂遺跡

第一章　遺跡の位置と環境

鶴岡八幡宮前から、県道金沢・鎌倉線を東へ進み、岐れ道を過ぎて更に180m程行くと荏柄天神参道の先端部にあたる。調査地点は、この参道先端部の西側に位置している。(図１)

図２　幕末頃の荏柄天神社

荏柄天神社は、長治元年(1104)の勧請と伝えられる古社で、現在の参道は、鎌倉宮へと通じる新道で二分され、その南半分はあまり利用されていない。先端部には明和五年(1768)銘の石鳥居が倒壊したまま残され、傍に建つ６基の庚申塔には、元文五年(1740)～明治三十三年(1900)の銘が刻まれている(註１)。かつての様子を伝えるものに、図２の絵図がある。この絵図は、文政十年(1827)八幡宮再建のため、鎌倉を訪れた隅田大隅守の組下、海老原孫三郎利啓によって描かれ、天保五年(1834)に図巻としてまとめられたものの一部である(註２)。参道端の石鳥居や六浦路と思しき道が描かれ、石段下の別当一乗院を除けば、一面に田畠が広がっていたことがわかる。二階堂大路は廃れてしまったようで、描かれていない。

さて、時代を遡り、中世においてはどんな様子であったのだろうか。遺跡地南方の谷は、源氏の菩提所ともいうべき勝長寿院のあった谷である。勝長寿院は、文治元年(1185)源頼朝が父義朝の報恩のために建立した寺院で、その後、実朝、政子の法華堂も造立され、天文九年(1540)頃まで存続したことが知られている(註３)。同じく頼朝ゆかりの大刹、永福寺は遺跡地の北東方向にあたる。永福寺は義経、泰衡をはじめ、奥州征伐での犠牲者を慰霊するために建立され、平泉中尊寺を模した大伽藍であった。文治五年(1189)に事始めが行われた後、享徳四年(1455)の火災で焼失し、廃絶したようである(註４)。この永福寺門前へと通じる道は、二階堂大路と呼ばれ、現在の関取橋から荏柄天神参道を横切り、北東方向へと伸びる小路が該当する考えられている。

西方に目を転じてみると、現在、清泉小学校のある辺りは、大倉幕府跡と推定される場所である(註５)。治承四年(1180)鎌倉に入った源頼朝は、大倉の地に幕府を開いている。その郭内には、寝殿、対屋、大御所、小御所、常御所などが建ち、東西南北に門を設けていたらしい。幕府の開設と同時に、御家人たちも宿館を構えた。遺跡地の近くでは、荏柄前に和田平太胤長の屋地があり、

宇佐美判官、宮内権大輔時秀の屋敷も遠からぬ距離にあったらしい（註６）。また、北条義時の大倉邸については、貫達人氏の詳しい論考がある（註７）。それによれば、「杉本観音の西方で、二階堂大路の辺、つまり、現在の関取橋の近所にあった。」と指摘している。関取橋の辺りは、大倉辻とも呼ばれ、建長三年（1251）と文永二年（1265）に幕府による商業地域の規制が行われた際、小町屋ならびに売買の施設を作ることが許可された地域であり、更に降って、天文十一年（1542）には、荏柄社再興造営のための関所が設けられていた場所でもある。

遺跡地近辺での発掘調査箇所は、図１に示した通りである。この中から二三紹介してみよう。まず、図１－２地点では、近世初頭の礎石建物が検出され、馬渕和雄氏は、「関取場の建物の一部」と推定している（註８）。図１－３地点では、六浦路に直交する道路状遺構と大形の井戸、そして1000にも上る多数の柱穴群が検出されている。建物の規模・配置・変遷は不明ながらも、13世紀中半～16世紀初頭にかけての屋敷地と考えられている（註９）。図１－５地点は少し距離を隔てるが、溝によって区画された中に、井戸や建物（礎石・掘立柱）が配され、13世紀初頭～14世紀後半代にかけての有力階級の屋敷地ではなかろうかとしている（註10）。

最後になったが、遺跡地周辺で起きた火災の記録は、建久二年（1192）・承久元年（1219）・寛喜三年（1231）・建長三年（1251）・弘長三年（1263）『吾妻鏡』と弘安三年（1280）・延慶三年（1310）『北条九代記』の計７件が知られる。各件の被災内容は『向荏柄遺跡発掘調査報告書』（註10に同じ）で簡潔に記されているので、そちらを参照されたい。なお、14世紀以降は史料が乏しいため、不明といわざるを得ない。

註１　木村彦三郎『道ばたの信仰―鎌倉の庚申塔―』　鎌倉市教育委員会　昭和48年
　　庚申塔は、明治以降にこの場所へ移されたらしい。また、石鳥居は関東大震災の時に倒壊したものである。

註２　『図説　鎌倉回顧』　鎌倉市　昭和44年

註３　高柳光寿『鎌倉市史　社寺編』　吉川弘文館　昭和47年

註４　『史跡　永福寺跡』　鎌倉市教育委員会　昭和57年～平成元年

註５　高柳光寿『鎌倉市史　総説編』　吉川弘文館　昭和47年

註６　『吾妻鏡』建保元年（1213）・建長三年（1251）・弘長三年（1263）の条による。註７　貫達人「北条氏亭址考」『金沢文庫研究紀要』第８号　昭和46年

註８　馬渕和雄『大倉幕府周辺遺跡群』　同遺跡発掘調査団　1990年

註９　菊川英政「横小路周辺遺跡（No.259）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書６』　鎌倉市教育委員会　平成２年

註10　馬渕和雄『向荏柄遺跡発掘調査報告書』　同遺跡発掘調査団　1985年

第二章　調査の概要

発掘調査は、平成元年10月５日～10月31日にかけて実施された。調査方法として、建物基礎により破壊される面積が小さいことを考慮し、建築範囲の東西両端にトレンチを設定して調査を行うこととなった。西側のトレンチＩは約３×７m、東側のトレンチIIは、土塁状遺構が検出されたため、西側へ拡張して約５×７ｍの範囲となった。トレンチＩ・IIの間隔は約７ｍである。

トレンチＩについては、地山面を含めて３枚の生活面が確認され、その各面での調査が終了している。トレンチIIでは、第１面（生活面）に伴なう土塁状遺構の調査に主眼を置き、それ以下の生活面に関しては、北壁際に設定したサブトレンチによって、トレンチＩとの対応関係を明らかにするに留まった。

調査地点に張ったグリッドは、荏柄天神参道の縁石端を基準とした。まず、参道鳥居脇に仮設の点Ａ０を設け、そこから縁石に沿って北側へ５ｍ間隔、更にその点から西側へ５ｍ間隔に点を落として方眼を組み、南北軸に算用数字、東西軸にアルファベットを付した。南北軸（参道主軸）は、磁北に対して、N—19°—Eの傾きをもっている。

図３　調査区の設定

第三章　層序と検出遺構

第１節　層序と生活面

調査地点の堆積土層は、大略７層に区分され、そのなかで、３時期の生活面が確認された。堆積の状態は、図３に示した通りである。１層としたのは表土層で、20～30cm程の厚みをもつ。遺物の出土はなく、宝永火山灰も肉眼では見つかっていない。２・３層は中世遺物包含層で、多量の遺物が混入していた。４層は上面を第１面（生活面）とした層であるが、その堆積状態は、トレンチＩとIIでは著しく異なっている。トレンチＩでは、粘土層（a)、炭層（b)、微小土丹層（c）が薄く互層状を呈しており、短期間に幾度も地業がなされたことを示している。一方、トレンチIIでは、a～c に対応する層がなく、４層上面に薄い炭層が１枚確認されたのみである。５層は中～大形の土丹塊による地業層で、上面を第２面（生活面）とした。トレンチＩ・IIに共通してみられ、厚さは約20～30cm、広範囲にわたる大規模な地業が行われた結果である。６層は粒子の微細な粘土層。締りがなく、炭化物粒、木端片を少量混入する。自然堆積層か地業層か判然としない。７層は地山である。上面を削平された可能性はあるが、標高11.1m を測る。第３面（生活面）とした。

なお、図３中に記された試料 No.1～No.8は、花粉分析試料の採取位置を示している。分析結果については、本報告末尾に附篇として掲載した。参照されたい。

第２節　トレンチＩ検出遺構

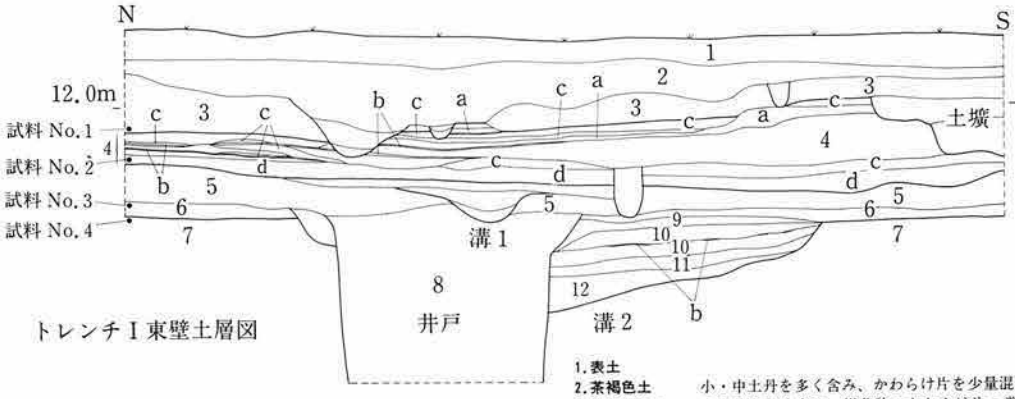
トレンチＩでは、３枚の生活面が確認され、調査が行われた。以下、各面で検出された遺構について簡単に説明を加えたい。

第１面は地表下60～80cmで検出された。東壁寄りに集中する土丹版築面は、広がりのない部分的な面で、精査するうちに、更に別の版築面が数cm下で検出されるという状態を呈し、１枚の安定した生活面とは言い難い面である。トレンチ壁面にみられる４枚の薄い炭層やＥ２グリッド杭付近の焼土面から、短期間のうちに幾度かの火災に遇い、その度に部分的な地業を繰り返した結果ではないかと推定される。

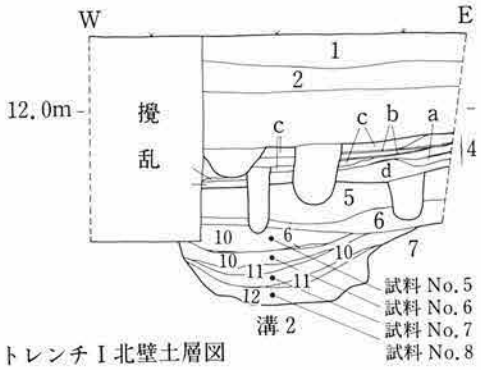
検出した遺構は、柱穴および土壙があるが、両者とも覆土断面の観察が不十分なため、確実な遺構と断定できないものが多い。また、西壁寄りで検出された伊豆石は、柱穴内にあるものを除いて欠損しており、礎石に使用した後に廃棄され、地業土中に混入したものと考えられる。いずれの石も焼けた痕跡は見出せなかった。

第２面は地表下１～1.2m、標高11.5m 前後の所で検出された。大形土丹塊を主体とした地業層上面にあたり、安定した生活面として広がりをもつ。遺構としては、柱穴・溝（溝１）がある。

柱穴は１辺20～30cm程の方形プランで、深さ20～40cmのものが多く、底面に礎板を置くものもある。残念ながら、検出された柱穴群からは、建物としてのまとまりは確定できなかった。



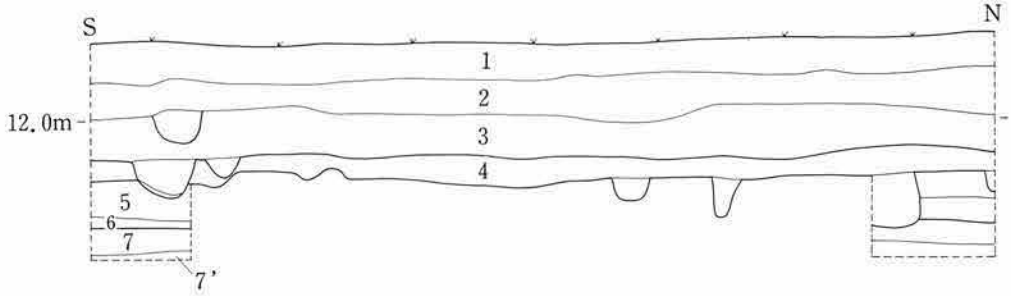
トレンチⅠ東壁土層図



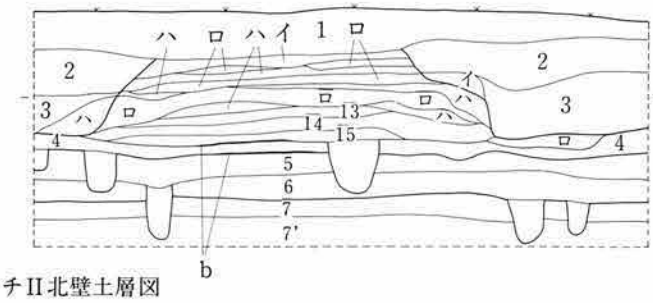
トレンチⅠ北壁土層図

1. 表土
2. 茶褐色土　小・中土丹を多く含み、かわらけ片を少量混入する。
3. 暗茶褐色土　小土丹を多く含み、炭化物・かわらけ片・常滑片を多量に混入する。
4. 暗茶褐色土　小・中土丹を含み、幾層かの薄い地業層を挟む。（第1面）
a 粘土層　b 炭化物層　c 土丹地業層　d 暗灰褐色砂質粘土層
5. 暗黄褐色土　中・大形土丹を主体とする地業層（第2面）
6. 暗灰色粘土　炭化物を少量含み、締りなし。
7. 黒灰色粘土　混雑物なし。地山。（第3面）
7'. 黒灰色粘土　7層に似る。締り良好、地山。
8. 黄褐色土　大形土丹を主体とする。（井戸覆土）
9. 暗茶褐色粘土　土丹粒子を含む。（溝2覆土）
10. 暗茶褐色粘土　木端片を少量含む。（〃）
11. 黄茶褐色土　木質腐蝕層（〃）
12. 暗灰褐色粘土　炭化物を微量混入する。（〃）

0　2m



トレンチⅡ西壁土層図



トレンチⅡ北壁土層図

<土塁状遺構>
13. 茶褐色土　小土丹、炭化物を含む。
14. 暗茶褐色土　土丹粒、炭化物を含む。
15. 暗灰褐色粘質土　小土丹を含む。
イ. 黄茶褐色土　上部に小土丹を多く混入。
ロ. 土丹版築層
ハ. 茶褐色砂質土

0　2m

図4　土層堆積状態

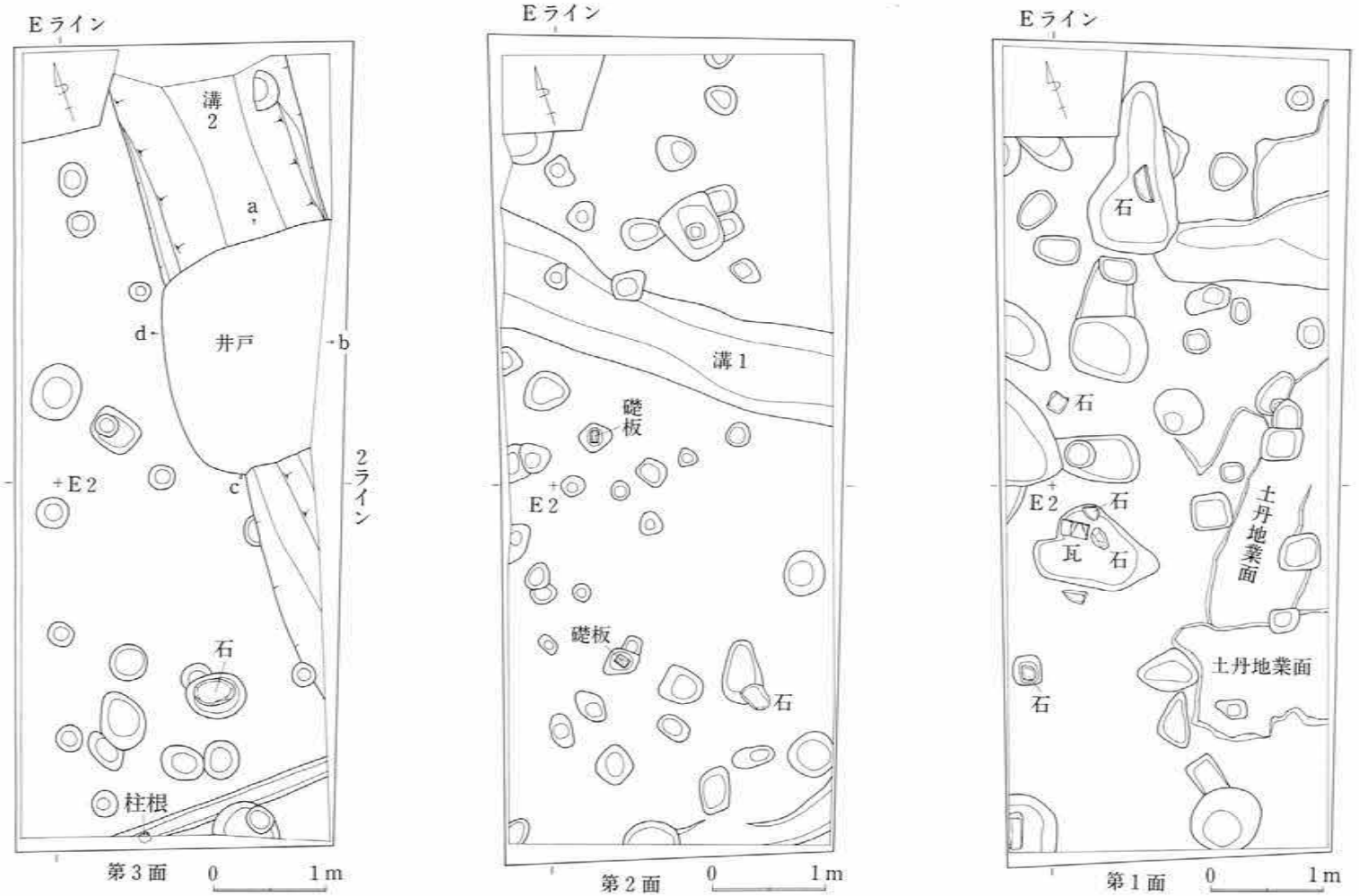


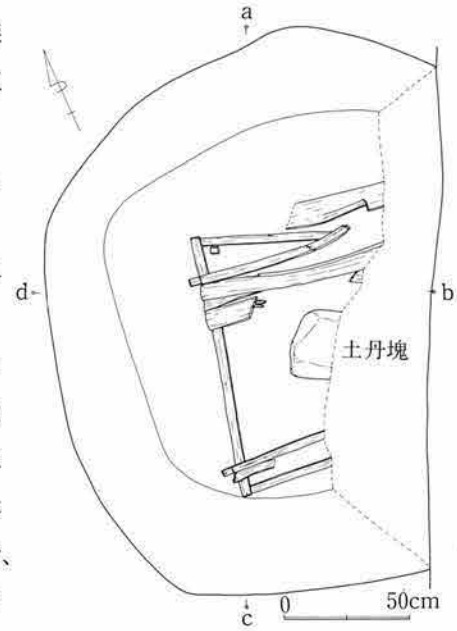
図5　トレンチⅠ　遺構平面図

溝１はトレンチ中央部で検出された。幅0.7～１m、深さ30cm、断面形状は浅いＵ字形を呈す。底面のレベル値から、南東→北西方向への水の流れが予想される。

南東角隅近くにある伊豆石は、礎石として据えられたものと考えられるが、対応する石がなく、断定はできない。

第３面は地山面である。標高11.1m を測る。検出された遺構には、井戸・柱穴・溝（溝２）がある。

井戸は地山面の１枚上層から掘り込まれており、溝２より新しい。東壁際で検出され、トレンチ壁面が崩落する危険性があるため、全掘はしていない。井戸掘り方は、１辺1.8m の隅丸方形を呈し、内部に木枠が遺存していた。木枠は土圧を受けて変形するが、１辺1.05m の方形木組で、横桟支柱型と呼ばれるものである。横桟部分の組み方は図５に示したように、枘で連結されている。井戸枠内部の覆土は、上層が土丹塊を主体としており、第２面構築の際に井戸も埋められたことが判る。下層は暗灰褐色粘土であるが、完掘はしていない。なお、上層と下層との境、井戸掘り込み面より約90cm下で、１辺30cm、厚さ15cm程の整形加工されたと思しき大形土丹塊が検出された。井戸埋めの儀式と関連するものであろう。



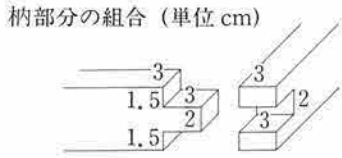


図６　井戸平面図

柱穴は第２面に比して数少なく、建物を復原するには至っていない。大形の伊豆石を底面に据えたものや、柱根の残るものがみられた。柱根の径は約13×11cm、周囲を11面にわたって細かく面取り整形し、50cm程の長さが遺存していた。柱根下には礎板も存在したが、計測はできなかった。この柱穴の掘り込み面は、井戸と同様に、第３面の１枚上の層である。

溝２は、確実に第３面から掘り込まれた溝である。上端幅1.6m、底面幅0.5m を測る大形の溝で中位に段を有し、中位からの立ち上がりは垂直に近い。断面形は、２段の箱掘りとでも言うべき形状である。主軸方位は南北を示すが、南側の底面が調査区外に出ているため、水の流れがどちらへ向っていたかは不明である。

溝２と直交する小溝も検出された。この溝はトレンチ南壁際にあり、柱根の残る柱穴によって、一部を切られている。幅20cm、深さ３cm程の浅い溝である。

第３節　トレンチII検出遺構

トレンチIIでは、土塁状遺構と柱穴が検出された。

土塁状遺構は、表土層直下で検出され、当初、道路状遺構として調査された遺構である。検出直

後の状態は、小形ないし中形の土丹による幅2m程の弱い版築面であり、全体に荒れた観を呈していた。(写真図版5上段) 多くの道路状遺構が、数回にわたる補修を行なっていることから、本遺構も築造当初の道路面を出すとともに、側溝および対応する生活面を探りながら調査が進められた。良好な土丹版築面は、上から3番目で検出された。(図6・写真図版5下段) この面が最もよく整っており平坦で堅緻な版築がなされ、版築中には小砂利も混入していた。道路としての機能を十分に果たす面である。一方、側溝および対応する生活面は、北壁際を断ち割って調査された。(図3最下段) その結果、側溝は検出されず、本遺構が道路ではなく、第1面上に盛土した土塁である可能性が濃厚となり、ここでは、一応、土塁状遺構として扱うこととした。

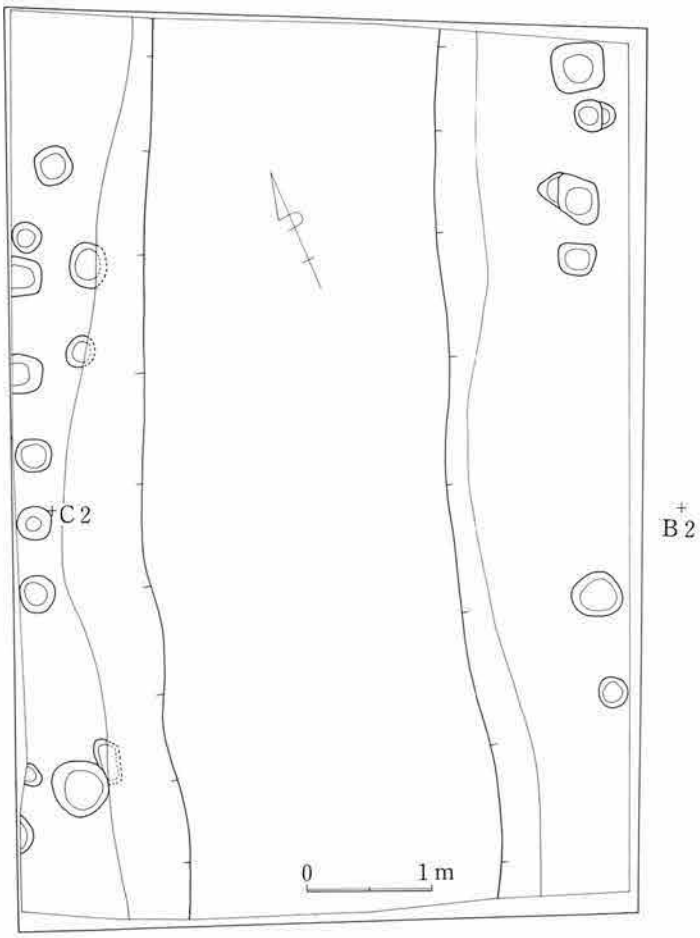


図7　トレンチII遺構平面図

土塁状遺構の構造は、基底面となる第1面上に、弱い粘性をもつ茶褐色土（図3、13～15層）を約30cmの高さに盛り、その上に、砂質土（図3、ハ層）と土丹版築層（図3、ロ層）を交互に積み上げて構築している。項部は後世の削平を受けるが、遺存する上端面の幅は2m、基底部幅3.2m、高さは60～70cmを測る。断面形状は台形。ただし、土塁東側の立ち上がりに、垂直に近い箇所も認められることから、板材をあてていた可能性も考えられる。主軸方位は、磁北に対してN—23°—Eの傾きをもち、現在の荏柄天神参道とほぼ併行している。

土塁状遺構の東西両側で検出された柱穴は、精査中に掘り下げ過ぎてみつかったものである。そのほとんどが、第2面に伴なう柱穴と考えられ、第1面の柱穴は、土層図にかかった2穴以外に確定できなかった。

第四章　出土遺物

第1節　トレンチⅠ出土遺物

第1面から第3面までの出土遺物を図示した。遺構に伴なう遺物は少なく、小片ばかりであるため割愛し、包含層中より得られた遺物に限った。各生活面の年代観等を見るには十分であると考えている。なお、図8～図11が第1面上包含層出土、図12が第2面上包含層出土、図13が第3面上包含層出土の遺物で、各々、総出土量の1/2～1/3程度の点数を測図化したことを付記しておく。

1～12はかわらけ皿。12は手捏ね整形のものである。概して器高が低く、内彎する体部をもち、口径と底径の比率に差がないものが多い。いわゆる薄手タイプの大皿・中皿・小皿のセットは1点もみられない。8は時期的に後出するタイプの皿である。

13～18は舶載磁器。13は青磁鎬蓮弁文碗の底部と思われる。14は青磁折縁皿の口縁部小片である。15は白磁口兀げ皿。17は白磁碗、口縁端部の釉は丁寧に削り取られている。18は白磁の壷と思われる。体部以上の破片は出土していない。

19は山皿、完形品である。

20～21は瀬戸窯産の陶器。20は灰釉小皿の口縁部小片。漬け掛け手法で端部にのみ灰釉を施す。21は四耳壷であろうか。内外面に気泡化した灰釉が薄くみられる。

22～23は渥美窯系の捏ね鉢。素地は暗灰色を呈し、山茶碗窯系の製品ほどには胎土が粗くない。22は小ぶりの製品。23は甕の下半部をそのまま捏ね鉢としたような形態である。23については常滑窯系に類似の製品が多くみられるが、胎土の比較から渥美窯系として扱った。22・23ともに内面は磨耗している。

24～33は山茶碗窯系の捏ね鉢。全体を復原できるものはなく、口縁端部と底部を別々に測図した。口縁端部の形態や体部下半のヘラ削り痕の有無に差がみられる。

34～42は常滑窯系の捏ね鉢。山茶碗窯系の捏ね鉢に比べて出土量は少ない。口縁端部の形態はさまざまあるが、底部は高台の付かないものばかりである。37と42は他のものより後出する形態といえる。

43～44は手焙りの口縁端部。ともに小片で、体部以下の破片もみつかっていない。

45は滑石製鍋。口縁部の小片である。外面の鍔上部に錐で突いたような小穴が2個並んでいる。貫通はしておらず、何のために穿った穴か不明である。

46は泥岩製品。通称“土丹”と呼ばれる軟質な泥岩塊を加工したもので、上面を鋸歯状に刻み、裏面は粗い鑿痕をそのまま残す。用途等は不明。類例の出土もない。

47～48は北宋銭。47は祥符元宝（初鋳1008年）、48は元祐通宝（初鋳1086年）である。49～54は瓦。49が鐙瓦、50～52が男瓦、53～54が女瓦である。永福寺で出土する瓦と同じもので、本遺跡地へは二次的に運び込まれたと思われる。

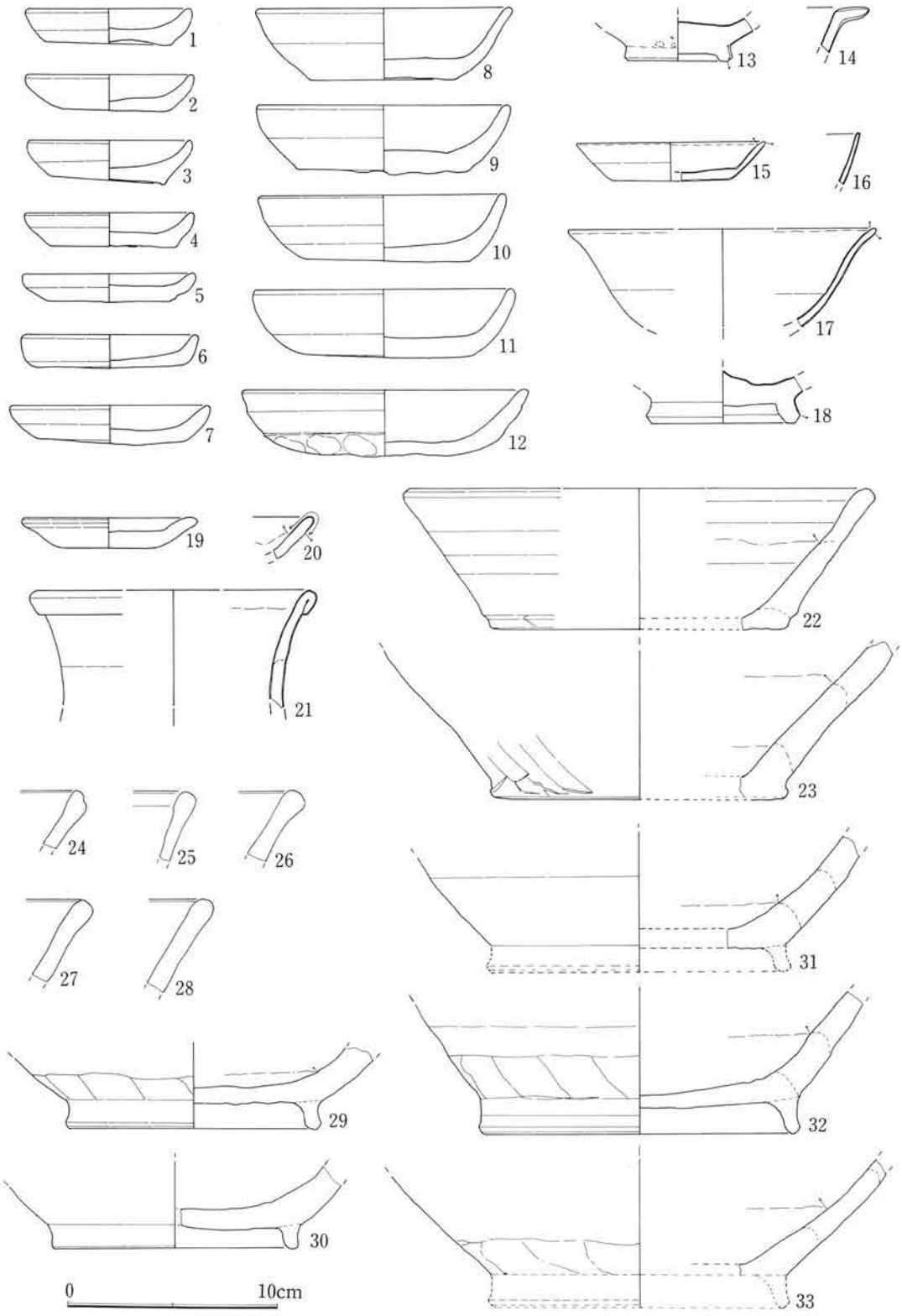


図8　第1面上包含層出土遺物（トレンチⅠ）

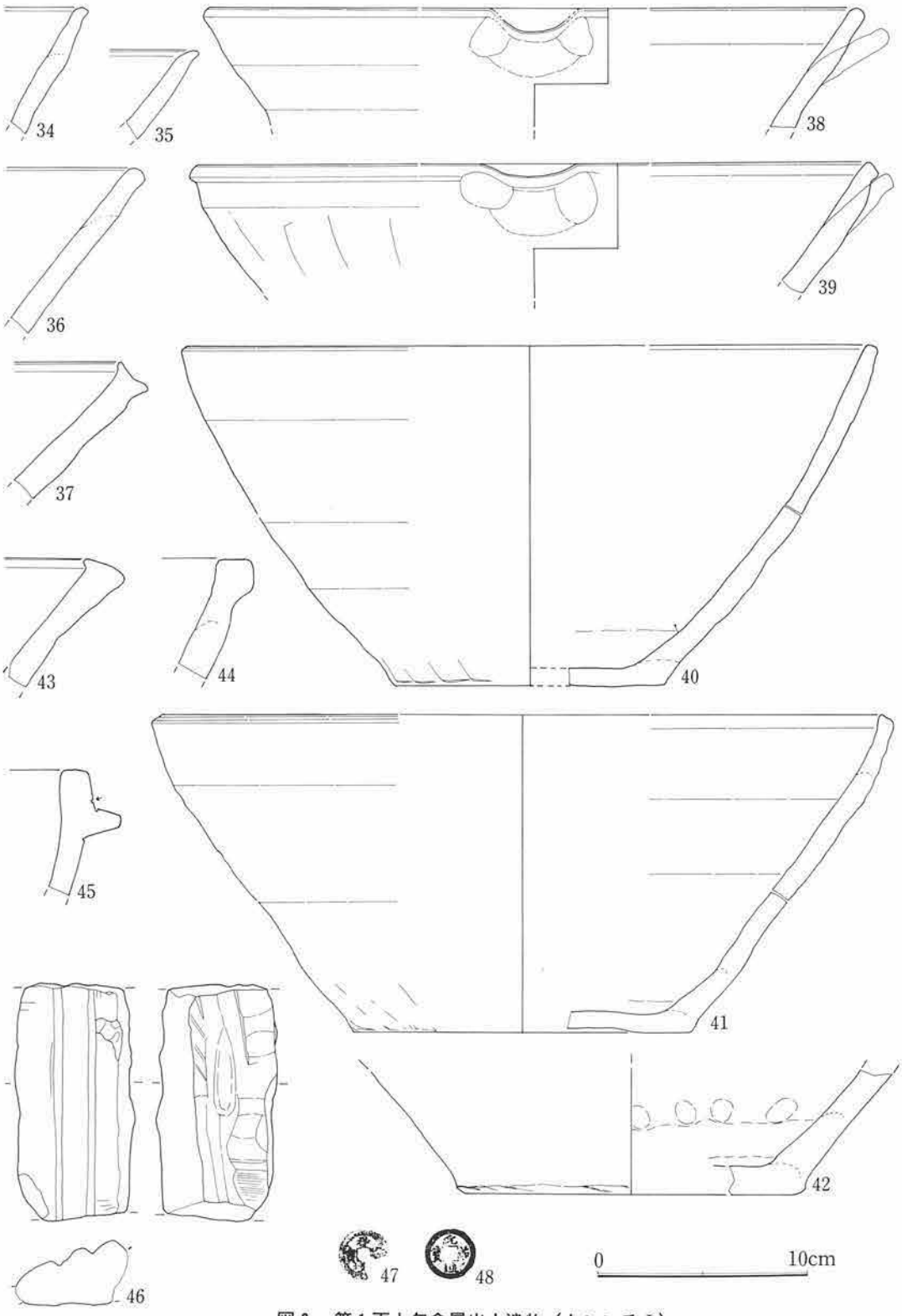


図9　第1面上包含層出土遺物（トレンチⅠ）

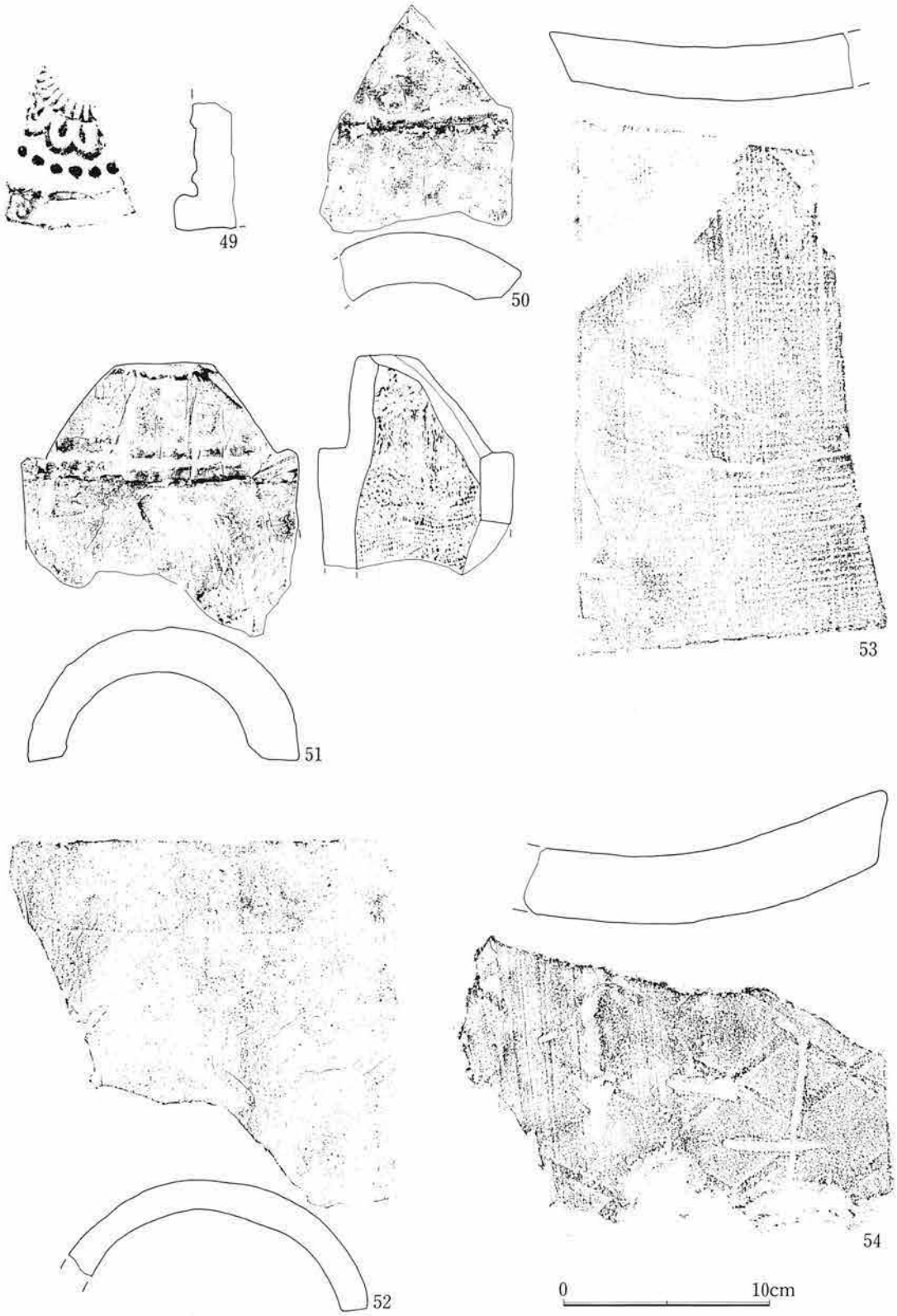


図10　第１面上包含層出土遺物（トレンチⅠ）

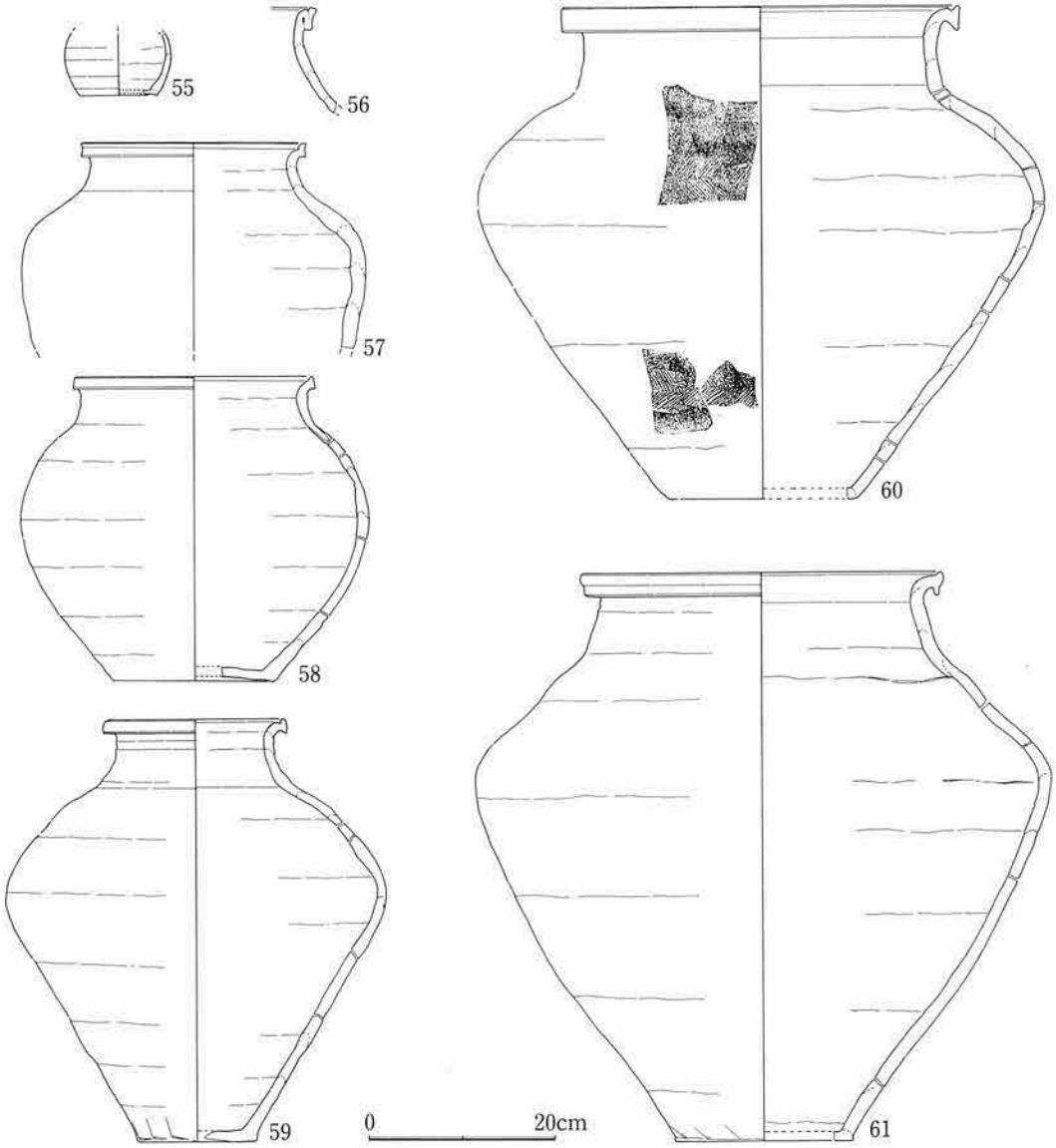


図11　第１面上包含層出土遺物（トレンチⅠ）

55～61は常滑窯産の壷・甕類。1/8に縮小して図示した。なお、57以下は接合できない破片から、図上復原を試みたものであり、法量・器形は若干の誤差がある点に注意されたい。55は小形の壷。外面に降灰釉がかかる。56は小片のため口径不明。縁帯部が頸部に密着し、後出的な形態を示している。57～58は広口壷とでも称すべきものであろうか。寸のつまった中形の甕である。58はおそらく三筋壷であろう。頸部のつけ根と肩部に沈線らしき痕跡が看取できるが、今一つ明瞭ではない。外面には気泡化した降灰釉もみられるが、多くの部分は剥げ落ち、灰色の素地面が露出している。60～61は大甕である。口縁部はともに┤字形を呈す。外面に残る叩き目は、60が羽状文と菊花文（？）との組み合わせ文様、61は×印と縦線文との組み合わせ文様であり、ともに肩部および体部

を横方向に叩きめぐらせている。

62～74は第２面上包含層出土の遺物である。

62～65はかわらけ皿。62が手捏ね整形のものである。

66～68は青磁画花文碗。

69は男瓦。

70は常滑窯産の甕。口縁端部は短く立ち上がっている。

71は山茶碗。粗雑な付け高台で、畳付け部に籾殻圧痕がみられる。

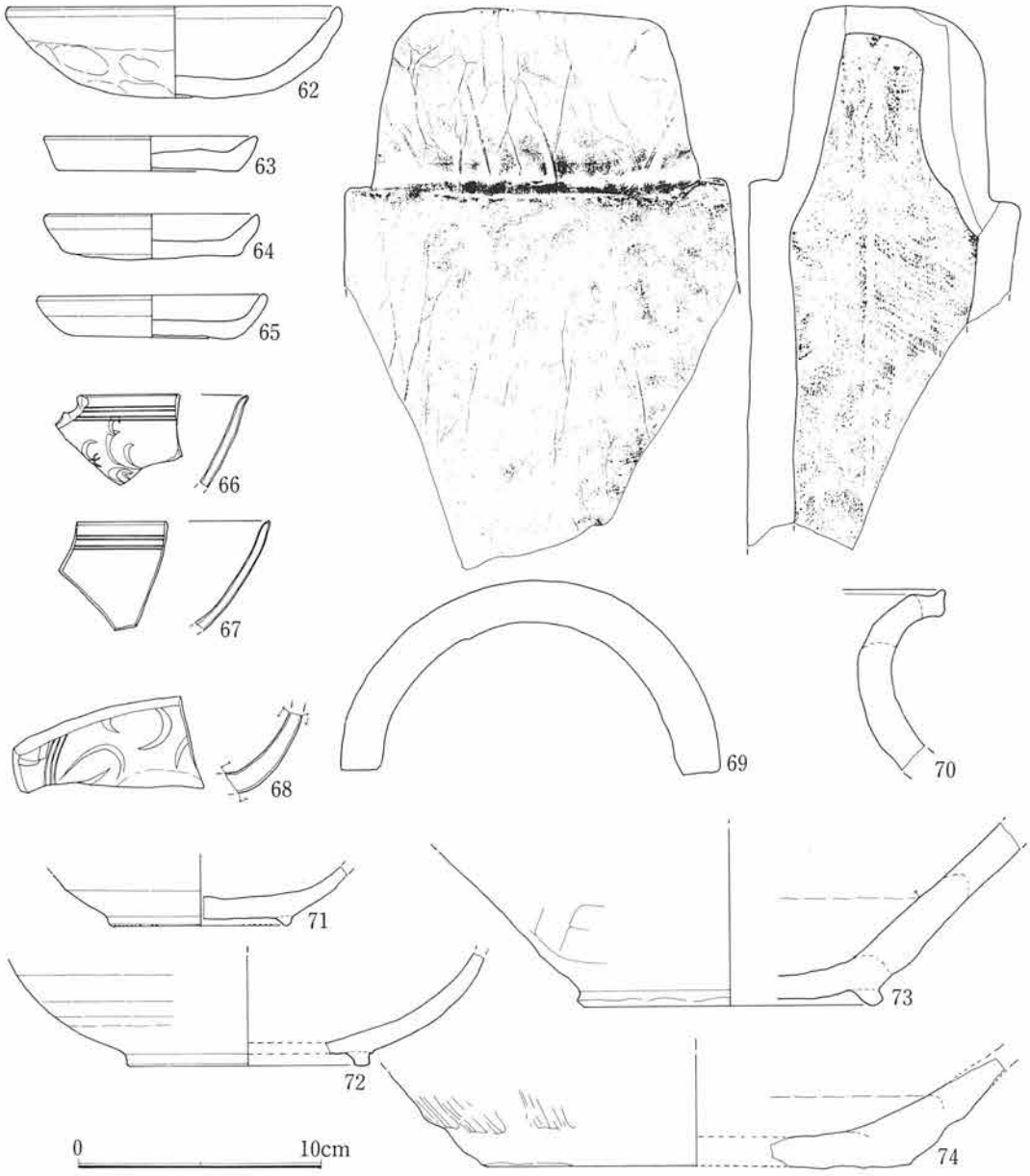


図12　第２面上包含層出土遺物（トレンチⅠ）

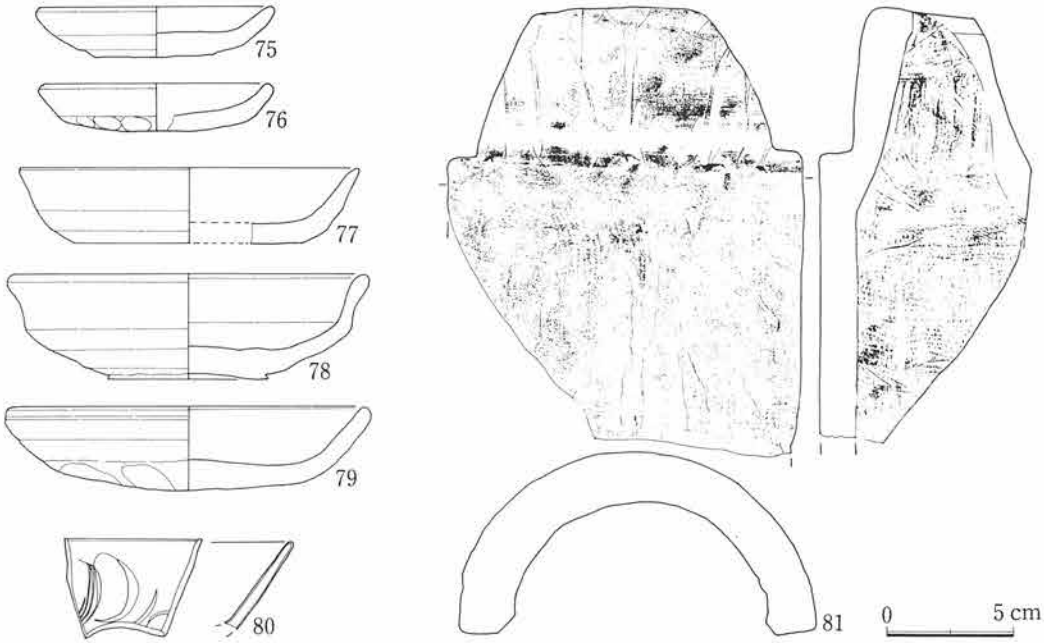


図13　第３面上包含層出土遺物（トレンチⅠ）

72～74は捏ね鉢である。72が渥美窯系、73が山茶碗窯系、74が常滑窯系の製品である。

75～81は第３面上包含層出土遺物である。

75～79はかわらけ皿。76と79が手捏ね整形の皿である。78は略完形品。かなり特徴ある器形を呈している。見込み中央のナデつけは非常に弱い。第３面直上の出土。79は完形品で、78と同様に第３面直上で出土した。

80は青磁画花文碗。舶載磁器のうち、鎬蓮弁文碗は１点も出土していない。

第２節　トレンチⅡ出土遺物

トレンチⅡでは、土塁状遺構に係わる遺物を限定して図示した。図14は土塁構築層中に混入した遺物。図15は土塁の周囲、第１面上包含層から出土した遺物である。

82～83はかわらけ皿。

84～85は白かわらけ。84が内折れ小皿。85が早島式と呼ばれる碗である。

86は瀬戸窯産の灰釉合子蓋。

87～89は舶載磁器。87が青白磁合子。88は青磁鉢。89が青磁櫛描文碗である。

90は渥美窯産の捏ね鉢。高台はない。

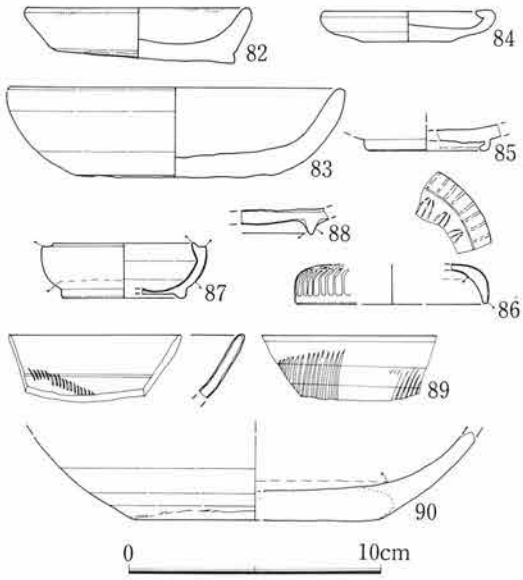


図14　土塁構築層出土遺物（トレンチⅡ）

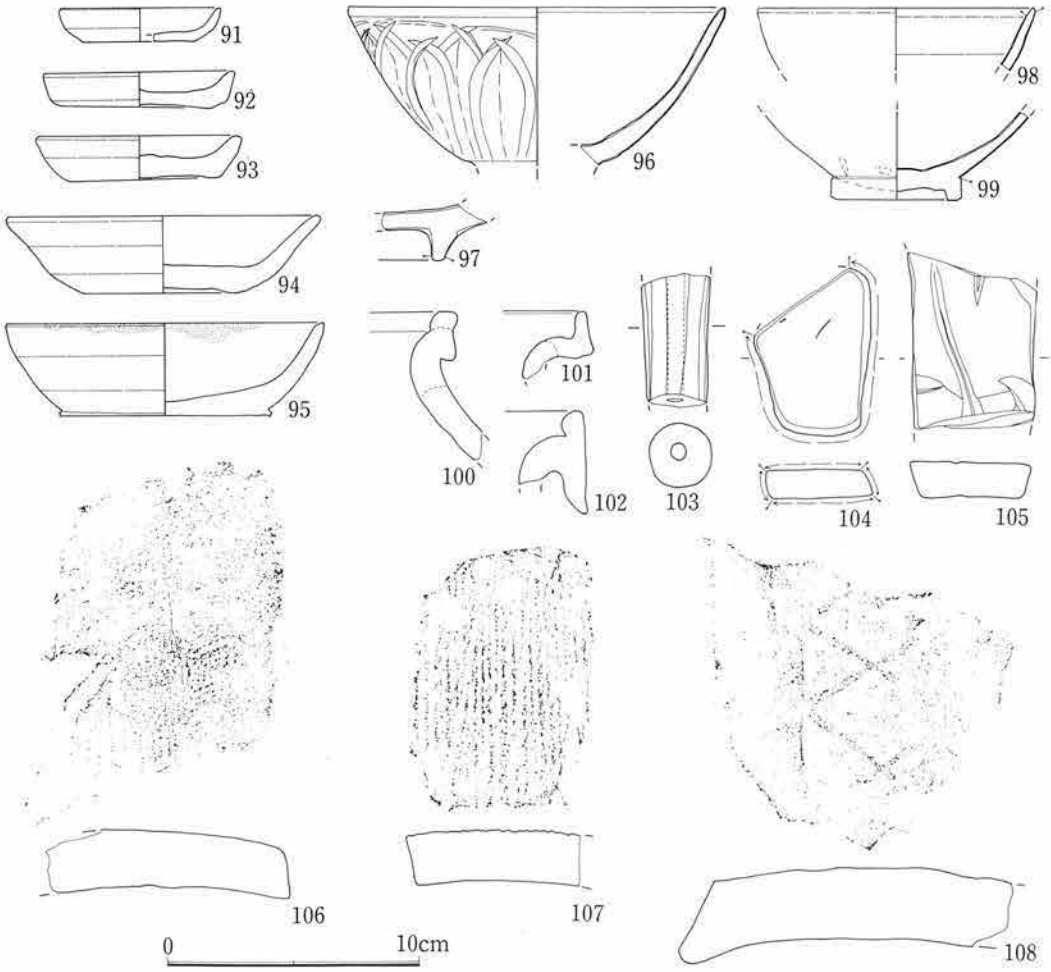


図15　包含層出土遺物（トレンチII）

91は瀬戸窯産の入れ子皿。

92～95はかわらけ皿。94は器形的に後出するタイプのものである。95は灯明皿として使用。

96～99は舶載磁器。96は青磁鎬蓮弁文碗。97は青磁鉢。大形の製品と思われる。98は白磁口兀げ皿。99は白磁碗である。

100～102は常滑窯産の甕。いずれも小片で、口径は不明。

103は土製品。高坏状の灯明台の一部であろう。外面を細かいヘラ削りで整形している。

104は通称“磨り常滑”と呼ばれるもの。陶片を再利用した道具と考えられる。表裏面に擦痕がみられ、特に周縁部の磨耗は著しい。

105は砥石。表裏面にV字形の溝（使用痕）がみられる。

106～108は瓦。いずれも女瓦片である。

第五章　調査成果と問題点

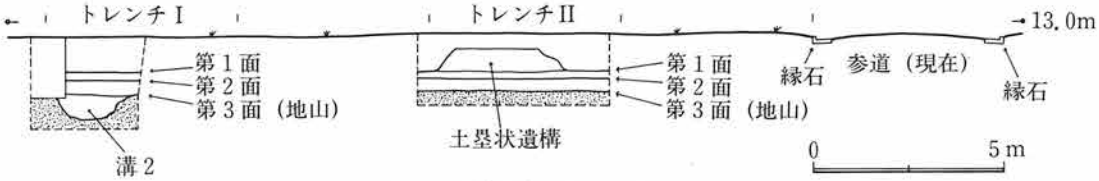


図16　調査地点の断面模式図

図16はトレンチⅠ・Ⅱの北壁土層図をもとに作製したもので、各トレンチ内で確認・検出された生活面相互の関係と、土塁状遺構と現在の荏柄天神参道との関係を示す図である。第１～第３面までの生活面は、ほぼ水平に地業された広がりをもち、土塁状遺構上面の土丹版築層に対応する生活面が、トレンチⅠ・Ⅱに存在しないことが理解されよう。また、土塁状遺構は現在の荏柄天神社参道より約10.5m（中心軸間）西側に位置していることもわかる。土塁状遺構についての問題点は後述するとして、先に各生活面の年代観を考えてみたい。

年代推定にあたっては、遺物群の組成や遺物個々の器形的特徴をとらえることによって、大雑把ではあるが、実年代を与えることが可能である。

まず、第３面では、２点の特徴あるかわらけ皿（図13―78・79）が目を引く。このタイプのかわらけ皿は、近年類例が増えつつあり、鎌倉市内遺跡では最下層ないし中世地山面上の遺構から出土することが多い（註１）。その年代観は12世紀末～13世紀初頭とされ、本遺跡の第３面も同時期に比定して間違いはないものと考えている。

第１面では、いわゆる“薄手”のかわらけ皿がなく、体部の内彎する器高の低いかわらけ皿が主体を占めている点、常滑甕の口縁部形態が┤字状を呈し、頸部との間が離れている点（註２）、更に、寛元・宝治年間（1244～48）の永福寺大修造の際、寺外へと流出した瓦が多く出土している点などを考え合わせると、およそ13世紀末～14世紀前半代に比定できるのではなかろうか。ただし、少数ではあるが、15世紀前半代にまで下る可能性のある遺物（図８－８・20、図９―37、図11―56、図15―94・100）が混入している点は注意を要する。削平された上層部により新しい遺構面が存在したのかもしれない。

第２面は遺物が総体的に少なく、明確さに欠けるが、一応第１面と第３面の中間をとり、13世紀前半～後半として置きたい。

さて、本遺跡で最大の問題点は、トレンチⅡで検出された土塁状遺構であろう。既に第三章第３節で、道路ではないとした理由に次の３点をあげておいた。

①多くの道路状遺構が側溝を伴なうのに対し、本遺構には側溝がない（註３）。

②上部にみられた３枚の土丹版築面には、対応する生活面が同レベル（絶対高）に存在しない。

③第１面上に盛土して構築されている。

確かに、②③に関しては、市内遺跡で検出される道路のイメージがまったくない。では、鶴岡八幡宮参道の段葛と似た特殊な道路（参道）を想定した場合はどうであろうか。段葛は寿永元年（1182）に源頼朝が妻政子の安産祈願のために築造した道路で、両側に石を並べ、その内側を一段高く盛土した構造であったという。築造当初の高さは不明であるが、明治初年の写真（註４）を見るかぎり、約60～70㎝程の高さは十分あったように見える。こうした構造の道路（参道）が既に鎌倉時代初期に存在し、本遺構が現在の荏柄社参道と平行して検出されたことを重視すれば、本遺構が荏柄社の旧参道ではないかと考えるのも、あながち見当はずれとは言い切れない。しかし、長治元年（1104）勧請と伝える荏柄社が、鎌倉時代末（第１面の年代観）になって、段葛に匹敵する規模の参道を作ったという史料はなく、また、幕府・北条氏が荏柄社に深く関与していた記録もみあたらないことから、現時点では荏柄社の旧参道とするには根拠不足で、想像の域を出ないものといえよう。

本遺構が土塁ではなく、土塁状遺構であると言葉を濁したのは、参道である可能性を捨て切れないためと、築泥塀の可能性を考えたためである。中世絵巻物には、寺社や武家屋敷の周囲に築泥塀をめぐらせた例が多くみられる（註５）。本遺跡地が第一章で述べたように、御家人・被官の多く居住した地域に位置していることを考えれば、築泥塀に囲まれた屋敷地があったとしても不思議はない。ただ残念なことに、絵巻物に描かれるような築泥塀が発掘調査で検出されたことはなく、本遺構をみて、ただちに築泥塀の一部であると断定するわけにはいかない。

今後、隣接する地域での調査が進み、本遺構がどのように続き、伸びていくのかがわかれば、より明確な答えができると考えている。調査の進展に期待したい。

註１　馬渕和雄『小町二丁目345番―２地点遺跡』　同遺跡発掘調査団　1985年
　　原　廣志「北条時房・顕時邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書４』　鎌倉市教育委員会　昭和63年
　　服部実喜他『千葉地東遺跡』　神奈川県立埋蔵文化財センター　1986年

註２　常滑窯の編年では、第Ⅲ段階後半の特徴とされる。
　　赤羽一郎『常滑焼』（考古学ライブラリー23）　ニューサイエンス社

註３　道路状遺構は以下の遺跡で検出されている。
　　手塚直樹『千葉地遺跡』　同遺跡発掘調査団　1982年
　　河野眞知郎『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』　鎌倉市教育委員会　1990年
　　服部実喜他『千葉地東遺跡』　神奈川県立埋蔵文化財センター　1986年
　　菊川英政「横小路周辺遺跡（No.259）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書６』　平成２年

註４　『図説　鎌倉回顧』　鎌倉市　昭和44年

註５　渋沢敬三『新版　絵巻物による日本常民生活絵引』　平凡社　1984年

〈附篇〉大倉幕府周辺遺跡の溝内堆積物の花粉分析

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

1．はじめに

大倉幕府周辺遺跡群において鎌倉時代初期のものと考えられている溝内堆積物とそれ以降の堆積物について花粉分析を行った。この時期は幕府が開かれ都市開発が盛んに行われた頃である。したがって当時の植生としてはこの影響を強く受けたものが成立していたものと思われる。こうした人間活動と植生との係わりあいに注目して花粉分析を行った。

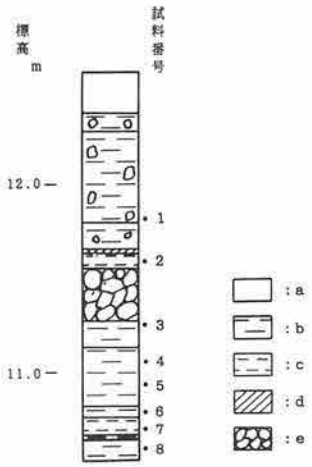
2．試料と方法

花粉分析は荏柄天神参道脇のトレンチⅠ北壁の溝内堆積物より柱状ブロック（5㎝角）で採取したものより5点（試料No.4～8）と東壁よりスポットで採取した4点のうち3点（試料No.1～3）の計8点について行った（図1）。詳しい土層記載については遺跡の項を参照して頂くとして、ここでは花粉分析に用いた試料について以下に若干記載する。

試料No.1は黒灰茶色粘土で、泥岩塊（いわゆる土丹）を多く含んでいる。他にかわら片や炭化物が含まれる。

試料No.2は暗灰茶色の粘土質シルトで、ロームの小塊（最大粒径5mm）を含んでいる。

試料No.3は暗灰色粘土で、試料No.2と同様にロームの小塊（最大粒径2mm）を含んでいる。



a：表土　b：粘土　c：シルト　d：炭　e：泥岩塊（土丹）

図1 荏柄天神参道脇地点のトレンチ総合柱状図

試料No.4～8は溝内堆積物である。試料No.4、5は灰黒色粘土で粘性があり、上部はややしまりがある。

試料No.6は黒灰茶褐色粘土で、材片や樹皮片を含んでいる。

試料No.7は黒灰茶色の粘土質シルトで、植物遺体を僅かに含んでいる。

試料No.8は黒灰色粘土で、No.7と同様に植物遺体を僅かに含んでいる。

これら試料8点について次のような手順に従って花粉分析を行った。

試料（湿重約0.5～1.0g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム水溶液を加え20分間湯煎する。水洗後0.5mm目の篩にて植物遺体等を取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂等を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、酢酸処理を行った後アセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの

残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

3．結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉28、草本花粉25、形態分類をしたシダ植物胞子２の計55である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表１に、主要な花粉・シダ植物胞子の分布を図２に示した。なお分布図における樹木花粉は樹木花粉総数を基数に、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数として百分率で示してある。なお試料No.1～３検出できた樹木花粉数が非常に少なく分布図として示すことが出来なかった。表１および図２においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。検鏡に際して花粉化石の単体標本（花粉化石を一個体抽出して作成したプレパラート）を適宜作成し各々にPCL．SS番号を付し形態観察用および保存用とした。

検鏡の結果、溝内堆積物の全体を通して花粉の出現傾向にあまり大きな変化はみられなかった。また全般に草本花粉の占める割合が高く、試料No.5では83％に達している。出現率は低い中でスギ属が最優占しており、下部より次第に増加し上部では樹木花粉中50％以上を占めている。これについでコナラ属アカガシ亜属が20％前後出現するが、上部で若干減少する傾向がみられる。同様の傾向がクリ属にもみられ、下部では10％以上出現するが上部ではそれまでに達していない。その他ではイチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、コナラ属コナラ亜属、シイノキ属―マテバシイ属等が数％ではあるが連続して出現している。

草本類ではイネ科が30％～40％の高率で出現している。ヨモギ属は10％前後出現しており、試料No.5では40％弱に達している。タケニグサ属やオオバコ属が下半部のみから出現しており、アカザ科―ヒユ科も10％前後の出現率を示している。

4．考察

草本花粉の占める割合が非常に高く、樹木花粉は全体の20～30％にとどまっている。この樹木花粉の中ではスギ属が最優占しており、こうしたスギ属の優占した景観は南関東では普通にみられるものであった。すなわち千葉県の村田川流域（房総半島北西部）においては約1900年前よりスギ属の増加が始まり、一時期漸減するがその後再び増加している（辻ほか　1983)。神奈川県の御殿場地域では９世紀頃までスギ属が最優占しており、その後は人間の植生干渉により急減した（宮地・鈴木　1986）が、そうした影響がなければスギ属の優占が続いていたと思われる。静岡県の丹那盆地では約600年前までスギ属が優占していた（東郷・橋屋　1984)。

また照葉樹林要素のコナラ属アカガシ亜属が上部において若干減少気味ではあるが10～20％を占め、シイノキ属―マテバシイ属と共に照葉樹林を形成していたであろう。このように遺跡周辺山地部ではスギ林が大半を占めていたが、一部照葉樹林も形成されていた。

前述したが草本花粉のしめる割合が高く60%から試料No.5では80%に達している。東京都板橋区舟渡遺跡（平安期の館跡）の溝内堆積物の花粉組成においても全花粉・胞子のうち約80%が草本花粉で占められており、周辺植生としてヨモギ属等の雑草で占められていたと予想されている（辻1988）。

試料No.6～8ではタケニグサ属やオオバコ属といった畑や道端に生育する植物がこの層準のみより出現している。またアカザ科―ヒユ科も比較的多く出現しており、人間活動の影響が強く現れた植生がうかがわれる。

このように鎌倉時代初期においては当遺跡群周辺は開発が急速に進んだと思われ、アカザ科―ヒユ科やオオバコ属といった道端雑草類が目立ちかなり開けた景観であったと思われる。またスギ属や照葉樹類といった樹木は都市開発の影響をうけ、分布はおもに山地部に限られるようになったであろう。

その後については産出花粉量が少なく古植生の復元は出来なかったが、花粉の産出傾向から鎌倉時代初期と余り大きな変化はなかったと思われる。

引用文献

宮地直道・鈴木　茂（1986）富士山東麓、大沢藍沢湖成層のテフラ層序と花粉分析。第四紀研究、25、P.225－233。

辻　誠一郎（1988）花粉分析に見る人間と自然。週間朝日百科　日本の歴史・別冊　歴史の読み方　3　考古学への招待、P.51－52。

辻　誠一郎・南木睦彦・小池裕子（1983）縄文時代以降の植生変化と農耕　―村田川流域を例として―。第四紀研究、22、P.251－266。

東郷正美・橋屋光孝（1984）丹那盆地における完新世後半の環境変遷　―花粉分析結果をもとにして―。地球、6、P.186－193。

表１　大倉幕府周辺遺跡群における溝内堆積物の花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8
樹木									
マキ属	*Podocarpus*	-	-	-	3	-	1	-	4
モミ属	*Abies*	-	-	-	3	-	1	1	1
ツガ属	*Tsuga*	-	1	-	2	4	1	2	4
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	-	-	-	2	-	6	8	5
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	-	-	-	1	1	3	1	2
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	-	-	2	-	1	6	2
スギ属	*Cryptomeria*	2	1	13	102	54	69	112	85
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	-	1	-	6	2	4	7	11
ヤナギ属	*Salix*	-	-	2	-	1	1	-	1
ヤマモモ属	*Myrica*	-	-	-	2	-	-	-	1
クルミ属	*Juglans*	-	-	-	-	1	1	1	1
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	-	-	6	1	2	3	3
カバノキ属	*Betula*	-	1	1	1	-	1	1	4
ハンノキ属	*Alnus*	1	2	1	1	1	-	1	2
ブナ属	*Fagus*	1	1	-	1	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	-	-	-	6	1	8	7	13
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	-	3	7	32	18	40	34	53
クリ属	*Castanea*	1	1	12	15	9	30	32	25
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis-Pasani*	-	-	5	7	1	6	6	10
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	1	1	1	4	-	-	2	3
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	-	-	-	-	-	-	1
ウルシ属	*Rhus*	-	-	-	-	-	-	-	13
カエデ属	*Acer*	-	-	-	-	-	1	-	1
トチノキ属	*Aesculus*	-	-	-	-	2	-	-	-
ブドウ属	*Vitis*	-	-	1	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	2	2	-	5	2
ミズキ属	*Cornus*	-	-	-	-	-	-	-	1
イボタノキ属	*Ligustrum*	-	-	-	-	1	-	-	-
トネリコ属	*Fraxinus*	-	-	-	-	1	1	-	1
草本									
ガマ属	*Typha*	-	-	1	3	1	4	-	3
オモダカ属	*Sagittaria*	-	-	2	2	1	5	2	8
イネ科	Gramineae	7	11	73	201	286	222	341	429
カヤツリグサ科	Cyperaceae	-	1	16	67	23	49	67	56
イボクサ属	*Aneilema*	-	-	-	-	-	1	-	1
ミズアオイ属	*Monochoria*	-	-	-	-	-	-	-	1
クワ科	Moraceae	-	-	-	1	-	1	2	-
ギシギシ属	*Rumex*	-	-	-	-	-	1	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	-	-	-	1	1	12	2
ソバ属	*Fagopyrum*	-	-	-	-	-	1	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	5	18	28	45	82	26	99
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	-	1	8	2	10	10	9
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	-	1	2	5	6	2	3
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	-	-	-	2	1	6
タケニグサ属	*Macleaya*	-	-	-	-	-	1	-	1
アブラナ科	Cruciferae	1	5	15	4	13	18	17	18
バラ科	Rosaceae	-	-	-	1	-	-	-	4
マメ科	Leguminosae	-	-	1	5	11	3	2	4
フウロソウ属	*Geranium*	-	-	-	-	-	1	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	3	4	9	8	-	6
シソ科	Labiatae	-	-	-	-	1	-	-	-
オオバコ属	*Plantago*	-	-	13	-	-	1	1	3
ヨモギ属	*Artemisia*	-	6	26	74	373	131	50	116
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	1	2	4	20	8	6	11
タンポポ亜科	Liguliflorae	1	2	4	19	24	18	28	15
シダ植物									
単条型胞子	Monolete spore	1	2	37	51	26	47	59	37
三条型胞子	Trilete spore	2	2	10	16	35	17	20	16
樹木花粉	Arboreal pollen	6	12	43	198	100	177	229	249
草本花粉	Nonarboreal pollen	10	31	176	423	815	574	567	795
シダ植物胞子	Spores	3	4	47	67	61	64	79	53
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	19	47	266	688	976	815	875	1097
不明花粉	Unknown pollen	7	11	28	61	29	50	62	74

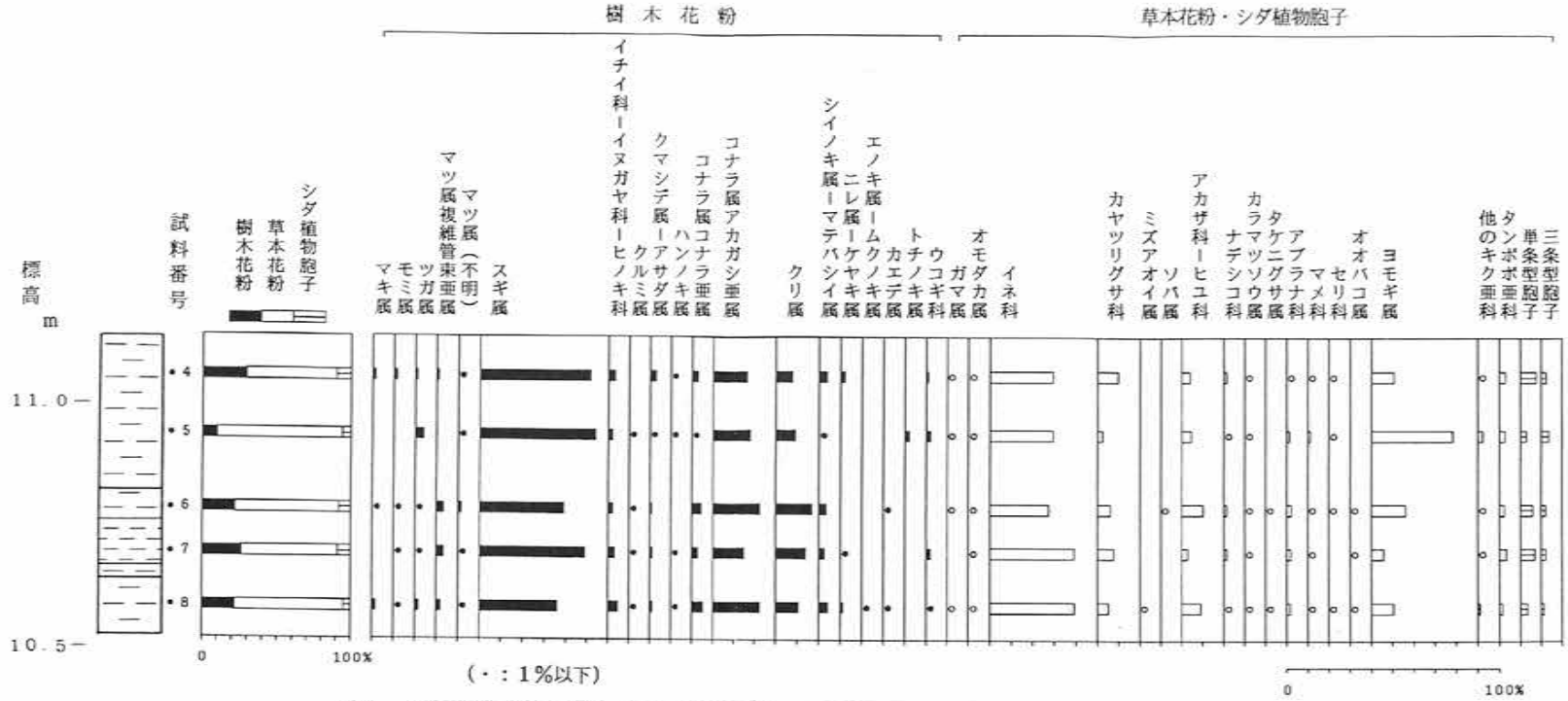
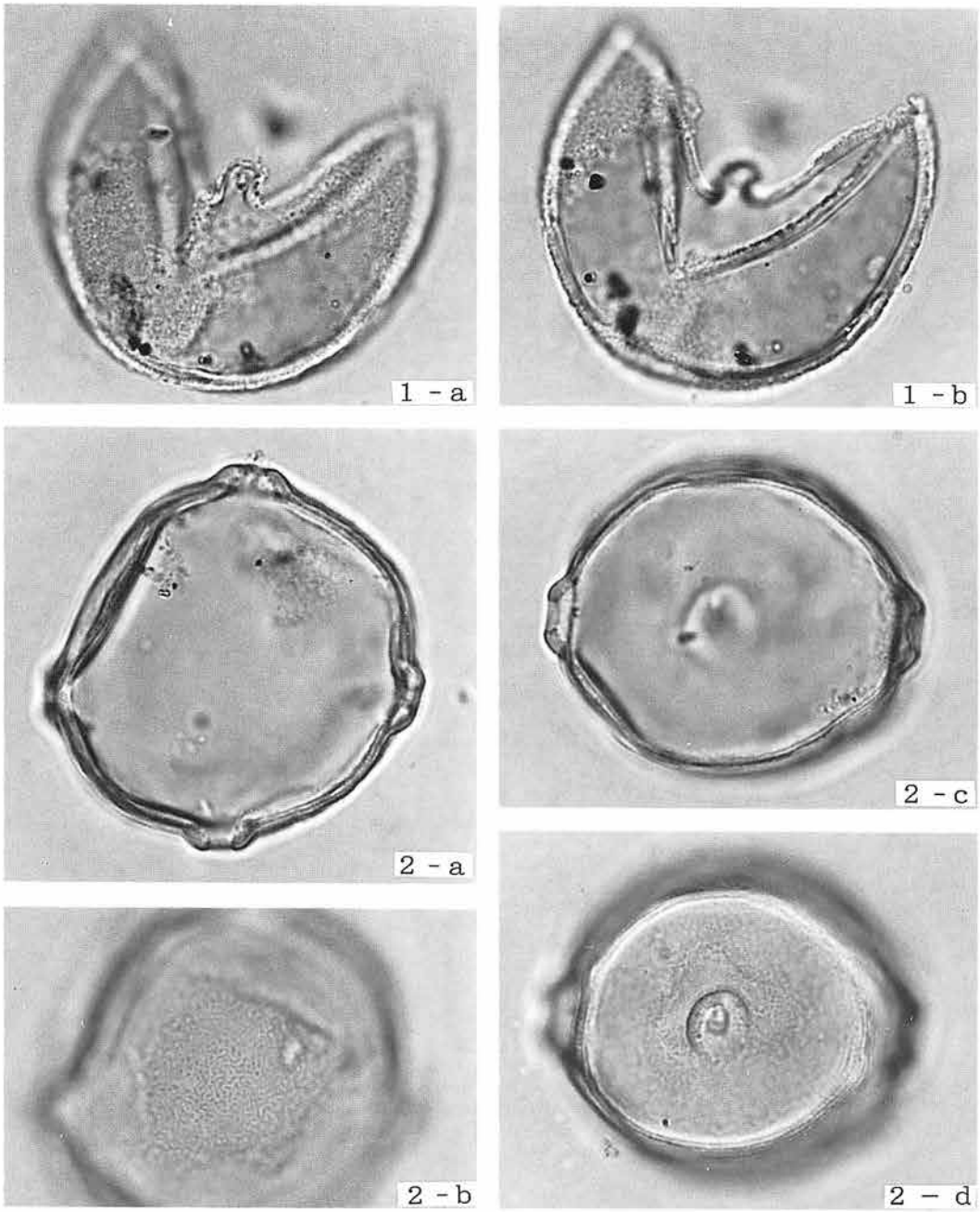


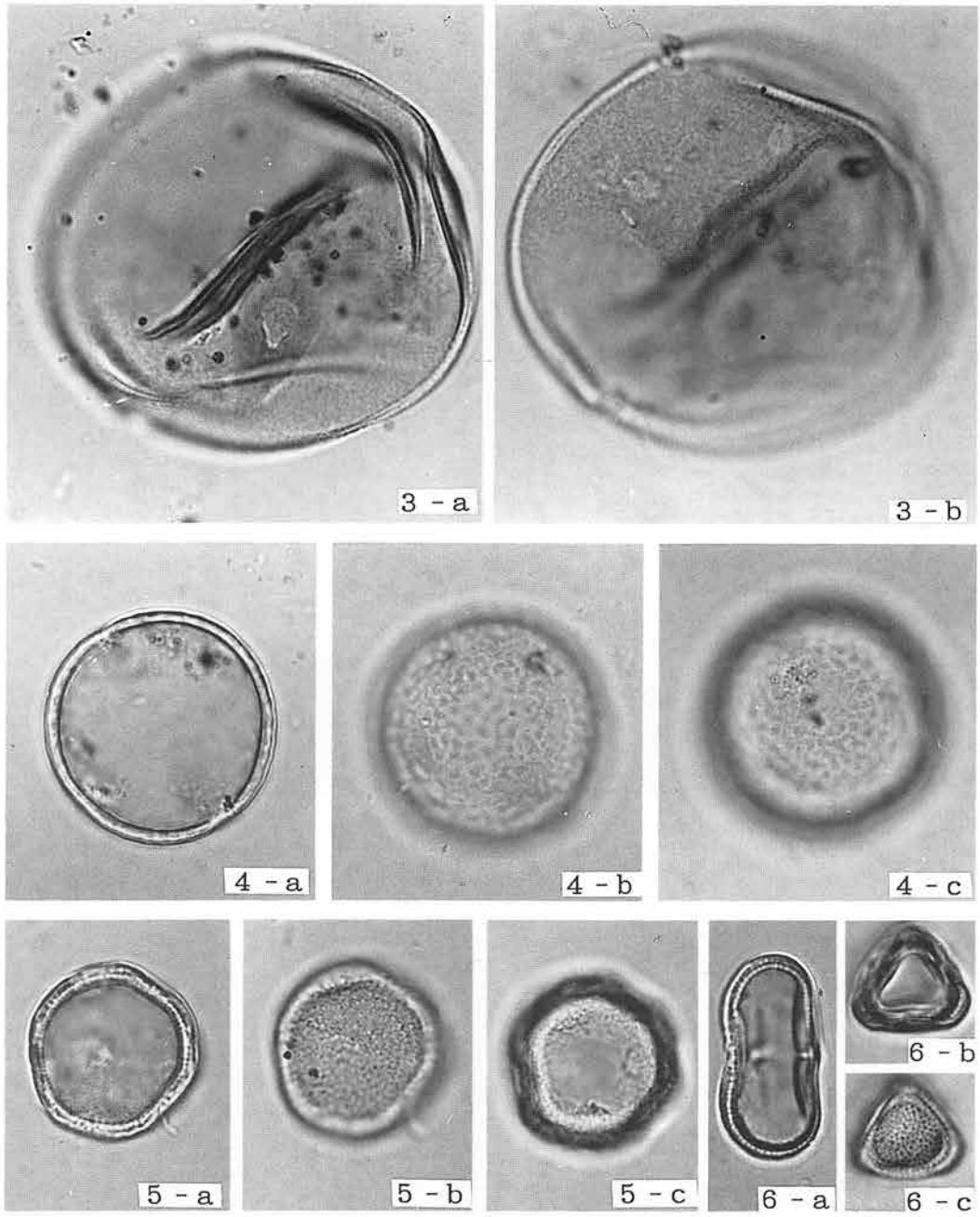
図2　大倉幕府周辺遺跡群における溝内堆積物の主要花粉化石分布図
（樹木花粉は樹木花粉総数，草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した）



大倉幕府周辺遺跡群の花粉化石

1： スギ属　試料 No. 6　PLC. SS　305

2： クマシデ属 - アサダ属　試料 No. 8　PLC. SS　301　　(×1100)



大倉幕府周辺遺跡群の花粉化石

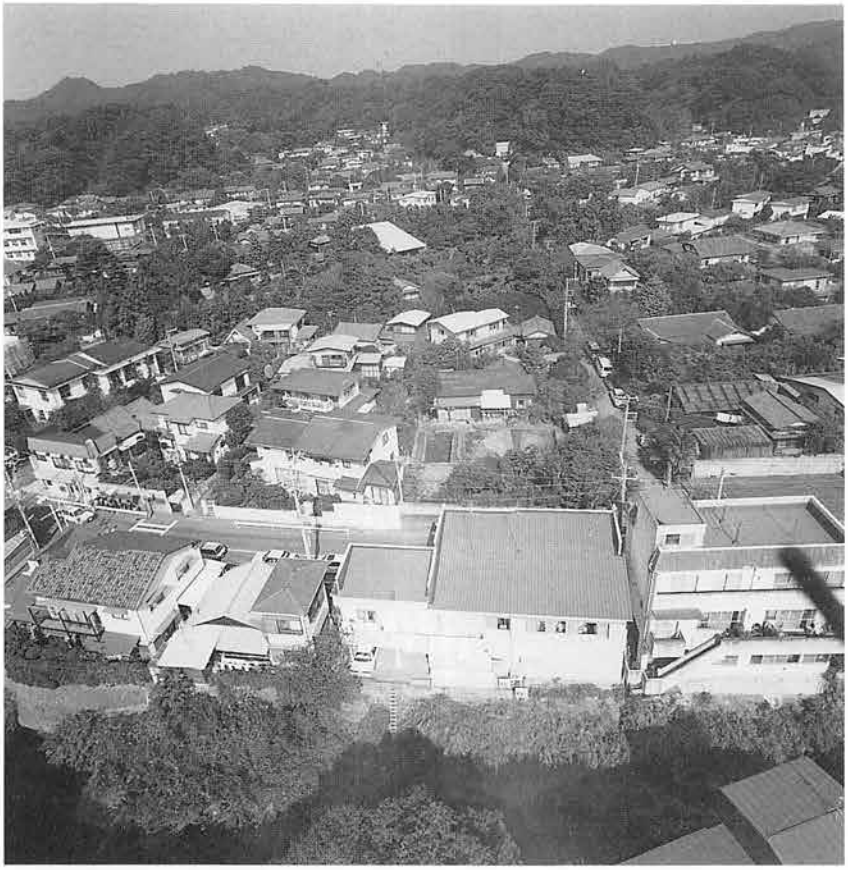
3： イネ属　試料 No. 6　PLC. SS　304

4： オオバコ属　試料 No. 8　PLC. SS　303

5： カラマツソウ属　試料 No. 8　PLC. SS　302

6：セリ科　試料 No. 8　PLC. SS　295　　(×1100)

図版 1



遺跡遠景（調査地点南方より荏柄天神社を臨む。手前は滑川）

トレンチー・Ⅱと荏柄天神参道（真上から撮影）

▲荏柄天神社参道（△が調査地点）

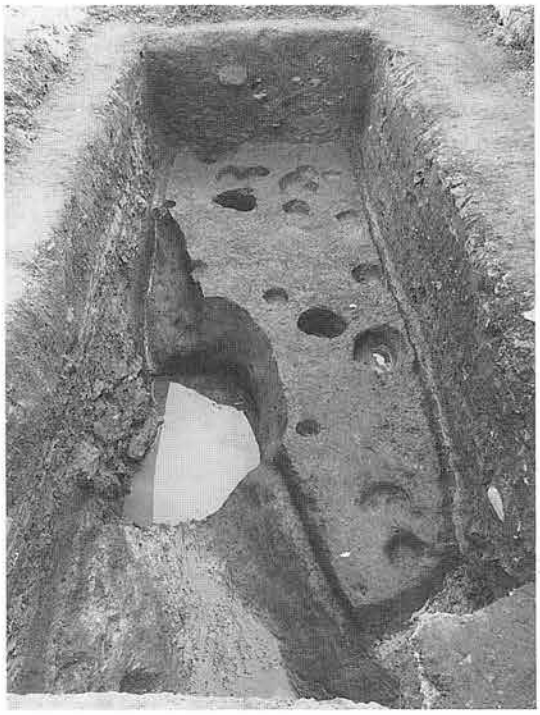
▼参道脇に建つ庚申塔

図版 3

〈トレンチⅠ検出遺構〉

▲第Ⅰ面の状態（南から）

▼第２面の状態（北から）



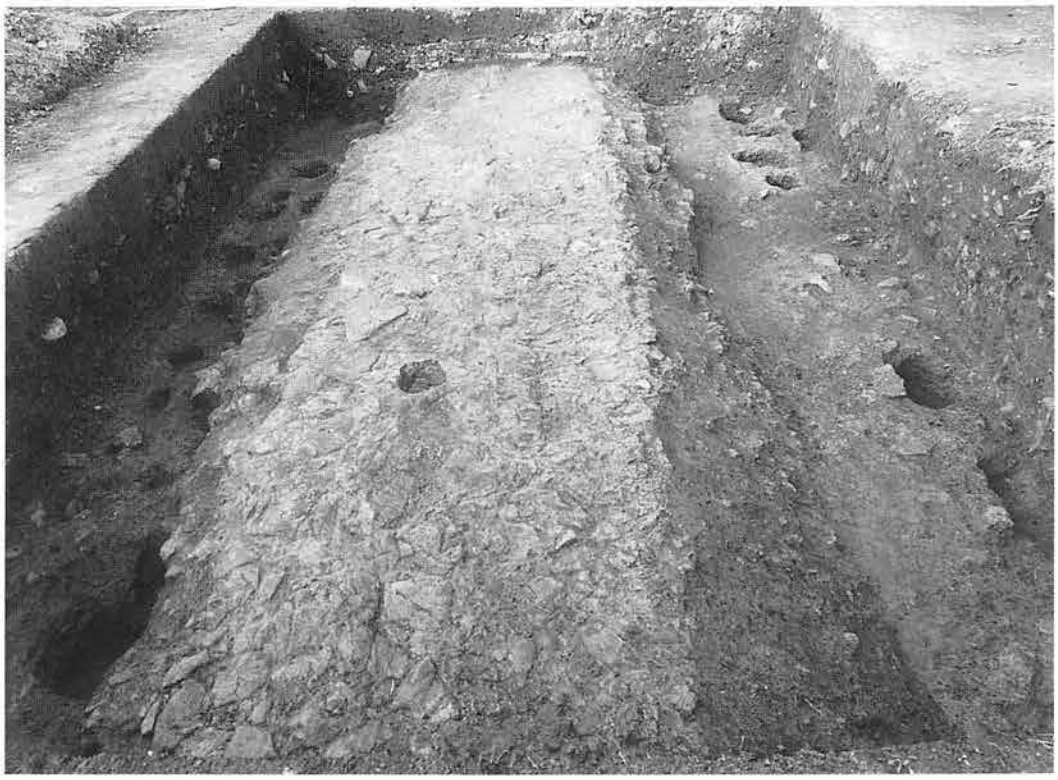
◀第３面の状態（北から）

▲井戸（トレンチⅠ・第３面検出）

▼井戸覆土中の大形土丹塊

▲土塁状遺構（表土層下での検出状態）

▼土塁状遺構（完掘状態）



▲土塁状遺構の断面（白く見えるのが土丹版築層）

▼同上（やや東寄りの角度から撮影）

図版 7

◀かわらけ皿

▲瀬戸壺

▶山皿・山茶碗

◀第3面出土かわらけ皿

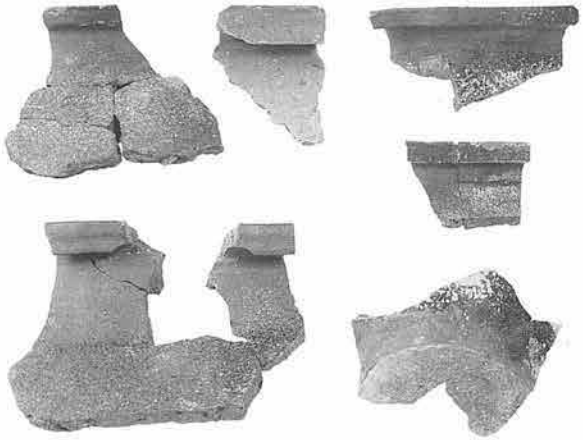
◀青磁碗

▲高麗青磁

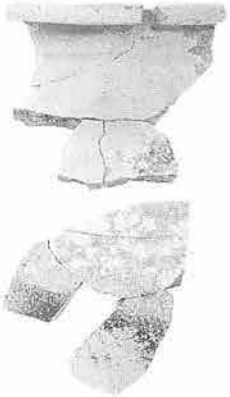
▶白磁碗・皿

▲銅製水滴(表・裏)

◀泥岩製品(表・裏)

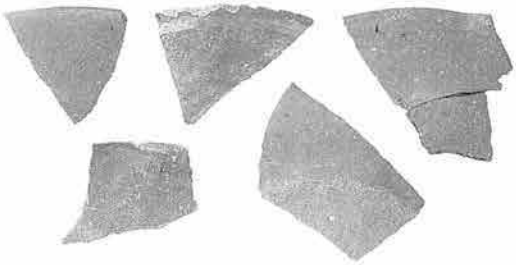


▲常滑甕



◀常滑三筋壺(?)

▶男　瓦

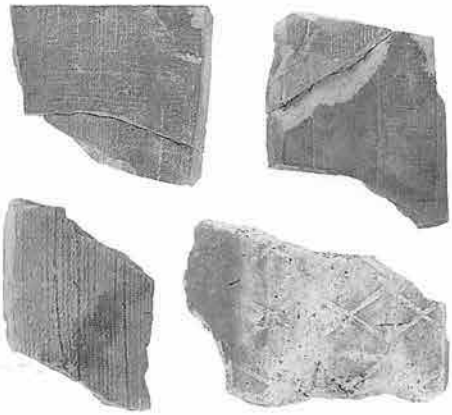


▶常滑窯系捏鉢

◀鐙　瓦

◀渥美窯系捏鉢

▼女　瓦



▲山茶碗窯系捏鉢

5．由比ガ浜中世集団墓地遺跡（No.372）

由比ガ浜二丁目1015番29外地点

例　言

1．本報は鎌倉市由比ガ浜二丁目1015番29外における専用住宅建設に伴う発掘調査の報告である。

2．発掘調査は国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成元年10月11日から10月31日までである。

3．本報は鎌倉市教育委員会の指示を受けて、大河内勉が執筆、編集した。また片岡睦枝・浦田優子・石田真由美の協力を受けた。

4．本報に使用した写真は遺構を大河内勉が、遺物を木村美代治が撮影した。

第一章　地理的・歴史的環境（Fig. 1）

中世集団墓地遺跡は鎌倉市街の南縁に位置し、市街を南北に流れ相模湾に注ぐ滑川河口の北西側に広がる。由比ガ浜の後背砂丘上に立地し、由比ガ浜中世集団墓地遺跡として遺跡台帳に登録されている範囲は、東西約700m、南北約200～300m を測り、広大な面積を有する。今回の調査地点は本遺跡の東北寄りに位置し、滑川と若宮大路に挟まれた一角である。若宮大路より東に約20m、滑川より北西に約100m、滑川河口より北東に約500m 離れている。現地表の標高は約９m である。

相模湾に面した由比ガ浜は、中世には前浜とも呼ばれ、都市鎌倉の周縁部にあたる地域と言われ

Fig. 1　発掘調査地点

ている。現在由比ヵ浜と呼称されるのは鎌倉市街の海岸線のうち、滑川からその西方の稲瀬川付近までの地域に限られているが、中世期では前浜と同様に稲村ヵ崎から和賀江島までの海岸線全域を指していたと考えられる。「足利尊氏書状案写」（貞和５年２月11日）によると、前浜は忍性以来極楽寺が管領していたことが知られ、殺生禁断の権利などが与えられている。また、日蓮宗や一向宗など鎌倉新仏教の活動の場とも言われ、前浜一向堂の名が「新田義貞証判軍忠状」（元弘３年６月14日）に見える。

由比ヵ浜（「由井の浦」・「由比の浦」・「由比の浜」）や「前浜」に係わる記事は『吾妻鏡』には多数見られるが、それによると鎌倉時代には当地では合戦・船の着岸・祭事・笠懸や流鏑馬・舟遊びなどが行なわれていたことが知られる。また『海道記』（貞応２年―1223）には「申の斜に湯井の浜に落着ぬ。しばらく休みて此所をみれば。数百艘の舟どもつなをくさりて大津のうらに似たり。千万宇の宅軒をならべて大淀のわたりにことならず。御霊の鳥居の前に日をくらして後。若宮大路より宿所につきぬ」と記される。正応２年（1288）に鎌倉を訪れた二条の『とはずがたり』には「由比の浜といふところへ出でみれば、大きなる鳥居あり。若宮の御社はるかにみえ給へば」と見える。さらに『太平記』には「二十一日の合戦に、由井の浜の大勢を東西南北に懸け散らし、敵・御方の目を驚かし」と、また『梅松論』には「五月十八日の未刻ばかりに義貞の勢は稲村崎を経て前浜の在家を焼払ふ煙みえければ」と、新田義貞の鎌倉攻め（元弘３年―1333）での記述が著されている。応永23年（1416）の上杉禅秀の乱でも前浜は戦場となっている。文明18年（1486）に来鎌した道興の記した『廻国雑記』には「由比が浜にまかりて鳥居など見侍りて。しばらくみなみなあそび侍りけるに」として、「朽のこる鳥居の柱あらはれてゆゐの浜へにたてる白波」と一首詠んでいる。

由比ヵ浜中世集団墓地遺跡やその周辺地域で実施された、数地点の発掘調査について簡単に紹介し、考古学的な環境を考えたい。材木座遺跡（Fig.1―２）は今次調査地点と同じく、若宮大路と滑川に挟まれた地域に位置し、今次調査地点より南南西に70m程離れている。1953・56年に発掘調査が実施され、28年の調査では人骨群（24個所）や馬骨・犬骨等の獣骨が検出された。人骨は個体数で556体発見され、新田義貞の鎌倉攻めを中心とした鎌倉・室町期の合戦での犠牲者と推測している。31年の調査では同じく354体以上発見され、両調査での人骨は計910体以上を数える。由比ヵ浜四丁目1134番１地点（３）は1986年に発掘調査が実施され、中世期の遺構としては方形竪穴建築址55軒・墓壙41基以上・土壙約90基などが検出された。静養館用地（４）は1982年に発掘調査が実施され、集合埋葬を含む91体の人骨が検出されている。下馬周辺遺跡・由比ヵ浜二丁目1011番１他地点（５）は1989年に発掘調査が実施され、34軒の方形竪穴建築址や井戸・土壙群・道路などが検出されている。以上の調査成果は14世紀台が中心と見られるが、建物としては方形竪穴建築址が濃厚な密度で分布し、今次調査地点付近より南西方では墳墓群が存在しており、生活領域と墓域が錯綜した地域を言えよう。

第二章　調査の概要

本調査は宅地造成（個人住宅）に伴うものであるが、調査に係わる範囲は敷地のうち、工事での掘削深度が遺構面に達することが予想されたガレージ部分のみである。そのため調査対象は敷地前面（南西側）の道路に面した部分が該当し、調査区は逆T字形を呈している。道路に面した幅は18.5m、奥行き9.7m（最大）である。前面の道路は近世・中世層を大幅に掘り下げて施設されたもので、敷地の地表面より2.4m低い。道路面は調査で検出された遺構面の第2面と第3面の中間に相当する。

調査地点の層位は（Fig.7・11参照）は上から、表土・撹乱層（厚さ30cm前後）→近世灰白色砂・灰黒色砂等（厚さ100cm前後）→第1面（地表下約1.3m）→灰色砂・淡灰色砂等（厚さ20cm前後）→第2面　（地表下約1.5m）　→灰色砂・明灰褐色砂・灰白色砂等（厚さ100cm前後）→第3面（地表下約2.5m）→淡灰色砂・明灰褐色砂・暗灰褐色砂等（厚さ30cm前後）→第4面（地表下約2.8m）→淡灰褐色砂・明灰褐色砂等（厚さ30cm前後）→第5面（地表下約3.1m）→淡灰褐色砂（以下不明）、となっている。第1面直上層及び各遺構面の間層は量の多寡はあれ、遺物を包含している。また、層中には所々に褐鉄化した部分が見られた。

調査深度は造成工事深度までと限られたが、その深度は一様でなかったため、調査区内での調査深度も北西部・中央部・南東部で異なっている。すなわち、北西部が第4面と第5面の間（第5面上の包含層）まで、中央部が第3面まで、南東部が第4面までである。第5面及びその直下層までは、北西部の北東壁際に設けたサブトレンチのセクション面で確認したが、それ以下の層位は分明でない。第4面検出のピットの壁（第5面以下に掘り込んでいる）での観察では、地山層は現われておらず、第5面以下にも遺構面が存在する可能性が高いが、それ以下の古代期の遺構・遺物の有無は明らかにできなかった。

発掘調査では、初めに近世灰白色砂層まで重機で掘削し、さらに手掘りで第1面を検出した。第1面調査後、さらに重機で掘り下げ第2面を検出したが、遺構が検出されなかったため、重機でさらに掘り下げ第3面を検出したが、同じく明瞭な遺構が検出されなかったため、記録は取らなかった。以下、北西部・南東部は手掘りで第4面を検出し、さらに北西部のみ第4面下（第5面上包含層中）まで掘り下げ、北東壁際にサブトレンチを設け工事深度以下まで一部掘り下げた。

なお、本遺跡は砂丘上の立地しているため、生活面として基本的に客土を用いた地業面はなく、自然堆積の風成砂層上に生活が営まれている。そのため本来的に生活面の分離・確認は難しく、本調査にあたっては、遺構が検出されるか又は炭層等の広がり認められ、生活の痕跡が明らかな面についてのみ番号を付して遺構面として扱った。

第三章　検出された遺構と遺物

第１節　第１面（Fig.2、PL.1～3）

第１面は地表下約1.3mで確認された。面上には中世期の遺物包含層が堆積している。本遺跡で検出された遺構面の中では最も遺構が多いが、一般的に見て特に密集しているわけではない。本面では調査区内全域で南北に走行する細い溝様の凹みが平行して多数見られたが、これは遺構ではなく、何らかの自然現象の所産と思われた。第１面では布掘り遺構２条・土壙４基・溝１条・ピット21口検出されたが、主軸方位が細い溝様の凹みと同じく、南北方向を示しているものが多い。第１面では調査区中央部と北西部道路際には撹乱が存在する。

１．布掘り遺構

布掘り遺構１

調査区の東端で検出された。途中の一部と南端部は調査区外に出ている。南北方向に走行し、全長は７ｍ前後であろう。幅は50～80cm。内部の柱穴は半間間隔で５口見られたが、全体では７口程になろう。柱穴は基本的に略長方形を呈し、径は60cm前後である。深さは溝の部分が約30cm、さらに柱穴部分も約30cmを測る。覆土は軟らかい淡灰色砂・灰色砂・黄灰色砂である。

出土遺物（Fig.3）

１は瀬戸の卸し皿（灰釉）である。底径6.7cm。体部は外方に開く。

２は大型のかわらけである。比較的器壁が薄く、やや大振り。

３は鉄釘である。４は釘のような形状であるが、両端が折れ曲がっている。

布掘り遺構２

調査区東端の隅で検出された。大部分が調査区外に出ており、２個所でわずかに検出されたにとどまった。おそらく繋がっているものと思われる。本址は布掘り遺構１の東側に位置し、平行して南北に走行する。両遺構の間隔は50cm前後である。詳細は不明だが、布掘り遺構１と同様の形状と見られる。覆土は軟らかい灰色砂・淡灰色砂である。

出土遺物（Fig.3）

１は大型のかわらけである。器壁は比較的薄い。

２．土壙

土壙１

南東部に位置する。南東側は調査区外に出ており、全掘はしていない。布掘り遺構２と重複しているが、本址の方が古い。平面形は正方形ないし長方形をするものと思われる。深さ1.05mを測る。底面はほぼ平坦。覆土は軟らかい淡灰色砂である。

出土遺物（Fig.3）

１は小型のかわらけである。体部外面に稜が巡り、屈折して立ち上がる。

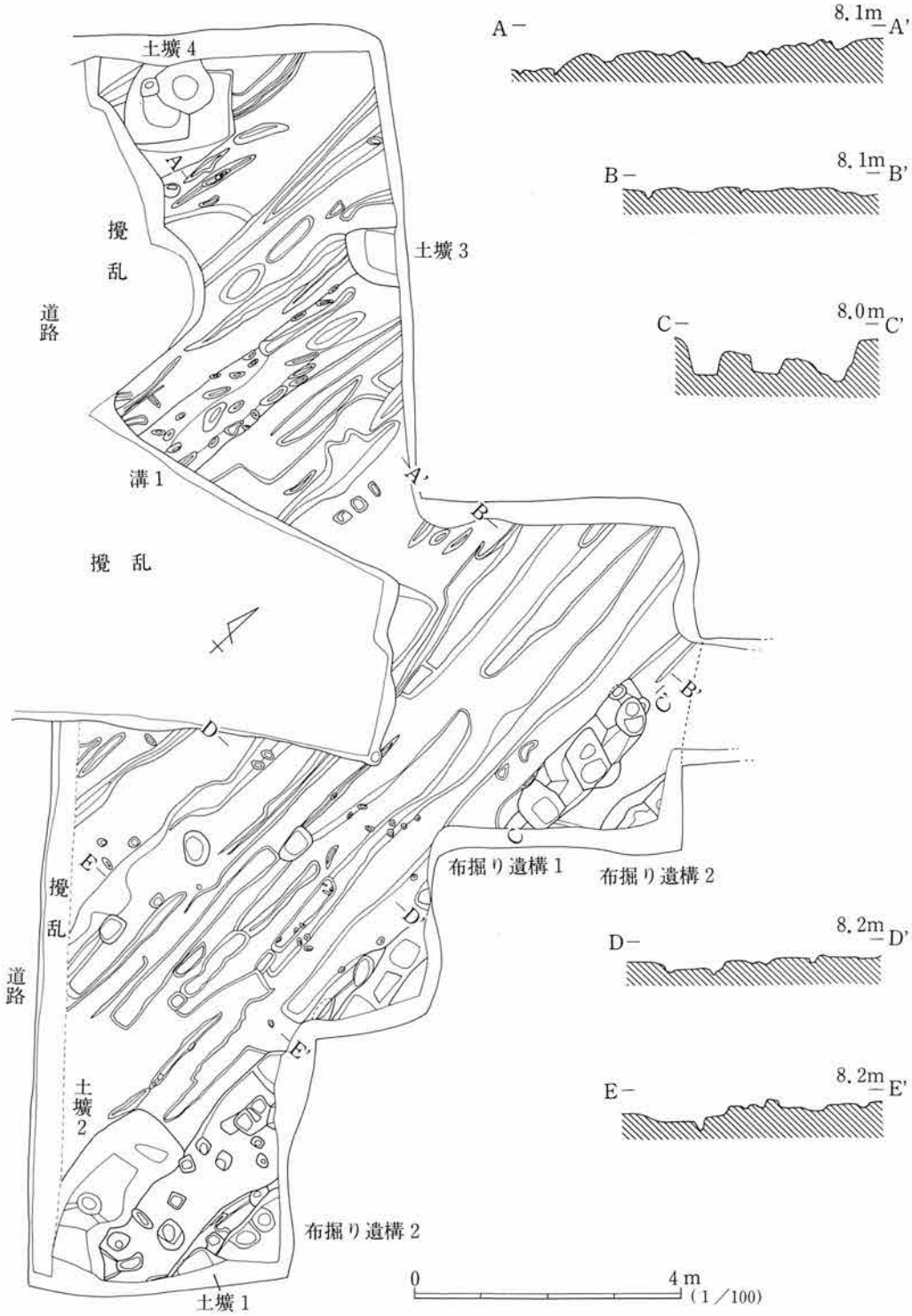


Fig.2　第1面　平面図・エレベーション図

2～5は鉄釘である。長さは異なっている。

6は砥石である。細長い札状を呈し、仕上げ砥であろう。上面のみ使用している。

土壙2

南東部に位置する。南側は調査区外に出ており、全掘していない。不整形を呈し、長さ2.5m以上、幅1.2m、深さ95cm（最深部）を測る。底面にはピット2口と段差が見られる。覆土は軟らかい灰色砂である。

出土遺物

全く出土していない。

土壙3

北西部に位置する。北東側は調査区外に出ており、全掘していない。深さ45cm。形状等は不明。覆土は灰色砂である。

出土遺物（Fig.3）

1・2は常滑である。1は甕の底部片。外面には木口状工具等によるなで、内面は指頭による押さえが行なわれている。2は捏鉢の口縁部片。口端部は内外にわずかに張り出している。

3は美濃の摺鉢の口縁部片である。口縁部には内外面とも1条ずつ凸帯が巡るが、縁帯とはならない。内面にはわずかに条線が観察される。内外面とも褐紫色の鉄漿が掛けられている。

4は大型のかわらけである。器壁はかなり厚く、体部は直線的に立ち上がる。外面には轆轤挽きで生じた凹凸が巡る。外底面には篦で付けられた放射状の刻線が見られる。胎土は微砂粒・雲母・白色針状物質を含み、焼成はやや甘い。戦国期タイプのかわらけである。

5～9は鉄釘である。大小様々見られる。すべて頭部が残っているが、折り曲げて形作られている。

土壙4

北西部に位置する。周囲は撹乱がある。ほぼ円形を呈し、直径約80cm、深さ約70cm。

出土遺物（Fig.3）

1が大型のかわらけ、2・3が小型である。1は厚手の器壁で、外面は口縁部の強いなでのため、口縁下に稜ができている。口唇部には点々と油煙が付着しており、灯明皿である。2は器高が高く、小坏形を呈する。3は器高が低く、体部も短い。

3．溝

溝1

北西部に位置する。南北方向に走行し、4.5m確認された。幅95cm前後、深さ10cm程で浅く、断面形は皿状を呈する。溝内には小ピットが多数見られるが、溝との関連は不明。土壙3と重複している。

出土遺物

全く出土していない。

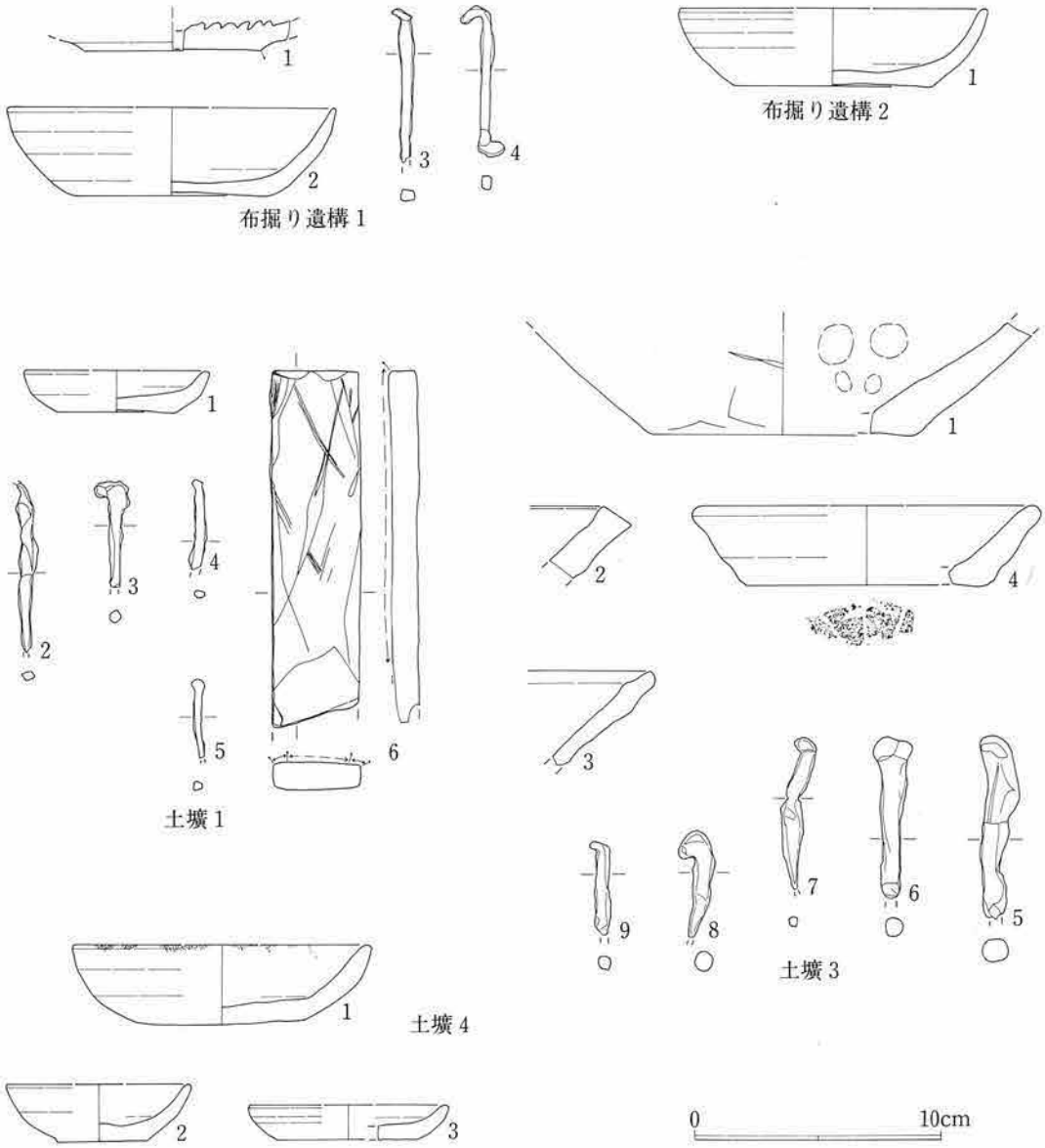


Fig. 3　第1面遺構出土遺物

4．ピット

21口検出された。すべて調査区南東部に位置し、特に南東隅に密集している。大きさ・形態とも様々である。南東隅のピットのうち、方形のものは柱穴と思われるが、構築物自体は想定できない。

出土遺物

全く出土していない。

5．第1面上包含層出土遺物（Fig. 4・5）

1・2は青磁である。1は碗の口縁部片。外面は複弁の蓮弁文が見られる。釉はくすんだ灰緑色を呈する。2は折縁鉢の口縁部片。外面には蓮弁文が彫られている。釉は厚く、オリーブ色を呈する。

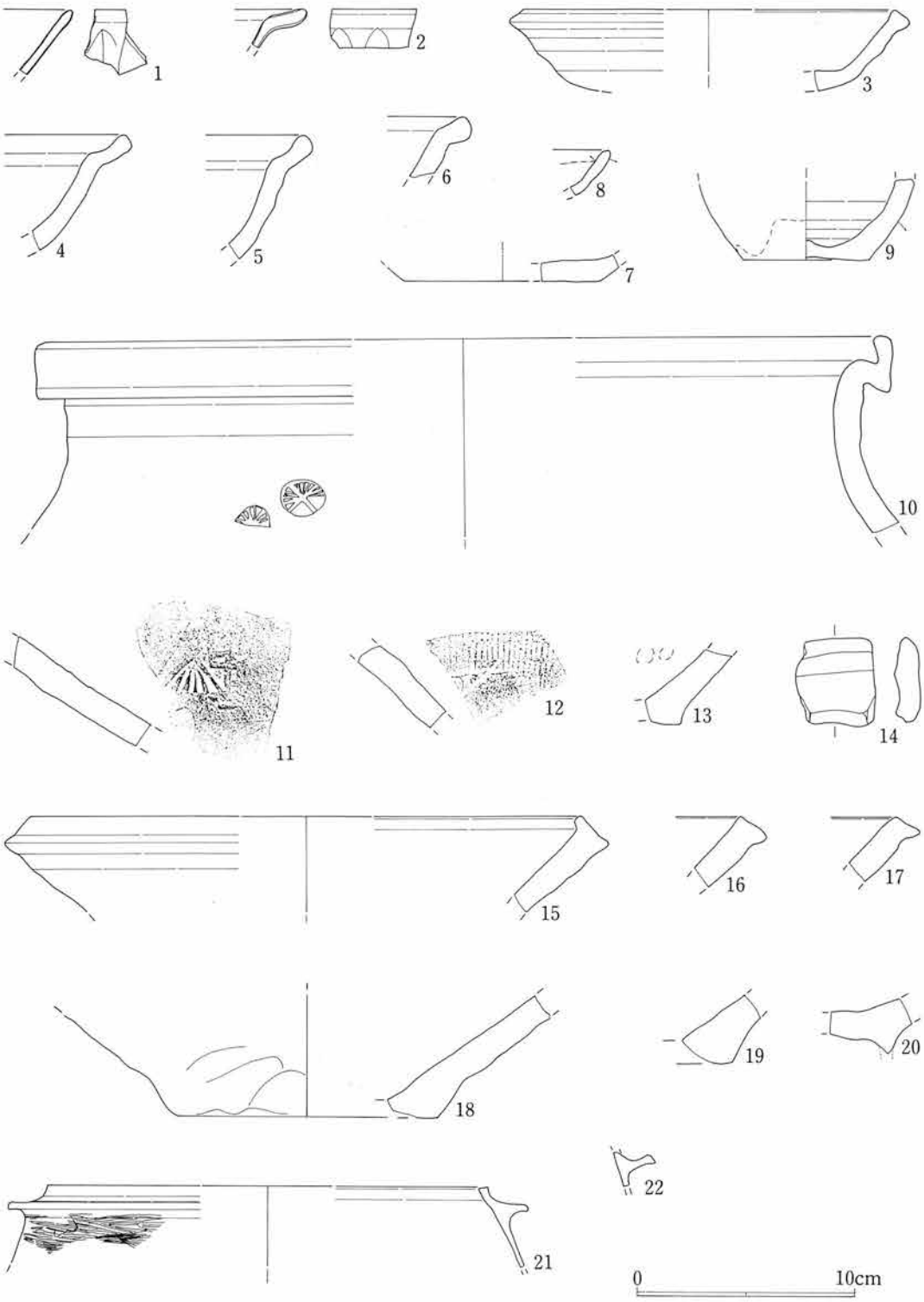


Fig.4　第1面上包含層出土遺物（1）

3～9は瀬戸である。3は卸し皿。体部外面には轆轤挽きで凹凸が生じている。口端部は肥厚になり、特に外方に張り出す。釉は灰釉だが、薄く変質している。4～7は折縁鉢。4点とも灰釉だが、4・5は二次焼成を被り変質している。8は縁釉小皿の口縁部片。灰釉。9は上半部を欠失しており、器形ははっきりしないが、袋状をする可能性が強い。外底面は回転糸切り。内面は轆轤目が著く、底面中央は盛り上がる。釉は灰釉で、内面及び外面下位まで施される。

10～18は常滑である。10～14は甕。10は口縁～頚部片。口縁部はN字状を呈し、縁帯は上方に伸びている。頚部下位には丸内に十字と菊花を組み合わせたようなスタンプが押捺される。11・12は肩部で、叩き文様が見られる。13は底部片。14は全面的に磨かれたような口縁部片。破片を二次的に研磨等に使用したのか、海か川で洗われたものであろう。15～18は捏鉢。15～17は口縁部片で、端部は15が内側に、16・17は外側に張り出している。18は体部下半～底部片で、内面は使用により摩滅している。外面は指で押さえた痕が見られる。

19・20は山茶碗窯系捏鉢の底部片である。ともに内面は摩滅している。19は高台が取れてしまっている。

21・22は鍔釜である。鍔は水平ないしやや上方に向けて付けられている。21は復元口径21.2cm。口縁部と鍔は横なで、内面はなで、外面胴部は刷毛調整が行なわれる。器壁はかなり薄い。灰褐色を呈する。

23～26はかわらけである。23は大型。器壁は比較的薄く、良好な焼成。24・25は小型で、ともに器高がやや高い。25は灯明皿。26は極小型だが、内折れ形にはならない。口径4.6cm。大きさの割には器壁が厚い。底部は突出底状。

27～40は鉄製品である。27はまっすぐ伸びる細い棒状の製品だが、用途不明。断面は長方形を呈

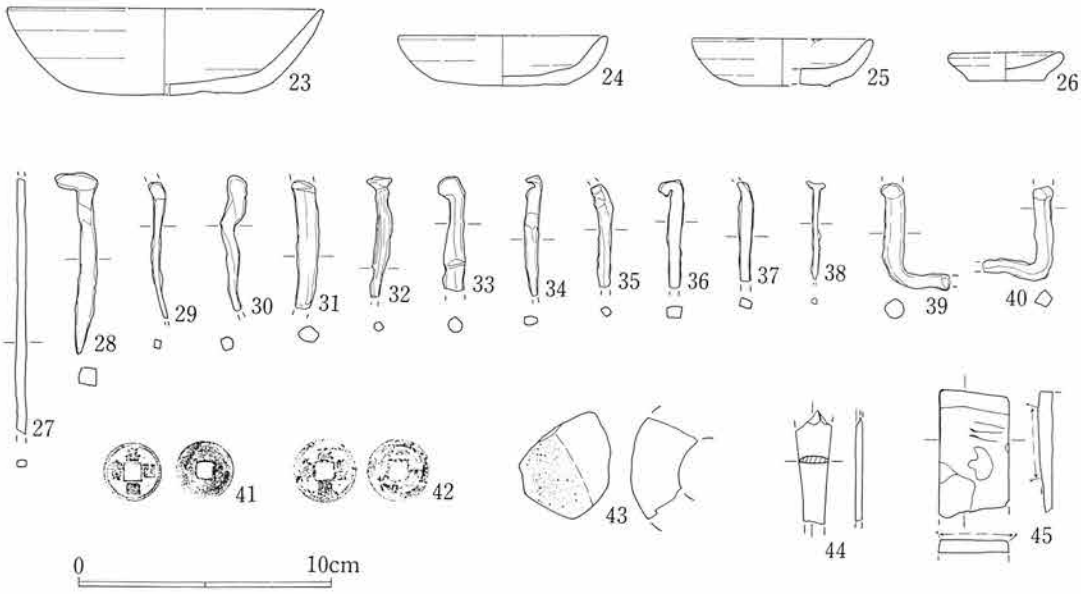


Fig.5　第1面上包含層出土遺物（2）

する。28～40は釘。すべて鍛造の角釘であるが、長さも太さも一様ではない。頭部は折り曲げている。緩い角度で曲がっているものが多く、なかには直角に曲がるものも見られる。

41・42は銭貨である。ともに北宋銭で、41は「嘉祐通宝」、42は「元豊通宝」。

43は土製の鞴の羽口である。外面には熔着物が見られ、部分的に赤変している。胎土はかわらけのそれと同質である。

44は骨製の笄である。断面形は平べったいかまぼこ形である。両端とも失われているが、残存部上端に溝の一部が観察される。

45は砥石である。仕上げ砥であろう。

第2節　第2面

第2面は地表下約1.5mで確認された。面上に薄い炭層が部分的に広がっており、遺構面として扱った。面の精査では遺構が発見できなかったため、記録は取らずに掘り下げたが、調査区壁のセクションの観察から溝1条と土壙1基があったことが判明した。

溝（Fig.11セクション図の土層番号8）は北西部に位置し、幅約40cm、深さ約10cmを測る。覆土は灰黒色砂である。土壙（Fig.11セクション図の土層番号22）は中央部に位置し、深さ約30cm。セクション面での幅は1.55m。覆土は部分的にカーボン層を含む灰色砂である。

第2面及び第2面上包含層出土遺物（Fig.6）

1は青白磁梅瓶の胴部片である。渦巻き文が見られる。

2・3は常滑の捏鉢である（別個体）。2は口縁部片。口端部はやや凹み、外方にわずかに張り出す。3は体部下位片。内面はすりこぎの摩擦で磨耗している。外面は木口状の工具による調整が行なわれる。

4～6はかわらけである。4は体部が丸みをもって立ち上がる。5も内彎して立ち上がるが、外

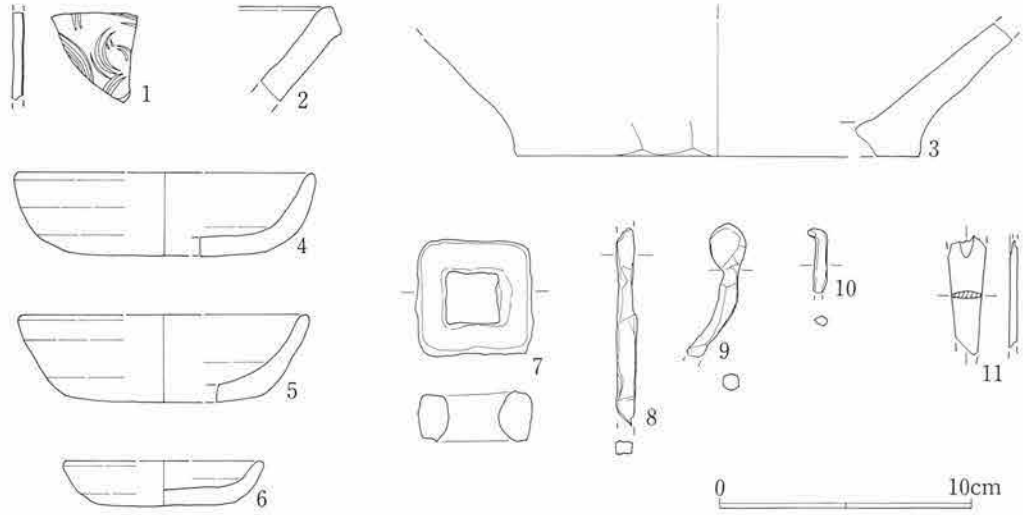


Fig.6　第2面及び第2面上包含層出土遺物

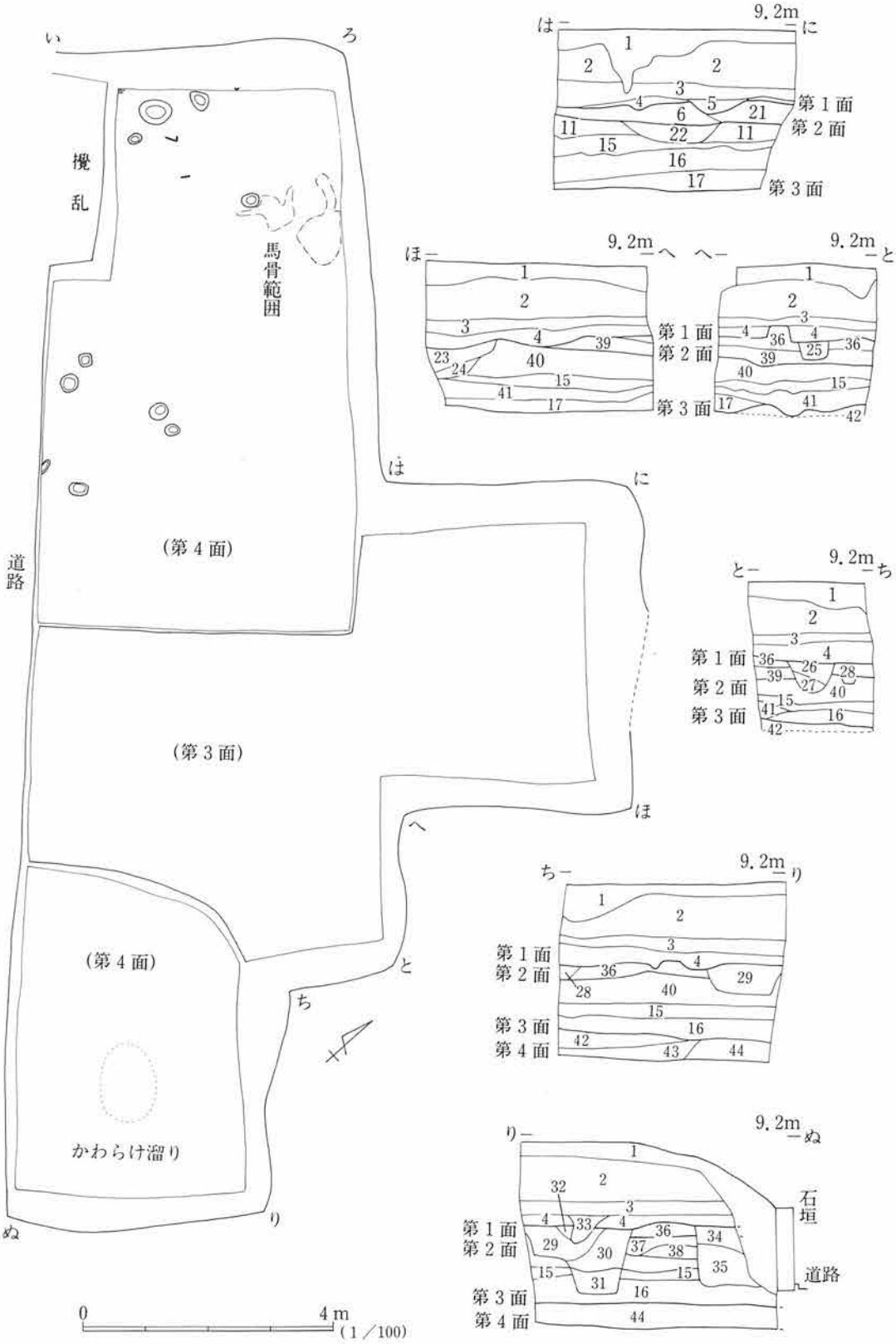


Fig.7　第3・4面　平面図、調査区壁セクション図　※土層説明はFig.11参照

面には凹凸が生じている。6は小型品。

7は方孔を有する用途不明の鉄製品である。一辺4.6cm、孔径2.0cm、厚さ1.9cm。千葉地遺跡で同様の製品が出土している。8～10は鉄釘である。遺存状態は余り良くない。

11は骨製の笄である。両端とも失われているが、残存部上端に溝の一部が観察される。

第3節　第3面（Fig.7、PL.4・5）

第3面は地表下約2.5mで確認された。本面も第2面と同じく、面の精査では遺構が検出されなかったが、調査区壁の観察で本面より掘り込んだ遺構が2基発見された（Fig.11セクション図の土層番号18及び46）。18の方は溝、46は土壙と思われるが、詳細は不明。覆土は18が暗灰褐色砂、46が淡褐色砂である。

第3面及び第3面上包含層出土遺物（Fig.8）

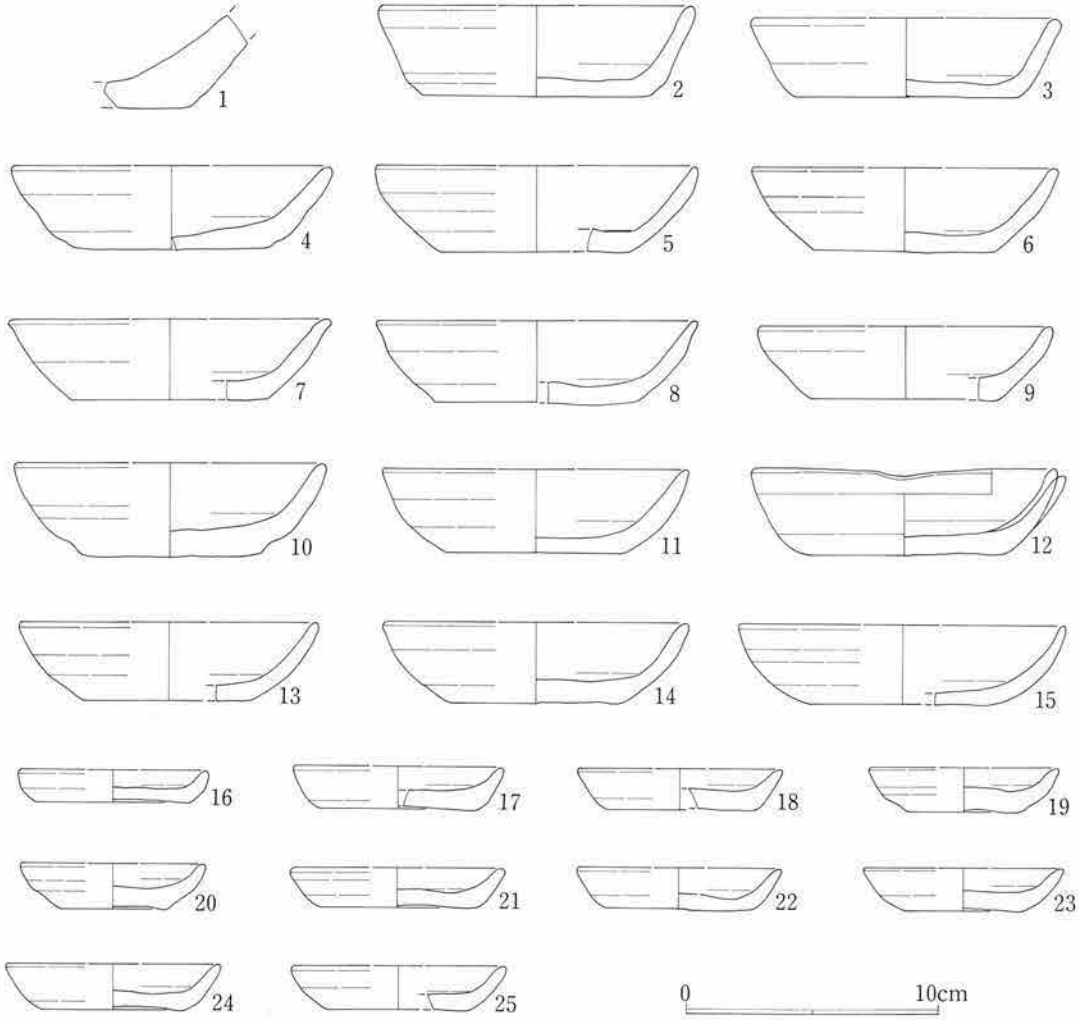


Fig.8　第3面及び第3面上包含層出土遺物

1は山茶碗窯系捏鉢の小片である。高台の有無は不明。内面は使用により摩滅している。

2～25はかわらけである。すべて轆轤成形。2～15は大型。2・3は底径が大きく、体部は鋭く直線的に立ち上がり、3は口縁部が幾分外反する。4は器壁が厚い。5・6は長めの体部で内彎気味に立ち上がる。7・8は体部が内彎気味に立ち上がり、外面口縁下のなでのため口縁部は幾分外反する。9は外面口縁下に稜が巡り、屈曲気味に立ち上がる。10は体部が内彎し、外面には数条の轆轤目が見られる。器壁は厚く、特に底部は糸切り位置が低いために分厚く、突出底状を呈する。11は体部が緩やかに内彎する。底部の器壁が薄いため、器高に比して深めの器形である。12は口縁部が1個所、わずかに外方に押し出され、注ぎ口状を呈する。体部は内彎する。13は器壁が薄く、体部は緩やかに内彎して立ち上がる。14は体部が内彎し、口縁部は幾分外反気味である。体部の器壁が薄いのに対して、底部は厚い。15は内彎する器形であるが、器壁が薄く、特に口縁部・底部はかなり薄く整えられている。そのため同法量のかわらけに比べ軽量である。

16～25は小型のかわらけである。16は器高が低く、器壁は薄めである。体部は屈曲して短く立ち上がり、外面の屈曲部には稜が巡る。17・18は体部が短めで直線的に立ち上がる。底部の器壁はやや厚い。19・20は口径・底径が小さく、底部の器壁が分厚いため器高が高めになっている。体部は長めで屈曲気味に内彎する。内底面は中央部がやや盛り上がる。21・22は体部が直線的に立ち上がり、内底面は中央部がやや盛り上がる。23～25は体部が長めで、直線的ないしわずかに内彎気味に立ち上がる。

第4節　第4面 (Fig.7、PL.4・5)

第4面は地表下約2.8mで確認された。調査深度の関係で、中央部は本面の調査は実施していない。北西部では面上に、遺物を多く包含する層が堆積している(Fig.11セクション図の土層番号48)。本面では動物遺骸1個所・ピット10口・かわらけ溜り1個所が検出された。

1．動物遺骸 (Fig.9)

北西部で検出された。馬の遺骨が2個所跨って密集し、その周囲にも一部遊離している。密集した部分は面上に存在するが、遊離したものはわずかに面の構成砂中に及んでいる。密集部には寛骨・脊

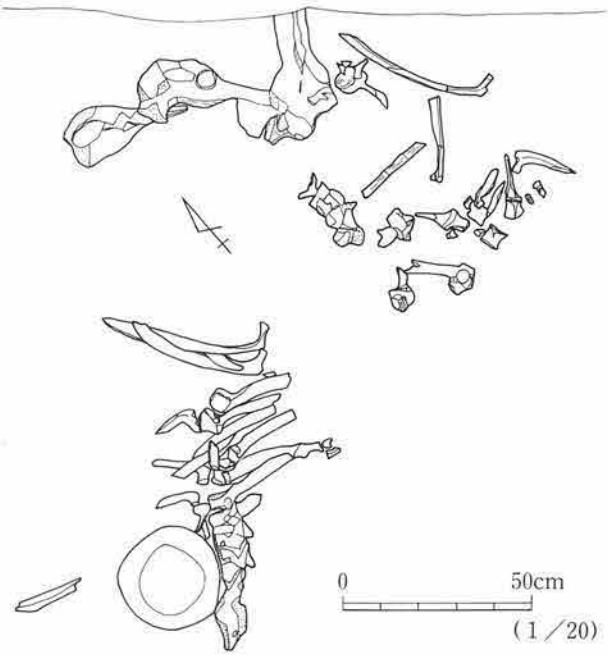


Fig.9　第4面馬骨検出状況

椎・肋骨などが、周囲には四肢骨が見られる。密集部南西寄りで検出された脊椎は繋がった状態のままであることから、骨になった時点ではなく遺体の状態で遺棄されたものと思われる。それ以外の位置で検出された骨は遊離状態を示しており、おそらく野犬等に食い散らかされて原位置を失ったのであろう。

出土遺物

馬骨に伴って出土した遺物はなかった。

2．ピット

10口検出された。すべて調査区北西部に位置する。大きさ・形態とも様々である。

出土遺物

全く出土していない。

3．かわらけ溜り

南東部で検出された。1.3m×0.9m程の範囲でかわらけ片等がまとまって出土した。ほぼ平面的に広がっている。一般的にかわらけ溜りは完形品を多く含むが、本址は小片ばかりであった。

出土遺物

かわらけ等が出土したが、小片が多く図示できるものはわずかであった。面上出土遺物と併せてFig.10に掲載した。

4．第4面出土遺物（Fig.10）

2・4・6・9・12がかわらけ溜りの出土遺物、他が第4面の出土遺物である。

1・2とも青磁蓮弁文碗の体部片である。釉は1がオリーブ色、2が灰青色を呈する。2は内面に横方向の擦痕が見られる。3は青白磁の水注或いは小壺の底部片である。瓜形を呈するようである。釉は内面と外面胴部下位まで施される。4は白磁口兀皿の口縁～体部片である。

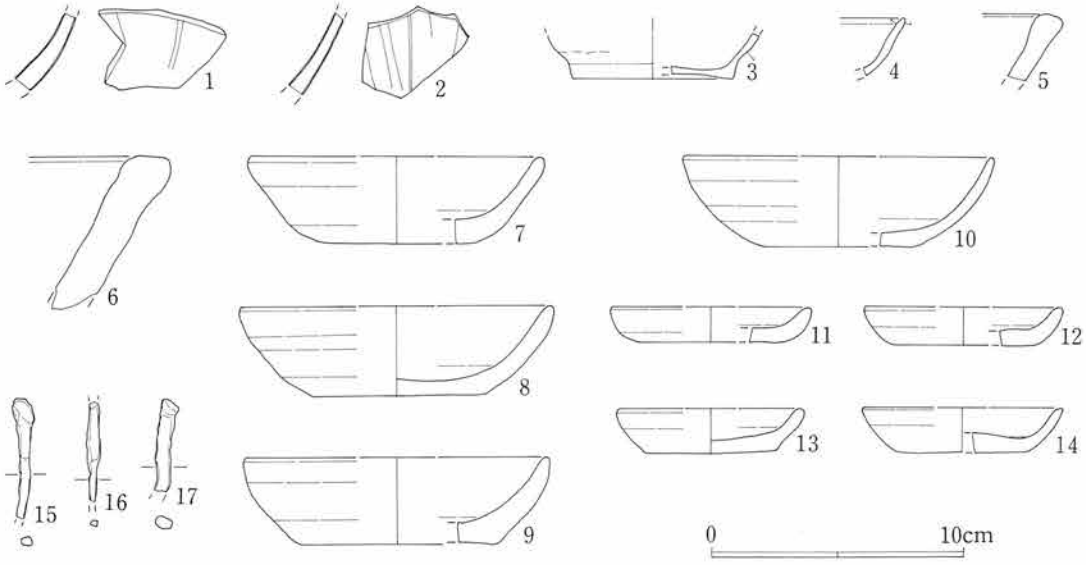
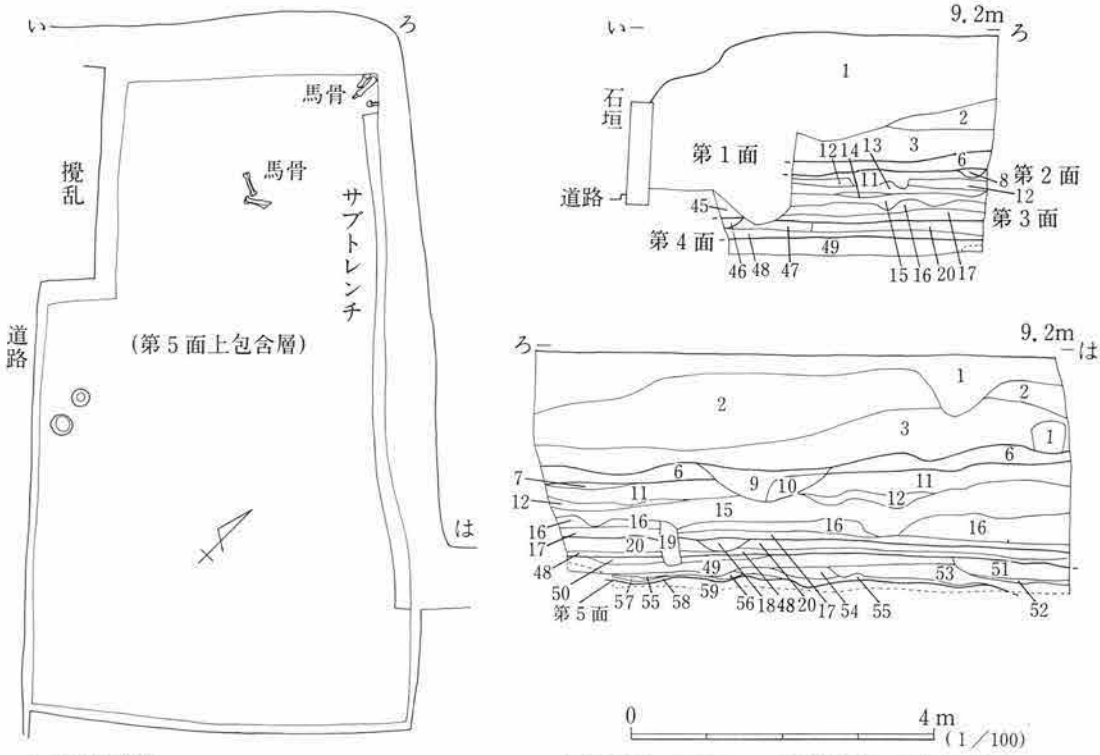


Fig.10　第4面出土遺物



1. 表土及び撹乱。
2. 灰白色砂。やわらかくしまりない。貝殻微粒含む。
3. 灰黒色砂。やわらかいがややしまりはある。貝殻微粒・カーボン粒・遺物を含む。若干土壌化。
4. 淡灰黒色砂。3と6の混合。やわらかいがややしまりはある。貝殻微粒含む。
5. 灰白色砂。やわらかいがややしまりはある。
6. 灰色砂。固い。貝殻微粒・カーボン粒含む。部分的に褐鉄状を呈す。
7. 灰白色砂。貝殻微粒含む。全体的に褐鉄状を呈する。
8. 灰黒色砂。やや固い。貝殻微粒含む。カーボン粒やや多い。溝覆土。
9. 灰色砂。やわらかくしまりない。遺物・貝殻微粒含む。土壙3覆土。
10. 灰色砂。黄褐色砂含む。土壙3覆土。
11. 灰色砂。固い。カーボン粒・貝殻微粒含む。褐色砂含む。かなり褐鉄部分見られる。
12. 明灰褐色砂。貝殻微粒・カーボン粒含む。やや固い。部分的に白色砂を混入する。
13. 灰色砂。カーボン粒・貝殻微粒含む。固い。層状に褐鉄化している。
14. 淡黄灰色砂。貝殻微粒含む。やや固い。
15. 灰色砂。固い。貝殻片・カーボン粒含む。褐色砂含む。また褐鉄化部分見られる。
16. 明灰褐色砂。固い。夾雑物ほとんど含まない。
17. 灰白色砂。固い。カーボン粒・貝殻微粒・遺物をわずか含む。褐色を呈する部分もある。部分的に褐鉄化している。
18. 暗灰褐色砂。カーボン粒多く含む。溝覆土。
19. 灰褐色砂。やわらかくしまりない。ピット覆土？
20. 明灰褐色砂。固い。
21. 灰色砂。固い。貝殻微粒・遺物片・カーボン粒含む。黄褐色砂混入。
22. 灰色砂。貝殻微粒・かわらけ片含む。部分的にカーボン層堆積。褐色砂含み、部分的に褐鉄化している。土壙覆土。
23. 灰色砂。やわらかい。貝殻微粒・カーボン粒含む。布掘り遺構2覆土。
24. 灰色砂。黄褐色砂含む。やわらかい。貝殻微粒・カーボン粒含む。布掘り遺構2覆土。
25. 淡灰色砂。やわらかい。貝殻微粒・カーボン粒含む。布掘り遺構1覆土。
26. 灰色砂。やわらかい。貝殻微粒・カーボン粒含む。布掘り遺構1覆土。
27. 黄灰色砂。やわらかい。貝殻微粒・カーボン粒含む。布掘り遺構1覆土。
28. 灰黒色砂、灰色砂含む。やわらかい。カーボン粒・貝殻微粒含む。遺構覆土？
29. 淡灰色砂,灰黒色砂粒含む。やわらかい。貝殻微粒含む。布掘り遺構2覆土。
30. 淡灰色砂。やわらかい。貝殻微粒以外の夾雑物は含まない。土壙1覆土。
31. 淡灰色砂。30よりやや暗い。やわらかい。貝殻微粒以外の夾雑物は含まない。土壙1覆土。
32. 淡灰色砂。29より暗い。やわらかい。貝殻微粒含む。布掘り遺構2覆土。
33. 灰黒色砂。やわらかい。カーボン粒・貝殻微粒・かわらけ粒含む。ピット覆土。
34. 灰色砂。やわらかい。貝殻微粒・カーボン粒含む。土壙2覆土。
35. 灰色砂。34よりやや褐色を帯びる。やわらかい。貝殻微粒・カーボン粒含む。土壙2覆土。
36. 淡灰色砂。やや固い。貝殻微粒・カーボン粒含む。
37. 灰白色砂。固い。貝殻微粒・カーボン粒含む。部分的に黄褐色を呈する。
38. 黄褐色砂。固い。貝殻微粒多い。カーボン粒・かわらけ粒含む。
39. 淡灰色砂。固い。貝殻微粒含む。全体的に褐色を帯びる。6に対応するが、6よりしまっている。
40. 淡灰黄褐色砂。固い。貝殻微粒含む。11に対応するが、砂質は異なる。
41. 淡黄褐色砂。やや固い。部分的に淡緑色を呈する。貝殻微粒含む。16に対応するが、砂質は異なる。
42. 淡灰色砂。固い。貝殻微粒含む。
43. 淡灰緑色。固い。貝殻微粒・カーボン粒含む。
44. 淡灰褐色。固い。貝殻微粒・カーボン粒含む。
45. 淡灰黒色砂。カーボン粒含む。やわらかい。
46. 淡褐色砂。カーボン多量に含む。やわらかい。土壙覆土？
47. 灰褐色砂。貝殻微粒・遺物含む。やわらかい。
48. 暗灰褐色砂。貝殻微粒・カーボン含む。やわらかい。遺物包含層。
49. 淡灰褐色砂。貝殻微粒・カーボン含む。やわらかい。
50. 灰色砂。貝殻微粒・カーボン含む。やわらかい。
51. 淡灰褐色砂。貝殻微粒含むが夾雑物少ない。やわらかい。
52. 炭層。
53. 明灰褐色砂。貝殻微粒含むが夾雑物少ない。ややしまっている。
54. 灰白色砂。やや褐色を帯びる。貝殻微粒・カーボン含む。やや固い。
55. 灰褐色粘質土及び砂。やわらかい。貝殻微粒・カーボン含む。遺物包含層。
56. 明灰褐色砂。貝殻微粒含む。やや固い。
57. 灰褐色砂。やや固い。貝殻微粒多く含む。
58. 灰色砂。やわらかい。カーボン多量に含む。遺物包含層。
59. 淡灰褐色砂。しまっている。貝殻微粒含む。

Fig.11　第5面上包含層　平面図、調査区壁セクション

5は捏鉢の口縁部片である。口端部は比較的丸みを帯び、上端にわずかに沈線が見られる。

6は手焙りの口縁～体部片である。土器質。体部は外傾し、口縁部は比厚になる。口縁部は器表が一部剝離している。

7～14はかわらけである。すべて轆轤成形。7～10は大型。7は体部外面中位が凹み、直線的に立ち上がる。8・9は体部が厚めで、緩やかに内彎して立ち上がる。10は精良・粉質な胎土で、器壁がかなり薄く、内彎し深めの器形である。

11～14は小型。11・12は体部が短めで内彎気味である。13も体部が内彎気味で、底部は糸切り位置が低いため、やや突出底状を呈する。14は体部の器壁が薄く、内彎気味である。底部は中央が盛り上がっている。

15～17は鉄釘である。完全なものはない。

第5節　第5面 (Fig. 11、PL. 6)

第5面は北西部北東壁下のサブトレンチのセクション面で確認した。地表下約3.1mにあり、調査深度以下のため、第5面は平面的には調査しておらず、遺構の有無は不明。調査では第4面と第5面の間層中まで掘り下げ、遺物を採集した。セクション面の観察では、面は平滑ではなく凹凸が見られる。面の上層には遺物を多く包含した層が存在する。

第5面及び第5面上包含層出土遺物 (Fig. 12)

1・2は青磁の碗である。1は体部片。単弁の蓮弁文が見られる。釉は明灰緑色を呈し、大きな貫入ができている。2は口縁部の小片。蓮弁は複弁であろう。釉は灰緑色だが、表面がただれており、二次焼成を受けたものと思われる。

3は白かわらけである。轆轤成形で、復元底径4.8cm。

4は常滑甕の口縁部片である。N字状に折り返され、縁帯が成形される。

5～32はかわらけである。すべて轆轤成形。5～21は大型。5は体部が鋭角に真っすぐ立ち上がる。器壁が底部より口縁に向かって急激に減じており、断面は楔形を呈する。6・7は体部が幾分内彎して立ち上がる。体部の器壁がやや厚い。8・10・11・15は器高が低く、器壁が比較的薄い。体部は内彎する。15は外面口縁下に稜が巡る。9・12も器高が低く、体部は内彎するが、器壁は薄くない。14は体部下位で屈曲して、直線的に立ち上がる。器壁が比較的薄い。13・16は体部が内彎して立ち上がる。17は外面口縁下に稜が巡り、その下は凹んでいる。体部は緩やかに内彎する。18～20は体部が緩やかに内彎し、外面口縁下に弱い稜が巡る。21も体部が緩やかに内彎するが、外面に稜は見られない。

22～32は小型。22・25・26は器高が低く、体部が小さく内彎気味に立ち上がる。体部は短く、断面は楔形に近い。26を除き器壁は薄い。23・24・29は体部が直線的に立ち上がる以外は、上記とほぼ同じ。27・28は器壁が厚く、体部はほぼ直線的に立ち上がる。27は体部の器壁も分厚い。30は器高が低く、口縁部が外反する。31・32も器高が低めだが、体部が幾分長く、緩やかに内彎して

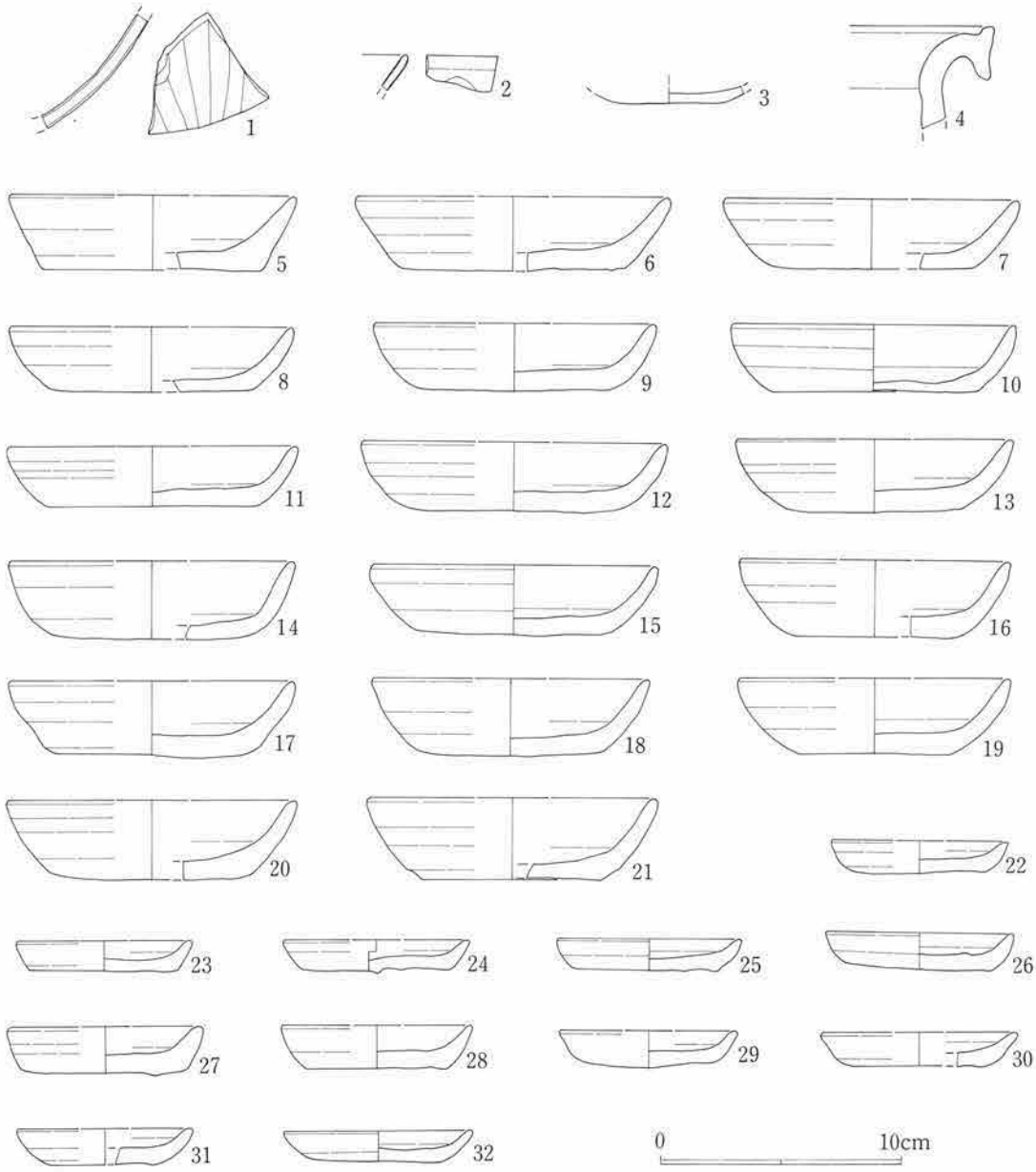


Fig. 12　第 5 面及び第 5 面上包含層出土遺物

立ち上がる。

第四章　まとめ

本調査では上下２ｍ以上に及ぶ砂丘層中で、中世期の遺構・遺物が検出された。遺構面として捉えたのは計５面あるが、検出された遺構の密度はかなり低く、出土遺物も概ね少なかった。遺構としては、当該地域で顕著な方形竪穴建築址・墳墓等は全く見られず、布掘り遺構・土壙・ピット・動物の遺骸などが検出されたにとどまった。布掘り遺構は柵列址かと思われるが、具体的に何の目的で築かれたものかは分からない。また、それ以外の遺構も用途は不明である。本調査の成果だけでは本地点での中世期の具体相は詳らかにされないが、馬の遺体が放置されているような状況から見ると、荒涼とした情景も写しだされよう。

本遺跡の年代はかわらけ等の出土遺物より判断すると、戦国期の土壙３（第１面）を除き、概ね14世紀台に営まれたものであるが、各面の実年代を細分して示すのは難しい。14世紀頃の約100年間で、調査で最下面である第５面から最上面の第１面まで、砂丘の形成とともに徐々に推移していったのであろう。第５面以下にも遺構が存在している様子であり、遺跡の開始時期は上記の年代より早まる可能性が高いが、13世紀後葉より以前に遡ることはないと思われる。

出土遺物の総量はテンバコ６箱程で少ないが、内容的にはかわらけ・常滑（甕・捏鉢）・鉄釘等が多く、その他に一通りの器種は見られることから、本地点では検出されなかったが、付近に建物があって何らかの生活が営まれていたことは明らかである。遺物の傾向としては、馬骨を含め獣骨が多いようである。また、少量であるが、遊離状態の人骨も発見された。

1. 第Ⅰ面全景（南東から）

2. 同右（北西から）

PL. 2

1. 第 I 面（北西部）

2. 同上（中央部）

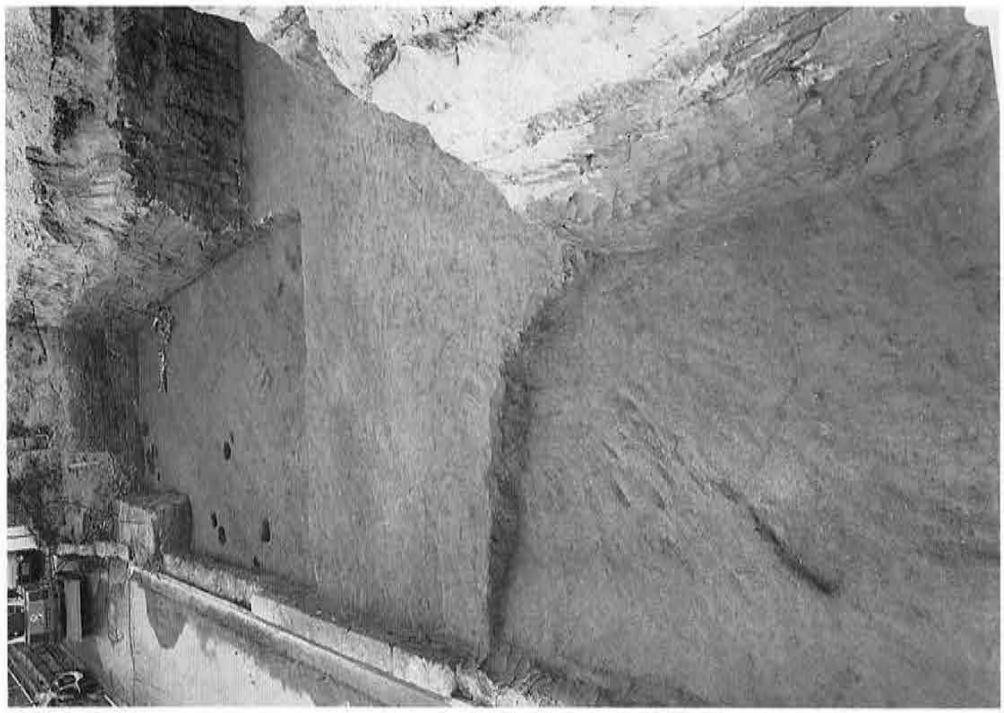
3. 同上（南東部）

1. 第Ⅰ面　布掘り遺構Ⅰ

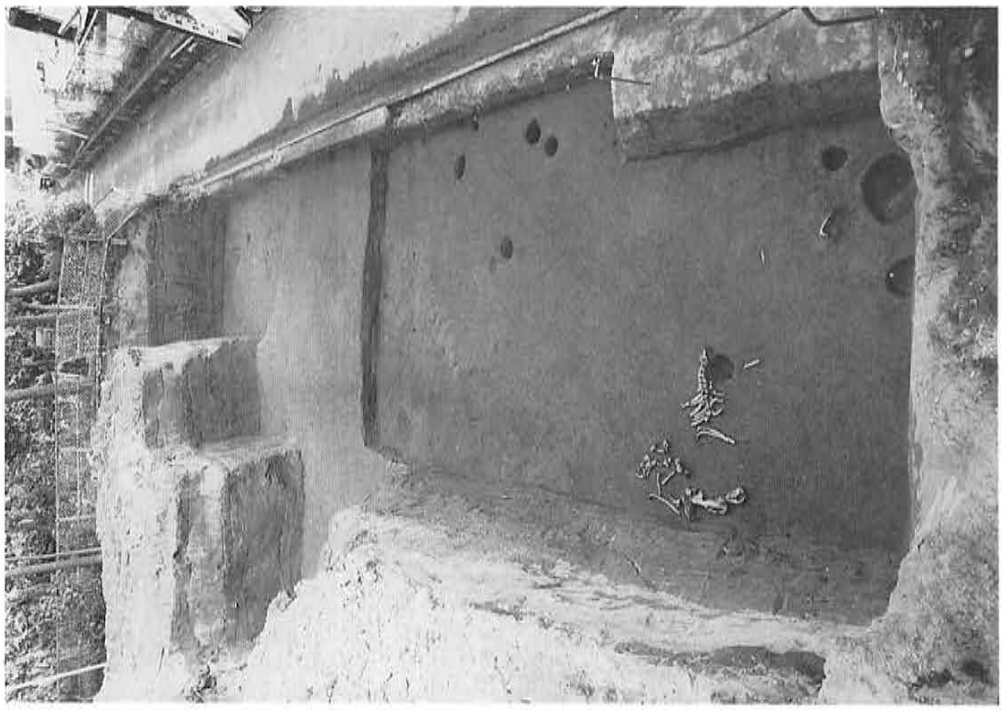
2. 同左

3. 第Ⅰ面　南東部、布掘り遺溝2、土壙Ⅰ・2、ピット

PL. 4



1. 第3・4面全景（南東から）



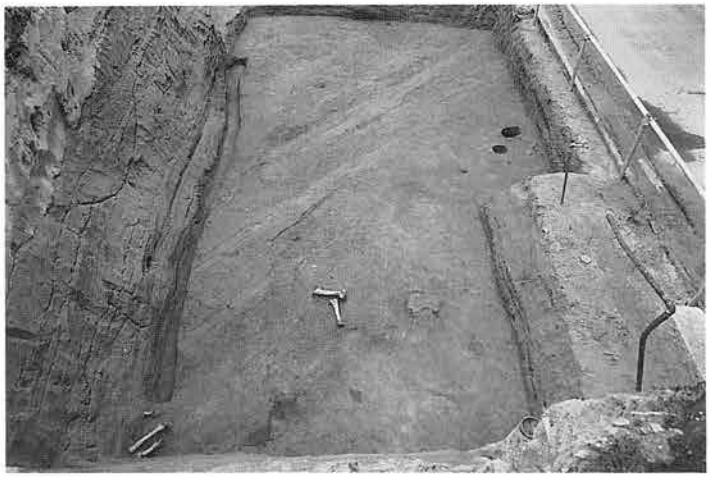
2. 同右（北西から）

1. 第3面（中央部）

2. 第4面（北西部）

3. 第4面（北西部）
馬骨検出状態

PL. 6

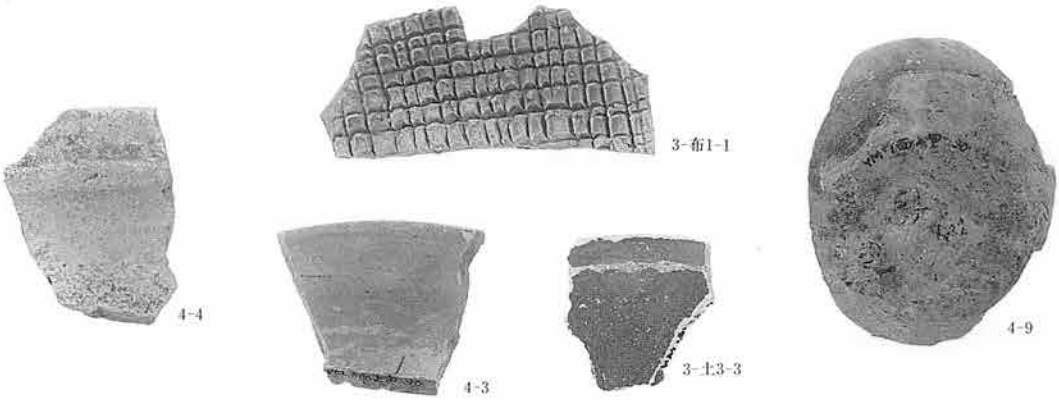


1. 第5面上包含層
(北西部)

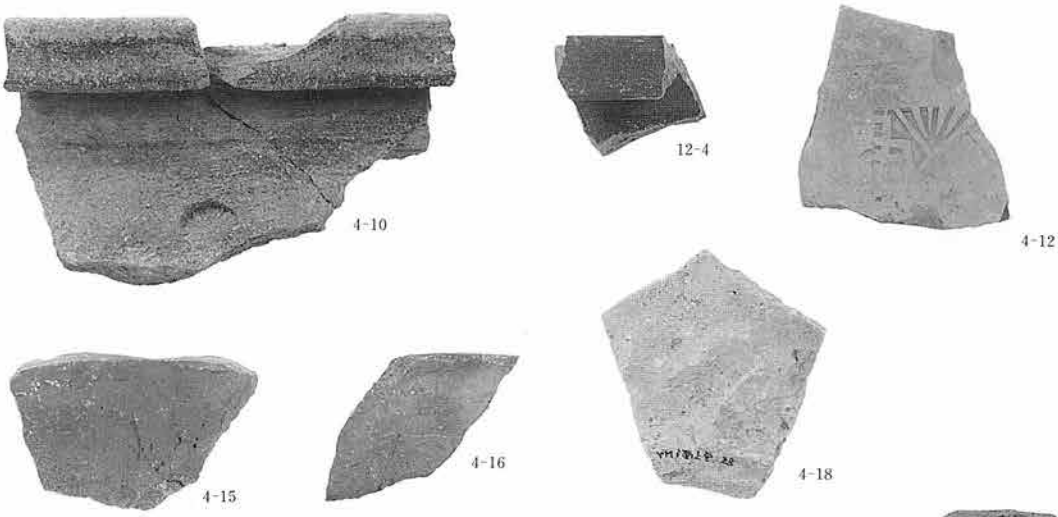
2. セクション (北西部)

3. 同上 (南東部)

舶載磁器



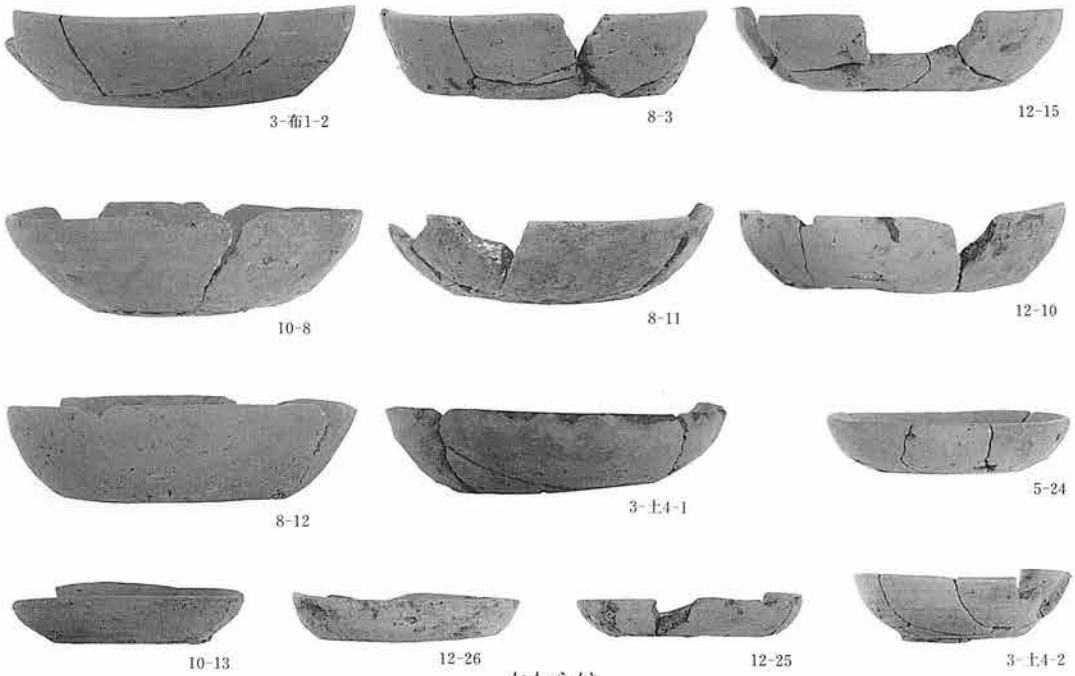
瀬戸・美濃



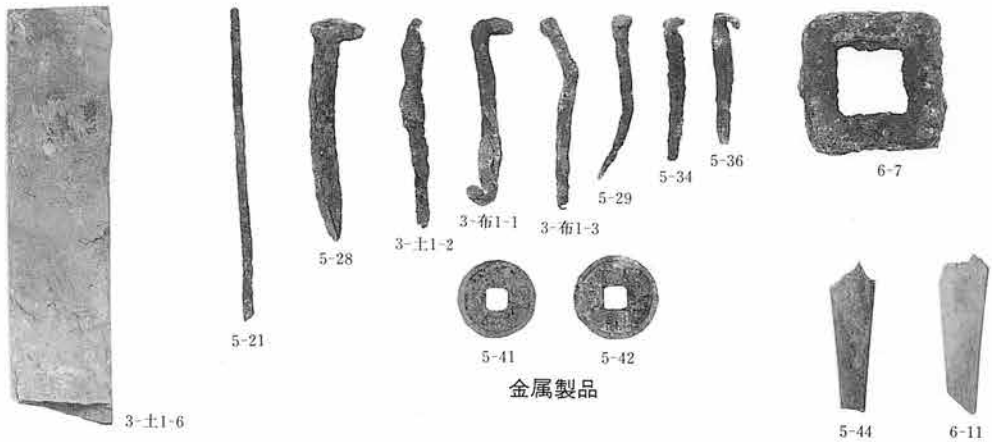
常　滑

鍔　釜　　手焙り

PL. 8



かわらけ



金属製品

石製品

骨製品

6．長谷小路周辺遺跡（No.236）

由比ガ浜三丁目194番24地点

例　言

1．本編は、鎌倉市由比ガ浜三丁目194番24における店舗併用住宅建設に伴う国庫補助事業発掘調査の、報告書である。

2．460㎡の調査対象面積に対して、92㎡を国庫補助事業調査として実施した。残りの対象面積は長谷小路周辺遺跡発掘調査団（団長・斉木秀雄）が調査を行った。

3．調査の実施にあたっては、長谷小路周辺遺跡発掘調査団より器材等の援助を受けた。

4．本編の執筆は、第１章から第３章および第４章第３節と第５章－２を宗臺秀明が、第３節を除く第４章および第５章－１を宗臺富貴子が行い、第６章を共同執筆した。また、遺物の実測・トレースと挿図作製も上記二者で行ったが、遺物の復元には溝手美穂の助力を得た。尚、第５章－３は、（株）パレオ・ラボに委託した原稿である。

5．本編に使用した写真は、遺構を宗臺秀明が、出土遺物を宗臺秀明と大沼真理、宗臺富貴子が、航空写真を（株）シン航空写真が撮影した。ただし、PL１上段に使用した航空写真は、長谷小路南遺跡発掘調査団が（株）サンシャイン工業に依頼したものを、借用した。

6．調査体制

主任調査員　宗臺秀明

調　査　員　汐見一夫、宗臺富貴子

調査補助員　菊池正明、安田博人、佐久間康一。

調査協力員　安田ヒデ、河盛ミサエ、石井ちづ子、鎌倉市高齢者事業団（石渡、箕田、藤田、高橋、長浜、大湊）

以上敬称略

7．出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　次

例言 …… 130
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 132
第二章　調査の経過と堆積土層 …… 135
　第１節　調査の経過 …… 135
　第２節　堆積土層 …… 136
第三章　検出された遺構 …… 139
　第１節　第１面 …… 139
　第２節　第２面 …… 143
　第３節　トレンチによる下層の調査 …… 146
第四章　出土した遺物 …… 150
　第１節　第１面 …… 150
　第２節　第２面 …… 157
　第３節　トレンチ …… 162
　第４節　近現代建築基礎壙 …… 166
第五章　付編 …… 169
　１．出土かわらけについて …… 169
　２．出土貝類 …… 172
　３．長谷小路周辺遺跡の花粉化石群集 …… 174
第六章　まとめ …… 179

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

鶴ヶ岡八幡宮から海へ向けて、鎌倉の中心を南北に走る、若宮大路の下馬交差点を横切る国道134号線は、西に向うと六地蔵、長谷観音、大仏前を抜けて藤沢方面に至り、東に向うと名越を抜けて逗子に至る。遺跡地はこの134号線の南に面し、六地蔵と長谷観音の中間に位置する。このあたり一帯は長谷小路周辺遺跡（神奈川県遺跡台帳No.236）として遺跡指定されているが、今回調査した遺跡地はその北辺にあたる。

長谷小路は、六地蔵から長谷（当時の甘縄）を結ぶ路であろうと思われている(注1)。中世にあっては、鎌倉七口のうち、極楽寺と大仏の切通し道を街中の屋地へと導く、交通の要所である。中世以前においてもまた、古東海道がこのあたりを抜けて小坪方面に至っていたと想定されている。遺跡地の周囲には、中世以前に創立された御霊神社、甘縄神明社のほか、『万葉集』にも詠まれた稲瀬川（無水瀬川）があり、古代のある時期より鎌倉の要所として知られていた。また、遺跡地の南東の一帯は「妥女塚」を含めた「下向原古墳群」とされ、明治頃まで遺っていたという。

中世になると、稲瀬川から滑川河口までの海浜地は、「前浜」と呼ばれ、長谷小路あたりを北限としていたようである。この「前浜」は市街地の「屋地」と異なり、屋敷地のほとんどない（宗旨不祥の「浜の一向堂」なる建物の記載が「市川文書」にあるのみ）特殊な地域である。近年、この「前浜」地域の調査件数が増加している(注2)が、発見される遺構は、方形竪穴建築址がほとんどで、礎石建物址はまず見られない。方形竪穴建築址も、市街地に発見される２～３メートル四方の小さなものでなく、規模の大きなものが多い。なかには、床に凝灰岩切石を敷きつめる例もしばしばみられる。「前浜」地域でもより海に近い「由比ガ浜中世集団墓地遺跡」内の遺跡地には、やはり方形竪穴建築址が多数発見されたが、その廃棄後、多数の土壙墓が作られていた。こうした「前浜」地域の諸遺跡地の地山は、全て砂層である。これらから出土する遺物には、市街地遺跡と同様な舶載陶磁器、国内各窯の製品、かわらけなどのほかに、多量の鞴の羽口、スラグ、骨製品およびその未成品がある。職能集団もしくは工房の存在が遺物から窺われている。なかでも、鞴の羽口とスラグは多く、「前浜」での精錬作業が恒常的に行われ、スラグの肉眼観察によれば、銅を扱っていたようである(注3)。

ここで注意されるのが、「前浜」の西方、極楽寺切通しに近い、坂ノ下に位置する御霊神社である。御霊神社は、鎌倉権五郎景政（正）を祭神とするため、「権五郎神社」とも呼ばれるが、鎌倉幕府創立以前の旧社である。景政をまつった時期は鎌倉時代の中期以降とされるが、景政が隻眼であったところから、眼をわずらう人々の参詣が続いたという(注4)。鋳銅職能集団と隻眼の祭神との密接な関係は、谷川健一氏が指摘している。

一方、遺跡地北方の一帯は、山麓に東西に広がる甘縄と称される地域である。ここには、甘縄神明社のほかに、安達九郎盛長・右衛門尉景盛・義景・泰盛ら、安達一族の屋敷があり、おそらくは他の御家人の屋敷も並んでいたであろう。

1. 調査地点
2. 由比ガ浜三丁目199番１地点遺跡（福地ビル用地）
3. 長谷小路周辺遺跡（秋山ビル用地）
4. 長谷小路周辺遺跡（河合ビル用地）
5. 同　上　（鎌倉市調査分、河合ビル用地）
6. 長谷小路南遺跡
7. 由比ガ浜中世集団墓地遺跡（鳥かつ用地）
8. 由比ガ浜南遺跡
9. 笹目遺跡
10. 諸戸邸用地

0 200m

Fig. 1　調査地点および周辺の遺跡

甘縄神明社の東に位置する諸戸邸用地遺跡の調査を初例として、遺跡地周辺に「下向原古墳群」以外にも、中世以前の様子が少しづつ発見されてきている。諸戸邸用地を除く、日産自動車鎌倉保養荘用地、長谷小路南遺跡、長谷小路周辺遺跡（河合ビル用地、福地ビル用地、秋山ビル用地、尺ビル用地）の調査では、中世地山の飛砂層下に、五領期以降の古代の遺物・竪穴住居址、伸展葬土壙墓がチョコレート色の堆積層中に確認された。チョコレート色の堆積層は、海岸砂丘の後背湿地に形成された腐植土と考えられている(注5)。

本遺跡地において、この腐植土層下に貝殻片を混じえる粗い海砂が確認され、この時期の遺跡地は海岸であったようである。また、由比ガ浜南遺跡では、海抜1.8メートルに、泥岩の波触台が認められ、この上から古代遺物が発見されている。

注

1．『鎌倉市史・総説編』1959年

2．『由比ガ浜三丁目194番25外遺跡調査報告』長谷小路遺跡発掘調査団編、1990年

『由比ガ浜三丁目199番１地点遺跡調査報告書』由比ガ浜三丁目199番１地点所在遺跡発掘調査団編、1990年

「長谷小路周辺遺跡・由比ガ浜三丁目258番８」長谷小路周辺遺跡発掘調査団編、『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書６―平成元年度発掘調査報告―』pp.129―204所収　鎌倉市教育委員会、1990年

3．大三輪　他『中世鎌倉の発掘』1983年　有隣堂

4．『鎌倉市史・社寺編』1959年

5．「長谷小路周辺遺跡・由比ガ浜三丁目258番８」長谷小路周辺遺跡発掘調査団編　前掲、1990年 p.187

第二章　調査の経過と堆積土層

第１節　調査の経過

本遺跡地の発掘は、原因者負担調査区と国庫負担調査区を同時に、平成元年11月13日から翌平成２年２月23日にかけて実施した。

調査は、先に鎌倉市教育委員会の行った試掘調査の結果を受けて、現地表下１～0.5メートルまでの表土層および現代の撹乱層を重機を用いて除去することより開始した。表土層除去後、破砕泥岩による薄い版築面が調査区北東に認められた。この版築面は、本遺跡地の北東に隣接する由比ガ

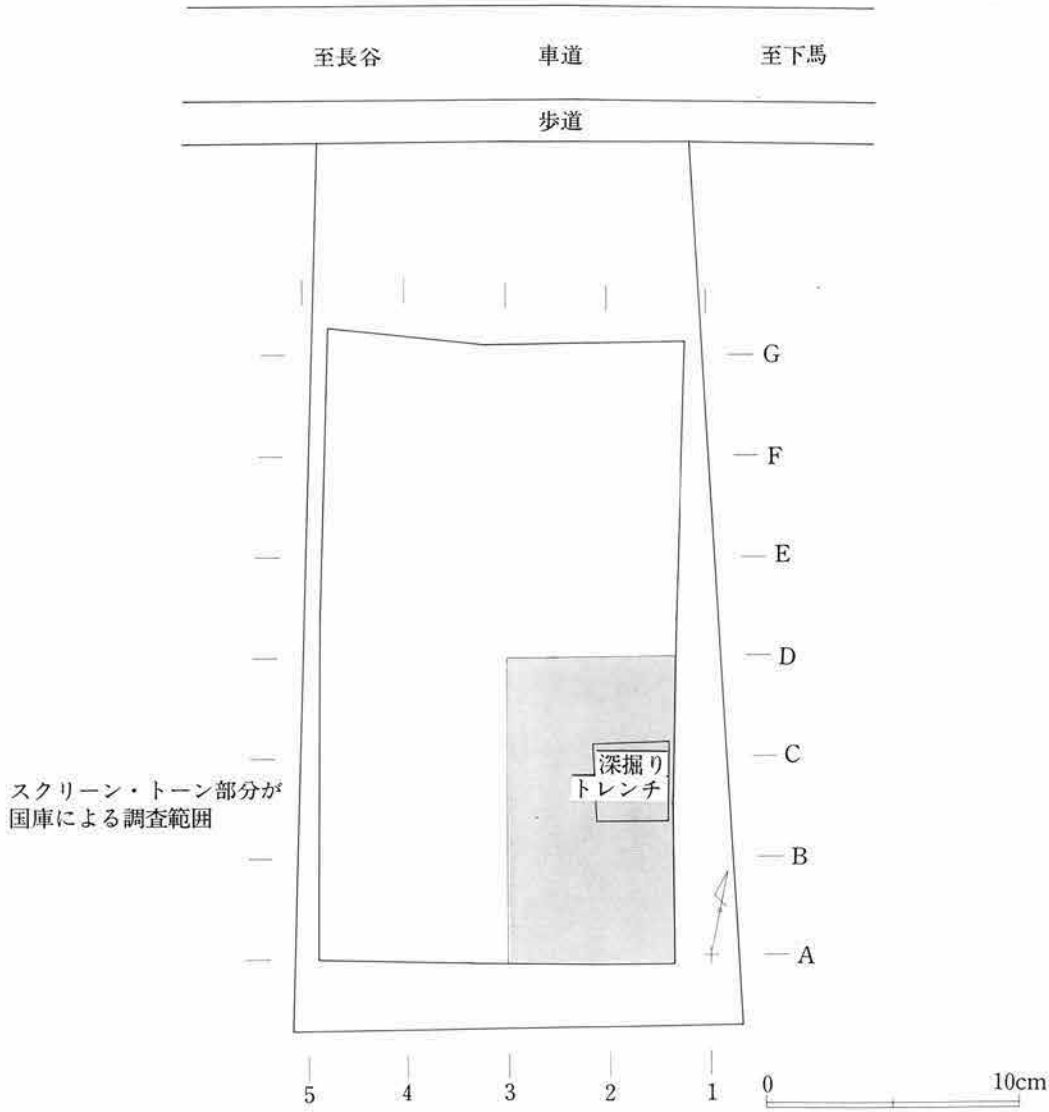


Fig. 2　調査区及びグリッド設定図

浜三丁目194番25外遺跡（秋山ビル用地）にみられた第１面の延長と思われたが、調査区全域には広がらなかった。調査区の一部にのみ現われた版築面と同時期の層を本遺跡の第１面とした。第１面は北西から南東へ向って傾斜する。この傾斜は、第１面以下の第２面および砂層まで一貫して同様であった。調査は第２面の広がりまでを確認したが、建築の基礎深度が現地表下２メートルであったため、より下層の確認を深掘り基礎杭の入る位置に設定したトレンチにて行った。

発掘調査にあたっては、調査区内に方眼を設定した。方眼は、基準点を調査区外南東に任意に設定し、そこより４メートル間隔に配置される。方眼の軸線は、東西にアルファベット、南北に算用数字を付し、各方眼単位の名称をそれぞれの南東隅の交点名とした。南北の軸線は磁北に対して3°6′00″西にずれている。

第２節　堆積土層

A. 堆積土層

本調査地は、現況地表面が北西から南東に向い緩やかに傾斜しているが、古代から中世の生活面も南東へ向い低くなる。時代が遡るほど傾斜は強い。下に掲げた標準土層図は、原因者負担分を含めた調査区の約24メートルにわたる南北軸の文化堆積層序を概念化したものである。

駐車場として使用されていた現況整地表土層を除去すると、大正・昭和の整地層・第１層が現われる。この上面に関東大震災時に倒壊したと思われる建物の基礎がみられた。報文中の近代建築基

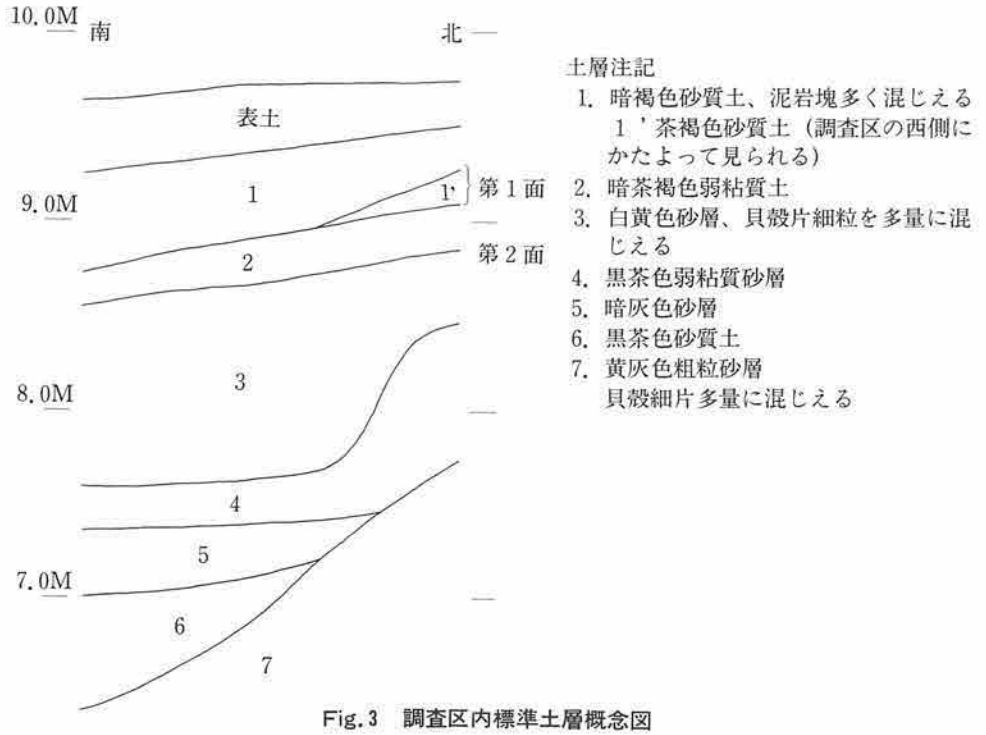


Fig.3　調査区内標準土層概念図

礎壙は、この攪乱壙を指している。第１層中から、中世に帰属する遺物類はほとんど出土せず、１層を積み増す以前に何らかの削平が行われた可能性がある。　第２層は中世第１面を構成する。第２層上面には、破砕泥岩による版築面が調査区の北東部にみられた。ほかの地域は弱粘質土を残すのみで、遺構の確認に手間どったうえ、次の第２面調査時に発見された１面遺構もあった。

第３層は鎌倉時代中期以降の地山となった白黄色砂層である。砂の粒子等の観察から、本層は海浜および海浜砂丘からの飛砂と考えられる。この砂層中より、中世の遺物片が数点出土することから、鎌倉時代の前期から中期にかけての時期には未だ飛砂の堆積中であったのだろう。砂層中には中世の遺構掘り込みと生活面を確認していない。

第４層から第６層までは、チョコレート色に近い暗褐色系の弱粘質砂層である。下層ほど粘性は小さい。次の第７層とともに第４層の傾斜は強く、段状に近い落ち込み方をする。やはり長谷小路周辺遺跡に含まれる由比ガ浜三丁目258番８遺跡（河合ビル用地）の報告で指摘されているように、この飛砂層下にある暗褐色系弱粘質砂層は、砂丘後背湿地に形成された腐植土と思われる。第４層から第６層は古代の遺物（土師・須恵など）を多く包含している。

第７層は黄灰色の粗砂層。褐鉄のために黄色味を強くしているが、本来は白褐色の海砂と思われる。この層中に人工遺物はみられない。

B. 周辺遺跡堆積土層層準との比較

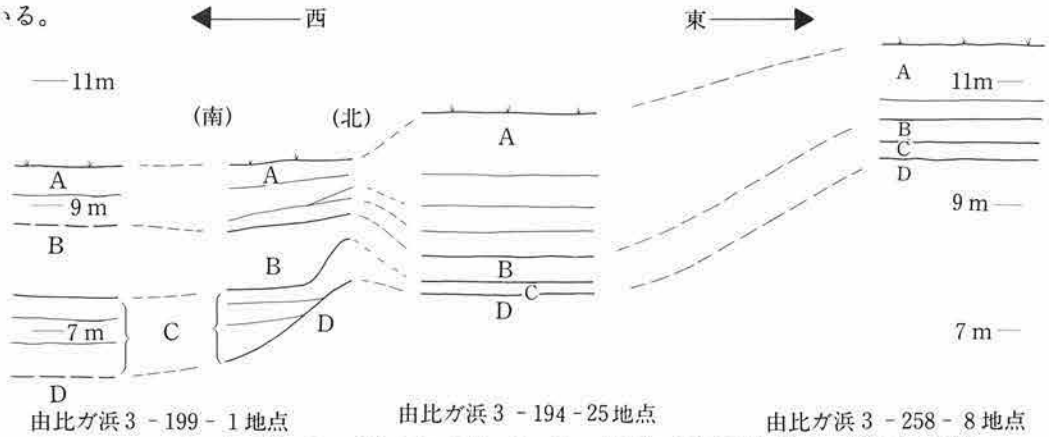
本遺跡の土層堆積と周辺遺跡のそれを、鎌倉時代中期以前の白黄色砂層以下を比較し、今後行わねばならない地勢復元に資したい。比較する遺跡は以下の３遺跡である。

由比ガ浜３―199―１地点（福地ビル用地）、本遺跡より西30メートルに位置する。

由比ガ浜３―194―25地点（秋山ビル用地）、本遺跡の北東に隣接する。

由比ガ浜３―258―８地点（河合ビル用地）、本遺跡より東170メートルに位置する。

本遺跡を含めた４遺跡ともに現在の国道134号線に面している。尚、本遺跡地内の現地表および第７層までの全ての層序は北西から南東へ強く傾斜しているため、図は南北軸方向の層準を示している。



A. 表土層　B. 黄白色細砂層　C. 黒～暗褐色弱粘質砂土層 D. 黄褐色粗砂層

Fig. 4　標準土層対照比較図

図中のA、B、C、Dは、それぞれ表土、白黄色砂層、暗褐色系弱粘質砂層、白褐色ないし黄灰色の自然堆積粗粒砂層である。A層とD層ともに東から西へ低くなり、古代における自然傾斜を現在まで遺していると言える。ただし、砂丘後背湿地に堆積したと考えられているC層と、その後に堆積した飛砂層であるB層が、西の遺跡ほど厚い。また、本遺跡をみる限りでは南ほどBおよびC層が厚く堆積している。このBおよびC層の堆積状況からは、本遺跡と福地ビル用地遺跡などは砂丘後背湿地近くに位置し、河合ビル用地遺跡は砂丘後背湿地からやや隔れた位置にあったのではないだろうかと、想定できるが、現在の周辺地形を考慮するならば、そう簡単ではないだろう。現在の周辺地形（Fig.1）では、国道134号線の東側は北に開析谷が開けている一方、西側はすぐ北に丘陵地が迫っている。かつては、南北方向の傾斜が西ほど強かったのではないだろうか。本遺跡の南北方向の層準もその示唆を含んでいる。この南北方向の海へ向う傾斜の強弱によっても、後背湿地の深さや飛砂の堆積状況が変化するものと思われる。今後は海浜地域の調査地点の南北方向の土層堆積状況をより確実に捉えてゆくことも課題であろう。

さて、本遺跡と秋山ビル用地遺跡および福地ビル用地は近接するものの、A層下面以下の海抜高がかなり相違している。上記のC層およびB層の堆積要因を考慮するならば、本遺跡北側にD層形成時以前から微高地の存在した可能性が考えられようか。やはり今後の調査の課題である。

第三章　検出された遺構

今回の調査で検出された遺構は方形竪穴建築址を主として、井戸と数基の土壙である。これらは、中世の都市遺跡の一部を切りとった、いわゆる長谷小路周辺遺跡という行政上の区分の更に一部である調査地の中でも、そのまた一部分の国庫負担区からの調査検出遺構である。しかし都市遺跡の一部である上、海浜地域生活遺跡の一部でもある今回の調査地内の原因者負担区であっても、方形竪穴建築址のほかに井戸や鞴の羽口を多数出土した特殊土壙、貝殻集積遺構、土壙墓等の生活の多様さを窺わせる遺構と遺物が発見されている。この報文では国庫負担区のみの調査結果だけを記してゆくが、国庫分と原因者負担分を同一調査地内にて一線をもって画すことは不可能であるため、両区にわたる遺構はこの報文にて報告する。

尚、原因者負担区については、未だ室内整理作業の経費が入金されないため、調査報告書作成の目途すらたっていない。

調査は、第１面の破砕泥岩版築面が一部分に検出されたのみで、調査地全体での面を確認できず、遺構掘り込みプランも不明瞭なものが多くみられた。そのため、不明瞭なプランの遺構は、土層堆積観察の畦を残しながら、次の第２面において確認と掘りあげを行い、図上で帰属生活面に復元した。その結果、検出遺構全景写真は、第２面での完掘状況のみを掲げた。

また、建築基礎深度が２メートルであったため遺構掘りあげにあたっては床面にまで達しなかったものが多くあった。

以下、調査進展順に上層の生活面より記してゆく。各遺構は面ごとにイコウ No を付されているが、それらは原因者負担区を含めた調査地全体に検出された遺構の通し番号である。そのため、今回報告する国庫負担区内の遺構に付した番号がかなり飛び飛びとなってしまった。御容赦願いたい。

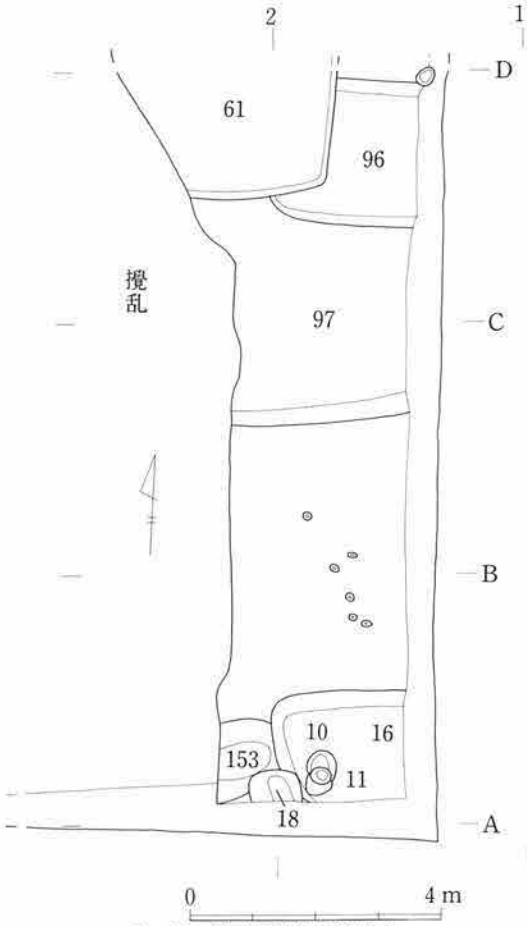


Fig. 5　第１面遺構全体図

第１節　第１面

第１面からは、方形竪穴建築址３棟、井戸１基、土壙２基、ピット９口が発見された。

A. 方形竪穴建築址

3棟の方形竪穴建築址は、深度規制のために共に床面まで掘りあげることができなかった。唯一イコウ97の南壁は深掘りトレンチ内に位置していたので、一部床面を確認できた（PL.4)。他の2棟は、その覆土上層のみを発掘するにとどまり、方形竪穴建築址として確認したとは言いがたい。ただし、以下の要件に基づいて方形竪穴建築址と推測した。

1．壁の落ち込み角度が強い。

2．ボーリング棒を用いて確認した限りにおいて、床面の深度が2メートル以内ほどである。

3．覆土堆積状況の観察と覆土が含む水分の多寡。壁板を支える裏込めが掘り方に比較的近い。

以上の3点を基本要件とした。あくまでも推測の域にとどまる。他方、方形の掘り込み平面形をもつ遺構を、その軸線のみをもって性格を論じるのは意味がない。方形竪穴建築址と井戸址の軸線が同一である調査例は多く、多様な遺構群全体の軸線の相違や同一方向への指向性が町並みと生活者お

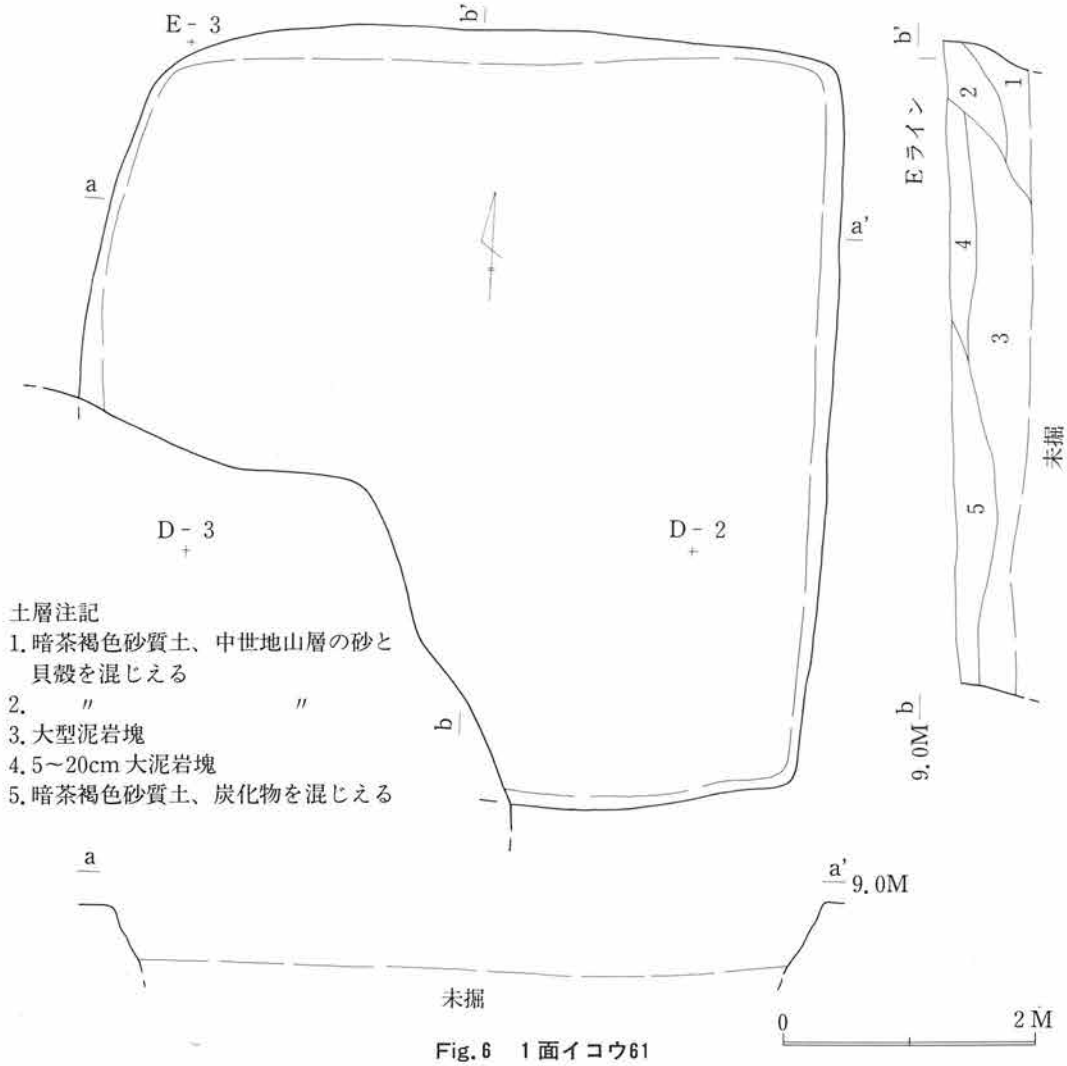


Fig.6　1面イコウ61

よび社会を論じる時に援用されるべきものであろう。

（1）イコウ61

イコウ61は、国庫負担区と原因者負担区の両区にわたって検出された。その南西部は近代建築基礎壙により破壊されているが、推定復元規模は5.9×6.2メートルのほぼ正方形をなす。方形竪穴建築址は概して長方形の平面プランをもつ例が海浜地域では多い。しかし、本例の土層堆積状況は、掘り方壁面近くに、板壁と掘り方の間に入れた裏込め土と考えられる土（Fig.6の土層図中の1と2）の存在を示しており、本例は方形竪穴建築址と捉えてよいであろう。床面を検出するまで掘りあげを行いえなかったが、ボーリング棒を用いた探査では、あと1メートルほど下位に床面が位置するものと思われる。また、調査しえた限りでは、壁材等の遺存を認められなかった。

南北の軸方位は、ほぼ磁北を向き、遺跡地北側を走る国道にほぼ正対している。遺構覆土は、その上層のみが観察されるが、泥岩塊をもって一度きに埋め、最上層を小さめの泥岩と砂質土で整地しているようである。

検出された3棟の方形竪穴建築址のなかでも、本イコウ61は、切り合い関係より、最も新しいと考えられる。

（2）イコウ96

本遺構は、調査区の北東隅に発見された。北西コーナーをイコウ61に切られ、東側は調査区外へ延びている。南北2.4メートル、東西2.3メートル以上の規模の掘り方である。検出面から1メートル弱を掘りあげたが、床面までは達しなかった。また、調査した限りにおいては板材などを検出できなかった。

覆土堆積の状況は井戸址覆土堆積の上層とも似るが、ボーリング棒による探査からは、下層覆土に水分を多く認めることがなく、深さもさほどないと感じられた。

南北軸方位は、N—1.5°—W。

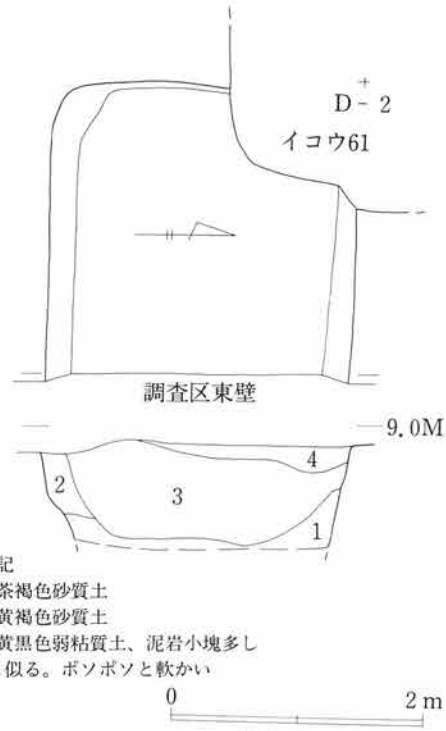


Fig.7 イコウ96

（3）イコウ97

イコウ96の南、C—2グリッド周辺に位置する。ただし、西は近代建物基礎壙に、北はイコウ61と96に切られ、東は調査区外へと延びるため、遺構の規模を確認しえなかった。南の掘り方の壁のみが発見された。南掘り方壁面からイコウ61と96に切られる地点までの3.4メートルの間に北側掘り方壁を検出できなかったので、本遺構の規模は少なくとも南北3.4メートル以上であることを確

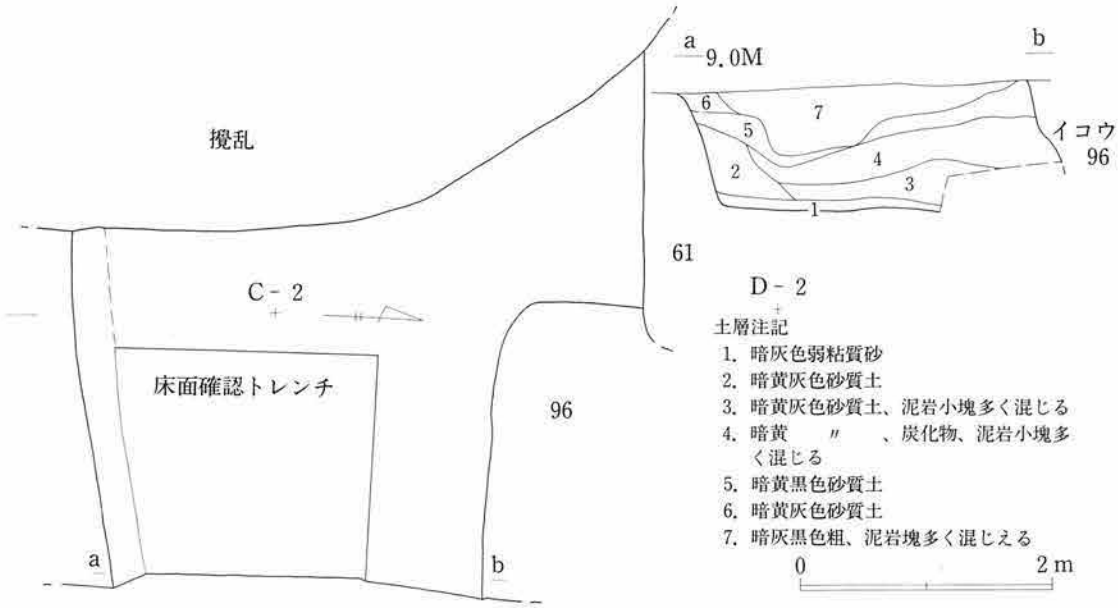


Fig. 8　イコウ97

認できる。本遺構もやはり深度規制により完掘できなかったが、調査の後半に設定する深掘りトレンチの中に位置したため、その部分のみ床面まで掘り上げられた。

調査区東壁に見られる土層堆積状況によれば、遺構掘り方の深さは90センチ。掘り方底面直上に、弱粘質砂が8センチ程の厚さで見られる。底面直上に平らにあること、海浜地域において粘質砂は自然堆積しないと思われるため、この粘質砂層は建物の床面を構築したものと考えられる。土層図第2層は、掘り方壁面際に、幅が狭く、そして高く堆積する。層中には貝殻粒を多く混じえる一方、第3層以降に含まれる炭や遺物片がない。遺構掘り方の掘りあげの後、間をおかずに埋めもどされた土であろう。おそらくは、掘り方内に木組の壁を立てた後に、裏込めとされた土が、建物廃棄後に内側へ流れたものと考えられる。しかし、遺構内に、地下梁や根太木、板壁、さらに柱穴は残っていない。調査終了近くに掘った深掘りトレンチの北壁西部に、本遺構床面に穿たれた浅い土壙の断面が見られた。

本遺構は、掘り方の壁を一辺のみ残しているため、その南北軸方位を確定するには至らなかったが、他のイコウ61、96とさほど変らないものと思われる。

B. 井戸址

(1) イコウ16

調査区の南東隅、A—1グリッドに発見された。遺構全体の2/3～3/4ほどが調査区内にあり、東は調査区外へと延びている。掘り方の上幅は、南北1.8メートル、東西2.1メートル以上の規模を持つ。長方形を呈する。

遺構内覆土は概ね黒色の粘質土が堆積し、水分が多い。底面は確認できなかった。1メートルのボーリング棒でも底までとどかず、ボーリング棒にはやはり水分を多く含んだ粘質土が付着した。掘り上げ部分とボーリング棒での探査を加わえると、2メートル以上の深さがある。井戸であろう

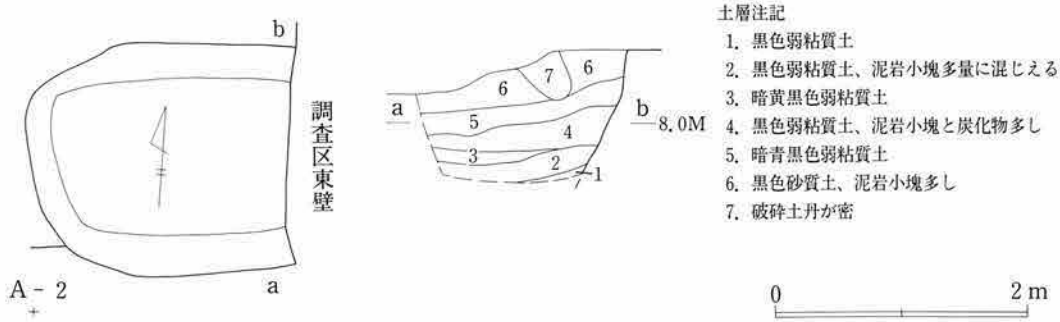


Fig. 9　イコウ16

と思われる。

南北軸の方位は、N－5°－W。

C. その他の遺構

イコウ18は調査区の南端、Aラインと2ラインの交点付近に位置する。イコウ16と153（後述）を切る。遺構の南半分は調査区外にある。おそらくは、長方形もしくは方形をなすものであろう。東西の掘方上幅は80センチ、下幅が35センチ。深さが48センチ。遺構内覆土堆積状況に柱痕らしきものは見られない。南北軸方位は、N—10°—W。イコウ153はA—2グリッド内に位置し、イコウ16と18に切られている。遺構全形の西半を近代建物基礎壙に切られて失っている。南北1.2メートルの不整円形もしくは楕円形を呈する。南北径80センチの底面は、ほぼ平である。掘り込み面からの深さは27センチ。南北軸方位は、N—15°—W。

イコウ10、11は、イコウ16の覆土を掘り込むほぼ円形のピット。10は深さ19センチ、11は深さ51センチを測る。

A—1～B—1にかけて広がる平坦な面上には、径10センチほどの小穴が6口ある。深さは5センチ内外と浅い。6口は、北西から南西へ、並ぶようにも見える。簡単な垣根状のものかもしれない。これらを一組の列と捉えるならば、その方位はN—31°—Wである。ほかの遺構の軸方位とはかなり相違している。時期の下るものだろうか。

第2節　第2面

第2面からは、方形竪穴建築址2棟、土壙6基が発見された。第1面で発見された遺構の多くが、発掘深度規制のために、掘り残し状態となり、その底面ないし壁面に発見されるであろう下面（つまり第2面以下）の遺構を探し尽くすことができなかった。そのため、第2面で発見された遺構は、第1面の平坦地域と深掘りトレンチ内にのみ位置している。発見された生活面の当時の様相を窺うには、片寄った遺構検出状況となってしまった。

A. 方形竪穴建築址

（1）イコウ11

A—2グリッド内に発見されたが、東を1面イコウ16に、南を同じくイコウ18に、西を近代建築基礎壙に切られている。また南は調査区外へと延びている。確認できたのは、遺構全形のほんの一

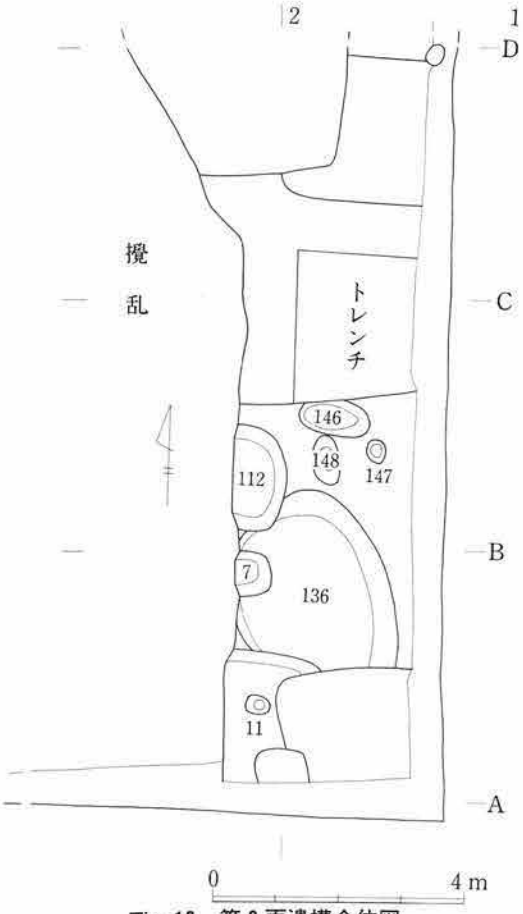


Fig. 10　第 2 面遺構全体図

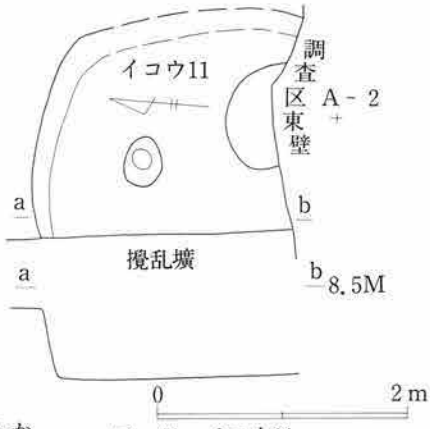


Fig. 11　イコウ11

部であろうか。

掘り方の壁高55センチを残す。壁面の角度は急で、垂直に近い。掘り方の底面はほぼ平らで、北東隅から50センチ離れた位置にピットを残している。ピットは、東西40センチ、南北30センチの上幅をなし、円形の底面まで24センチを測る。掘り方の底面上にタタキ状の床面は確認されず、また木組の施設等も残っていないが、掘り方の壁や底面の状況から方形竪穴建築址と思われる。

南北軸の方位は、N－5～10°－W であろう。

（2）イコウ121および未確認遺構

深掘りトレンチ内に、2棟の方形竪穴建築址の存在を想定せしめる、覆土堆積状況と床面の一部が発見された。イコウ121と名付けた遺構は掘り方の立ち上がりをトレンチ内に見せている。その掘り込み開始土層は、トレンチ内に限られた土層観察であるが、第2面に相当すると考えられ、本項にその発見状況を記した。しかし、トレンチ内に発見された2棟の方形竪穴建築址遺構はその規模と掘り込み面を明確に断定しえないため、詳しくは深掘りトレンチの項にて記す。

B．土壙

（1）イコウ112

イコウ112はB－2グリッド内の南東に発見された。西は近代建築基礎壙に壊わされている。遺っている限りでは、南北1.7メートルを測り、本来は隅丸方形を呈していたのではないか。壁面の落ち込みは緩やかで、深さ48センチを測る。南北軸はほぼ磁北を通る。

（2）イコウ136

B－1グリッドあたりから発見された。深度規制のため完掘できず、検出した上場から60センチ掘り下げたところで調査を中止した。確認できた上幅の規模と形状は、南北1.5メートル以上、東西

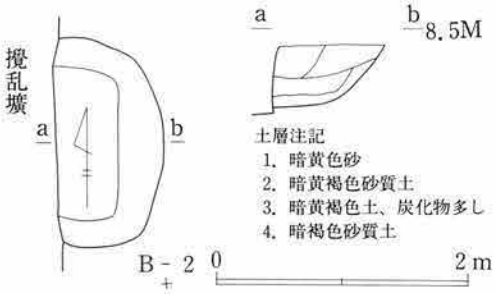


Fig. 12　イコウ112

1.2メートルほどの楕円形と思われる。イコウ112、7、11に切られ、調査区の南地域では最も古いと考えられる。

調査できた限りにおいて、本遺構の覆土は全体に炭化物を多く混じえている。遺構の底面を確認したわけではないが、本遺構内にて火を用いた様子は感じられなかった。ゴミ捨て場もしくは火事場の後かたずけに用した土壙ではないだろうか。

本遺構の南北軸方位は、N—23°—W。

（3）その他の土壙

イコウ7はイコウ136を切り、その西端に位置する。西側は近代建築基礎壙に切られる。規模と形状は、南北58センチ，東西56センチ以上の隅丸方形と思われる。深さは17センチと浅い。南北軸方位は、磁北よりやや西に傾くだろうか。

イコウ146は第1面のイコウ97の南壁に接するところにある。東西に長い楕円形を呈し、南北58センチ、東西1メートル16センチを測る。東西軸方位は、N—80°—W。

イコウ147は、146の南東にある。南北36センチ、東西34センチを測る。ほぼ円形。深さ30センチ。柱穴様の小穴。

イコウ148は、南北58センチ、東西40センチの楕円形。深さ21センチを測る。南北軸方位は、N—5°—W。

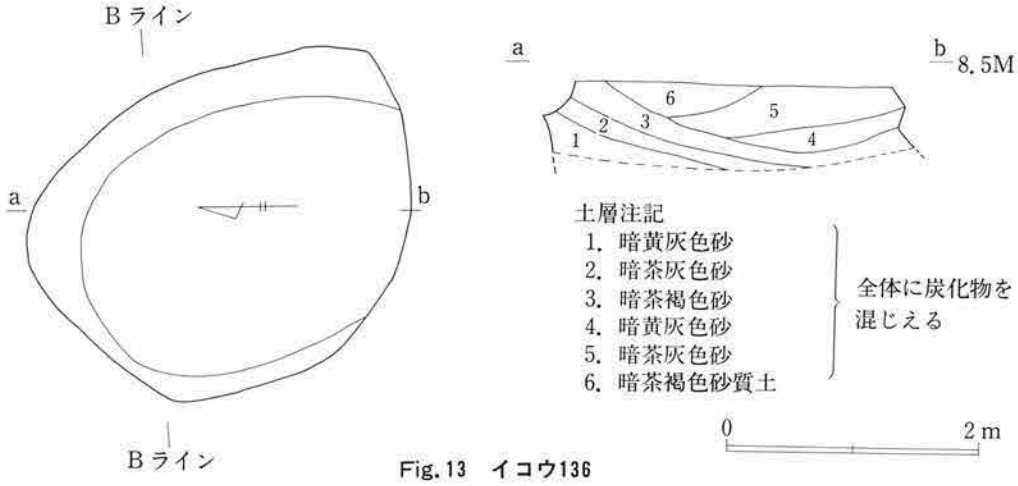


Fig. 13　イコウ136

第3節　トレンチによる下層の調査

第2章においてすでに記したように、建物の建築によって破壊される遺跡の深度が浅いため、調査区全域の調査深度を現地表下2メートルにとどめ、より下層の文化堆積層及び遺跡の調査は深掘基礎杭の打ち込まれる位置にトレンチを設定して行った。トレンチは本遺跡地内全域に7個所、国庫負担区に1個所設定できた。国庫負担区内のトレンチ設定位置と規模は、C—2の交点を中心にして、南北3.2メートル・東西2.9メートルである（Fig.2参照）。

A. 中世の遺構

トレンチ掘削開始後、第1面イコウ97の床面下20センチほどに黒茶色弱粘質砂を掘り下げた多数の小穴を発見した。これらの小穴は、土層観察によって、中世の方形竪穴建築址の床面に穿たれたピットと判断できた。また、方形竪穴建築址は2棟あり、それらがトレンチ内で切りあっている。2棟の内、新しいものの掘り方壁面の立ち上がりを土層に確認できる。他方の方形竪穴建築址はトレンチ内に掘り方の立ち上がりを発見できない。2棟の床面はほぼ同じで、海抜高7.6メートルである。

発見された2棟の方形竪穴建築址の内、新しいものをイコウ121とし、旧いものは床面のみが認められ土層観察から方形竪穴建築址と判断したため未確認遺構とした。

（1）イコウ121

方形竪穴建築址。トレンチ壁面に、掘り方南壁の立ち上がりが確認された。壁高70センチを測る。底面に10口のピットと9口の小穴が遺る。ピットは、確認面からの深さ5～10センチ程と浅い。形状は方形もしくは不整円形を呈し、底に小さな2個の窪みをもつものがある。

ピットは、掘り方南壁に直角もしくは平行方向に並ぶようにも見られるが、整然とした配列ではない。ちなみにP.1と2との南北軸方位はN—15°—W、P.1と3との南北軸方位はN—11°—Eとなる。

（2）未確認遺構

イコウ121に切られ、トレンチ内ではイコウ121の南に床面を遺している。おそらくは方形竪穴建築址の掘り方底面の一部であろうと思われる。底面に発見された数多くのピットは、一辺20センチ前後の方形を呈し、深さは5センチ程と浅い。ピット相互の並びも雑然としている。

数多くのピットが群集する所から少し離れた地点に土壙が1基位置している。土壙は南北27センチ・東西50センチの楕円形を呈し、浅さ12センチを測る。

2棟の方形竪穴建築址はトレンチ内のみでの検出にとどまり、それぞれの帰属する生活面を断定しえない。イコウ121の掘り方南壁の掘り込み開始層は、他の調査区における第2面から20センチほど海抜高で低いながらも、互層状に第2面構成層につながる。つまり層準としては低位層であるものの層序としては第2面構成層となる。今回、行いえた調査からは、イコウ121を第2面の中で

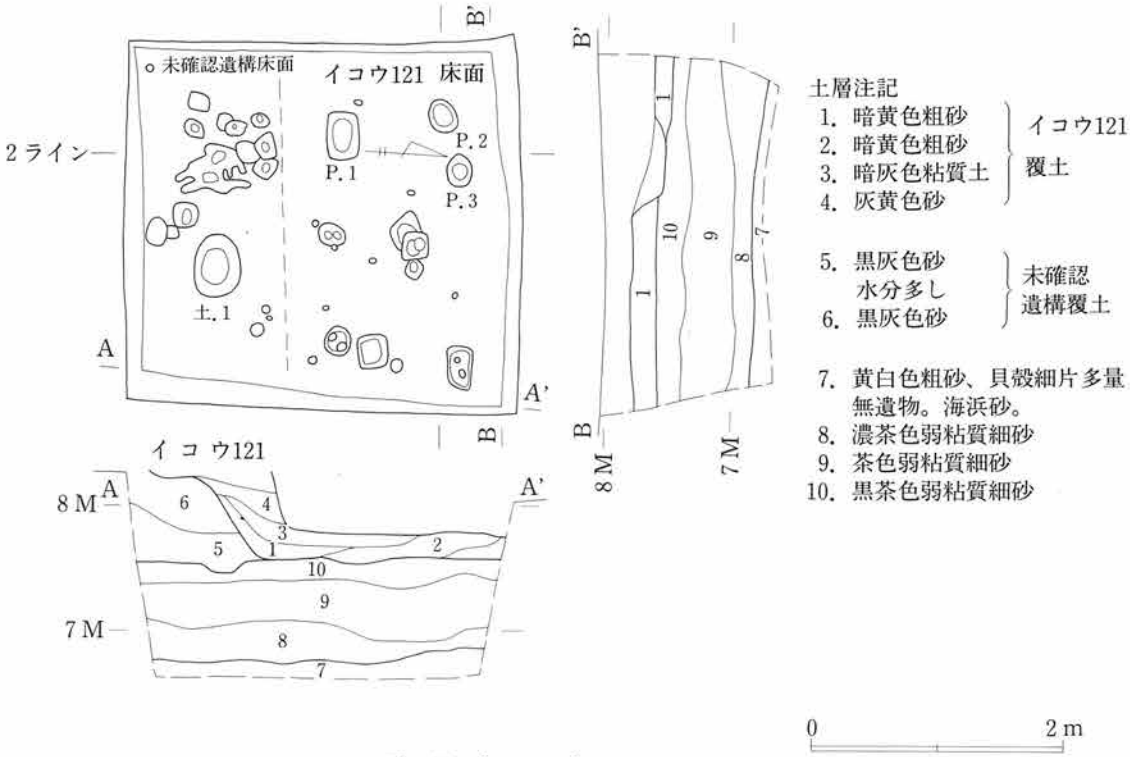


Fig. 14　トレンチ内イコウ121

もやや早い時期のものと想定するにとどめおく。

次に、イコウ121に切られている未確認の方形竪穴建築址は、その覆土が湿地帯で形成されたと思われる（注１）弱粘質黒色砂系の砂質土で占められている。後述するように、そうした土質は古代から中世初頭に堆積したものである。未確認の本遺構の覆土が古代から中世初頭にかけて形成された土質に近似すれども、必ずしも本遺構がそうした堆積土の形成期間中に構築・廃棄されたことを直接的に示すわけではない。しかし、弱粘質黒色砂質土を生活面としていた時期に構築されたのではないかと考えられないだろうか。

B. 古代の遺構

中世に比定できた遺構より下位の層序を古代に形成されたものと捉えた（注２）。トレンチ内の中世の遺構・イコウ121の床面下、厚さ80センチに及ぶ黒色ないし茶色の弱粘質砂質土層、つまりFig. 14の土層番号８～９を古代における堆積土と考えた。これら土層の下位には貝殻片を多量に混じえ、人工遺物を含まない粗粒砂が堆積している（Fig. 14の第７層）。この層中からは多量の地下水が吹き出し、本層の厚さとより下層の確認は危険を伴うと判断し、調査を中止した。この粗粒砂層の上面海抜高は6.8～6.7メートルを測る。

Fig. 15　トレンチ内軽石

（１）軽石の集積

中世の未確認方形竪穴建築址床面下10センチ位の古代土層（Fig. 14の第10層）中に、長径10センチ位の軽石が集積した状態で発見された。軽石の多くは偏球状をなし、他のものも全て角が丸くなっている。

発見された範囲は20センチ四方に収まり、周囲には生活面らしき土層及び人工施設を確認できなかった。

（2）土器の集中廃棄

トレンチ内最下層、粗粒砂層上面に土器が集中して発見された。出土範囲はトレンチの北側半分に限定され、そのうちでも東側に集中している。トレンチ東壁面中に土器片を確認できるので、より東にも、土器片は残っているであろう。出土土器は、トレンチ内西側に点在するものは時に砂層より２～３センチ位浮いたレベルにあるが、多くは砂層の直上や砂層にくい込むように発見された。発見された土器は全て、破片で出土したものの、接合状況は良好である。近接地点出土の破片同志のほとんどが次々に接合できた。発見地点で押しつぶされたように感じられる。特に、トレンチの東壁際に出土した台付甕は、その場で壊された状況を良好に示している。

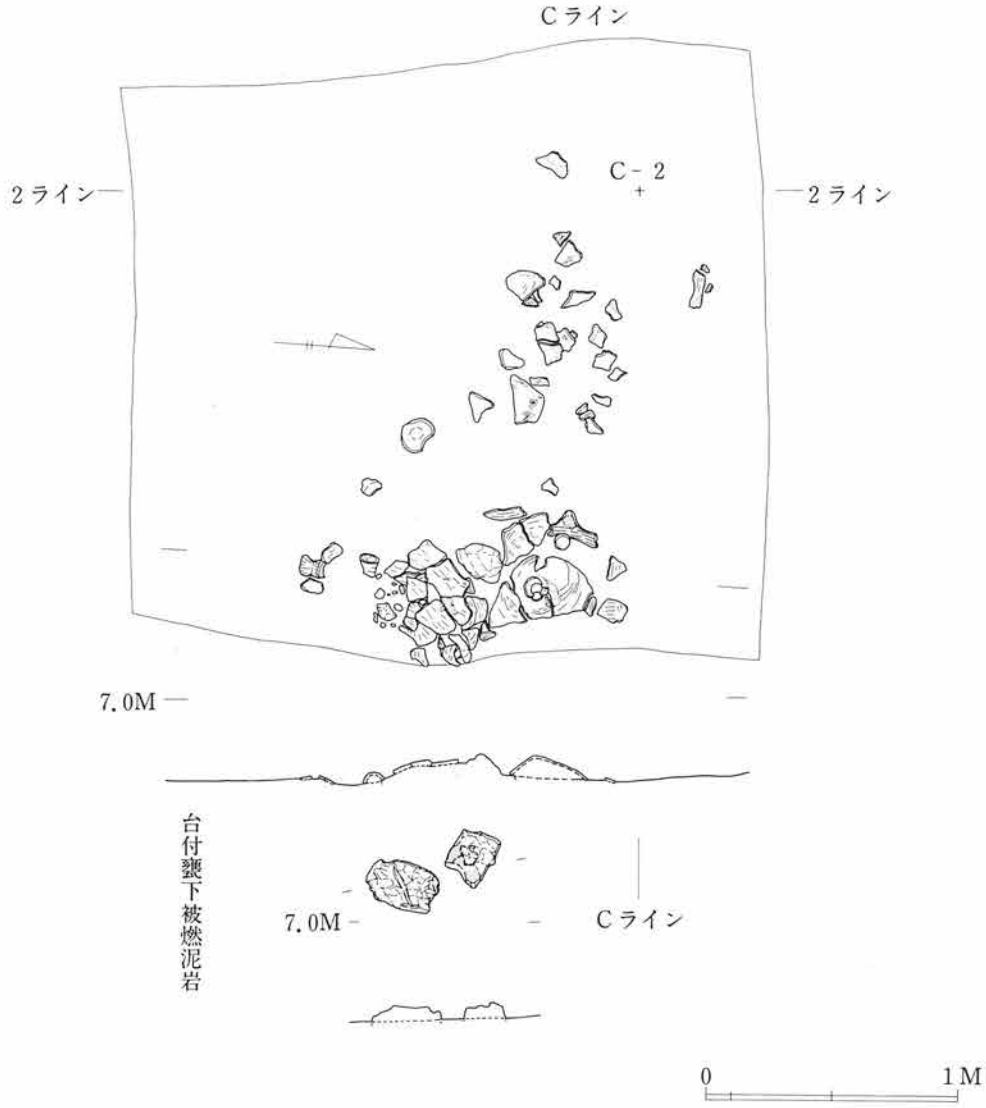


Fig.16　トレンチ内土師器出土状況

東壁際に出土した台付甕は大型の大廓式の特徴をもつ台付甕であるが、その出土状況は台部を上に向けた展開図のようであり、出土破片は全て接合でき、全体の2/3を復元できた。復元できなかった部位は、出土状況図の東側であり、上述のように、その部位の破片はトレンチ外にあるものと思われる。ただし想定にすぎない。

この大型台付甕の体部下半には強い火熱を受けた痕が残り、土器片の下にも火熱を受けて崩れた泥岩塊が位置していた。破片接合作業の感触からは、強い火熱によってゆがみが生じて、はじけ破れたようである。つまり、当地点において、泥岩塊を敷いた上に台付甕を立て、火をたいて用いたうえ、その場に廃棄したと考えられよう。他の土器も同様の用いられ方をされたのであろうか。

出土した土器は、台付甕が4点に甕と小型広口壺がそれぞれ1点づつ出土した。

第四章　出土した遺物

本遺跡では、南西部に11m×12m程の大型近代建築基礎壙があり、更に現地表下２ｍの発掘深度規制が設定されていたことにより完掘できない遺構が多く、そのために遺物を全て取り上げられなかった。しかし、出土点数こそ少ないものの遺物の種類は幅広く、古代の土師器・須恵器、中世のかわらけや国産陶器類・舶載陶磁器等、日常雑器を中心として、硯・土製人形等の非日常品も多く出土した。特筆すべきことは、金属製品、鞴の羽口、スラグの出土が多いことである。これは、遺跡が水はけのいい砂地であったために金属製品の保存状態がよかったことにも起因するが、数的・質的に見ても職能集団もしくは、工房が存在していたことを窺わせる。また、海浜近くに位置するにもかかわらず、近接する他遺跡から出土する漁労のための遺物は、極端に少なく土錘については、わずか２点しか出土していない点も注目したい。

かわらけと近代遺物を除けば、遺物のほとんどは破片で出土したが、生活面を壊して次の生活面を造りだす過程において土が移動し、これに伴い遺物も移動してしまうことや、砂の自然堆積という砂地の性格上、同一遺構から出土した遺物でさえ接合復元は困難である。しかし、幸いなことに、それらの遺物の残存片が大きかったので図示できた遺物が比較的多かった。残念ながら、この報文では国庫負担分の遺物だけを記して行くことになるが、順次、生活面毎、遺構毎に観察してみたい。

第１節　第１面

A. 第１面上出土遺物（Fig. 17）

第１面上遺物とは、第１面を確認する際に薄く削った排土と第１面に貼り付いて出土した遺物を示す。

Fig. 17－１，２は、須恵器。共に胴部破片で出土したため傾度実測である。１は、櫛掻き文が施され、胎土は白色小石および微石を含み灰黒色を呈す。櫛掻き文上部と内面は薄黒色。２は、格子目文が施され，胎土は白色微粒を含んだ堅緻な土で暗灰色を呈す。器表色は胎土よりさらに暗い暗灰色。

Fig. 17－３は、土鍋の口縁部。口径21. 55cm。胎土は、白色細石を多量に含む灰色土だが、器表色は肌色を呈す。

Fig. 17－４は、青白磁の合子蓋片。残存片が小さいため傾度実測である。素地は、白色粉質土を少量含む緻密な白色土である。釉は、淡灰緑色を呈し外面低位は施釉されない。

B. 第１面遺構内出土遺物

（１）イコウ16

Fig. 17－５は、かわらけ。小型で内外面中位に強い曲折点を持ち、器壁がまっすぐ立ち上がる。口径7. 8cm、底径5. 6cm、器高1. 75cm。胎土は、淡灰褐色を呈し黒色砂粒・白色微粒を含みやや粉

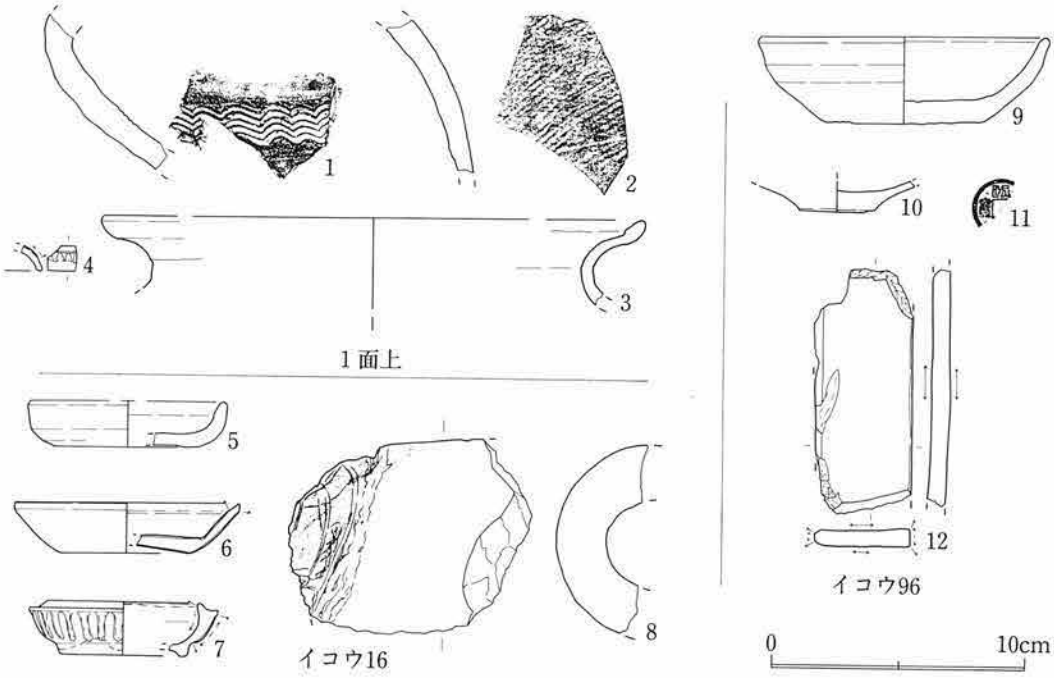


Fig. 17　1面上及び1面遺構内出土遺物

っぽい。

Fig. 17—6は、白磁口兀げ皿。口径8.9cm、底径5.1cm、器高2.0cm。素地は、黒色微砂を少量含む粘性に欠ける粉質状の白色緻密土。口唇部は鋭い三角状を呈す。釉は、淡緑味白色を呈し貫入が見られる。また、外底部にも施釉している。

Fig. 17—7は、青白磁の型作りの合子の身。口径7.4cm、底径5.1cm、器高2.1cm。素地は、黒色砂を含む粘性に欠けた淡灰白色土。釉は、水青白色を呈し失透する。また、釉下に黒砂の鉄分が浮いて見える。施釉は、外壁口唇部下より外壁高台上までしか施されず残りの部分は露胎。焼成は良好である。

Fig. 17—8は、径7.5cmの鞴の羽口。

(2) イコウ96

Fig. 17—9は、かわらけ。中型で外面中位に曲折点を持ち口縁部は外反している。口径11.5cm、底径6.2cm、器高3.4cm。胎土は暗赤褐色を呈し白色針状微粒・黒色微砂を含み粉っぽい。

Fig. 17—10は、白かわらけ。底径2.9cmを計る。胎土は乳白色を呈し黒色微砂を少量含み粉っぽい。底部は糸切りで脚台状になっている。

Fig. 17—11は、鋳造銭。北宋時代の「熙寧元宝」と思われる。背面に文字等は見られない。

Fig. 17—12は、砥石。遺存長9.5cm×3.8cmの長方形で、淡肌色を呈する泥岩製。両面を使用し、両側面には砥石を切り出した際の切り出し痕が残っている（図中、一点破線で示す。）

C. 方形竪穴建築址

(1) イコウ61 (Fig. 18)

イコウ61は、本遺跡全体のなかでも、図示しえなかったものも含めて多量の遺物が出土した。遺物の種類も多岐に渡っている。しかし、前述したとおり床面を検出するまで掘り下げを行ないえなかったので床面直上で取り上げた遺物は皆無である。つまり、ここで図示した遺物は、方形竪穴建築址であろう遺構の遺物包含層から出土したものだけということになり、これだけでは本遺構の性格はとうてい言及しえない。

Fig.18—1は、須恵器の碗の小片。復元口径11.6cm。胎土は、濃灰色を呈し白色細粒を含むもののよくしまっている。口縁部には、焼成時の降灰による自然釉が薄くかかっている。

Fig.18—2～17は、かわらけ。2は、小型で曲折点を持たず器壁が底部からまっすぐに立ち上がっている。本遺跡全体で見てもこの器型の出土量は、他の器型より圧倒的に少ない。口径7.4cm、底径6.1cm、器高1.8cm。胎土は、赤褐色を呈し白色針状微粒・黒色微砂を含み焼成良好である。3～5は、小型で外面中位に曲折点を持ち口唇部が外反している。3は、器壁が厚くぼってりした感じを受ける。口径7.8cm、底径5.4cm、器高1.55cm。胎土は、淡赤褐色を呈し白色針状微粒・黒色微砂を含み焼成良好である。4は、外面中位と内面上位に強い曲折点を持ち、器壁は薄い。口径8.0cm、底径5.0cm、器高1.7cm。胎土は、淡赤褐色を呈し黒色微砂・白色針状微粒・白色微粒を含みやや粉っぽい。5は、4とやや似た器型で、外面と内面に強い曲折点を持つが口唇部は内湾気味で薄い。口径7.6cm、底径4.7cm、器高1.7cm。胎土は、赤褐色を呈し黒色砂粒・白色微粒をとても多く含む。焼成良好。6～9は、小型で器高がやや高くなり、外面中位に弱い曲折点を持つ碗状で口唇部が外反しているものである。6は、口径8.0cm、底径5.2cm、器高2.2cm。胎土は、淡赤褐色を呈し白色微粒を多く含んでいる。やや粉っぽい。また、内面口縁部から中位にかけて煤が付着する。7は、口径7.6cm、底径4.6cm、器高2.2cm。胎土は、淡赤褐色を呈し黒色微砂・白色針状微粒を含みやや粉っぽい。底部が高く残り、0.1cm程の脚台状になっている。8は、口径7.8cm、底径4.8cm、器高2.4cm。胎土は、暗赤褐色を呈し白色微粒・白色針状微粒を含みやや粉っぽい。内面底部から中位にかけて煤が付着する。9は、口径7.4cm、底径3.6cm、器高2.4cm。胎土は、淡赤褐色を呈し黒色微砂・白色微粒を含みやや粉っぽい。口縁部に煤が付着する。10～11は、小型で器高がやや高く碗状で、外面中位に強い曲折点を持ち、口縁部が外反している。10は、口径8.0cm、底径4.4cm、器高2.4cm。胎土は、淡赤褐色を呈し黒色微砂・白色針状微粒を含み砂っぽい。底部は、糸切りの後、ヘラ状工具を用いて放射状の刻線を施している。11は、口径7.8cm、底径4.6cm、器高2.45cm。胎土は、淡赤褐色を呈し黒色微砂・白色針状微粒・白色微粒を含みやや粉っぽい。底部は、高く残り0.2cm程の脚台状になっている。器肉は、やや厚い。12は、10～11と同じ器型だが内湾気味で器壁がまっすぐに立ち上がる。口径7.6cm、底径3.9cm、器高2.4cm。胎土は、赤橙色を呈し黒色微砂・白色針状微粒・白色微粒を含みやや砂っぽい。焼成良好。底部は、高く残り0.2cm程の脚台状になっている。13は、中型で外面中位に強い曲折点を持ち口唇部が外反している。口径11.0cm、底径6.8cm、器高3.0cm。胎土は、赤褐色を呈し黒色微砂・白色針状微粒・白色微粒を含み焼成良好。底部は、高く残り0.4cm程の脚台状になっている。14～17は、大型で外面中位に弱い曲折点を複数

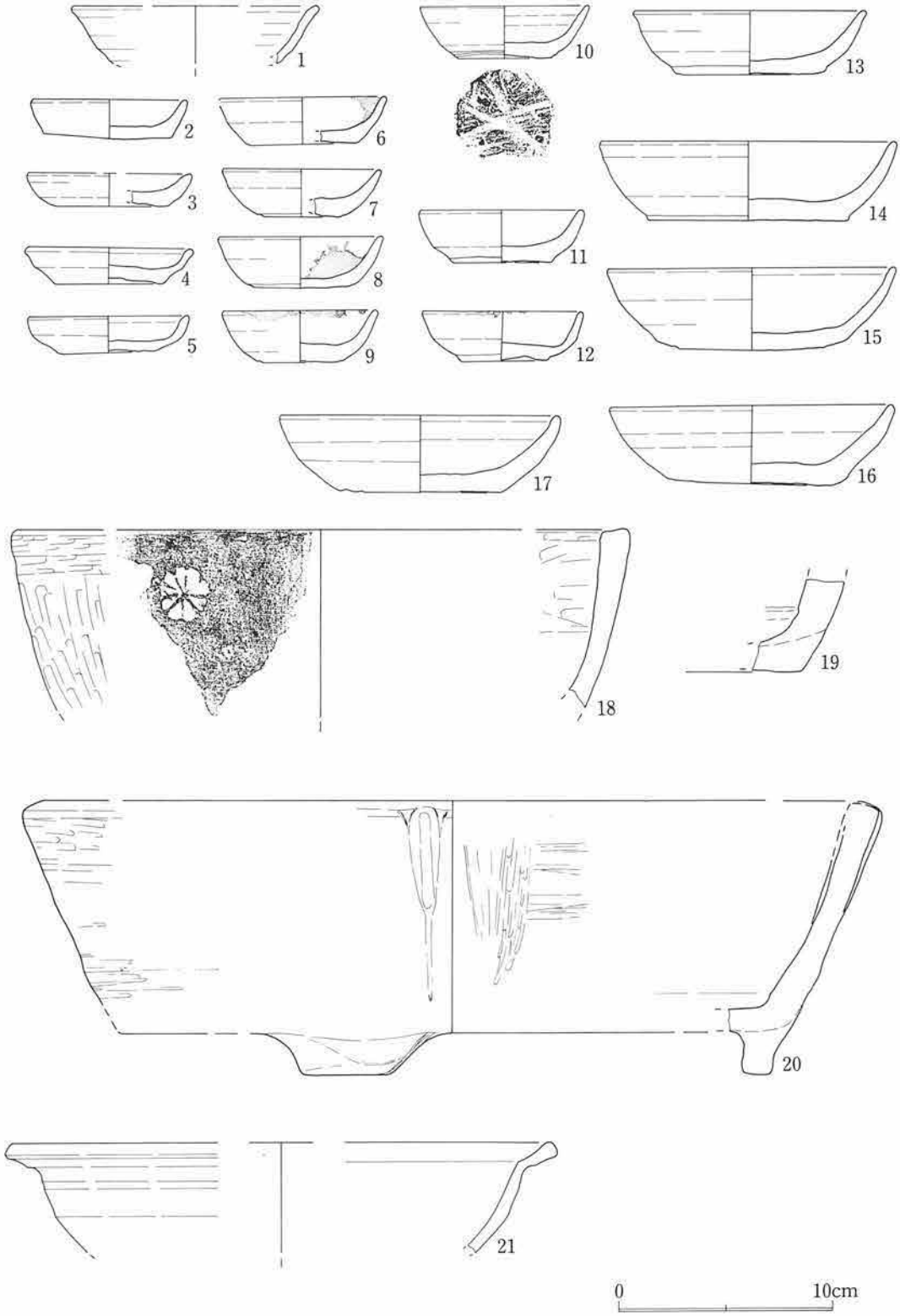


Fig. 18　1面イコウ61出土遺物（1）

箇所持ち、口唇部が外反する。14は、口径14cm、底径9.3cm、器高3.7cmで赤褐色を呈し白色微粒・黒色微砂・白色針状微粒を含みやや粉っぽい。底部は、高く残り0.2cm程の脚台状になっている。15は、口径13.6cm、底径7.6cm、器高3.8cm。胎土は、暗赤褐色を呈し白色針状微粒・白色微粒を含みやや粉っぽい。内底部のナデ痕が大きく残る。また、器壁が厚い。16は、内面中位に強い曲折点を持つ。口径13.3cm、底径7.6cm、器高3.6cm。胎土は、赤褐色を呈し黒色微砂・白色微粒・白色針状微粒を含み砂っぽい。焼成良好。17は、大型で内面中位に強い曲折点を2箇所持ち、他の3点より内湾が強い。口径13.3cm、底径7.8cm、器高3.7cm。胎土は、赤褐色を呈し黒色微砂・白色微粒・白色針状微粒を含みやや粉っぽい。

Fig.18—18～20は、瓦質手焙り。18は、復元口径29cm。器型は、円筒形で口縁部が内湾している。外面上部に菊花文様が見られる。胎土は、黒色砂粒と赤褐色細石を多く含む淡紅色粉質土である。器表は黒色を呈す。外面上位から下方は垂直方向に、外面上位から内面中位までは水平方向にミガキがみられ、内面中位から下方はナデツケのままである。19は、底径実測不能。胎土は、明灰色を呈し黒色小石・細石を多量に含む炻器質のような胎土で流紋が見られる。焼き上がりは軽く焼成良好。器表は内面が灰色、外面が暗灰色から黒灰色を呈す。ミガキが、底部外周から外面低位に

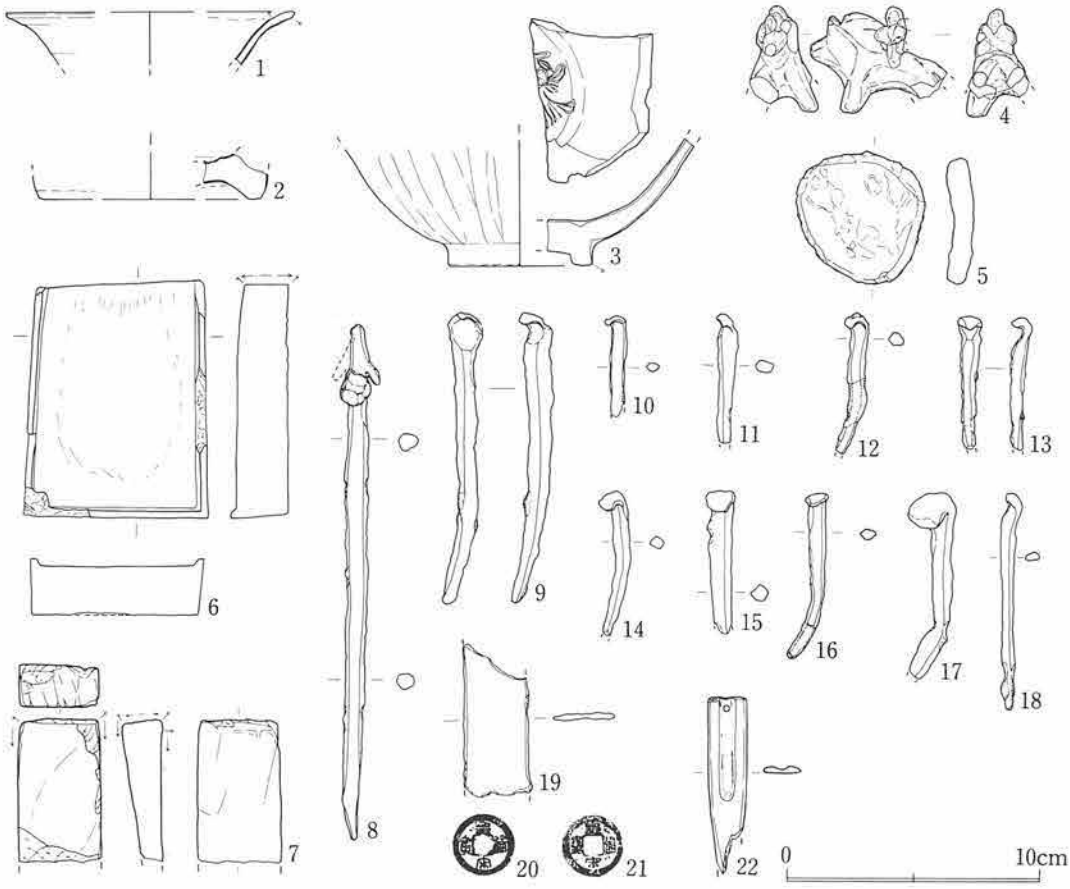


Fig.19　1面イコウ61出土遺物（2）

かけては水平方向に、それより上部では、垂直方向に行なわれている。また、内面はヨコナデ、外底部中央は砂底になっている。20は、3片の破片から復元し図示したが口縁部残存片が小さかったため法量値は不安。復元口径40.4cm、器高20.4cmを計る。板状の足を有し、体部は輪花型で口縁部がゆるく外反している。胎土は、多量の白色細物質と黒色砂及び、赤褐色や黒色の細石を含んだきめの細かい灰色土である。焼成良好。器表は黒色を呈す。ミガキは、内面上位から外面にかけて、器面がハゼているため不明瞭だが、水平方向に、輪花周辺は垂直方向に行なわれる。内面中位より下位はヨコナデが施される。

Fig.18—21は、瀬戸の盤である。口径約26cm。胎土は、白色細粒を含みよくしまっており淡黄灰白色を呈す。全体にやや薄く灰釉が施釉されている。外面下部は回転ヘラ削りで、外面上部は回転ナデで整形されている。

Fig.19—1～3は、舶載磁器。1は、口兀げ皿と思われる口縁部片。復元口径11.4cm。口縁部は大きく外反している。素地は、黒色緻砂を少量含み粘性に富む白色緻密土。釉は、灰色を呈し失透する。2は、青白磁の梅瓶底部である。底径8.8cm。素地は、黒色微砂を多量に含む粘性に富んだ白色土。釉は、淡水青色を呈し透度は高いものの素地に含まれる黒色砂が浮き上がって見える。3は、青磁鎬蓮弁文の碗である。高台径5.6cm。内面見込みには蓮華文が描かれている。素地は、淡灰色を呈し粘性に富みよくしまっている。釉は、灰緑色を呈し失透する。高台下部から外底部は無釉である。

Fig.19—4，5は、土製品である。4は、騎馬像の土馬。手づくねのかなり大雑把な作りだが、騎乗している人形は、背中に箙等を携えていたらしい痕が見られる。胎土は、黒色砂と白色細物質を含む粉質性のかわらけの土に似ている。焼成良好。5は、円盤状を呈する石灰分の塊であろうか。

Fig.19—6，7は、石製品である。6は、暗紫色粘板岩の硯。遺存長12.5cm×7.1cm、厚さ2cm。図中の1点破線は切りだし痕を示すが、この硯は、海の部分が何らかの理由で欠損したために他の製品に転用しようとしたものと考えられる。また、陸の部分は使用痕が著しい。7は、淡橙色細粒凝灰岩の砥石である。遺存長5.7cm×3.3cm、厚さ1.5cm。切り出し痕が著しく凸凹状にまた、両面、両側面共に摩滅痕が残る。

Fig.19—8～19は、金属製品である。8は、銛。遺存長20.4cm、径は、先端部で0.75cm×0.7cm、茎部で0.6cm×0.6cm。かえし部が半分欠損しているものの保存状態は良好である。9～18は、釘。9は、遺存長11.5cm、径は、上部で0.9cm×1.05cm、下部で0.65cm×0.5cmで大型である。10は、遺存長4.95cm、径は、中部で0.35cm×0.5cmである。11は、遺存長5.0cm、径は、中部で0.4cm×0.7cmである。12は、遺存長5.3cm、径は、上部で0.5cm×0.6cmである。13は、遺存長5.2cm、径は、中部で0.6cm×0.55cmである。14は、遺存長5.7cm、径は、中部で0.5cm×0.6cmである。15は、遺存長5.65cm、径は、下部で0.65cm×0.7cmである。16は、遺存長6.7cm、径は、上部で0.4cm×0.7cmである。17は、遺存長7.5cmである。18は、遺存長8.6cm、径は、上部で0.4cm×0.6cmである。19は、板状金属製品である。刀子の断片かもしれない。遺存状態が悪く詳細不明。

Fig. 19—20，21は、鋳造銭である。20，21共に北宋時代の「皇宋通宝」だが異鋳。背面に文字等は見られない。

Fig. 19—22は、骨製の笄。遺存長8.0cm、幅1.6cm、厚さ0.3cmを計る。右側面は丸みをおびているものの、左側面はやや強い稜を持つ。片面中央に溝状のへこみがあり浅い研磨痕が見られる。また、上部に径0.25cmの孔を持つ。

D. 第1面下出土遺物（Fig. 20）

第1面下とは、第2面確認までの排土を示す。

Fig. 20—1は、坏蓋。頂部は欠損するがつまみがついていたと思われる。径11.4cmを計る。胎土は、乳灰白色を呈し白色砂・砂粒が混入している。

Fig. 20—2～8は、かわらけ。2～5は小型である。2は、器高が低く曲折点を持たず丸みを帯びてゆっくり立ち上がっている。口径8.2cm、底径6.0cm、器高1.4cm。胎土は、赤橙色を呈し黒色微砂・白色微粒・白色針状微粒を含み焼成良好である。3は、外面中位に曲折点を持ち、器壁がゆっくりと内湾している。口径7.6cm、底径5.4cm、器高1.75cm。胎土は、淡赤褐色を呈し黒色微砂・白色微粒を含みやや粉っぽい。4は、外面中位に強い曲折点を持ち器壁は厚い。口径8.2cm、底径5.4cm、器高1.8cm。胎土は、赤褐色を呈し黒色微砂・白色微粒を含みやや粉っぽい。5は、外面中位に曲折点を持ち器壁は薄く、ゆっくり外反する。口径7.4cm、底径4.0cm、器高2.3cm。胎土は、淡赤褐色を呈し白色微粒・白色針状微粒を含みとても粉っぽい。6は、中型である。内外面中位に曲折点を持ち、器壁はゆっくり外反しながら立ち上がる。口径11.0cm、底径7.0cm、器高3.0

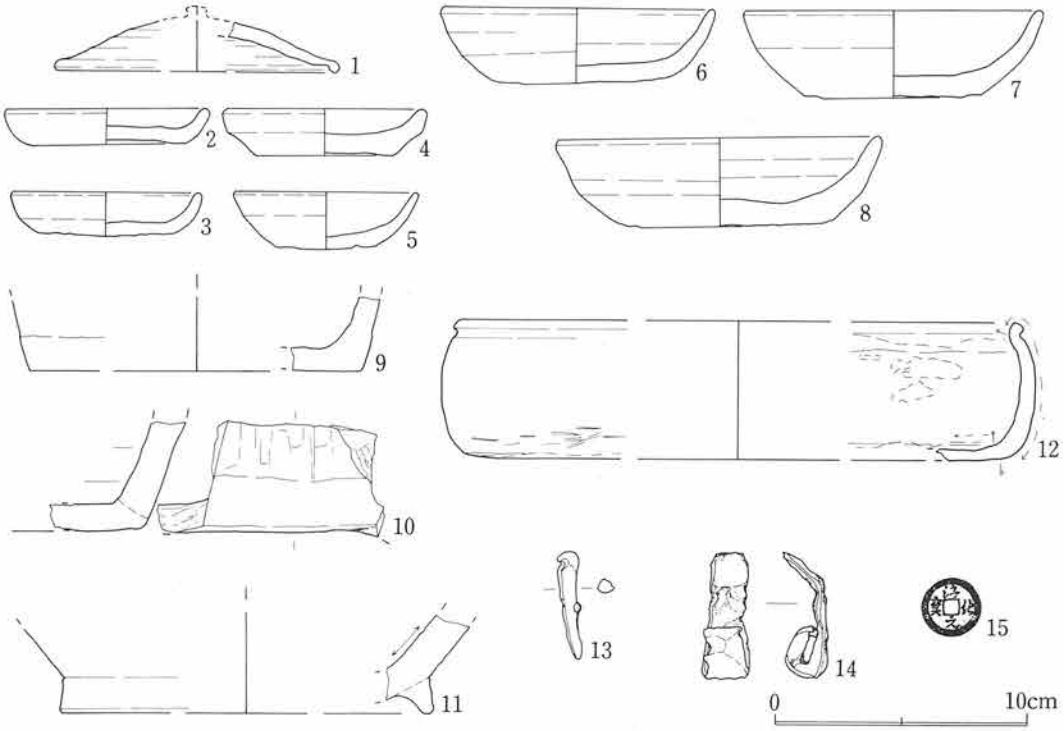


Fig. 20　1面下出土遺物

cm。胎土は、赤橙色を呈し黒色微砂を多く含む。焼成良好。7，8は大型である。7は、外面中位に曲折点を持ち、器壁はゆっくり内湾気味に立ち上がっている。口径12.0cm、底径7.0cm、器高3.45cm。胎土は、赤褐色を呈し黒色微砂・白色微粒をややふくみ粉っぽい。8は、内外面にそれぞれ2点ずつ曲折点を持ち器壁が厚く重量感がある。内底面のナデは、顕著である。口径13.1cm、底径8.2cm、器高3.5cm。胎土は、赤橙色を呈し黒色微砂・白色微粒・白色針状微粒を含む。焼成良好。

Fig.20—9は、近世の土製火消し壺と思われる底部片。復元底径は、13.2cm。胎土は、白色微石を多く含む黒色の砂質土。焼成良好で軽く焼き上がっている。外面下部から底部にかけては、粗いヨコナデによって器面が粒々に荒れている。内面はヨコナデ。外底部は砂底で、さらにヘラでなでている。

Fig.20—10は、瓦質手焙りの底部片である。底径は計測できなかった。器型は、輪花型で足を有する痕がわずかに見られる。胎土は、黒色砂・赤褐色の小石を多量に含んだ淡紅色粉質土。焼成は軽く焼き上がっている。外面低位から上方はヘラミガキ、下方はヨコナデ、内面もヨコナデが行なわれている。

Fig.20—11は、山茶碗窯系こね鉢である。復元口径は、14.8cm。胎土は、明灰白色を呈し、不透明な白色小石を多く含む粘性にやや欠けたしまりのない土である。断面が逆三角形に近い形の付け高台を持ち、外面低位にはヘラ削りが施され、内面に著しい摩滅痕が見られる。

Fig.20—12は、舶載陶器の盤と思われる。口径22.6cm、底径21.8cm、器高5.5cm。胎土は、白色微石粒を含んだ黒灰色緻密土。器面には、最初に外底部以外に化粧掛けをした後、内壁口縁部から外壁下部にかけてと内底部とに灰釉の刷毛塗りが施されている。また、内壁中位では一部灰釉が飛ぶものの化粧掛けが薄い肌色に発色している。化粧掛けでは、太くて堅い刷毛を用いたらしくナデ状の刷毛痕が見られる。外底部は回転ヘラ削り、その他の部分はヨコナデで整形されている。体部外壁と口縁部には重ね焼きの痕は見られない。胎土は、常滑の胎土と良く似ているが、釉の掛け具合から考えてみると、窯は不詳だが舶載陶器ではないだろうか(注1)。

Fig.20—13は、釘である。遺存長4.3cm、径0.6cm×0.7cmを計測する。

Fig.20—14は、板状金属製品である。遺存長8.4cm、厚さ0.55cm。上部は内側にゆるく、下部は二枚重ねに近い程強く折り曲げられている。

Fig.20—15は、鋳造銭。北宋時代「淳化元宝」である。背面に文字等は、見られない。

第2節　第2面

A. 第2面上出土遺物（Fig.21、22）

本項では、第2面を確認する際に薄く削った排土中と第2面に貼り付いて出土した遺物を見ていく。

Fig.21—1～5は、かわらけ。1～3は小型。1は、外面中位に2点曲折点をもち内底部のナデの範囲が広い。口径8.0cm、底径4.6cm、器高1.5cm。胎土は、淡赤橙色を呈し黒色微砂・白色微

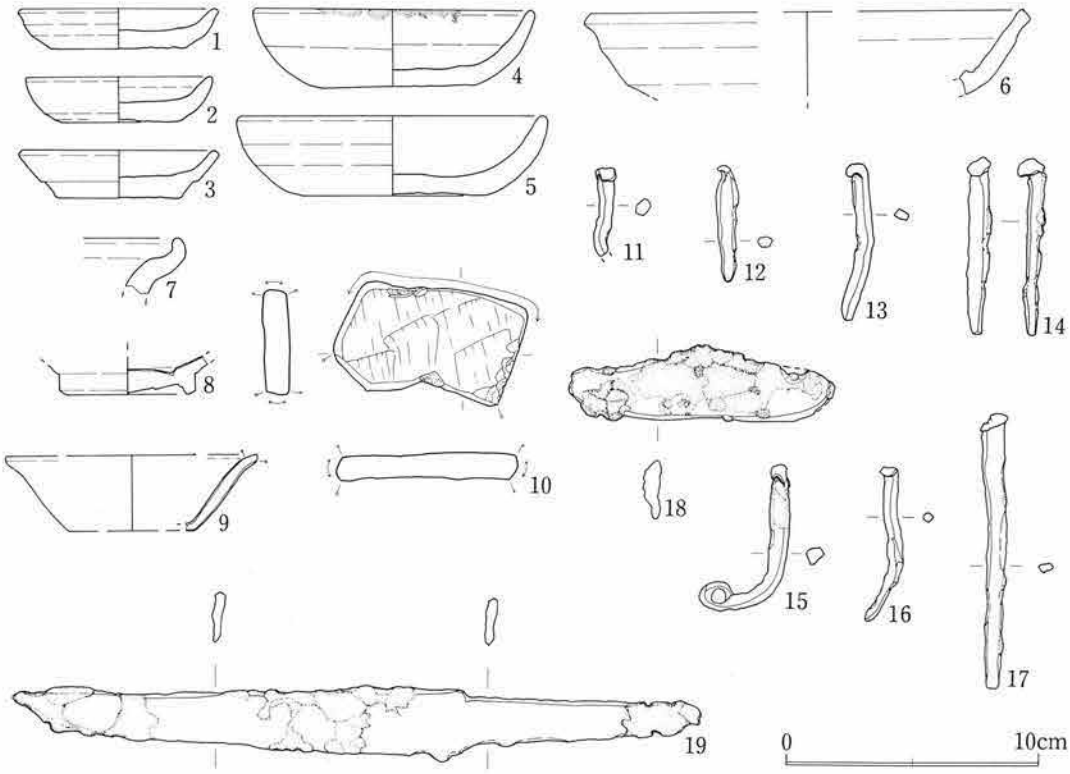


Fig. 21　2面上出土遺物（1）

粒・白色針状微粒を少量含みやや粉っぽい。2は、外面低位に曲折点を持ち底部器肉が厚く内底のナデの範囲は極端にせまい。口径7.4cm、底径4.6cm、器高1.8cm。胎土は、淡赤褐色を呈し黒色微砂を多く、また、白色微粒・白色針状微粒をも含みやや砂っぽい。3は、外面中位にとても強い曲折点を持ち底壁がとても厚い。口径8.0cm、底径4.8cm、器高1.9cm。胎土は、赤橙色を呈し黒色微砂・白色微粒・白色針状微粒を含む。焼成良好。4は、中型で内外面中位に曲折点を持ち、内底のナデの範囲はやや広い。口唇部には、煤が付着している。口径11.2cm、底径6.55cm、器高3.0cm。胎土は、淡赤褐色を呈し黒色微砂・白色針状微粒・白色微粒を含みやや粉っぽい。5は、大型で外面中位に2点曲折点を持ち、器壁はゆっくり内湾気味に立ち上がる。内底のナデは極端に狭い。口径12.4cm、底径7.2cm、器高3.1cm。胎土は、淡灰褐色を呈し黒色微砂・白色微粒・白色針状微粒を含み粉っぽい。

Fig. 21—6は、瀬戸のおろし皿である。復元口径17.8cm。胎土は、灰色を呈しざっくりした土だがよくしまっている。全体に薄く自然釉がかかる。

Fig. 21—7～9は、舶載陶磁器である。7は、黄釉盤の口縁部片。残存片が小さいため傾度実測で図示した。胎土は、白色微粒ないし泥粒を少量と黒色微砂および小石を多く含む暗黄色味灰色土である。釉は灰黄色を呈し、外面では白く吹き上がり失透する。また、口唇部の釉は、剥落しているが焼成時の重ね焼きのために剥離したのかどうかは不明である。舶載陶器は、本遺跡全体で黄

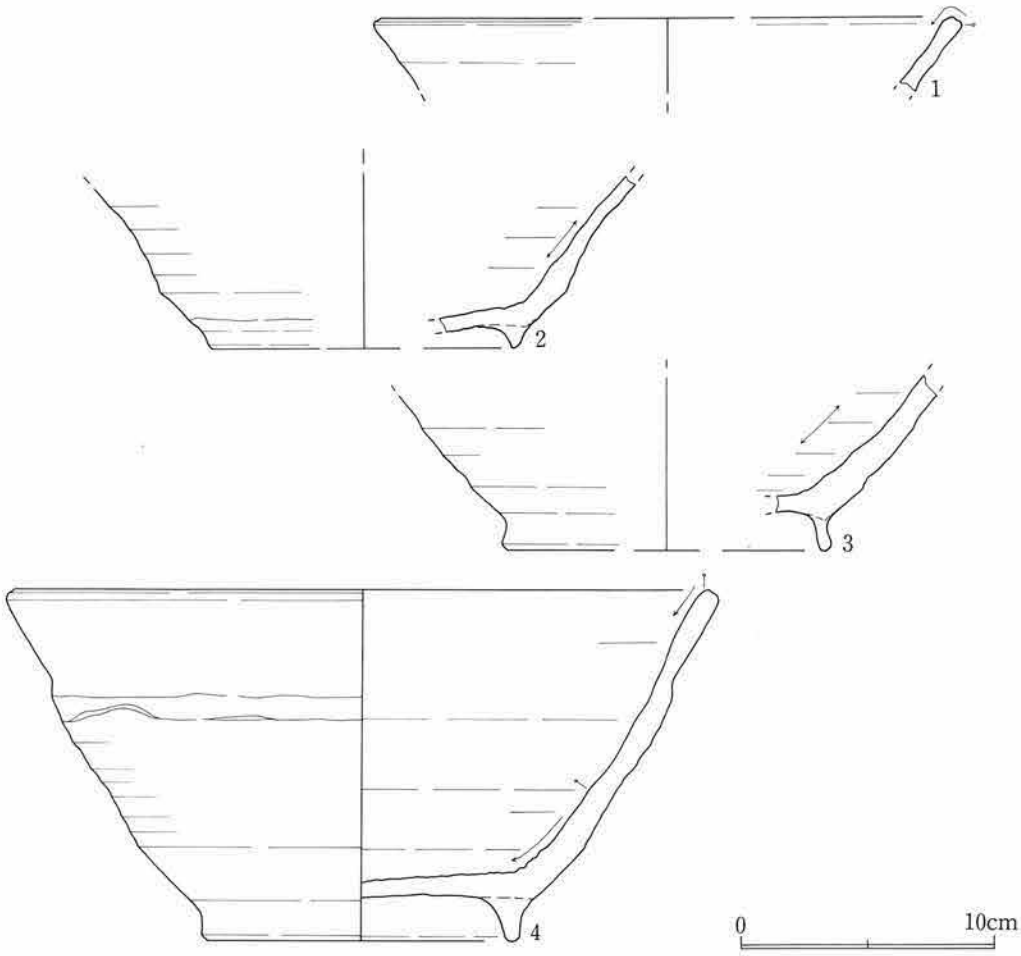


Fig. 22　2面上出土遺物（2）

釉の他に前述した灰釉、そして褐釉の破片が2点出土している。8は、白磁の皿あるいは、碗の高台部である。高台径5.4cm。素地は、黒色微砂と白色粉粒を含む粘性に富む白色緻密土である。釉は淡青味白色を呈し失透する。内壁は施釉されているが外面低位から外底部にかけては露胎。9は、白磁の口兀皿。口径10.0cm、底径5.0cm、器高3.0cm。素地は、黒色微砂を微量と白色粉粒を多量に含む粘性に富む白色緻密土である。釉は灰色味淡緑色を呈し半失透する。外底部にも施釉が見られる。

Fig. 21—10は、長方形のほぼ3辺に摩滅痕を残す常滑の破片。胎土は、白色石粒を少量含む肌色の粉質土。焼成良好。

Fig. 21—11～19は、金属製品である。11～17は、釘。11は、遺存長4.8cm、径は、上部で0.7cm×0.6cmである。12は、遺存長4.6cm、径は、下部で0.4cm×0.65cmである。13は、遺存長6.3cm、径は、上部で0.3cm×0.6cmである。14は、遺存長7.0cm、径は、中部で0.7cm×0.9cmである。15は、遺存長8.5cm、径は、中部で0.6cm×0.7cmである。16は、遺存長6.4cm、径は、中部で0.4cm×0.45cmである。17は、遺存長10.85cm、径は、中部で0.3cm×0.8cmで平べったい感じを受ける。18は、

火打金である。遺存長10.5cm、最大幅2.9cm、厚さは、作業部で0.3cm程である。錆が著しく、すかし文様等は確認できなかった。19は、刀子。遺存長27.5cm、最大幅2.9cm、厚さは、上部で0.45cm下部で0.4cmを計測する。

Fig.22—1～4は、山茶碗窯こね鉢である。1は、口縁部片で口径23.4cm。胎土は明灰白色を呈し、不透明な白色微粒を多く含み粘性に欠けしまりもない。外面口唇部から内面にかけて薄い灰緑色の自然釉がかかり部分的に二次焼成を受けている。内面の摩滅痕は見られない。2は、高台径12.4cm。外面低位に回転ヘラ削り痕が見られる。付け高台断面は、逆三角形に近い形で、高台を貼り付けた後、ナデて調整している。内面に、著しい摩滅痕が見られる。胎土は灰白色を呈し、不透明な白色微粒を含み粘性に富んだ土である。降灰や施釉は、認められない。全体的に整形も丁寧で高品質である。3は、高台径13.0cm。外面低位に回転ヘラ削り痕が見られる。付け高台断面は、長方形に近い形で高台を貼り付けた後ナデて調整している。胎土は灰白色を呈し、透明や不透明な白色微粒を含んだ粘性に富むよくしまった土である。内面下位から上方は透明で薄い自然釉、内面下位から内底部にかけて灰緑色で厚めの自然釉が見られる。内面には摩滅痕が見られる。4は、D—3グリッド、イコウ27、イコウ89とそれぞれ別遺構から出土した8点の破片で復元したものである。口径28.2cm、高台径12.5cm、器高13.9cmを計る。外面低位にヘラ痕が見られる。付け高台断面は、丸みのある逆三角形で高台を貼り付けた後ナデて丁寧に調整している。胎土は、不透明白色細粒を多く含み粘性に欠けたしまりのない土である。施釉は見られないが、内面口唇部から内底部直上まで薄い降灰が見られる。内面中位から内底部にかけて著しい摩滅痕が、内底部には全体的に黒ずんだ使用痕が見られる。

B. 第2面遺構内出土遺物（Fig.23）

（1）イコウ11

Fig.23—1は、須恵器壺の肩部片。傾度実測である。外面には平行叩き目文が、内面には押さえの円弧文が、また、外面肩上部にはヘラ押し痕が見られる。胎土は、白色微石を多く含むきめの細かい暗灰色土。焼き上がりは堅緻である。外面肩部と内面頸部に降灰が見られる。

Fig.23—2～4は、小型のかわらけ。2は、曲折点を持たず器壁はゆっくり立ち上がり、器高は低い。口径8.2cm、底径5.4cm、器高1.5cm。胎土は、淡赤橙色を呈し黒色微砂・白色針状微粒・白色微粒を含む。焼成良好。3は、外面上位に弱い曲折点を持ち、内湾しながらゆっくり立ち上がる。口径7.4cm、底径5.0cm、器高1.5cm。胎土は、淡赤褐色を呈し多量の黒色微砂・白色微粒を含み砂っぽい。4は、外面上位に曲折点を持ち器高が高い碗状になっている。口径7.6cm、底径4.4cm、器高2.25cm。胎土は、赤褐色を呈し黒色微砂・白色針状微粒を含む。焼成良好。

Fig.23—5は、土製皿の口縁部片。残存片が小さいため傾度実測である。胎土は、白色微砂あるいは、白色微石を少量含む淡黄白色微粉質土の瓦器質胎土である。器表は、やや赤味を帯びた感じだが、胎心は淡灰黒色を呈す。焼成良好。口唇部はヨコナデで鋭く尖り、外面口唇部より下方では指頭押しが、内面口唇部より下方では軽いナデが施されている。本報文では図示できなかったが、

これと同じ胎土・整形で、器壁がやや外反するが、ほぼ同器型の土製皿が本遺跡原因者負担分の遺構から出土している。両遺物と同じような器型・胎土・整形をした土製皿が四国地方で多く見られることから考えると同地方からの搬入品かもしれない。

Fig. 23—6は、白磁皿の底部片である。復元底径は6.1cm。素地は、黒色微砂を多く含む白色土で気泡が多く入り粘性も弱い。釉は、薄緑味白色を呈し外壁低位から外底部にかけては鉄発色している。焼成良好。

(2) イコウ136

Fig. 23—9, 10は、かわらけ。9は、小型で内外面中位に曲折点を持ち器高が高く器壁は厚い。口径9.1cm、底径5.8cm、器高1.75cm。胎土は、赤褐色を呈し黒色微砂・白色微粒・白色針状微粒を含みやや砂っぽい。焼成良好。10は、大型で外面上位に弱い曲折点を持ち器壁はゆっくり立ち上

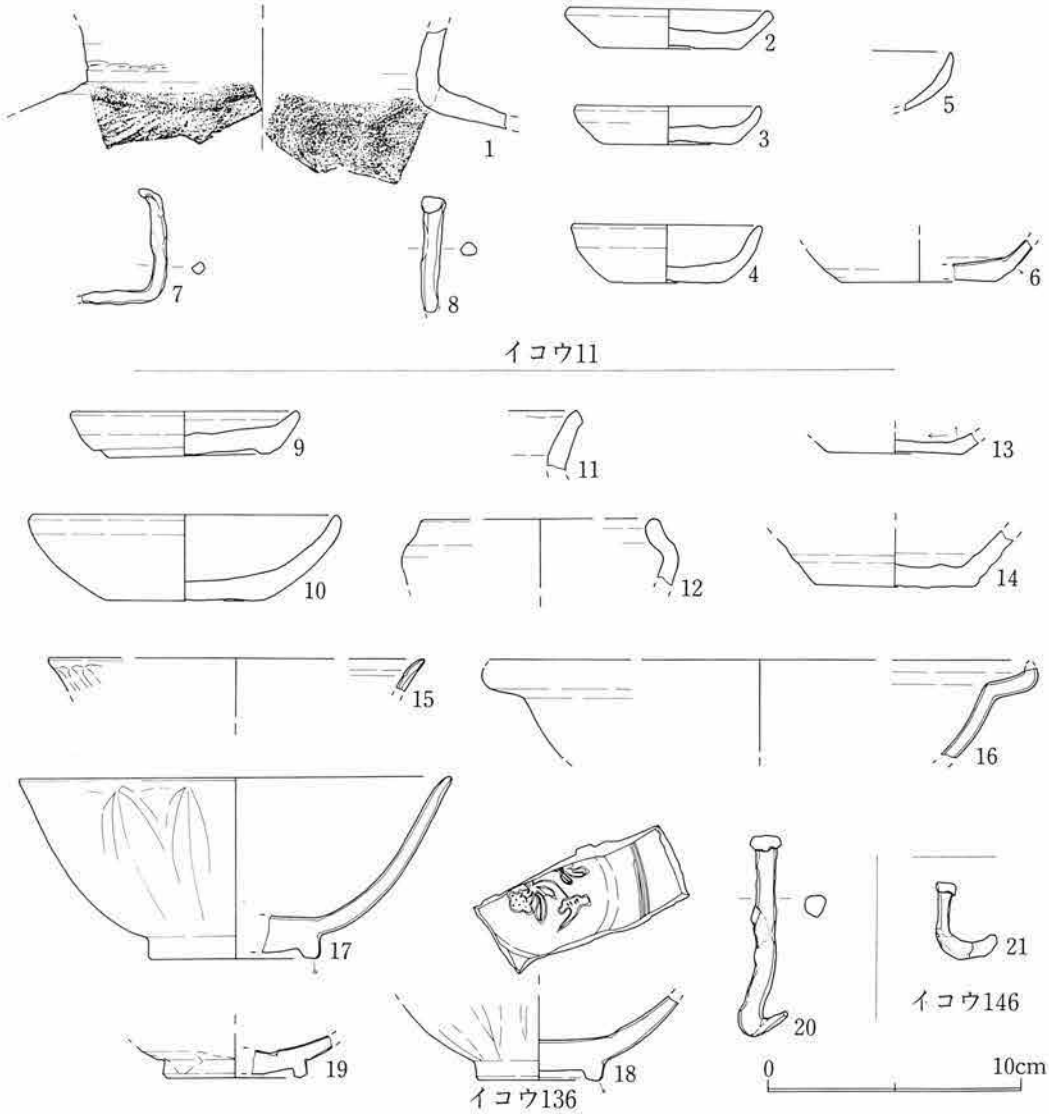


Fig. 23　2面遺構内出土遺物

がる。口径12.4cm、底径6.4cm、器高3.35cm。胎土は、赤橙色を呈し黒色微砂・白色微粒・白色針状微粒を含む。焼成良好。

Fig.23—11，12は、常滑。11は、鳶口壺の口縁部片。口径4.5cmに復元図示したが、片口部への湾曲部を含めた復元なので信用度は低い。胎土は、白色小石と細石を多く含むザラザラした黒色土。器表は無釉で淡茶色を呈す。焼成は軽く良好。12は、短頸壺の口縁部片。復元口径9.6cm。胎土は、白色細石を含む渥美より粗い青みがかった淡黒灰色土。器表は無釉である。焼成良好。コヨナデで調整されている。

Fig.23—13，14は、南部系（荒肌手）山茶碗の底部である(注2)。13は、底径6.6cm。胎土は、白色微粒を多く含み粘性に欠ける灰色土。器表は無釉である。外底部は無高台で、やや幅広の糸切りである。外底部から上方は回転ナデで整形している。14は、底径6.4cm。胎土は、黒色細砂・透明不透明な白色細粒を含む粉っぽく粘性に欠けるパサパサした灰白色土。器表は暗灰色を呈し無釉である。外底部は無高台で、やや幅広の糸切りで整形はとても雑である。内底部は強いナデ痕が見られる。

Fig.23—15～19は、舶載磁器。9～18は青磁、19は白磁である。15は、蓮弁文の碗口縁部片である。復元口径14.9cm。素地は、白色粉粒を含み粘性に富んだ灰色緻密土。釉は、やや暗い薄緑色を呈し細かい貫入が見られる。また、全体的に釉層が厚い。外面の蓮弁文は、蓮弁というよりも波状に近い彫りで輪郭がはっきりしない。器壁の削りは鋭く、内壁には溝状の削りも見られる。16は、折縁皿の口縁部。口径22.0cm。素地は、白色微粉粒を多く含み粘性に欠けた明灰色土。釉は、灰色味暗緑色を呈し細かな気泡が浮いて濁っている。焼成良好。17は、鎬蓮弁文碗。イコウ136、イコウ100、イコウ122、E—3グリッドとそれぞれ別遺構から出土した4点の破片で復元したものである。素地は、白色微粉粒を含む粘性にやや富んだ灰色土。釉は、灰緑色を呈し、貫入が見られる。高台部外周より外底部にかけては施釉されない。高台部は断面が逆三角形を呈す。18は、鎬蓮弁文の碗高台部。内底部見込みに花文が施される。高台径5.0cm。素地は、白色微粉粒を含む粘性にやや欠けた明灰白色土。釉は、青緑色を呈し、高台部外周から内底部にかけては施釉されない。高台部断面は、逆台形を呈す。19は、碗底部。高台径5.7cmを計る。素地は、黒色微砂を含み非常に緻密で粘性に富む白色土。釉は、淡青味白色を呈し透度が高い。外面低位から外底部にかけては施釉されないが鉄発色している。　Fig.23—20は、釘。遺存長9.3cm、径は、中部で0.85cm×0.8cm。

（3）イコウ146

本遺構は、かわらけの小片と釘のみの出土である。

Fig.23—21は、遺存長4.3cmの釘である。

第3節　トレンチ

A. 古代

トレンチ内イコウ121床面下より中世以前の遺物が出土する。遺物の出土する土層はFig.14の第

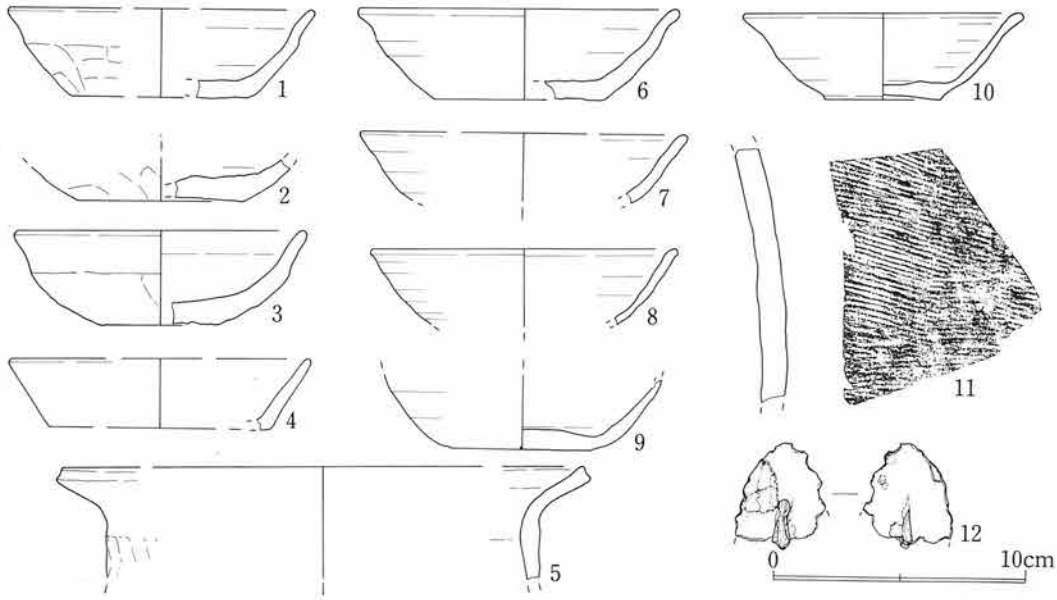


Fig. 24　トレンチ内出土遺物（1）

8層から第10層の黒色系弱粘質砂質土中からである。遺構の項で記した土師器の集中出土のほかは、堆積土中よりポツリ、ポツリと出土した。尚、堆積土中より出土した遺物は、軽石集積の発見された第10層を古代の上層、第8と7層を古代の下層中出土として分けた。

（1）古代上・下層出土遺物（Fig. 24）

1～5は土師器。6～11は須恵器。12は鉄鏃。1は相模型の坏。口縁の外反が強く、体部との境に稜を作る。口径12.3cm、底径7cm、器高3.5cmを測る。上層出土。

2は底部回転糸切りの坏。内底にはロクロ目。体部下半はヘラ削り調整。底径6.6cm。底部の器肉が厚い。上層出土。

3は、口径11.4cm、底径4.8cm、器高3.7cmを測る坏。ヘラ削り調整の体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部のヨコナデは弱く外反する。下層出土。

4は盤状坏。細片より復元。口径12cm、底径8.8cm、器高2.8cm位を測る。器壁は少し外反しながら立ち上がり、口縁が非常に弱く内湾する。内面に暗文は確認されない。下層出土。

5は長胴甕口頸部。細片よりの復元のため、径および傾きに不安が残る。上層出土。6～10の須恵器の坏はいずれも上層より出土した。糸切りの底部脇が弱い丸味を帯び、口縁が肥厚して外反する。6は口径12.4cm、底径6.2cm、器高3.6cm。7は口径13cm。8は口径12.2cm。7、8ともに細片よりの復元。9は底部から体部の1/5を残す。底径5.6cm。底部脇の丸味が強い。

10は全体の1/3ほどを残す。薄い器壁が外反する口縁で玉縁状に肥厚する。口径11cm、底径4.6cm器高3.5cmを測る。

11は須恵器甕の胴部片。下層出土。

12は板状有茎平根の鉄鏃。かえし部と茎部のほとんどを失っている。遺存する限りでは、身部最大幅3.5cm、長さ3.8cmである。茎部に根ばさみの木痕を残している。

Fig. 25　トレンチ内出土遺物（2）

（2）砂層直上出土遺物（Fig. 25、26）

砂層上に貼りつくように出土した遺物群（Fig. 25、PL. 7、12）は多くの破片を接合でき、発見した遺物は全て実測可能であった。

出土した土器は台付甕4点に甕と小型広口壺がそれぞれ1点である。台付甕5点のうち、接合状況の最も良好であったものは大型でFig. 25に図示した。

口径45cm、胴部最大径45cmを測る。台部は一部を残して欠損している。台部接合痕から口縁までの高さは34cmである。すでに記したように、この土器は強い火熱を受けてゆがみ、はぜたような破れ方をしているため、接合復元に若干の誤差が含まれているものと思われる。口縁は頸部から真直ぐに開く単純口縁をなす。体部は頸部下のかなり上位に最大径をもち、下方へ強くすぼまる。器面調整は内外面ともにナデの後に刷毛目が施されるが、体部中位では外面に粗い刷毛目、内面は

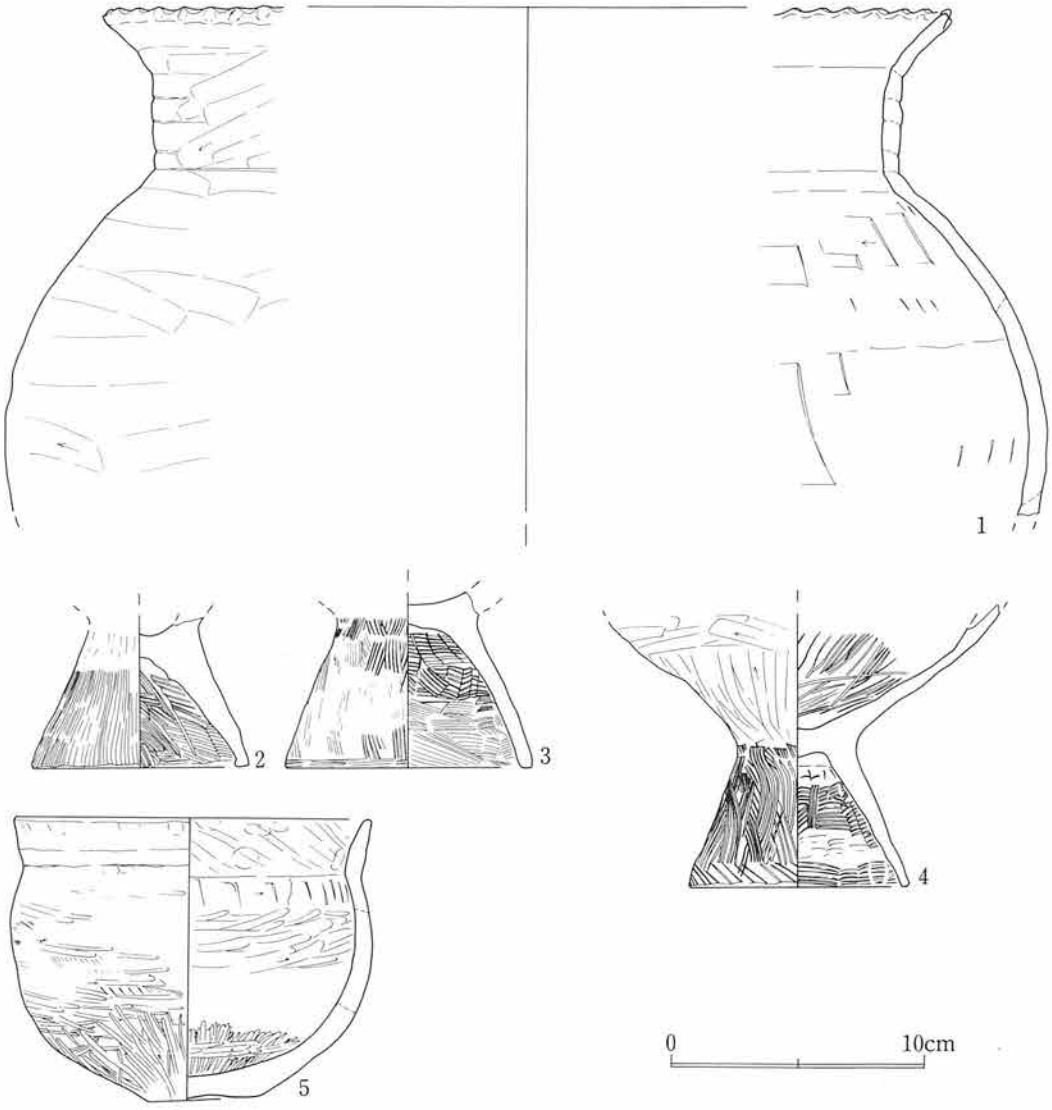


Fig. 26　トレンチ内出土遺物（3）

幅の広いヘラナデが施される。ヘラと刷毛の方向は、外面で右下から左上方へ、内面で右から左の横方向。内外面ともに同一方向に行われている器面調整痕は、外面に調整を施す際に土器をふせて行ったことを物語る。

Fig.26の2～4は台付甕の台部ないし体部下半から台部である。2は直線的に開きながら裾部に向けて器壁が薄くなる。内外面は木口状工具での強い刷毛目を残す。外面は上から下へ、内面は右から左へ調整が施される。この調整の強弱と有無によって内外の器面に凹凸が生まれている。裾部底面の肥厚は調整が施されなかったためである。3は均一な厚さの器壁が緩く内湾しながら開いている。器面調整は2ほど強くないが同様である。5の台部の器面調整もやはり、内面横方向、外面縦方向の刷毛目である。しかし、体部の調整は外面のヘラ削りと内面のヘラミガキである。外面のヘラ削りは右下から左上へ、それと右から左へと行われる。

器面調整でのヘラの使用はFig.26の1と5にも見られる。1は輪積み頸部に指頭押捺による波状口縁の甕である。胴部最大径を中位にもつ胴張甕。内面の調整は、口頸部にヨコナデ、胴部に指頭押さえの後に幅広の板状ヘラナデ。外面には、頸部から胴部に粗なヘラナデが施される。遺存片は1/10位で径に不安が残る。口径33.4cm。

5はほぼ完形に復元された。口縁の短く、あまり開かない小型広口壺。口径14.3cm、底径4.4cm、器高11.2cmを測る。輪積粘土帯作り。口縁外面のみを指頭押さえ＋ヨコナデのままに残し、外底を除く器面にはヘラ削りとミガキが施される。内面のヘラ削り方向は左から右。

砂層上面に発見された6点の土器のなかで、台付甕のほとんどは刷毛目調整が施される一方、甕と小型広口壺、それにFig.26；5の台付甕胴部にはヘラ削りとヘラミガキの調整が行われていた。2類の器面調整手法と台付甕に刷毛目調整が多用されること、加えてFig.25の大型台付甕の存在から、砂層直上より出土した土器群を五領期・古墳時代初頭から前期に比定できるだろう。

またトレンチの黒色系弱粘質砂質土中より出土した土器群のうち下層は、口縁の外反するFig.24；1と底部回転糸切りの土師器（同2）とFig.24；10などの須恵器坏より10世紀前半を主体とするものと考えられる。

第4節　近代建築基礎壙

A. 近代建築基礎壙出土遺物（Fig.27）

本遺跡南西部には、大型近代建築基礎壙（以後、近代建築壙とする）があった。本節ではその国庫負担分およそ16.2m²から出土した遺物を取り上げる。

Fig.27―1～2は、土製の皿である。1は、瓦器質の火皿。近代建築壙内より数片の破片で出土したものを復元した。口径27.6cm、底径22.3cm、器高3.5cmを計る。胎土は、白色微石を含む軟質な淡茶色微粉土である。外面口縁部より外底部にかけてミガキが施され黒色を呈する。体部外面から外底には格子目の打刻文様が施されている。外面口縁部から内底外周はヨコナデで、内底中心

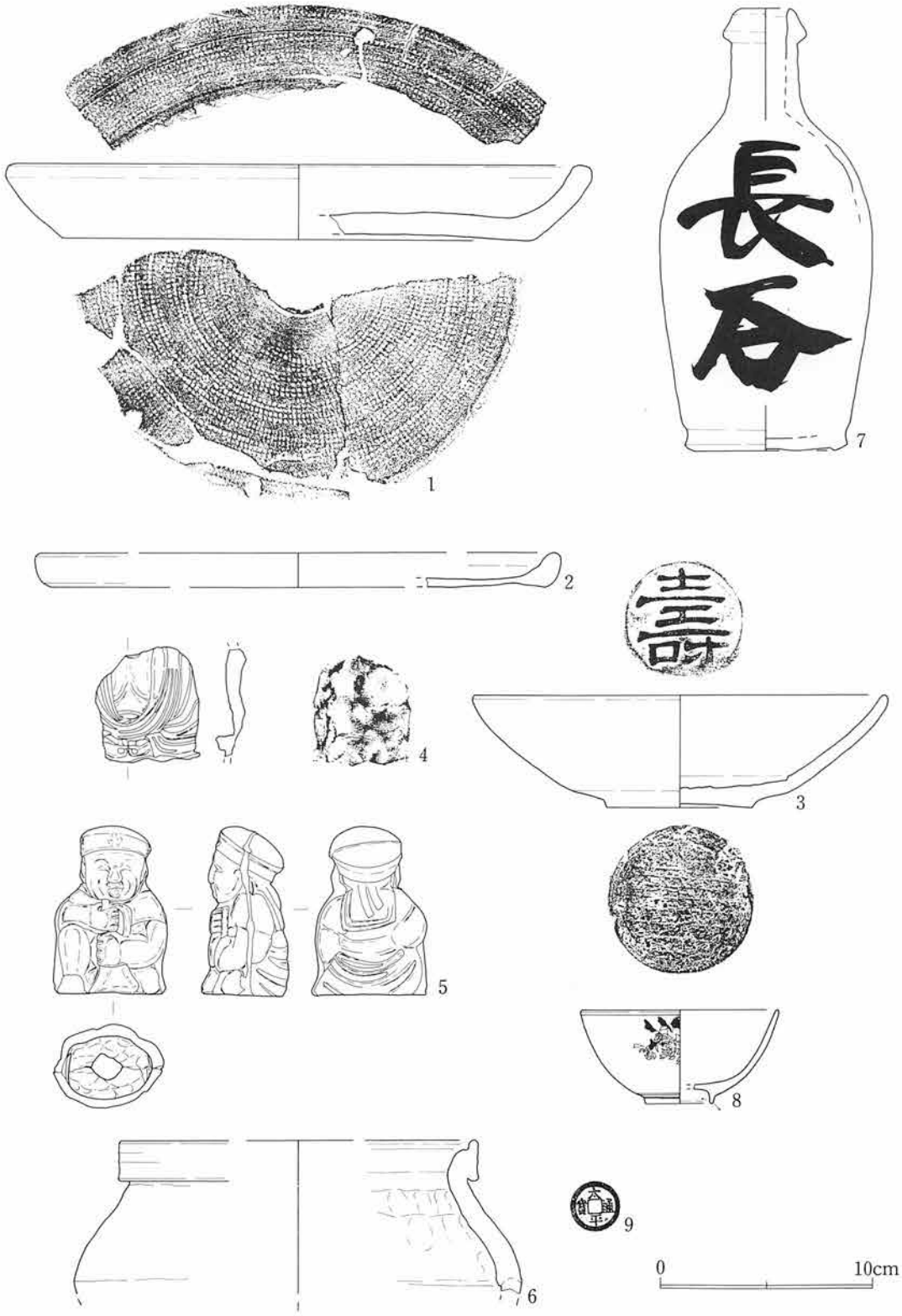


Fig. 27　近代建築基礎壙内出土遺物

部は、ナデで調整されている。2は、復元口径24.8cm、底径23.3cm、器高1.6cmを計る。胎土は、雲母細片、白色微粒と多くの黒色微粒を含むかわらけ土によく似た微粉質土。焼成良好。外底部脇から内底部にかけてはヨコナデ調整、外底部は砂底である。在地産かも知れない。

Fig.27—3は、超大型かわらけの碗。口径19.6cm、底径6.9cm、器高5.3cmを計る。胎土は、白色砂を多く含むよくしまった橙色土。底径値と口径値の比は極端に大きく、器壁がゆっくり立ち上がっていて平碗状を呈している。内底部には、「寿」と型押しされている。内外面共にヨコナデ調整し、外底部は糸切り、スノコ痕を残す。参考までに近代建築壙内原因者負担地に最終トレンチとして掘った第2トレンチ内上層で、小型で内底部に型押しは、見られないもののほぼ同器型のかわらけが出土している。また、近年、扇ガ谷の浄光明寺境内発掘調査に伴い発見された近世墓中の埋葬人骨の頭部にかぶせるようにして出土した超大型かわらけは、やはりこれと同じように内底部に「寿」と押し型されていたと聞く(注3)。

Fig.27—4，5は、土製人形である。4は、遺存最大幅4.8cm、最大高5.3cm。ふくよかな体型に袈裟をまとい阿弥陀定印を結んでいる様子から大仏像であろう。胎土は、多くの雲母片と赤褐色の大型泥粉を所々に含んだ粉質土でサラサラした感じを受ける。片側片しか出土しなかったが型合わせ作りをしており、近くに高徳院の大仏像がある土地柄、大量生産される土産物の一種かもしれない。5は、水兵帽にセーラー服、そしてラッパを携えている様子から旧帝国海軍のラッパ手像と思われる。遺存最大幅5.3cm、最大高3.7cm。胎土は、白色・赤褐色細泥粒・雲母細片を含む肌色粉質土。かわらけの胎土とよく似ていることや4と同じように型合わせ作りをしていることからやはり土産物の一種と思われる。

Fig.27—6は、常滑小壺の口縁及び胴部片。口縁部は小さく収まる。復元口径17.0cm。胎土は、白色小石・細石を多く含む粗くザックリした黒灰色土。器表は黒色を呈す。焼成は、良好で軽く焼き上がっている。内面上部から外面にかけてはヨコナデ、内面上部から下方にかけては指頭押さえの後軽くヨコナデで調整している。

Fig.27—7・8は、国産施釉陶器。7は、鎌倉市内の遺跡の近代土層中でよく見られる徳利である。口径3.9cm、高台径6.7cm、器高21.7cm。胎土は、白色砂を含む灰白粉質土。釉は、全面施釉され灰白色を呈し半失透している。釉下の文字は「長谷」と読める。外底部は削り出し高台である。

Fig.27—8は、国産磁器の小碗。口径9.4cm、高台径3.2cm、器高4.5cmを計る。外面上部から中部にかけて銅版刷りの花文が見られる。底部に文字等は見られない。

Fig.27—9は、鋳造銭。北宋時代の「大平通宝」である。背面に文字等は見られない。

(注1) 手塚直樹氏の御教示による

(注2) 藤澤良祐「半ノ木古窯跡群の変遷」『尾呂』1990年瀬戸市教育委員会

(注3) 調査担当者である宮田真氏の御教示による。発掘報告書は未刊。

第五章　付編

1．出土かわらけについて

表１，２は、本遺跡地全体で出土し、実測し得た総数215個のかわらけ法量分布表である。本遺跡は調査範囲が狭いこと、また、前述のとおり遺構を完掘できなかったこと等から、この資料はあくまで海浜地域におけるかわらけの統計的傾向を探るだけのものである。なお、上記に加えて統計分類上、全く資料数に乏しいためあえて器型別分類を行わなかった。

表１－１は外口径（口唇部径）値別、表１－２は外器高（底部の厚さを含めた高さ）値別の出土個体数を示したものである（出土数ゼロ個のものは省略した）。表２－１は、縦軸に外口径値、横軸に底径値を設定し作表したもの、表２－２は、縦軸に外器高値、横軸に底径の外口径に対する比率（底径口径比）を設定し作表したものである。４つの表から解るとおり小型のかわらけで外口径7.4cmから8.2cm以内、底径4.5cmから6.0cm以内、外器高1.4cmから1.9cm以内、底径口径比0.6cmから0.75cm以内のものが多く出土している。また大型のかわらけは、外口径12.4cmから14.0cm以内、底径7.8cmから8.6cm以内、外器高3.3cmから3.7cm以内、底径口径比0.5から0.6以内のものが多く出土している。そして破片を含む出土量全体でみても小型かわらけの出土量は大型かわらけの出土量を陵駕している。小型かわらけ、大型かわらけのいずれにも含まれない所謂中型のかわらけは、出土量や表２をみてもわかるように両者と比べて極端に少ない点に注目したい。

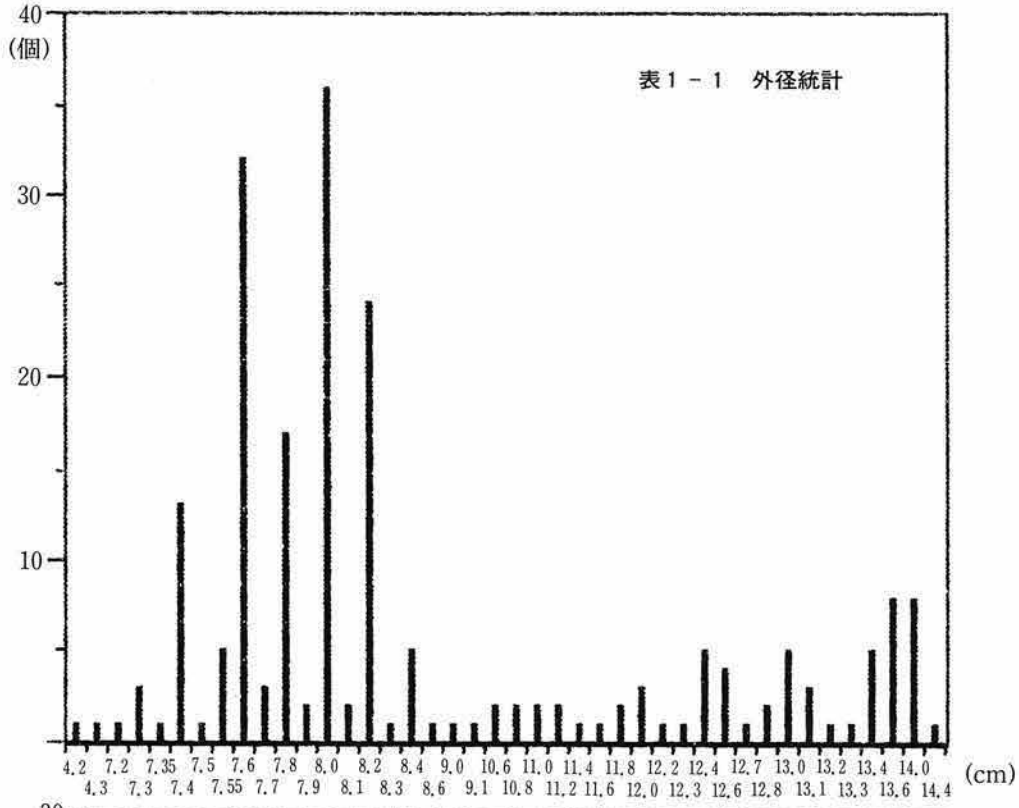
以上をふまえて各表を参考にしながら出土かわらけの平均的な型を想像することができる。小型かわらけは、口径と底径の差があまりなく器高1.4cmから1.9cm程の所謂平皿状のもの、大型かわらけは口径と底径の差が小型かわらけよりも大きく、器高3.3cmから3.7cm程の所謂碗状のものが多い。小型かわらけの方が大型かわらけよりも平べったい皿状を呈す傾向があるといえよう。

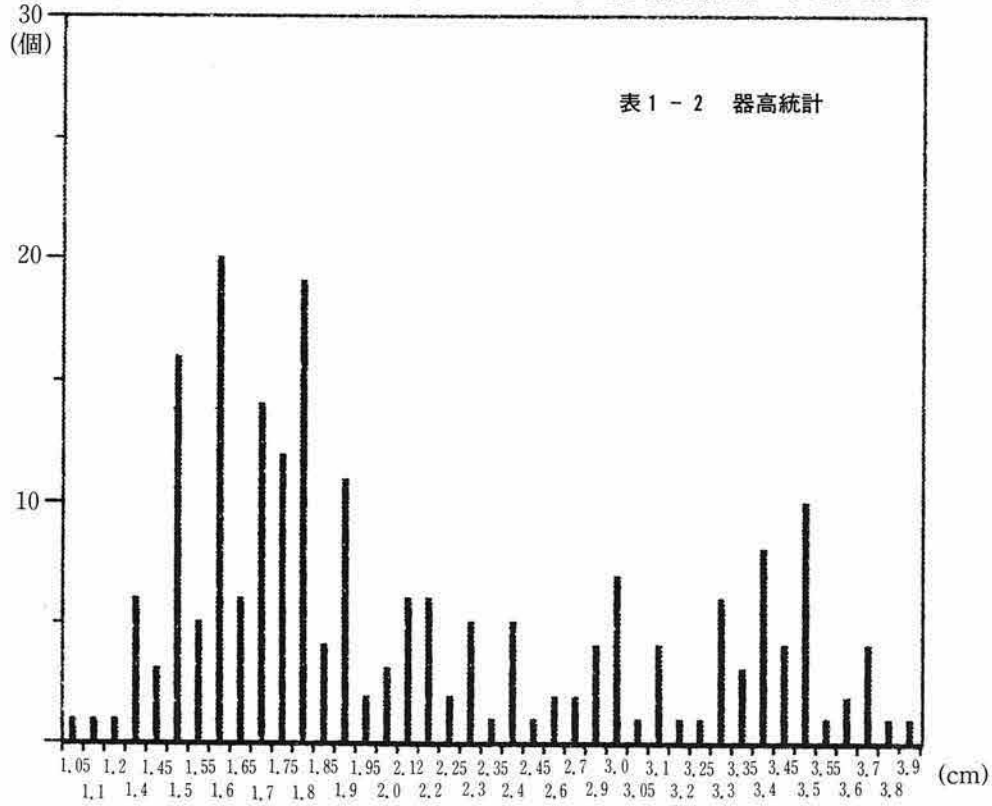
各表から捉えられる傾向だけを記したが今後は、調査地内より出土したものだけでなく各調査地で出土したものも順次加えて資料数を遺構別・生活面別に増やしてゆくことが急がれる。それによってかわらけの生産地・納入・販売路等が町中（武家屋敷等）と海浜地域とで差の有無をある程度捉えることができよう。また、生産地を知るために胎土分析をした上での胎土分類も必要不可決である。その上で分布表の比較考察を行えば器型における何らかの傾向を引き出せるかもしれない。

〈参考文献〉

１．河野真知郎「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古21号』神奈川考古同人会　1986年

本遺跡地出土のかわらけは、河野編年によれば鎌倉Ⅳ期から鎌倉Ⅴ期と考えられる一群に類似する。


40
(個)
30
20
10
表１－１　外径統計
4.2 7.2 7.35 7.5 7.6 7.8 8.0 8.2 8.4 9.0 10.6 11.0 11.4 11.8 12.2 12.4 12.7 13.0 13.2 13.4 14.0
4.3 7.3 7.4 7.55 7.7 7.9 8.1 8.3 8.6 9.1 10.8 11.2 11.6 12.0 12.3 12.6 12.8 13.1 13.3 13.6 14.4
(cm)


30
(個)
20
10
表１－２　器高統計
1.05 1.2 1.45 1.55 1.65 1.75 1.85 1.95 2.12 2.25 2.35 2.45 2.7 3.0 3.1 3.25 3.35 3.45 3.55 3.7 3.9
1.1 1.4 1.5 1.6 1.7 1.8 1.9 2.0 2.2 2.3 2.4 2.6 2.9 3.05 3.2 3.3 3.4 3.5 3.6 3.8
(cm)

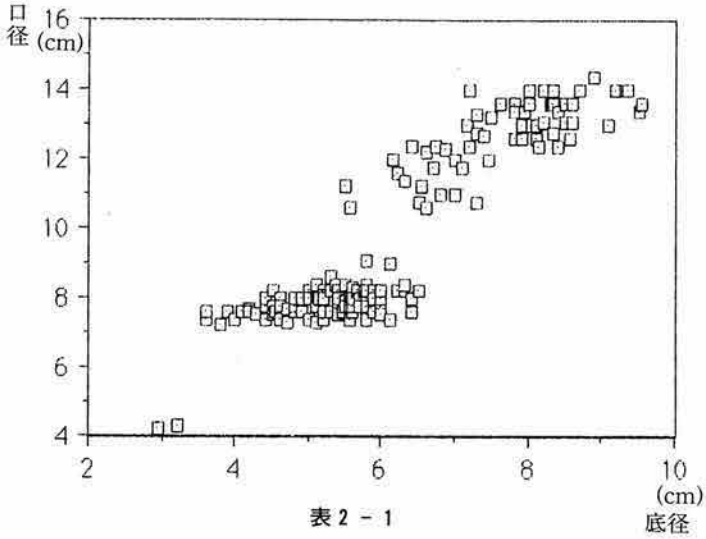

口径 (cm)
16
14
12
10
8
6
4
2
4
6
8
10
(cm)
底径

表２－１

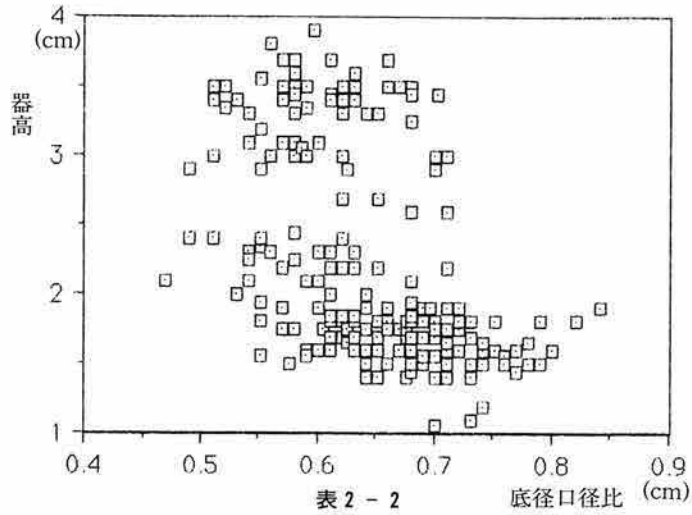

4
(cm)
器高
3
2
1
0.4
0.5
0.6
0.7
0.8
0.9
(cm)
底径口径比

表２－２

2．出土貝類

ここでは、国庫補助調査分に加えて施主負担分も含めた、長谷小路周辺遺跡(由比ガ浜三丁目194番4地点) 全域から出土した貝類をあつかう。

出土した貝類の総点数は324点(注1)、種類は25種に及ぶ。貝類の分類を表3に示したが、分類に

大海老	干潟群集				内湾泥底群集						内湾砂底							湾口砂礫底			
遺構及び層	ハイガイ	ウミニナ	マガキ	バカガイ	アカニシ	アカガイ	マテガイ	バイ	スミノエガキ	シオヤガイ	ハマグリ	イボキサゴ	アサリ	ツメタガイ	ムラサキイガイ	イソニナ	サルボウ	イワガキ	イタボガキ	チムラサキガイ	ヒナガイ
1層下					5			3			1										
3								1													
6																					
9														1							
10					1			1													
13																					
15											1										
16					1			1													
20					1																
22					2																
23								1			2										
25					1																
29																					
31											3										
42					2																
44								1													
45溝込め					1																
50																					
52-57					2			2													
61					15			5													
67											1										
72					1			1													
78								1			1										
79																					
85								1			2										
89																					
95											2										
101					2																
104																1					
105																					
111								1													
118																					
126											10										
129											13										
130											1										
131																					
137																					
139											1										
140																					
144											1										
2層					5			1			14	1									
7														1							
19																					
21					2			2			1										
30-32											3			1							
34-39					1			1			1										
40																		1			
76					11			1			10										
84											1					1					
91								5													
100					2						2										
109					1						2										
113					1																
117																					
119											3										
1トレ上層																					
1トレ下層																					
3トレ					1																
5トレ											1		2								1
5トレ貝溜まり										3			18				1				
7トレ-1																					
7トレ下層											1										
合計	0	0	0	0	58	0	0	30	0	3	77	1	20	3	0	2	1	1	0	0	1

大海老	外洋沿岸砂底								岩礁													
遺構及び層	チョウセンハマグリ	ダンベイキサゴ	シオフキ	ワスレガイ	テングニシ	ツノキガイ	ネンカリガキ	ヒメツメタガイ	サザエ	オオヘビガイ	マダカアワビ	クロアワビ	メカイアワビ	ナガニシ	ツノマタナガニシ	バテイラ	ガンガラ	イガイ	ヒオウギガイ	イボニシ	ヘソアキガイ	ミガキボラ
1層下	1								1				1		1	1						
3									1													
6	1																					
9	1	1																				
10																						
13									1		1											
15																						
16											1											
20	1																					
22									2											1		
23	3	3							2						1							
25	1																					
29	1																					
31									1													
42																						
44	1																					
45溝込め																						
50	1																					
52-57	5	2									1											1
61									1				1									
67																						
72																						
78													1									
79	1																					
85									1													
89									1													
95	5																					
101																						
104																1						
105																1					1	
111																						
118																					2	
126	4																					
129	3	1							1													
130																						
131		1							1													
137	2																					
139																						
140	1																					
144																						
2層	5								2							1						
7																						
19											1							1				
21	3								1				1									
30-32	1	2							1													
34-39				1																		
40	1																					
76	11								1													
84	1																					
91																					1	
100	1																					
109	2				1																	
113									1													
117	2												1									
119	2																					
1トレ上層	1								1													
1トレ下層		1							1													
3トレ																						
5トレ	1																					
5トレ貝溜まり	1								1													
7トレ-1	1																					
7トレ下層													1									
合計	65	11	0	1	1	0	0	0	22	0	4	0	6	2	2	4	0	1	0	1	4	1

表3　出土貝類分類表

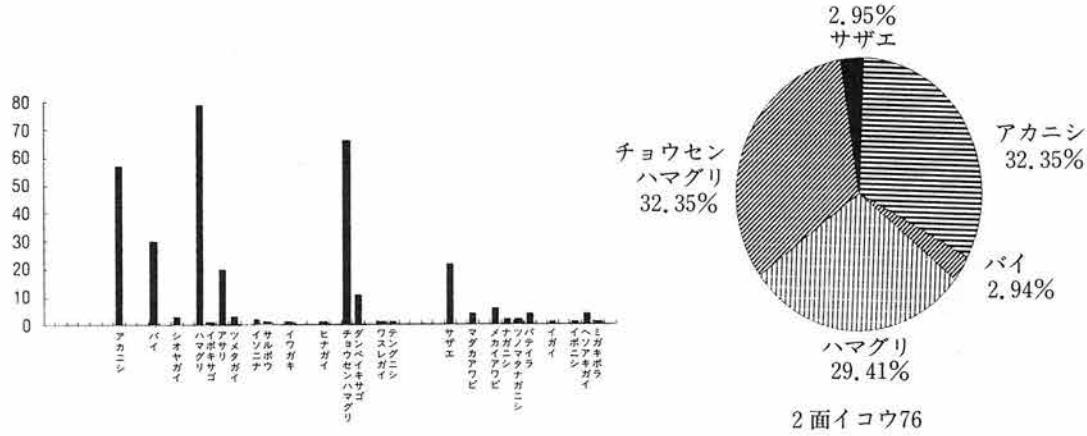


表4　貝類出度頻度

あたっては、鎌倉市内の調査においてかつて出土した貝種も含めて、生息地域別に行った。

表3を見て、先ず気づく点は干潟群集の貝殻がみられないことである。(注2)。他の群集では、多寡の差はあるものの、鎌倉で出土する貝種のほとんどは出土している。出土点数の多いものは、アカニシ、バイ、ハマグリ、アサリ、チョウセンハマグリ、ダンベイキサゴ、サザエである（表4の左)。アサリは第5トレンチ内よりまとまった出土したため、集計数値全体のなかでやや特別である。出土点数の多い貝種の傾向は、千葉地遺跡や蔵屋敷遺跡での貝類報告とほぼ同様であるが、外洋性のチョウセンハマグリとダンベイキサゴの多いのが注目される。

以上の貝類遺存体に直接火を受けた痕跡を残すものはアカニシだけのようである。体層部を残すアカニシの多くは、外唇の反対面が壊わされている例が多く、その回りが黒褐色に変色している。

出土した貝類遺存体には、概して極端な幼貝はみられない。アカニシは殻径50ミリ以上、バイは殻径30ミリ前後、ハマグリは殻長45ミリ以上、アサリは殻長35ミリ以上、チョウセンハマグリは大きく、殻長55ミリ以上などである。貝の採取にあたって、おおよその選択がなされたものであろうか。

鎌倉市街地の調査で出土する貝類と比較して、外洋性の貝種がやや多いことを指摘できるが、資料数は少なく、多くの問題は今後の調査と資料の蓄積によって検討されてゆくこととなろう。

注1.　遺存体の点数の数え方は次の基準を設けた。巻貝は軸をもって数え、体層や螺塔のみを遺すものは数えない。二枚貝は、腹縁のみを残すものを除外し、他は全てを貝合せを試みた後、片殻のみでも一点として数えた。

注2.　『蔵屋敷遺跡』所収の「蔵屋敷遺跡出土の動物遺体」においても、同様の結果を得ている。

3．長谷小路周辺遺跡の花粉化石群集

吉川　昌伸（パレオ・ラボ）

1．はじめに

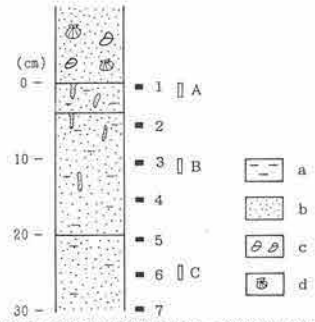
長谷小路周辺遺跡は、鎌倉駅の南西約850mに位置し由比ガ浜までは約500mの距離にある。この付近は、滑川低地で鎌倉時代初期には砂丘後背湿地であった（斉木、1989）とされている。

遺跡の堆積層は主として砂が卓越する層からなるが、白黄色砂の下位に後背湿地性の黒色ないし黒褐色砂が発達する。この堆積物について花粉化石群集の検討を行ったが、十分な成果は得られなかった。そこでこの堆積物の堆積環境の推定を行うため粒度分析も行った。以下に粒度分析結果と花粉化石群集から推定される古環境について報告する。

2．堆積物の記載と粒度分析結果

a．堆積物の記載

分析に用いた試料は、白黄色砂の下位に発達する黒ないし黒褐色砂である。堆積物の時代は特定できないが、弥生から古代頃と推定される。分析地点の位置及び土層断面については、遺跡の章を参照されたい。



長谷小路周辺遺跡の地質柱状図と試料採取層準
a：シルト　b：砂　c：土丹　d：貝
No.1～7：花粉分析試料　No. A～C：粒度分析試料
Fig. 28

堆積物は、3層に区分される（図1）。下部は黒褐色シルト質中～細粒砂よりなり（層厚10cm以上）、1mm前後の貝片を比較的多く含む。中部は黒褐色シルト質細粒砂よりなり（層厚16cm）、生痕状のパイプが縦方向に発達するが量的には多くない。上部は黒色シルト質細粒砂よりなり（層厚4cm）、直径2mmの生痕状パイプが発達し、パイプ内は灰白色粗～細粒の貝片や砂により充塡されている。特に上部に多く発達する。このパイプは植物の根の跡の可能性もある。いづれの試料も含砂率は高く、98.7～99.4%を占める。一方、含水比は16～22%と低い。

b．粒度分析

堆積環境を推定するため3つに土層区分された各層準（上位よりA、B、C、図1参照）について粒度分析を行なった。

試料の処理は、乾燥後約50gを秤量し手ぶるいでふるいわけを行った。ふるいは1/2ϕ粒度（粒径＝2－ϕ）間隔で－0.5～4ϕ（1.41mm～0.063mm）の間で行った。ここでは手ぶるいで行ったこと及び4ϕを通過した試料が多いもので5%を占めることから、精度的には高くないと言える。分析結果は正規確立紙に粒径頻度分布の積算曲線で示した（図2）。また、Friedman（1961）の積率

	平均粒度	淘汰度	歪度	尖度	含水比（%）	含砂比（%）
A	2.525	0.746	-0.453	5.180	22.7	95.0
B	2.498	0.676	-0.857	5.948	17.8	97.7
C	2.473	0.690	-0.954	6.024	16.2	97.9

表5　堆積物の粒度特性

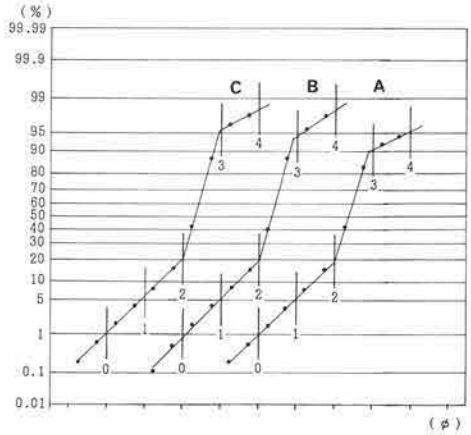


Fig.29　確率紙上の積算曲線

公式により平均粒度、淘汰度、歪度、尖度を求めた（表1）。

傾向的には、3試料とも同様の積算曲線を示し、上部で平均粒度が幾分細かくなり淘汰度が悪くなる。上杉（1972）は、1/4φ間隔で積率法で求めた平均粒径と歪度の関係から、風成砂と海成砂が区分されることを検証した。また、確立紙上の積算曲線をABCDEの5タイプに区分した。当遺跡の積算曲線はEタイプを示すこと及び平均粒度の歪度の関係から海成砂になる。一方、Freidman（1976）は、平均粒径―淘汰度の分散図から河川砂と海岸砂を区分している。その分散図に基づくと河川砂側にプロットされる。さらに、松本（1977）は平均粒度と淘汰度の関係及び淘汰度と歪度の関係から浜堤と自然堤防の環境を区分している。それによると自然堤防側にプロットされる。しかし、上杉（1972）は平均粒度と淘汰度の関係では河川砂と浅海砂が区別できない場合があることを指摘している。いづれにしても水域に堆積した砂であることは確かであり、その層の分布状態から環境が特定できるであろう。

3．試料と分析方法

試料は、連続柱状ブロックで行ったが、試料が砂であることからスポットでも採取した。花粉分析にはスポット試料を用い、柱状サンプルは堆積物の検討を行った後粒度分析に用いた。

花粉化石の抽出は、湿重を計測後10%KOH（湯煎約15分）―傾斜法により粗粒砂除去（砂分を回収後、乾燥、秤量、篩別（0.063㎜）、篩に残った砂を秤量）―48%HF（約30分）―重液分離（ZnBr2比重2.1、600rpm20分、2,500rpm10分）後浮上物を回収し比重を下げ沈殿さす）―アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸9：無水酢酸1の混液で湯煎5分）の順に物理・化学処理を行った。

プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、タッチミキサーで十分攪拌後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。作成時に残渣量とプレパラート作成に用いた容量を計測した。

4．花粉化石群集の記載

a．出現した花粉化石

同定は、断片的計数による花粉組成の歪を無くすため、パレプラートの全面を行った。この間に出現した分類群と個数を表2に示す。表中で複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。また、マメ科の分類群には樹木と草本があるが、区別が出来ないためここでは草本花粉に含めてある。

図版に示したPAL．MY番号は、単体標本（花粉化石を1個体のプレパラート）の番号を示す。単体標本の作成は、辻（1975）に従う。これら標本はパレオ・ラボに保管してある。

出現した分類群数は、樹木が6、草本が7のみである。

b．花粉化石群集の記載

出現した分類群数は少なく、花粉数も少ない。樹木花粉数は、2個以下である。全花粉数は、No.5～7では全体で100個以下、No.1～4では125～501個含まれ、いづれの試料においても、ヨモギ属が大半を占める。ヨモギ属はNo.1～4では95～99%を占め、花粉塊でも産出する。1g当たりの花粉量は、No.1で420個と一番多く、それ以外では190個以下である。No.5～7では10個以下と著しく少ない。傾向的には上部ほど花粉量が多い。

プレパラート中の植物遺体は、黒色ないし黒褐色の炭化物片よりなり、褐色の植物遺体はNo.1で僅かに含まれる程度である（図版―1のNo.1・2）。また、花粉膜の保存状態は悪いものが多い。図版―1に示したヨモギ属花粉は比較的保存が良いもので、図版―2のNo.11・12・16・17は外膜が分解され膜状を呈している。一方、虫食い状の分解が見られないことから、すべて化学的風化によるものであろう。

5．長谷小路周辺遺跡の堆積環境

樹木花粉がほとんど得られないことから、周囲の森林植生については言及できない。花粉化石が著しく少ない要因としては、花粉粒が16μm以下の微細粒子と挙動を共にする（松下、1982）ことから、粒度が粗くシルト以下の微細粒子が5%以下と著しく少ないためと言える。

ヨモギ属は花粉塊でも産出し、その場に生育していたものと考えられる。一方、堆積物は水域で堆積したものであり、ヨモギ属は堆積後乾燥化した段階で生育したものであろう。また、下位層準で検出されたヨモギ属花粉は、上位よりの落込みと見た方が妥当であろう。

ヨモギ属花粉は物理・化学的風化に対し比較的強い分類群で、土壌やロームにおいてもシダ植物胞子と共に比較的残存している場合が多い。ヨモギ属花粉が多い要因としては以下の2つが想定される。1つは、樹木花粉なども飛来し堆積するが、結果的にはそれらの大半は分解消失しヨモギ属が選択的残存した。もう1つは、堆積物の粒度が粗くシルト以下の粒子が少ないという特殊な環境下であったことから生育可能な植物も限定されたことによるであろう。この地点で生育していた場合、ヨモギ属としては海岸や川岸に生えるカワラヨモギや海岸に生育するユキヨモギなどが推定さ

表 6　長谷小路周辺遺跡の花粉化石の組成表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7
樹木								
マキ属	*Podocarpus*	-	-	1	-	-	-	-
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	-	-	-	-	1	-
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	-	-	-	-	-	1	-
ハンノキ属	*Alnus*	-	-	-	1	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	1	1	-	-	-	-	1
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	1	1	-	-	-	-	-
草本								
イネ科	Gramineae	3	2	2	1	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	-	1	-	-	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	3	-	-	-	-	-
キンポウゲ科	Ranunculaceae	-	1	1	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	-	-	1	-	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	311	493	119	245	37	54	20
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	-	1	-	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	2	2	1	1	0	2	1
草本花粉	Nonarboreal pollen	314	499	124	247	37	54	20
シダ植物胞子	Spores	0	0	0	0	0	0	0
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	316	501	125	248	37	56	21
不明花粉	Unknown pollen	2	3	0	2	0	0	0

れる。

以上のように白黄色砂層の下位に発達する砂層は、水成堆積したもので、堆積後乾陸化した段階でヨモギ属が生育したものであろう。また、周囲の森林植生に関しては樹木花粉が殆ど検出されなかったことから言及できない。

引用文献

Friedman, G. H. (1961) Distinction between dune, beach and river sands from the textural characteristics. Jour. Sed. Petro. , 31, (4), pp. 514—529.

Friedman, G. H. (1967) Dynamic processes and statistical parameters compared for size frequency distribution of beach and river sands. Jour. Sed. Petro. , 37, pp. 327—354.

松本秀明 (1977)「仙台付近の海岸平野における微地形分類と地形発達—粒度分析法を用いて—」東北地理、29、pp.229—237

松下まり子 (1982)「播磨灘表層堆積遺物の花粉分析—内海域における花粉・胞子の動態—」第四紀研究、21、pp. 15—22.

斉木秀雄 (1989)「鎌倉の地形を復元する」石井進・大三輪龍彦編『よみがえる中世 (3) 武士の都鎌倉』、pp. 52—55.

辻誠一郎 (1975)「化石花粉のための単体標本について」地学研究、26、pp. 253—257.

上杉陽 (1972)「粒径頻度分布からみた風成砂・海成砂の諸特徴」第四紀研究、11、pp. 49—60.

第六章　まとめ

調査範囲が狭く、本地点の調査結果より遺跡地の性格を捉えることは避けねばならないだろうが、周辺で行われた調査の成果を踏まえながら、２・３気付いた点を記することでまとめとしたい。

完掘できた遺構は少なかったが、各遺構出土の遺物から調査地点に営まれた生活の年代を次のように考えられる。在地産の土器であるかわらけは、手づくねを含まない底部糸切りによる、器壁が薄く、口縁の外反するものがほとんどである。また内底には必ずナデが１回以上施されている。他方、器高の高く、粉質の15世紀代のかわらけも見られない。

国産陶器は、隣接他遺跡と同じように口縁部が比較的小さく収まった常滑が多く出土し、次いで高台部がきれいに整形され、器壁がゆっくり立ち上がった広口の山茶碗窯こね鉢、薄めの灰釉が施された瀬戸等が主体である。特に著しい摩滅痕の残る山茶碗窯こね鉢の破片を含めた出土点数が多いこと、また、金属製品（特に釘）の出土数がとりわけ多いことに注目したい。

舶載磁器を見ると、白磁は口兀皿、青磁は蓮弁文碗を主体としている。

こうした出土遺物の様相は、本遺跡地に営まれた中世の生活は14世紀代に限られていたものと考えられる。本遺跡地に隣接する由比ヵ浜三丁目194番25外（地点）遺跡に発見された３期に及ぶ生活址も14世紀代としている。また、西に30メートル程離れた由比ヵ浜三丁目199番１地点遺跡での生活址も15世紀まで下るとは考えられず、14世紀後半を主体とするとされている。

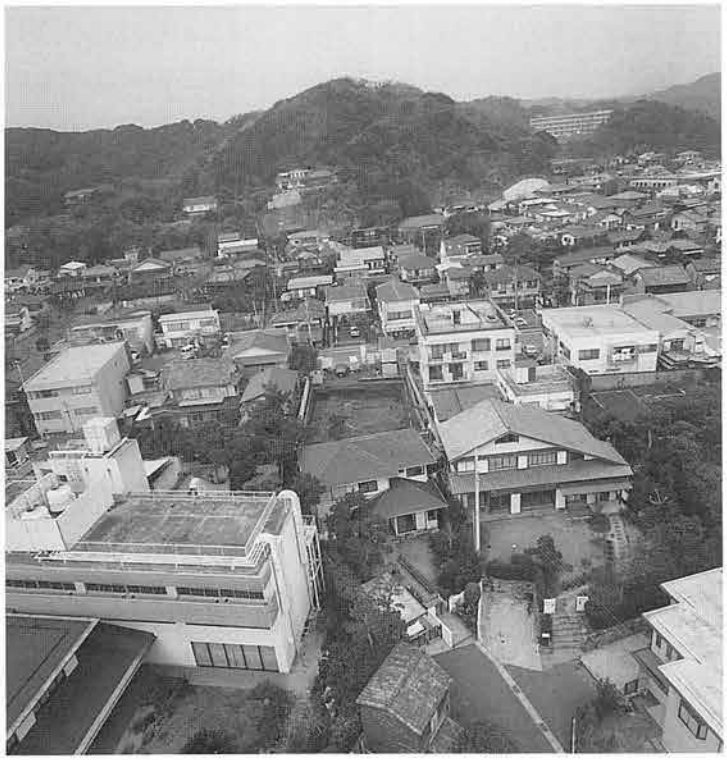
さて、トレンチには、中世の遺構下にある低湿地堆積土中に多数の土師器と須恵器の出土が見られ、その堆積土下の粗粒砂層上に大量の土師器の出土があった。堆積土中出土遺物は10世紀前半を主体とし、砂層上面出土遺物は大廓式大甕を代表として古墳前期所産のものである。低湿地の形成年代がこれから窺えよう。

さて、大型の台付甕は、駿河地方の大廓式に比定できる。大型台付甕は中部地方から三浦半島にかけての海岸ぞいより出土し、文化交渉（人的移動も含めて）としての海上路が問題となる。本遺跡地周辺より発見される中世以前の土器と遺構は８～10世紀代が多いほか、古墳前期のものも、由比ヵ浜三丁目258番８地点遺、長谷小路南遺跡と諸戸邸地点より出土している。古墳前期の遺物を出す諸遺跡のうち、本遺跡を除く、３遺跡はすべて住居址もしくは土壙墓を伴うものである。粗粒砂上にて使用した後に廃棄してしまったような本遺跡地での遺物出土状況は特異であり、それに大廓式の大型台付甕が用いられたことが注意される。本遺跡の土器出土状況をややうがった見方で捉えてしまったが、当時の生活復元のためには、海浜地域の調査にあたって、低湿地堆積土下まで調査を拡大する必要を痛感する。

PL.1

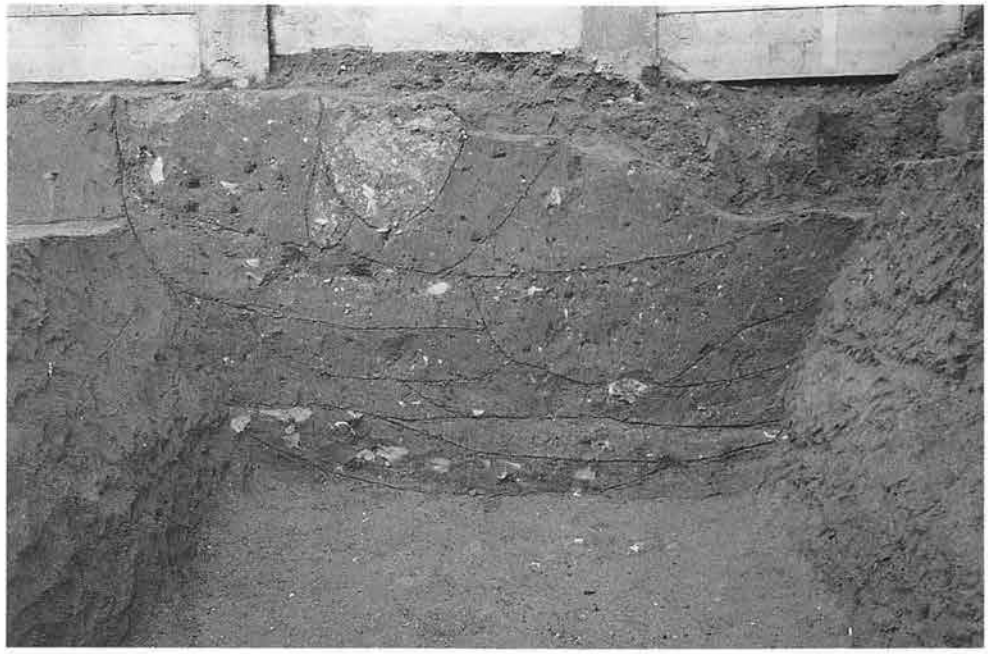
A. 調査地遠景（北から）

1. 調査地
2. 秋山ビル用地
3. 福地ビル用地
4. 長谷小路南遺跡



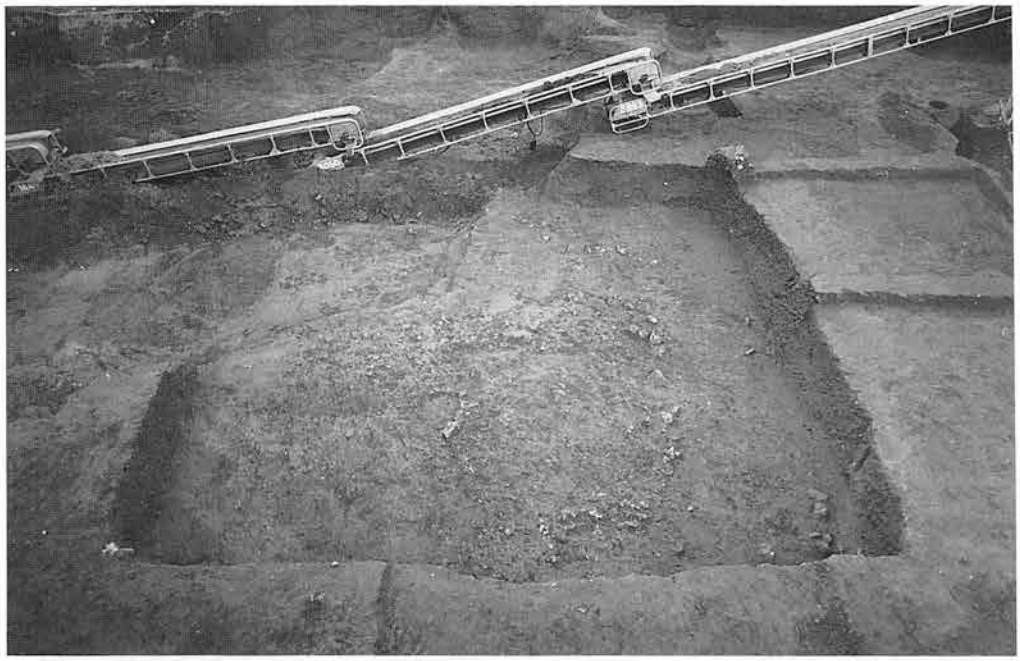
B. 調査地近景（南から）

A. 第1面イコウ16, 第2面イコウ11（南から）



B. 同上イコウ16覆土堆積状況（西から）

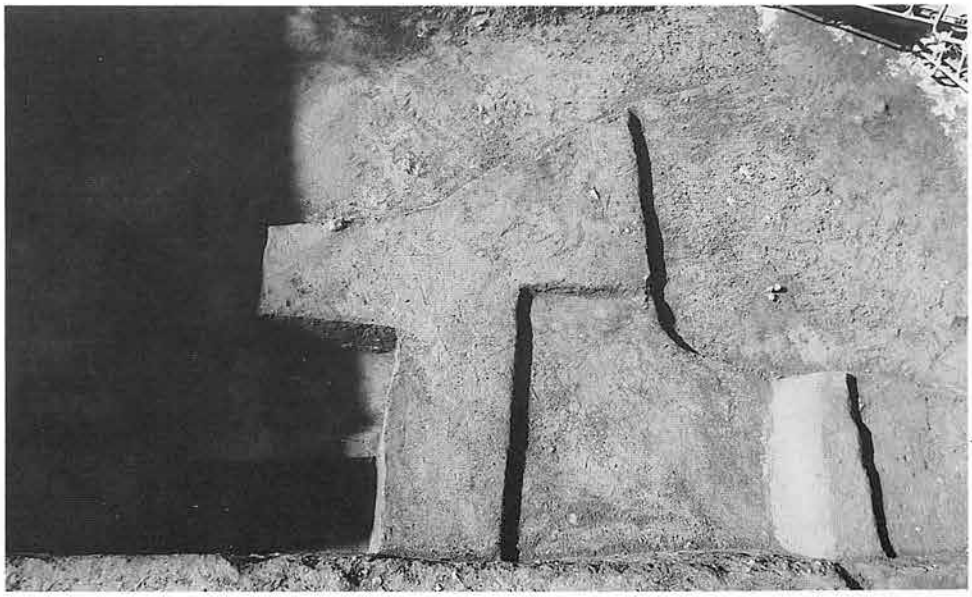
PL. 3



A. イコウ61全景（東から）

B. 同上覆土堆積状況（北東から）

A. 第Ⅰ面イコウ61内かわらけ出土状況

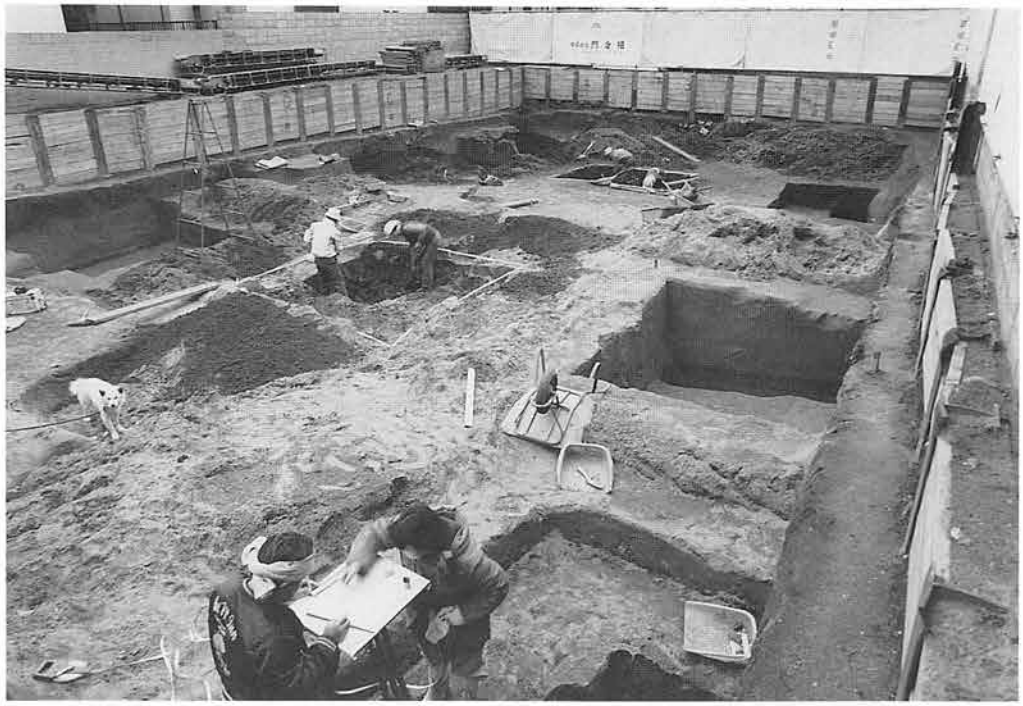


B. 第Ⅰ面イコウ96、97（東から）

PL. 5

A. 平面調査終了全景（北から）国庫負担区は左上方隅

B. 降雪時雪かき



A. トレンチ調査の様子

B. トレンチ内イコウ121および未確認遺構床面（北から）

PL. 7

A. トレンチ内　土師器出土状況（西から）

B. 同近景（西から）

A. トレンチ内　大型台付甕下被燃泥岩塊

B. トレンチ内土層堆積状況（西から）

PL. 9

Fig. 18 - 2

Fig. 18 - 5

Fig. 18 - 11

Fig. 18 - 12

Fig. 18 - 8

Fig. 20 - 2

Fig. 21 - 3

Fig. 17 - 9

Fig. 18—15

Fig. 18 - 16

Fig. 18 - 17

Fig. 20 - 6

Fig. 18 - 18

Fig. 18 - 19

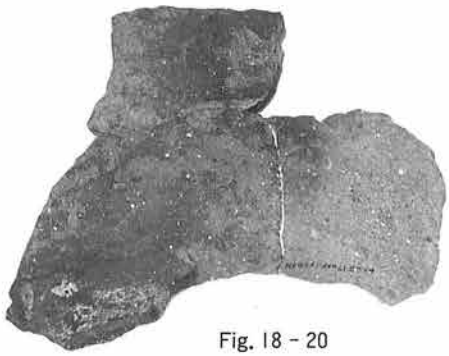


Fig. 18 - 20

Fig. 20 - 10

Fig. 27 - 1

Fig. 19 - 4

Fig. 27 - 4

Fig. 27 - 5

Fig. 27 - 2

Fig. 20 - 12

Fig. 21 - 7

Fig. 17 - 6

Fig. 19 - 1

Fig. 21 - 9

Fig. 23 - 6

Fig. 23 - 19

Fig. 17 - 7

Fig. 23 - 15

Fig. 19 - 3

Fig. 23 - 17

Fig. 23 - 16

Fig. 17 - 8

Fig. 23 - 18

Fig. 21 - 17

Fig. 19 - 8

Fig. 19 - 7

Fig. 17 - 12

Fig. 21 - 18

Fig. 19 - 6

Fig. 21 - 19

PL. 11

Fig. 21 - 6

Fig. 18 - 21

Fig. 23 - 13

Fig. 23 - 14

Fig. 23 - 12

Fig. 27 - 6

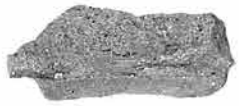


Fig. 20 - 11

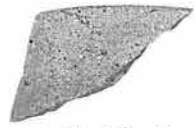


Fig. 22 - 1

Fig. 22 - 2

Fig. 22 - 3

Fig. 23 - 4

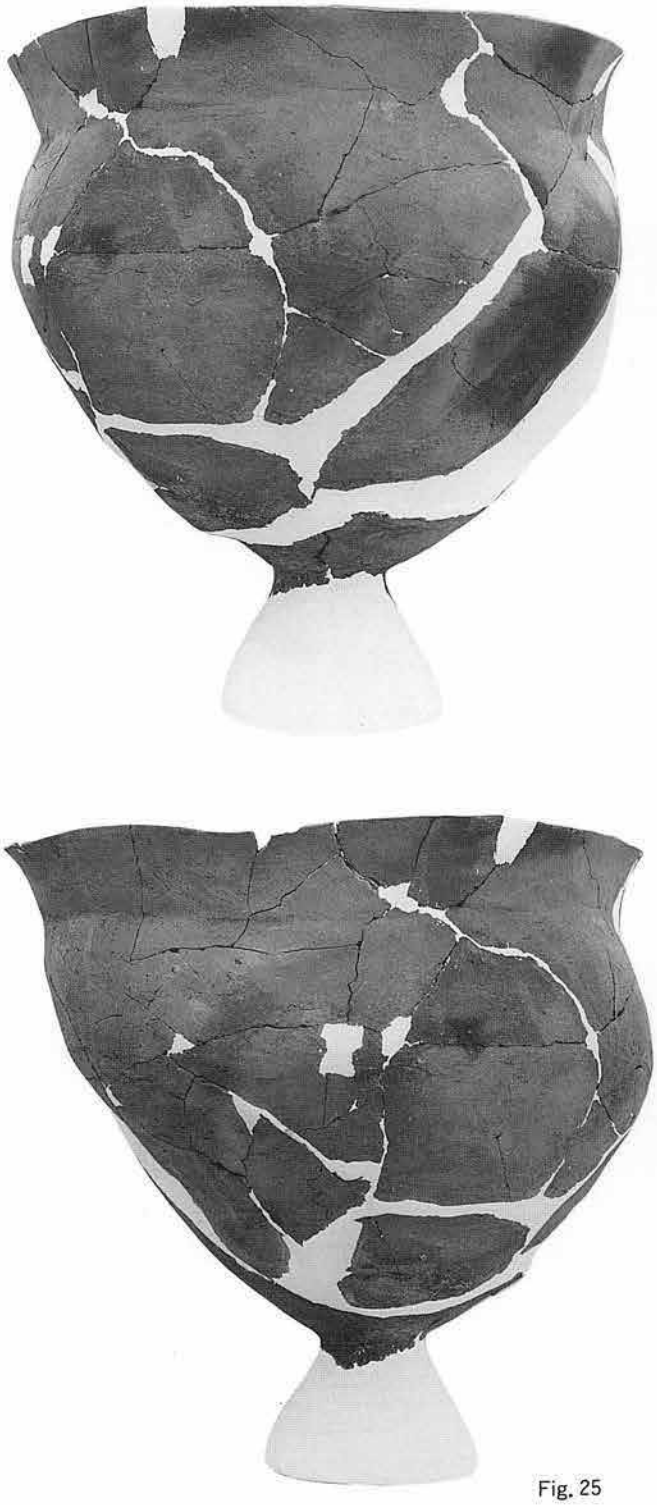


Fig. 25

Fig. 26 - 1

Fig. 26 - 4

Fig. 26 - 5

Fig. 17 - 1

Fig. 17 - 2

Fig. 23 - 1

Fig. 24 - 11

Fig. 24 - 6

Fig. 24 - 8

Fig. 24 - 9

Fig. 24 - 10

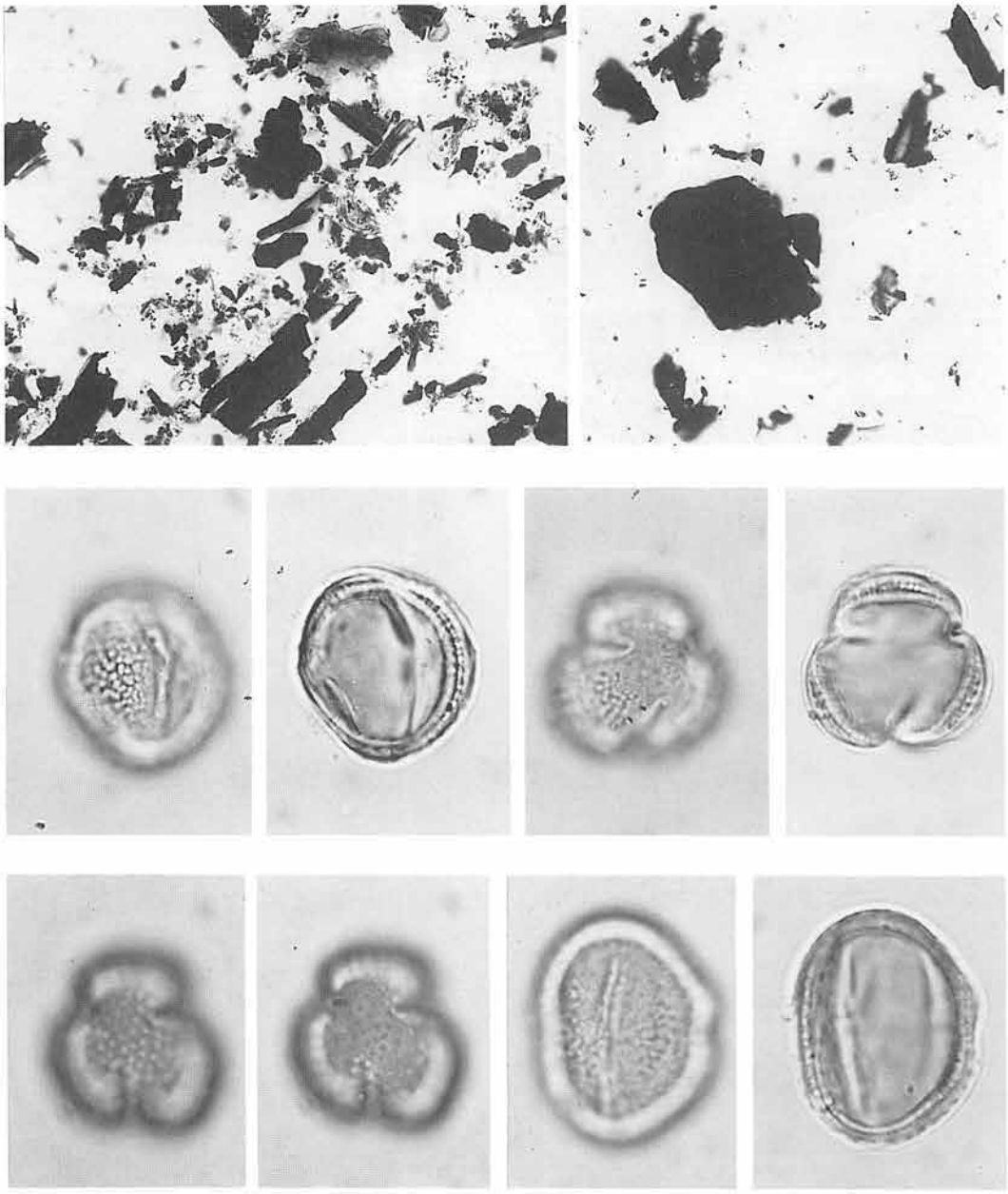
Fig. 24 - 1

Fig. 24 - 2

Fig. 24 - 3

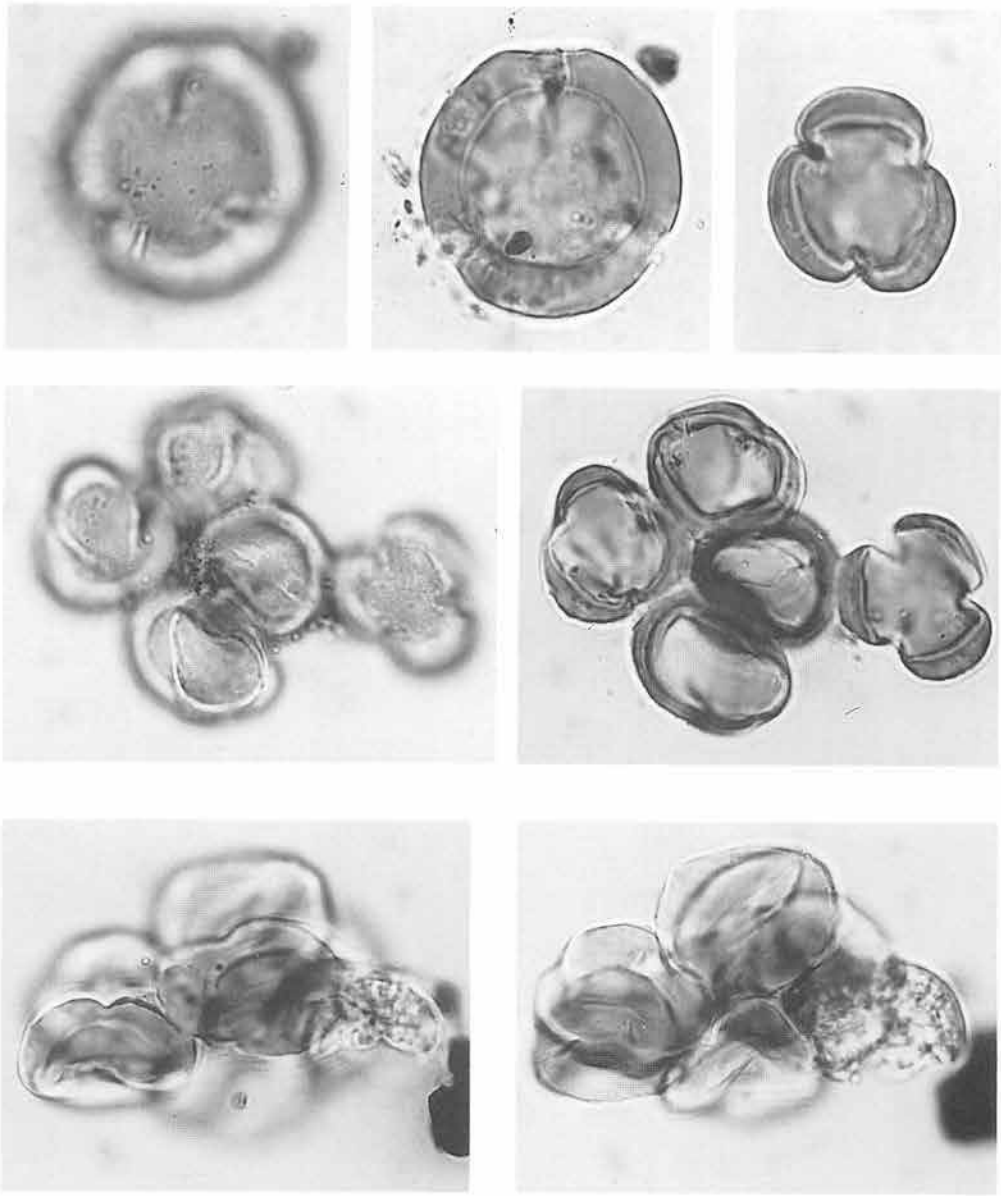
Fig. 24 - 12

PL.15



長谷小路周辺遺跡より産出した花粉化石

1：プレパラートの状況，No.2（x220）．　2：プレパラートの状況，No.5（x220）．
3 - 6：ヨモギ属，No.3, PAL.MY1057（x1,100）．　7 - 8：ヨモギ属，No.2, PAL.MY1053（x1,375）．　9 - 10：ヨモギ属，No.2, PAL.MY1056（x1,100）．



長谷小路周辺遺跡より産出した花粉化石
11－12：ヨモギ属，No. 2, PAL. MY1054（x1, 375）. 13：ヨモギ属，No. 2, PAL. MY1053（x1, 375）.　14－15：ヨモギ属，No. 2, PAL. MY1055（x1, 100）.
16－17：ヨモギ属，No. 4, PAL. MY1052（x1, 100）.

7. 材木座町屋遺跡（No. 261）

鎌倉市材木座一丁目144番3

例　言

1　本報は鎌倉市材木座一丁目144番３に於ける住宅建設に伴う発掘調査報告書である。

2　発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施し、調査期間は平成２年１月16日から２月６日までである。

3　本報の執筆は第１・２・３・５章を木村美代治が、第４章を田代郁夫が行い、木村が編集した。資料整理、図版作成に片岡睦枝、継　実のほか、原　廣志の協力を得た。

4　本報に使用した写真は木村が撮影した。

5　調査体制は下記の通りである。

主任調査員　木村美代治
調　査　員　継　実
調査補助員　片岡睦枝
作　業　員　阿部元英、神谷敏一、長島三男、野尻栄、福本寿夫
（社）シルバー人材センター
鎌倉高齢者事業団

6　出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

例言 …… 198
目次 …… 199

本 文 目 次

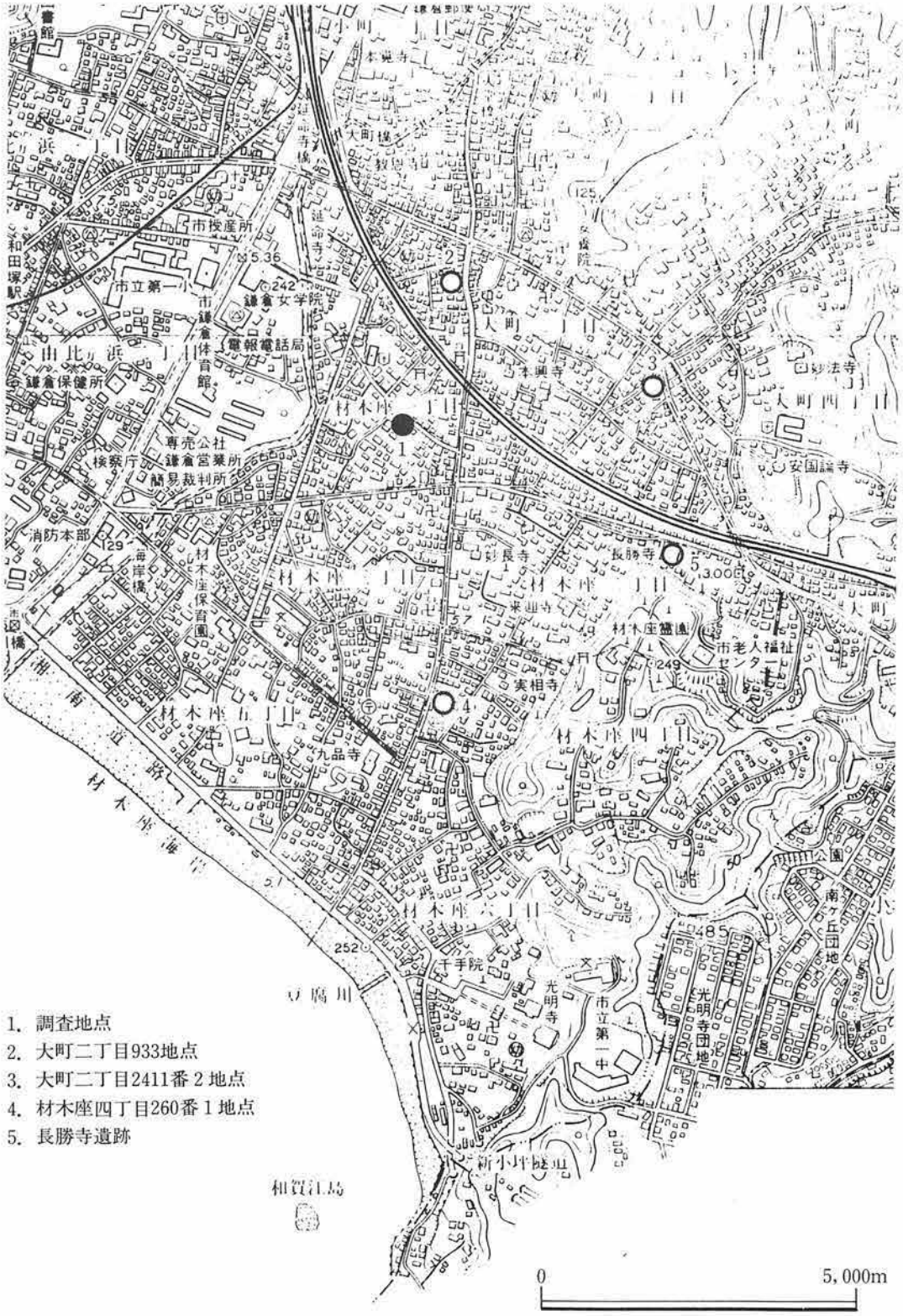
第一章　調査地点の位置と環境 …… 202
第二章　調査の経過 …… 203
第三章　層序と検出された遺構 …… 203
　　層序
　　第1トレンチ　溝1
　　第2トレンチ　溝2
　　井戸
　　柱穴列1
　　柱穴列2
第四章　出土した遺物 …… 207
　　第1トレンチ
　　第2トレンチ
　　井戸
第五章　まとめ …… 213

挿 図 目 次

第1図　調査地点の位置 …… 201
第2図　トレンチ配置図 …… 202
第3図　遺構全測図 …… 204
第4図　柱穴列1・2 …… 206
第5図　第1トレンチ包含層の出土遺物 …… 210
第6図　第1トレンチ遺構内の出土遺物 …… 211
第7図　第2トレンチの出土遺物 …… 212

図 版 目 次

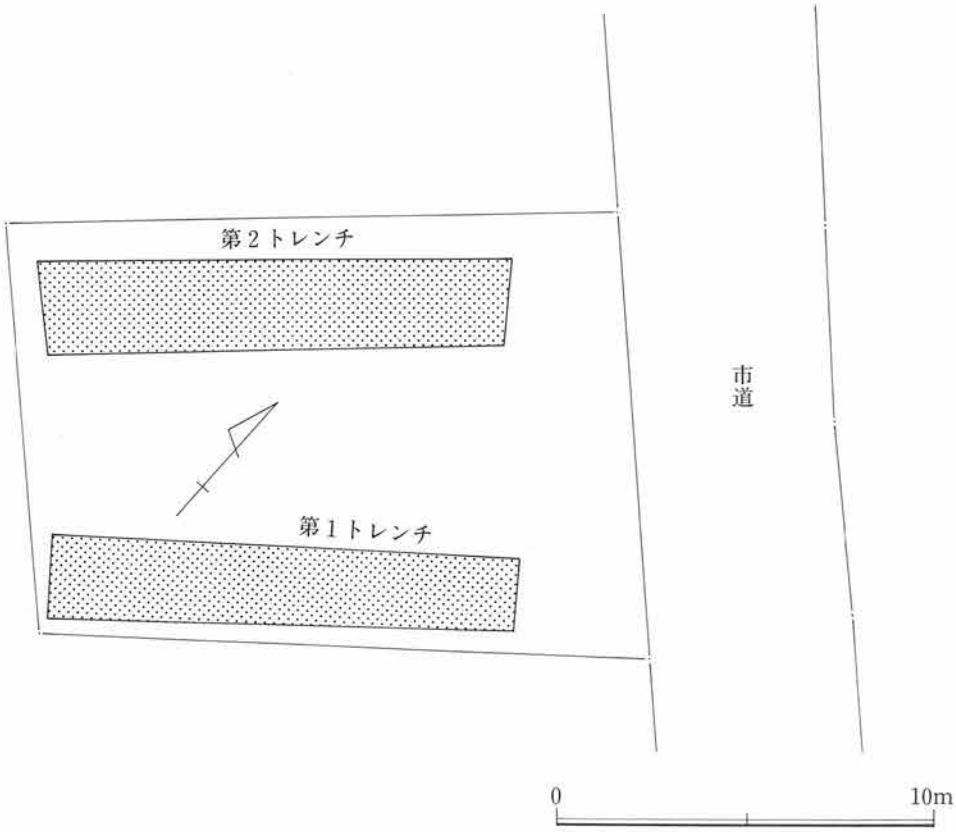
図版 1 …… 214
図版 2 …… 215
図版 3 …… 216
図版 4 …… 217
図版 5 …… 218
図版 6 …… 219


1. 調査地点
2. 大町二丁目933地点
3. 大町二丁目2411番2地点
4. 材木座四丁目260番1地点
5. 長勝寺遺跡
0
5,000m

第1図　調査地点の位置

第一章　調査地点の位置と環境

本遺跡は、鎌倉市材木座一丁目144番３に所在し、若宮大路の東側を南北に走る小町大路と大町大路の交差する米町辻（現在の大町四ツ角）の南方300m程に位置する。このあたり一帯は鎌倉時代から商業の栄えたところといわれ、米町辻はその中心的地域と考えられるところである。大町大路の南、現在の横須賀線の踏切あたりには車大路が東西に走り小町大路と交差するあたりを辻町といい付近には辻ノ薬師（元長善寺の本尊を祀る。）や辻の八幡（由比若宮、元八幡ともいう）がある。『鎌倉志』には、「辻町ハ逆川橋ヨリ乱橋マデノ間ヲ云ナリ」とある。しかしながらこの辻町という呼び名は鎌倉時代からのものではなく後世に車大路と小町大路の交差する辻からおこった呼び名であるらしい。本遺跡の北50mには現在も鶴岡八幡宮の境外末社として祀られている由比若宮（元八幡）が鎮座している。由比若宮は康平六年（1063）源頼義が陸奥の阿部貞任征伐の後石清水八幡宮を勧請し由比郷鶴岡に瑞籬を営んだのに始まり鶴岡若宮と称し、治承四年（1180）源頼朝が現在地の小林郷北山に遷座するまで当地に祀られ、遷座後も当地に社壇の祭祀は続けられ、下若宮と称されたという。鎌倉市内でも数少ない鎌倉幕府開府以前より続く社寺の一つである。



第２図　トレンチ配置図

本遺跡周辺の調査例はあまり多くなく、「米町遺跡（大町二丁目933番地点、大町二丁目2411番２地点）」、「材木座町屋遺跡（材木座四丁目260番１）」などのほか数カ所にとどまり、しかも小規模な調査がほとんどである。本調査も２×10mのトレンチが２箇所とごく限られた面積の調査で遺構の広がりや性格など不明な点が多い。

第二章　調査の経過

発掘調査に先立って平成元年11月29日に実施された試掘調査によって地表下約80～90cmに遺構の存在が確認されたため建設予定地のうち掘削深度が遺構面に達する基礎部分に限り調査対象とし、２×10mのトレンチを建設予定地の南北に２箇所設定した。

調査は地表下70cmまで小型重機を使い、その後人力により遺構面まで掘り下げ遺構の確認を行ったが、残土を場内処分としたため２箇所のトレンチを同時に調査出来ず、南側のトレンチ（第１トレンチとする。）から調査を開始し、第１トレンチの調査終了後北側のトレンチ（第２トレンチとする。）の調査を行うことにした。

調査は平成２年１月17日より掘削を開始したが、砂丘地帯で幅２mのトレンチ調査のうえ度重なる雨と雪のため湧水が多く一晩で遺構面が完全に水没してしまう状況であり、水中ポンプによる排水も砂の崩落やホースの目詰まりによって思うように出来ず完掘出来なかった遺構もある。

第三章　層序と検出された遺構

層序

本遺跡の現地表の標高は約4.6m程で大別して６層の堆積土層が確認された。

第１層　暗褐色砂層

第２層　褐色粘質土層

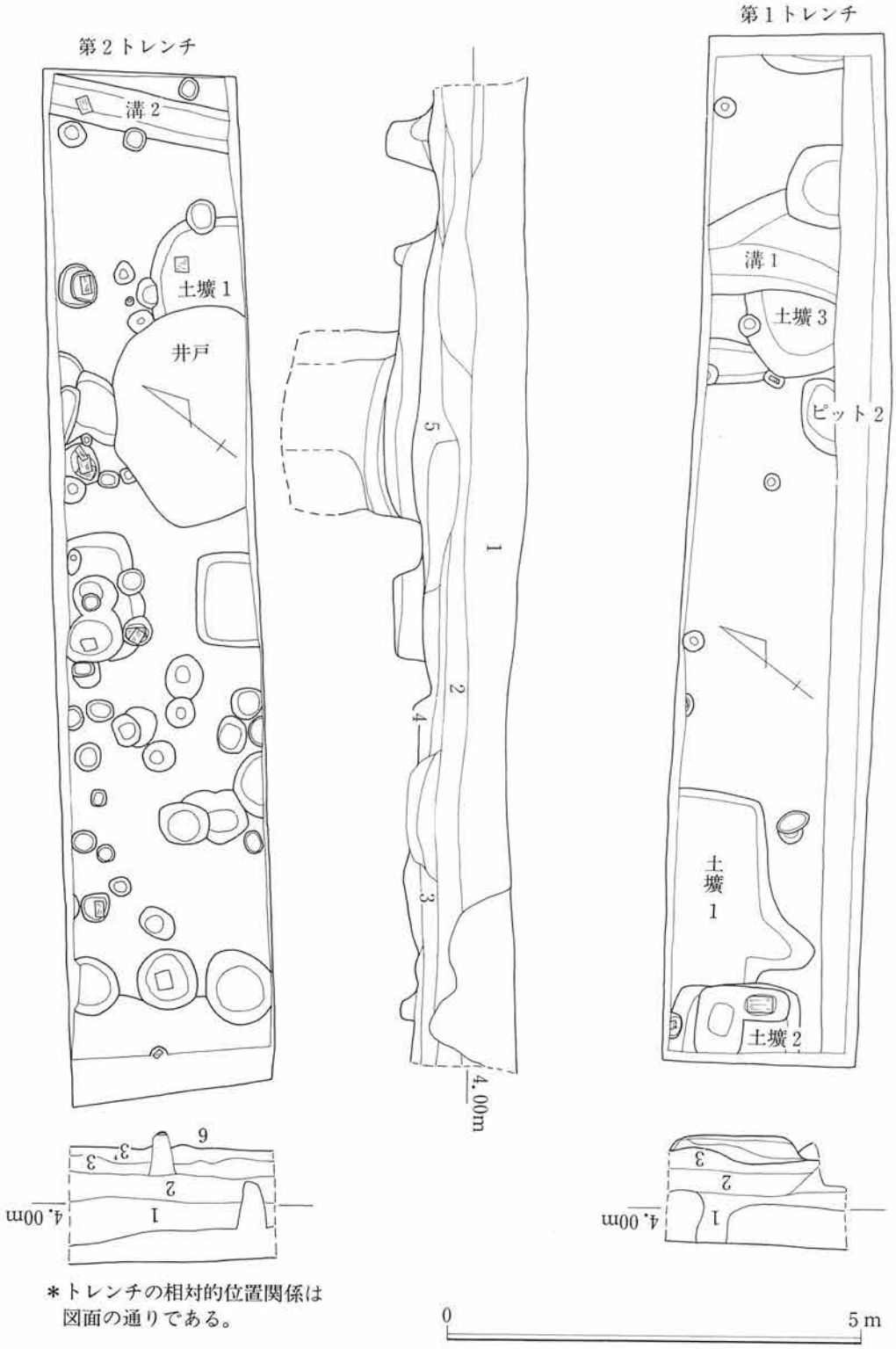
第３層　褐色砂質土層

第４層　褐色粘質土層

第５層　褐色砂層

第６層　黄褐色砂層

第１、２層は表土及び現、近代の整地層、攪乱層で現地表下約70～80cm程堆積する。第３層はごく小さなかわらけ片、土丹粒を大量に混入する遺物包含層である。第４、５層は第２トレンチの井戸付近に広く堆積するが第１トレンチでは検出されなかった。遺構確認面上にうすく堆積する。第６層は黄褐色砂の中世基盤層である。同層の上層部は褐色粘土のブロックが多く混入する。検出された遺構の多くがこの面からの掘り込みであるが、土層観察によれば第３層上面から掘り込まれた柱穴があり、同層上面もある時期の生活面と思われるが湧水が多く十分な遺構確認が行えなかった。



＊トレンチの相対的位置関係は
図面の通りである。

第3図　遺構全測図

検出された遺構

第１トレンチ

第１トレンチの遺構確認面の標高は約3.5mでほぼ水平な遺構面である。トレンチ東側に１条の溝が検出されたほか柱穴14穴、土壙４基が検出された。

土壙１

トレンチ西端に検出された。調査区外に延びるため全容は不明だが東西２ｍ以上、南北70cm以上の方形の土壙で深さは25cm程である。土壙の底部には厚さ５cm程の炭火物を含んだ褐色砂の堆積がみられた。

土壙２

土壙１の西側に検出された。土壙１と切り合っているが新旧は不明である。土壙１の底面レベルより10cm程深く南北１ｍ、東西50cm以上の方形を呈している。覆土には炭化物を多量に含んでいる。

土壙３

トレンチの東側に検出された。直径1.6m、深さ30cm程を測る円形に近い土壙であるが調査区外に延びるため全容は不明である。

溝１

溝１は土壙３により上半分を壊されているがトレンチ内を南北に走る。上幅50～60cm、下幅30～35cm、深さ50cmを測り、断面は逆台形を呈する。覆土は粘性のある褐色土で黄色砂のブロックと炭化物を混入する。溝底の標高は2.94m～3.02m程であり、特に木組等の構造材は確認されなかった。

柱穴

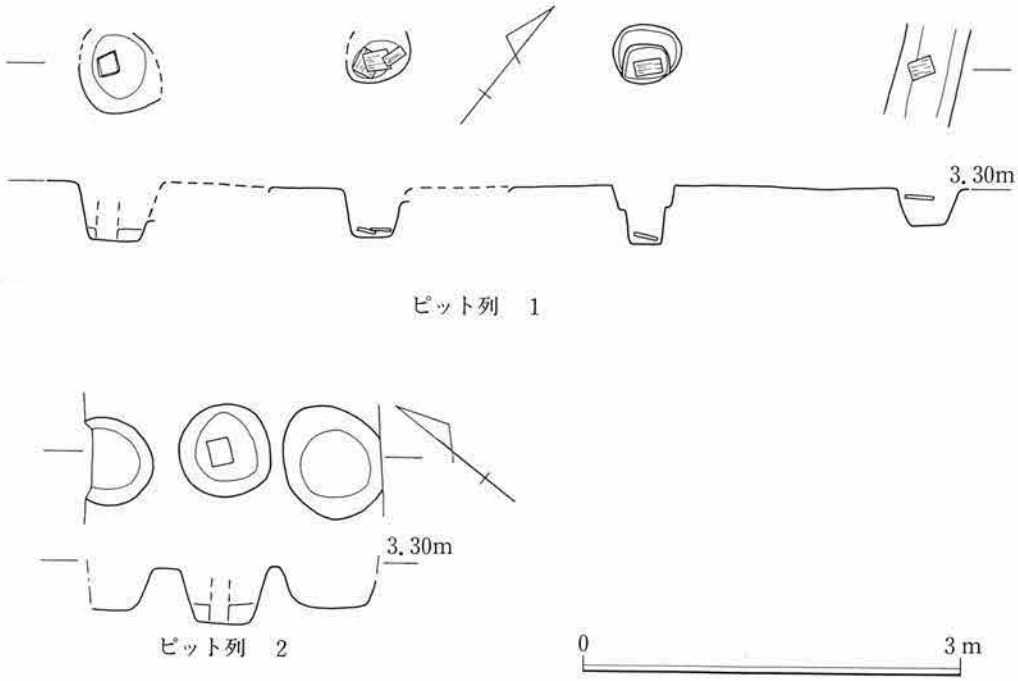
柱穴は全部で14穴検出されたが第１トレンチ内で規則性を見いだせるものはない。このうちトレンチ東側の２穴とトレンチ西端の２穴は他の柱穴に比べ一回り大きい。トレンチ東側の柱穴はトレンチの南壁にかかるが直径約１ｍ、深さ70cmを測り、２穴の芯々距離は2.7mを測る。西端の２穴は長辺60cm、短辺40cmの方形を呈し、深さ50cmを測る柱穴と、これと切り合うように長辺50cm、短辺35cm、深さ50cmの柱穴があり、これには25×15cmの礎板が確認された。この２穴はトレンチ内には対応するような柱穴は確認されなかった。

第２トレンチ

第２トレンチは第１トレンチの北５ｍに設定したトレンチで遺構確認面の標高は3.5m～3.3mで第１トレンチに比べ遺構の密度は高く、溝１条、井戸１基、土壙３穴、柱穴48穴が検出された。

溝２

溝２は上幅60～70cm、下幅30～40cm、深さ60cm程を測り断面は逆台形を呈している。溝底の標高は2.95m程である。この溝は第１トレンチで検出された溝１と同じく南北に造られており、おそらく第１トレンチの溝１と同一のものであろう。両トレンチで検出された溝を結ぶ線の主軸方向は磁北から27度程西に振れている。また後述する柱穴列に伴う礎板がこの溝の覆土を掘り込んで据



第4図　柱穴列　1・2

えられており柱穴列よりやや古い。

井戸

井戸はトレンチ南壁に半分ほどかかりしかも湧水が多く掘り方の壁が砂のため崩落も激しく危険なため完掘はできなかった。掘り方の直径は1.8m程で井戸枠は検出しなかったが、土層観察によれば粗い黄色砂及び貝殻粒を多量に含む黄色砂の裏込めの堆積が認められ、井戸枠の大きさは約1m程と考えられる。覆土を半分ほど掘り上げた時点で調査を断念したが、ボーリング棒による調査ではさらに70cm程覆土の堆積があり底部は非常にしまりある土層であった。確認面からの深さは約1.6m程と推定され、井戸底部の標高は1.6m程であろう。

柱穴

柱穴は全部で48穴検出されたが、このうち僅かでも規則性の認められる柱穴は北壁際に東西に並ぶ4穴（柱穴列1）と西壁際に南北に並ぶ3穴（柱穴列2）だけであった。柱穴列1は4穴からなり直径30～60cmのやや楕円形を呈し、深さは確認面から45cm程で内3穴には15×20cm程度の礎板がみられ、また1穴には15×15cm程の柱の抜取り痕が確認された。各柱間は2.15mと一定しているが東端の溝の覆土を切る礎板のレベルが他に比べやや高い。柱穴列2は直径60cm程の円形を呈し深さは確認面から50cm程を測る。柱間は約90cm程で1穴から15×20cm程の柱の抜取り痕が確認された。この柱穴列は、第1トレンチ西端で検出された柱穴とほぼ一直線上に位置しおそらく柵列状の遺構になるものと考えられる。柱穴列2から西に向かって緩やかな落込みがみられる。

第四章　出土した遺物

第１・２トレンチから出土した遺物は収納箱にして２箱程でありこのうち図示し得たものは75点ほどである。トレンチ別に出土遺物の説明を加えたい。

第１トレンチ包含層の出土遺物（図５）

１・２は瀬戸灰釉平碗の口縁部及び底部片でおそらく同一個体であろう。やや大ぶりで内面及び外面上部まで施釉され淡黄緑色を呈する。胎土は黄白色で粉っぽい。高台部は貼り付高台で高台外側の際と体部の立ち上がり部は回転を利用したナデによって接着されている。

３は東播系（魚住）鉢口縁部破片である。器表及び体部は灰色を呈し微砂を含む砂質の胎土である。

４・５・６は常滑口縁部破片である。いずれも口唇端部に平坦部をもつタイプで４は内方向に、５、６は外方向にわずかに引き出されている。４は片口部である。６は復元口径32cmを測り、内面に自然降灰が霜降り状に付着する。胎土はいずれも石英、長石、小石粒を多く含む。口縁部片ということもあり内面はあまり摩滅していない。

７は渥美甕口縁部破片である。口縁は舌状を呈し、口縁端部上面はやや平坦部が認められる。器内面には白色の降灰がみられ胎土はいわゆる砂目で緻密である。

８、９、10は常滑甕口縁部片である。いずれも口縁部はいわゆるＮ字状を呈する折り返し口縁であるが、８は下方への折り返しは少なく胎土は長石、石英粒を含むが比較的精良である。９は縁帯部の幅が狭く頸部に接着しており、口縁部及び頸部外面には霜降り状の自然降灰がみられる。10は幅広の縁帯を形成するが縁帯部は頸部に接着していない。長石、石英、小石を多く含む。８は遺構面直上出土。

11は備前捏鉢底部片である。６本を１単位とする条線が放射状に施されている。器表面は白濁色の自然釉が厚くかかる。胎土は緻密、堅緻で、径１㎜程の長石、小石粒を微量に含み石英もわずかにみられる。器内面は使用によりよく摩滅している。

12、13、は瓦質手焙り口縁部片である。12は輪花状を呈するものであろう。口縁端部は横方向のナデ、内外ともに縦方向の磨きがなされている。胎土は灰白色で軟質、微砂を多く含む。13は２条の区画沈線の中に花文がスタンプされ、その下方に珠文がめぐる。器表及び胎土は桃白色を呈し軟質で微砂を少量含む。

14は滑石製鍋口縁片である。口縁付近に鍔が作り出されその上方、下方は縦方向の削りによって整形されている。

15、16は砥石の小片である。15は目の細かい仕上げ砥であるが、鋭利な刃物によると思われる断面Ｖ字型の溝が２条認められる。16はやや目の粗い中砥で３面に使用面が認められ、無数の条線がみられる。

17は骨角製小型円盤である。直径約1.9cm、厚さ4mmで断面やや台形を呈するが外形はほぼ正円をなす。中央に径4mm程の穿孔がある。

かわらけは包含層及び遺構確認面から10点ほど出土したが図示できたものは6点である。

18は口径7.3cm、底径4.4cm、器高1.5cmを測り、体部中程に稜をもち口唇部は外方向にわずかに引き出されている。19は口径7.8cm、底径4.8cm、器高1.8cm。20は口径8.2cm、底径5.6cm、器高1.7cmを測り、体部中央にわずかな稜をもち口唇部はわずかに外方向に開く。21は口径7.1cm、底径4.7cm、器高2.0cm。22は口径13.0cm、底径7.1cm、器高3.1cmを測り、体部は緩やかに内湾しながらそのまま直線的に開く。遺構確認面直上出土。23は口径13.3cm、底径7.5cm、器高3.5cmを測る。いずれも底部糸切りでスノコ状の圧痕が見られ内底面には横方向のナデ調整を施している。

第Ⅰトレンチ遺構内の出土遺物（図6）

土壙1

1は瀬戸灰釉行平口縁部片である。内外面に淡緑色の灰釉が施されている。器壁は比較的薄手で胎土は石英粒、微砂を含み灰白色を呈する。

2、3は常滑捏鉢口縁部片である。2はわずかに片口部分にかかる。いずれも口縁端部は平坦で、胎土は石英、長石、小石を多く含む。

かわらけは実測可能な7点を図示した。

4は口径6.0cm、底径3.6cm、器高1.8cmで体部の立ち上がりは直線的で内底面には雑な横方向のナデが施されている。5は口径8.8cm、底径6.3cm、器高1.8cmで緩やかに内湾しながら立ち上がり体部上方は直線的である。体部立ち上がりはやや肥厚し断面三角形を呈する。6は口径12.6cm、底径7.8cm、器高2.9cmで体部立ち上がりは直線的で体部中程にわずかな稜をもち口唇部は外側へ開く。7は口径12.0cm、底径7.0cm、器高3.3cmで共に体部は緩やかに内湾し内底面に横方向のナデが認められる。8は口径11.4cm、底径6.8cm、器高2.9cmでやや薄手である。9は口径14.1cm、底径8.4cm、器高3.6cm。10は口径13.7cm、底径8.2cm、器高3.4cmで体部が緩やかに内湾しながら立ち上がるいわゆる薄手のタイプであるが胎土は微砂を含み粉っぽい。11は口径14.1cm、底径8.2cm、器高3.2cmを測る。

土壙2

12は常滑甕口縁部破片である。N字状を呈する折り返し口縁で縁帯部は幅2.5cmで頸部には接していない。胎土は長石、石英を多く含み焼成は良い。13は常滑甕底部片で胎土は長石、石英、小石を多く含む。

14は瓦質手焙り底部片である。底部は砂目で胎土にも多く砂を含む。器表は黒色、胎土は赤褐色を呈する。

かわらけは5点が図示し得た。

15は口径7.8cm、底径5.6cm、器高1.7cm。内面立ち上がりが肥厚し断面三角形を呈し、内底面に

横方向のナデが見られる。16は口径13.4cm、底径6.9cm、器高3.4cm。17は口径13.7cm、底径8.0cm、器高3.6cm。体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり口唇部はやや外方向に引き出されている。18は口径13.2cm、底径7.4cm、器高3.3cm。19は口径13.2cm、底径7.9cm、器高3.8cm。いずれも薄手精製のタイプで体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり直線的に開く。内底面には横方向のナデがみられる。

この他に土壙3、ピット2、溝2から若干の遺物が出土している。

20は青磁折縁の鉢口縁部破片である。釉は淡青色で厚く、胎土は灰白色で粘性がある。21は土器質手焙り底部片で胎土に砂を多く含み焼成はあまく軟質である。器表及び胎土は淡褐色を呈する。22は口径14.3cm、底径6.6cm、器高3.2cmを測る。体部は直線的で、内底面はナデがみられる。以上3点ピット2出土。

23は口径12.6cm、底径7.2cm、器高3.3cm。体部上方にわずかに稜がみられる。土壙3出土。

24は口径12.2cm、底径6.8cm、器高3.2cm。25は口径8.2cm、底径5.2cm、器高1.7cm。小片である。体部中程にわずかな稜をもつ。以上2点溝2出土。

第2トレンチ出土の遺物（図7）

包含層出土の遺物

1は青磁劃花文碗の口縁小片である。体部から口縁にかけて直線的で、内面に蓮華文を配し、釉は淡緑色で胎土は灰色を呈し堅緻である。

2、3は同一個体で青磁蓋付き小壺であろう。口縁部付近に牡丹唐草文の一部が認められ、釉は灰青色、胎土は灰褐色を呈する。蓋受け部、高台畳付き、内底面は露胎である。

4は瀬戸灰釉卸し皿口縁部破片である。口縁端部及び内面は淡緑色の釉が施され外面は拭き取られている。内面下半にわずかに卸し目がみとめられる。

5は常滑捏鉢底部片で体部の立ち上がりは底部との接合の際のヘラ痕が顕著である。

6は瓦質手焙りの小片で菊花のスタンプがみられる。

7は口径7.6cm、底径5.3cm、器高1.4cm。8は口径13.2cm、底径7.4cm、器高3.1cmを測るかわらけである。共に体部は内湾気味に直線的に引かれ、8は口唇部に至ってやや外側に引き出されている。

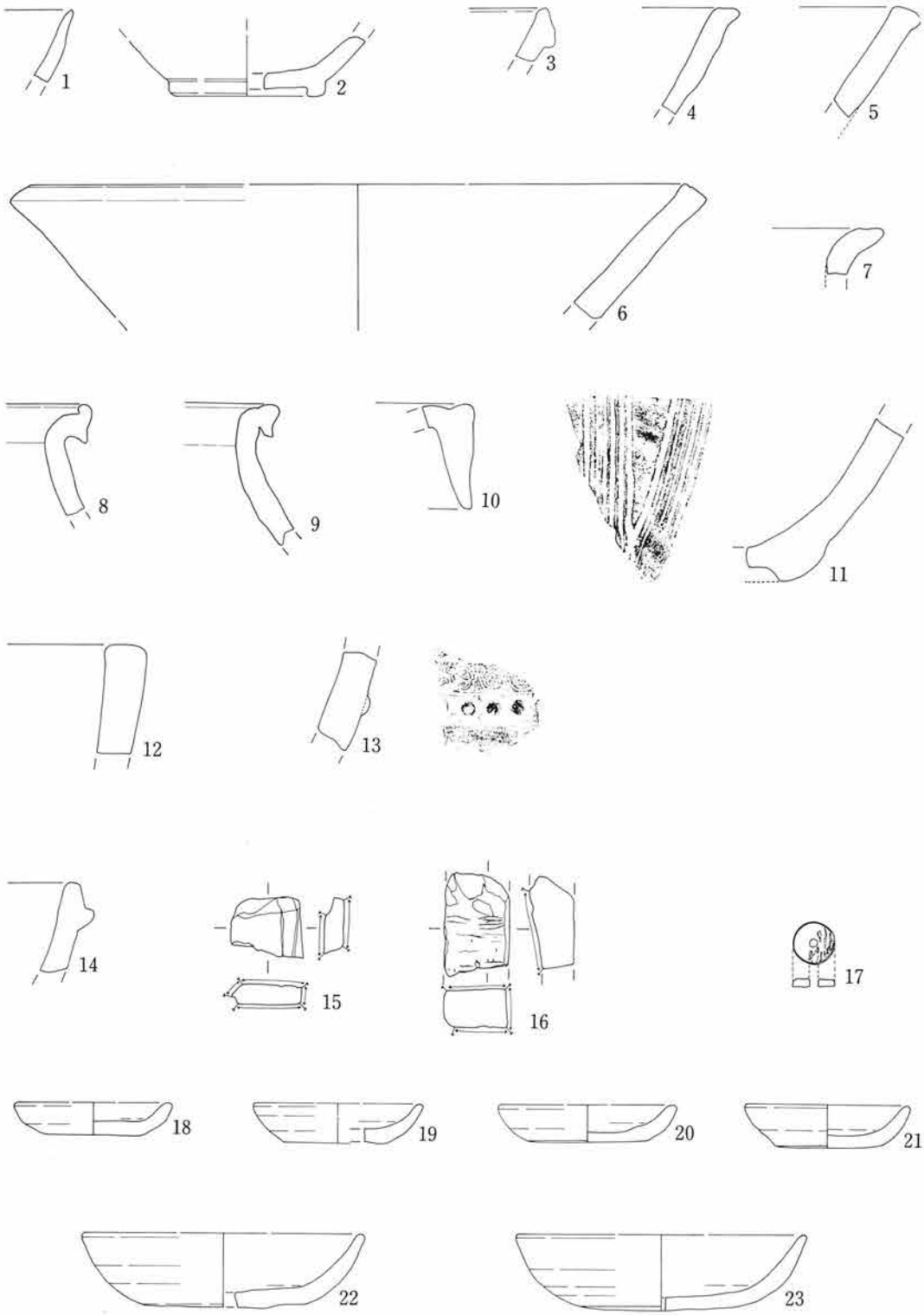
9は土錘である。長さ4.5cm、最大径2.6cm、穿孔部径0.9cmを測り、素焼であるがやや硬質で暗褐色を呈する。

土壙1

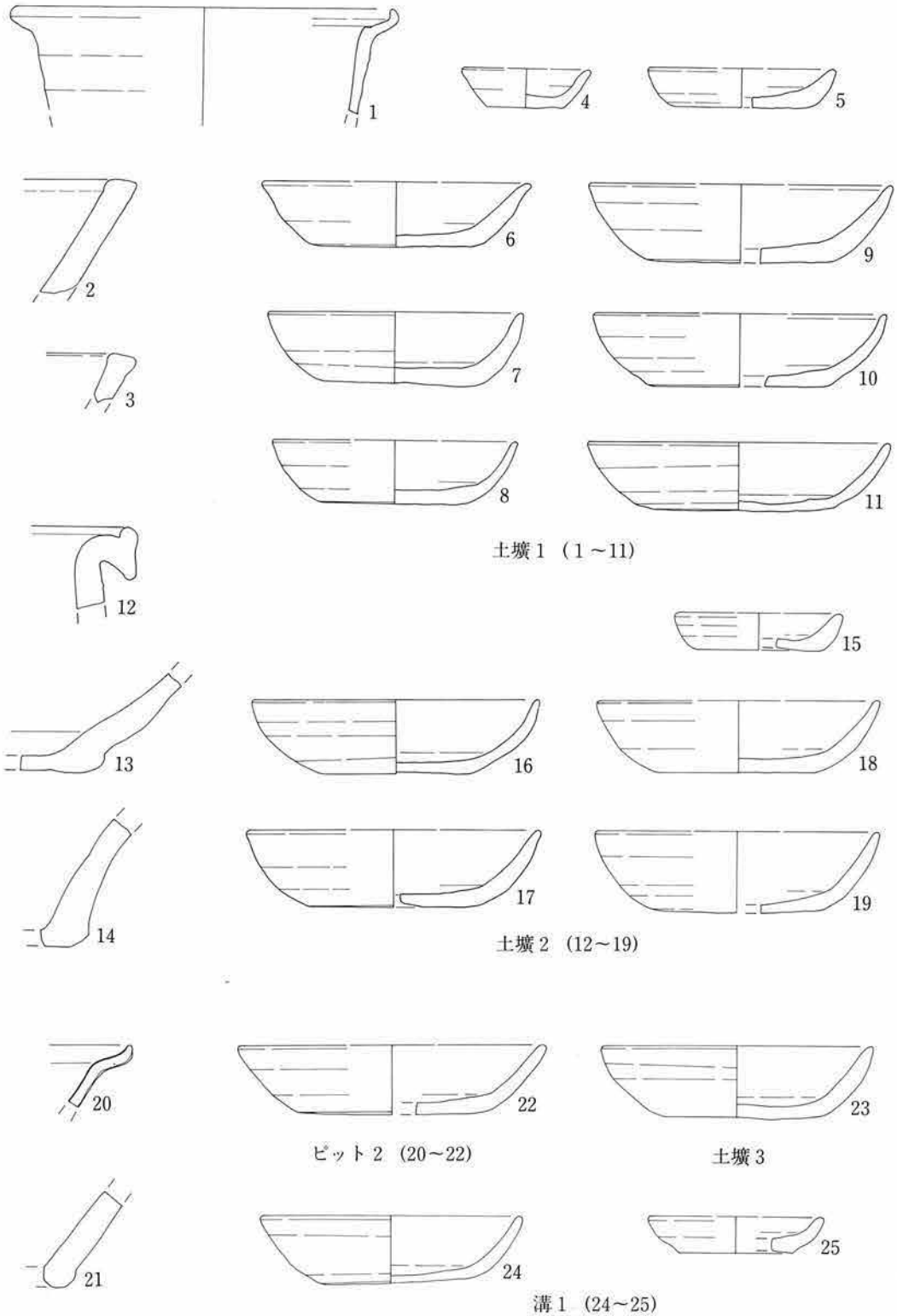
11は山茶碗窯系捏鉢である。内面には薄く自然の降灰がかかり外面には一部淡緑色の自然釉がかかる。胎土は長石、石英小石を含み灰色を呈する。常滑の製品であろう。

土壙1から出土したかわらけは8点でうち大型の4点は手捏ねである。

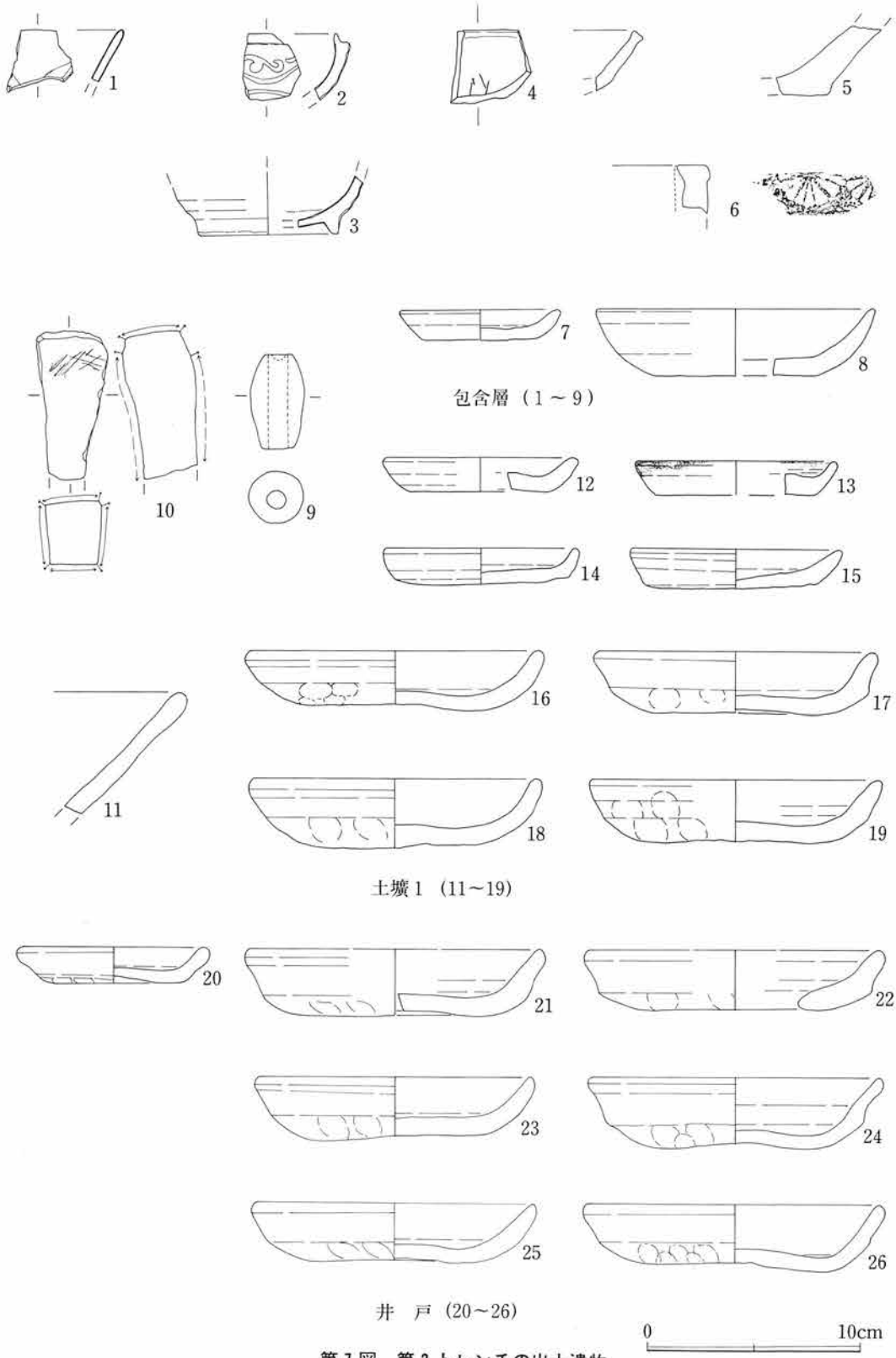
12は口径9.2cm、底径6.8cm、器高1.6cm。13は口径9.5cm、底径7.6cm、器高1.6cm。14は口径9.2



第５図　第１トレンチ包含層の出土遺物



第６図　第１トレンチ遺溝内の出土遺物



第7図　第2トレンチの出土遺物

cm、底径8.1cm、器高1.7cm。15は口径10.0cm、底径8.2cm、器高1.8cmでいずれも糸切りの小型のかわらけで15には底部にスノコ圧痕がみられる。古手のタイプで内底にいわゆる横方向のナデは認められないがまったくの無調整ではない。

16は口径14.1cm、器高2.5cm。17は口径13.4cm、器高2.9cm。18は口径13.8cm、器高3.2cm。19は口径13.8cm、器高2.9cmを測る手捏ねのかわらけで17、19は底部手捏ね部分と体部の境に明確な稜がみられるが19、18はあまりはっきりしない。

井戸出土の遺物

20は口径9.1cm、器高1.7cm。21は口径14.1cm、器高3.1cm。22は口径14.1cm、器高2.8cm。23は口径13.2cm、器高3.0cm。24は口径13.9cm、器高3.4cm。25は口径13.4cm、器高2.8cm。26は口径14.3cm、器高2.8cmを測る。いずれも手捏ねかわらけで23、25、20は手捏ね部と体部の稜が明瞭でない。

第五章　まとめ

今回の調査の対象面積は2つのトレンチを合わせても40m²に過ぎず、また狭いが故に湧水も多く一晩で遺構面が完全に水没してしまう状況の中での調査であった。検出した遺構検出面は地山上の一面のみで遺構の新旧は切り合いの確認されたもの以外不明である。また幅2mのトレンチ調査のため検出した遺構もその全容をつかめるものはなく部分的なものである。その中で遺構の性格を考え得るものとしては、溝、柱穴列1・2などがある。溝は掘り方のみで構造や構築状況などは不明だが1、2トレンチを通じて検出されさらに南北に調査区外に続いていると思われる。この様な小規模な溝は、町屋の小区画の境や路地的な小路に伴う側溝などに見られ、その性格は一様ではないが、柱穴列と共に本遺跡周辺に於けるある時期の区画の一端を示すものといえよう。

また柱穴列1や2はその全容は不明であるが、旧市街地の調査で検出されているようなある程度の規模をもつ掘立柱建物や柵列状の遺構になるものと考えられる。

遺構の検出面は地山上の1面のみであるが出土した遺物から考えて、14世紀前半から中頃にかけて削平されたものと考えられる。また検出された遺構も大部分がこの時期のものと考えられるが、同一面上で確認された第2トレンチ土壙1及び井戸は出土したかわらけの形態から考えて13世紀前半にさかのぼりうる。

図版 1

◀第1トレンチ全景（東より）

▶第1トレンチ土壙1・2（西より）

▶第ートレンチ西壁

◀第ートレンチ溝ー

▶調査開始状況

図版 3

▶第2トレンチ全景（西より）

◀第2トレンチ全景（東より）

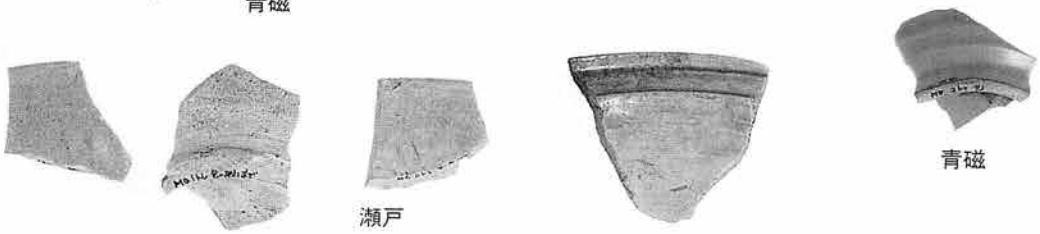
▶第2トレンチ井戸

◀第2トレンチ溝2

▶第2トレンチ西壁
（手前は柱穴列2）

図版 5

青磁



瀬戸

青磁

常滑甕

魚住鉢　渥美甕

備前　捏鉢

手焙り

手焙り　土錘　滑石鍋　砥石

1トレ溝1

2トレ土壙1

2トレ土壙1

2トレ井戸1

1トレ土壙1

包含層

包含層

1トレ土壙1

1トレ土壙1

1トレ土壙2

1トレ土壙3

2トレ井戸1

2トレ井戸1

8. 理智光寺跡（No. 265）

二階堂字稲葉越802番 7 地点

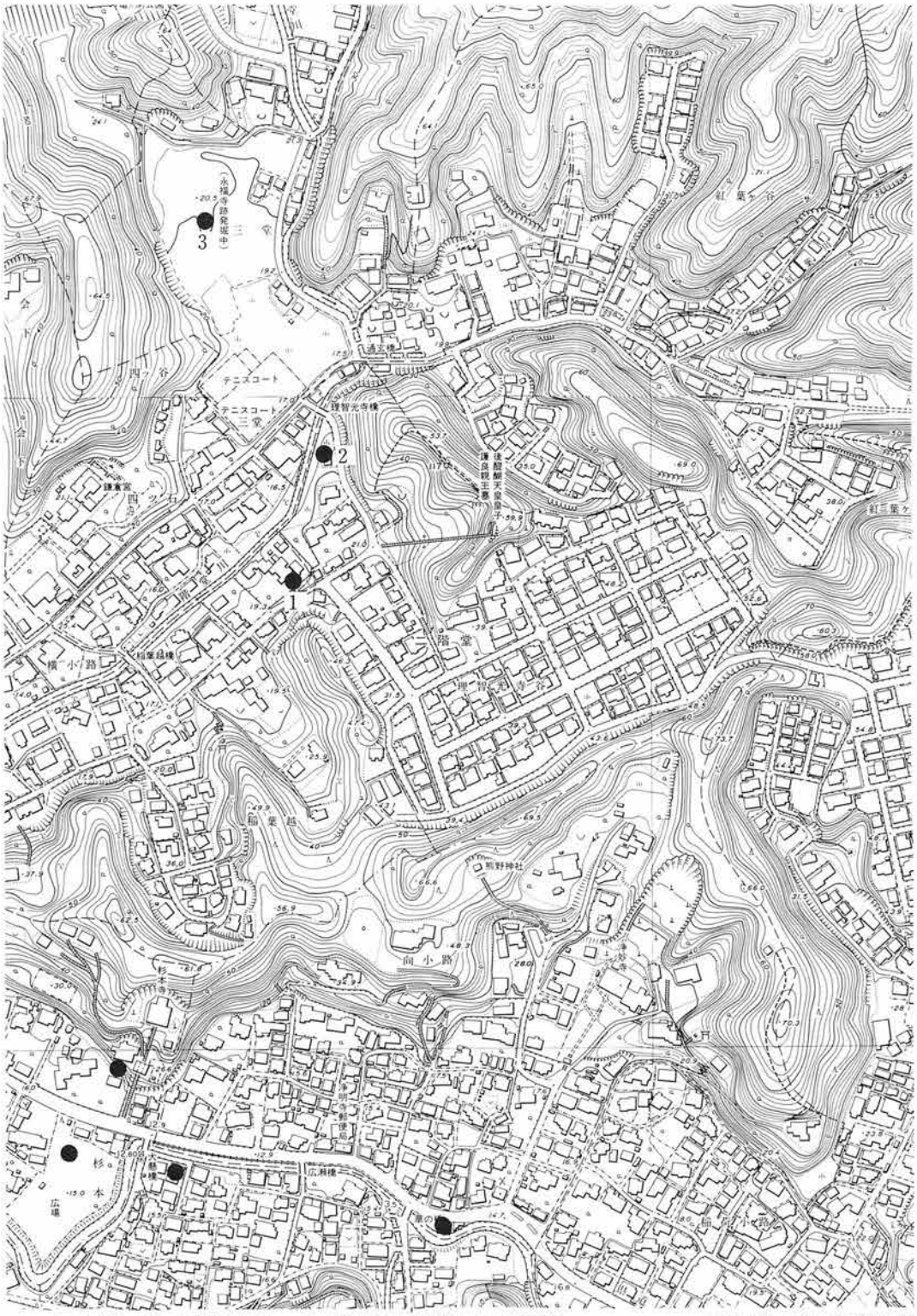
例　言

1．本報は鎌倉市二階堂字稲葉越802番７における専用住宅建設に伴う発掘調査の報告である。

2．発掘調査は国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成２年３月１日から12日までである。

3．本報は鎌倉市教育委員会の指示を受けて、大河内勉・瀬田哲夫が執筆、編集した。また溝手美穂・浦田優子・砂田美紀子の協力を受けた。

4．本報に使用した写真は遺構を瀬田哲夫が、遺物を木村美代治が撮影した。



1. 理智光寺跡（今次調査地点）　2. 理智光寺橋遺跡　3. 永福寺　　丸印はその他の調査地点

第1図　発掘調査地点（1／5,000）

第一章　地理的・歴史的環境（第１・２図）

調査地点は鎌倉市二階堂字稲葉越802番７に所在する。鎌倉市街の東北方にあたり、JR鎌倉駅の東北東約1.8kmに位置する。鎌倉を取り囲む丘陵に近接している。周辺は二階堂川を中心にして支谷が多方向に形成され、尾根筋も複雑に入り組んでいる。調査地点は二階堂川の左岸、理智光寺ケ谷と呼ばれる支谷の開口部に位置する。二階堂川とは15m程離れている。西方の二階堂川対岸には鎌倉宮（明治２年創建）が、近接する東側の尾根上には護良親王の墓と伝えられる石塔が存在する。また既に廃寺となっているが、北方の広い平坦地には永福寺が、南東の支谷（理智光寺ケ谷）

第２図　周辺の地形・昭和30年代（１／10,000）

には理智光寺がそれぞれ存在していた。理智光寺ケ谷内は大規模な宅地造成が行なわれ、現在は住宅地に変貌しているが、もともとは途中で二股に分かれる小支谷により形成された谷戸で、幅が50m弱、最深部までの長さ約200m強を測る。

今次調査地点の北約100mに位置する理智光寺橋付近（第1図の2の位置）では、1973年に発掘調査が実施されており（註1）、根石を用いた大型礎石列や瓦列などが検出され、永福寺の鐘楼跡（2間四方）と推測されている。またその南には永福寺の寺域を示すと思われる土塁も存在していることが確認された。永福寺の寺域はこの土塁と二階堂川及び鎌倉宮の裏山で区画される範囲と推定されている（註2）。今次調査地点は永福寺の寺域には近接するが、その外側にあたると判断され、地形的に見て理智光寺境内に入るものと思われる。理智光寺境内は谷戸全域が相当し、前面は二階堂川まで含まれるのであろう。永福寺との境は土塁と二階堂川ということになる。

理智光寺は真言密教系の寺院で、開山は願行房憲静（永仁3年没）である。山号は五峰山。南北朝頃までは理智光院と呼称されており、天文年間以降に理智光寺と称するようになった。天文年間頃には既に寺勢が衰微し、浄光明寺の支院である慈恩院が兼務または管理していた。江戸時代には東慶寺末の尼寺となり、阿弥陀堂のみが谷戸の入り口付近にあったと言われる。鎌倉宮造営に前後して廃絶し、本尊の阿弥陀如来坐像は覚園寺薬師堂に移された。『太平記』には建武2年（1335）、中先代の乱に際して殺された護良親王の首級を、理智光寺の長老が厚く葬ったことが記されている。

（大河内勉）

（註1）鎌倉市教育委員会「理智光寺橋遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ　1983年3月

（註2）鎌倉市教育委員会『国指定史跡永福寺跡　保存管理計画策定書』　1978年3月

第二章　調査経緯

本調査は鎌倉市教育委員会が実施した試掘調査の結果を踏まえ、平成2年3月2日より重機を導入して調査を開始し、3月13日に器材を撤収して終了した。

試掘調査の結果により、現地表面から約70cmは近、現代の客土と判断され、重機により表土除去を行ない、以下、既定掘削深度まで人力により掘削を行なった。また、建物基礎杭部分に限っては掘削深度を現地表面から約1.4mとし、東西2.0m、南北1.8mのトレンチを設定し、人力により掘削を行なった。

調査にあたり、調査地点付近に適当な基準点がないため、任意に4.0m間隔の方眼を設定し、東西軸に算用数字を、南北軸にアルファベッドを付し、各々の方眼区画の名称には、その東北角の軸線交点を充てた。尚、南北軸線と真北との偏差はN—33°53′—Wである。

以下、調査日誌の抜粋を記す。

3月2日（雨）重機による表土除去。事務所（テント）設営。

3月3日（曇り）人力による掘削開始。

3月5日（曇り）A—3グリット土丹（凝灰質シルト岩）列を検出。東西に12個ほど並ぶ。

3月6日（曇り）調査区南部にかかる2箇所の試掘トレンチを掘りあげる。

3月7日（晴れ）西トレンチを設定する。二階堂川に向かい厚く堆積する土層を検出する。

3月8日（晴れ）東トレンチを設定する。中層あたりから常滑、かわらけが出土する。

3月9日（晴れ）平面図、土層堆積図を作製。

3月10日（晴れ）全景及び個別写真撮影。

3月13日（晴れ）器材撤収。作業終了。　（瀬田哲夫）

第三章　検出遺構（第3図）

本調査は発掘調査対象面積が狭く、また、掘削深度も比較的浅く設定されており、調査面積の半分以上が現代の攪乱をうけ、遺跡を平面的に捉えることは不可能であった。このため、調査区にかかる2箇所の試掘トレンチと、基礎部分に設定した東、西2箇所の深掘りトレンチによる遺構確認と堆積土層の観察に調査の主眼をおいた。

1．石列遺構

A—3グリットにおいて東西約5mにわたって土丹列が検出された。使用している土丹は南側をほぼ直線的に切った面を並べる。土丹の大きさは20～50cmであり、ほぼ水平に据えられている。上面はほぼ平らであるが、土丹を積さねていたかは不明である。東端は現代攪乱により削平されており、西端は調査区西外につづく。

2．試掘調査5T.P.

D—2グリットに設定されたトレンチである。

表土を除去すると20.30mで土丹粒を混入する灰褐色粘質土、20.10mで岩盤が検出される。岩盤面上には4口の柱穴と2条の南北溝が検出された。岩盤面及び溝は北（二階堂川）に向かって落ちこむ。また、検出された堆積土層も同様に北へ向かってゆるやかに傾斜する。

3．試掘調査6T.P.

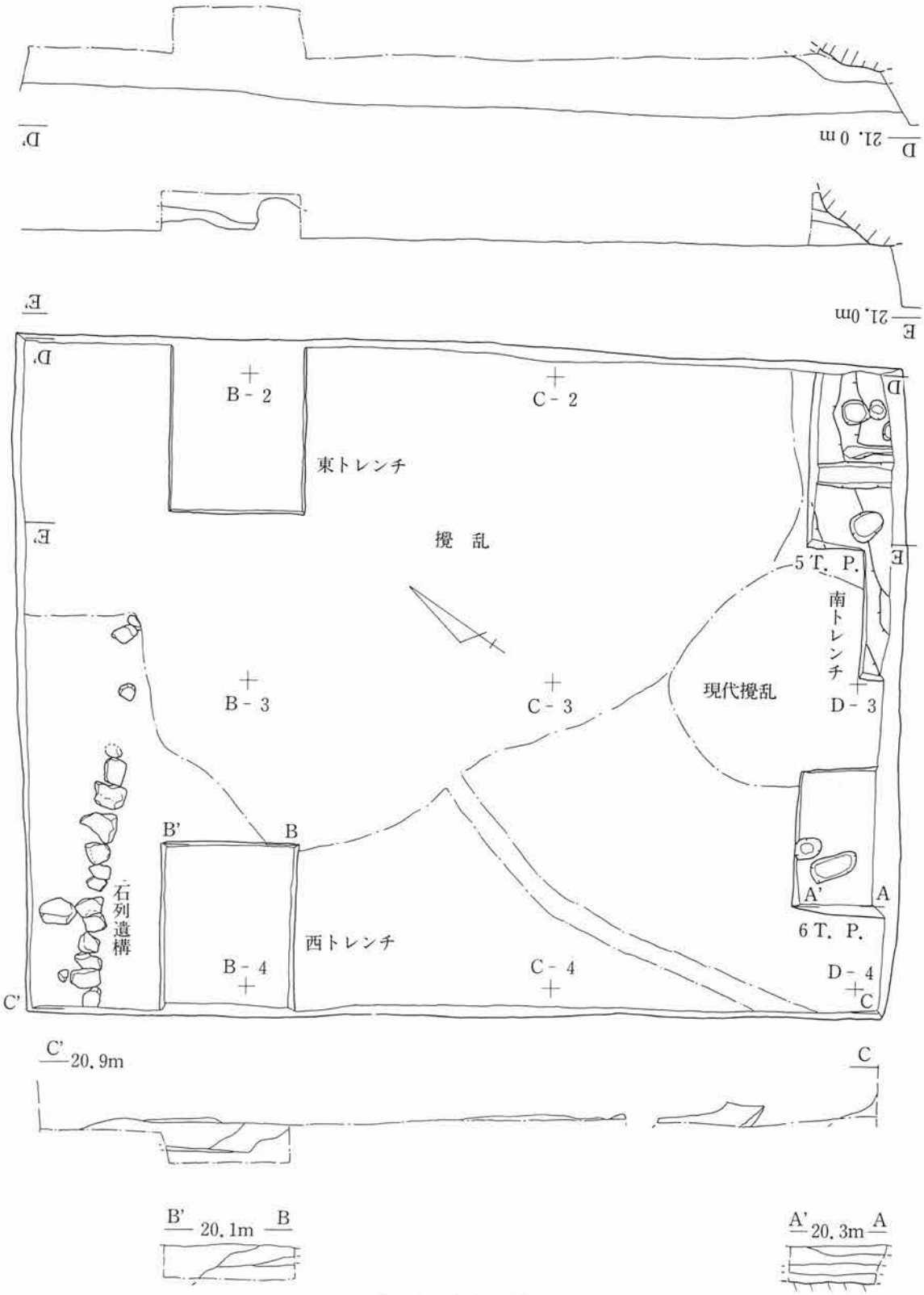
D—3グリットに設定されたトレンチである。

表土を除去すると20.10mで土丹粒を多量に含んだ灰褐色粘質土を検出した。この層はほぼ水平に3層に区分することができる。19.70mで岩盤を検出する。岩盤面はほぼ水平であり、2口の柱穴を検出した。5T.P.で検出された柱穴との関係は不明であり、同様の岩盤落ち込みは検出されなかった。

4．東トレンチ

B—2グリットに設定したトレンチである。

表土を除去すると20.10mで土丹粒を多量に混入する灰褐色粘質土を検出した。この層は上下2層に分けることができ、下層の土丹は大きく、瓦、常滑片を含み、北（二階堂川）に向かいゆるや


東トレンチ
撹 乱
5 T. P.
南トレンチ
現代撹乱
B - 2
C - 2
B - 3
C - 3
D - 3
B - 4
C - 4
D - 4
B'
B
A'
A
C'
C
D'
D
E'
E
石列遺構
西トレンチ
6 T. P.
21.0m
20.9m
20.1m
20.3m

第3図　全体図（1／80）

かに傾斜する。

5．西トレンチ

B—4グリットに設定したトレンチである。

表土を除去すると20.10mで土丹粒を混入する褐色粘質土、及び、灰褐色粘質土を検出する。前者は北（二階堂川）へ向かい大きく傾斜し、後者は3層に区分することができ、ゆるやかに北へ傾斜する。

（瀬田哲夫）

第四章　出土遺物（第4・5図、図版7）

本調査で出土した遺物の量はテンバコ1箱弱程でかなり少なく、出土遺物の全体的な傾向は捉えずらいが、瓦の占める比率がやや高いようである。漆器・木製品類は全く出土していない。なお、本文中の口径・底径の数値はすべて復元推定値である。出土位置を記していないものは、トレンチ以外で調査深度まで掘り下げる途中で採集した遺物である。

1．舶載磁器（1・2）

1・2は青白磁梅瓶の胴部片である（別個体）。1には牡丹唐草文、2には渦巻き文が彫られている。2点とも内面には轆轤挽きの凹凸が巡るが、1の方が強い。ともに釉は水青色を呈する。素地は白色で黒色微粒子をわずかに含んでいる。

2．瀬戸（3～5）

3は卸し皿である。口径15.5cm、底径7.0cm、器高3.3cm。体部は緩やかな角度で直線的に立ち上がるが、口端部で肥厚になり上面は凹む。体部外面は轆轤目が強い。内底面には篦で付けられた直交する条線が見られる。外底面は回転糸切りのまま未調整。釉は灰釉で内外面とも体部中位付近まで施される。胎土は灰褐色で比較的精緻。

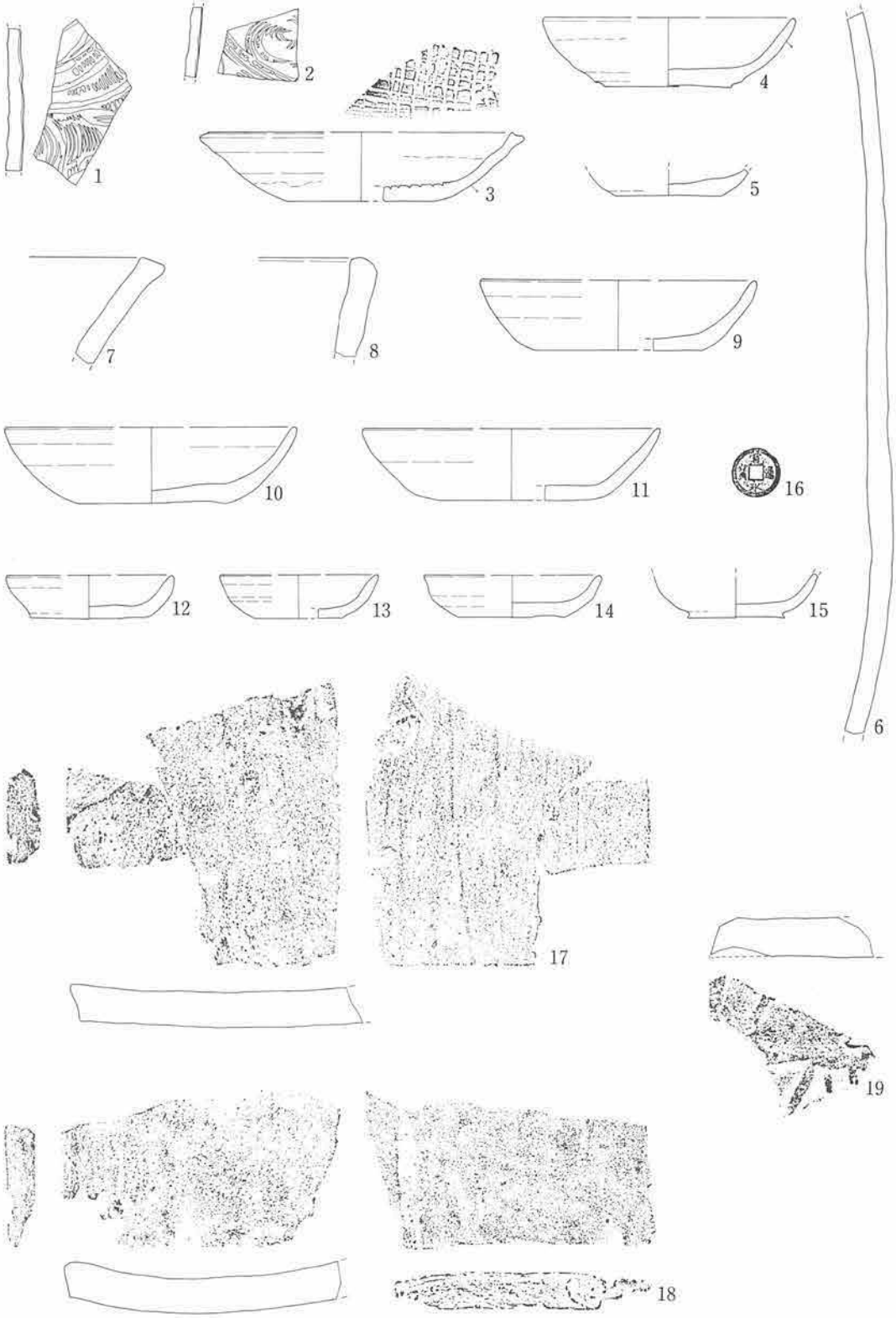
4は小皿である。口径12.0cm、底径5.9cm、器高3.3cm。体部は内彎して立ち上がる。底部は雑な回転糸切りのため、一部総高台状を呈し傾いている。釉は灰釉で内面と口縁部外面に施している。内底面には重ね焼きの際の目跡が見られる。胎土が灰白色で精緻。

5は入子である。底径5.0cm。外底面は篦削りが行なわれている。内面にはわずかに降灰を被る。胎土は灰白色で精緻。

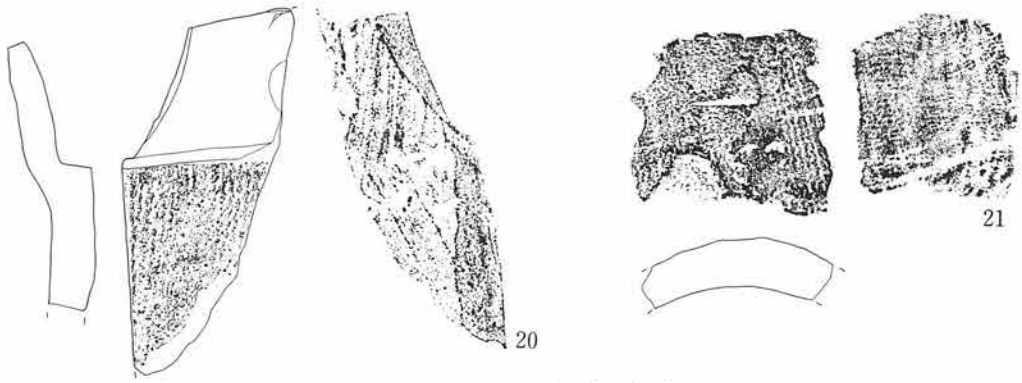
3．常滑（6・7）

6は大甕の胴部片である。図には断面図を掲載したが、胴部のどの部位かはっきりしないため、実測図は便宜的に縦に置いている。3段分の輪積みが観察され、内面には指頭調整・なでが行なわれる。胎土は微砂粒を多く含み、胎芯は灰黒色を呈する。焼成は堅致。東トレンチ出土。

7は捏鉢の口縁部片である。口端部は外方に張り出している。口縁部は二次焼成を受けているようである。胎土は灰黒色で微砂粒を多く含んでいる。東トレンチ出土。



第4図　出土遺物（1／3）



第5図　出土遺物（1／3）

4．手焙り（8）

8は瓦質輪花形手焙りの口縁部片である。篦で器壁を押し込んで輪花形に作り上げている。器表の剝離が激しく、調整は不明瞭であるが、内面には篦磨きの痕がわずかに観察される。胎土は微砂粒・雲母を含んでいる。焼成良好で堅致。西トレンチ出土。

5．かわらけ（9～15）

すべて轆轤成形で、9～11が大型、12～15が小型になる。すべて東トレンチ出土。

9は口径13.1cm、底径8.0cm、器高3.4cm。体部は比較的短めで内彎して立ち上がる。口縁部外面は灰黒色に変色しており、灯明皿として使われた可能性がある。

10は口径13.9cm、底径7.0cm、器高3.6cm。口径対底径比が大きい。体部は長めで内彎して立ち上がる。焼成良好。

11は口径14.1cm、底径8.0cm、器高3.4cm。やや大振りである。体部は長めで内彎気味に立ち上がる。焼成良好。

12は口径8.0cm、底径5.5cm、器高2.1cm。体部はやや長めで直線的に立ち上がり、外面口縁下に弱い稜が巡る。内底面は外周部の強いなでのため、中央部が盛り上がっている。底部は幾分総高台状を呈する。

13は口径7.5cm、底径4.1cm、器高2.1cm。体部は長めで外面中位に強い稜が巡り、内彎して立ち上がる。

14は口径8.4cm、底径5.0cm、器高2.0cm。体部は長めで外面中位に強い稜が巡り、内彎して立ち上がる。

15は底径4.7cm。口縁部をわずかに欠失している。体部は内彎して立ち上がる。底部は糸切り位置が低いため、総高台状を呈する。

6．銭貨（16）

16は近世の和銭「寛永通宝」である。背文は見られない。直径2.3cm。

7．瓦（17～21）

17～19は平瓦、20・21は丸瓦である。21を除き西トレンチ出土。

17は凹・凸面が縦位のなで、側面には篦削りが行なわれている。凹・凸面には微砂粒が付着している。淡橙色を呈し、胎土は小砂粒を比較的多く含んでいる。

18は凹・凸面がなで、側面・端面及び凹面側縁には篦削りが行なわれる。凹・凸面とも微砂粒が多量に付着している。表面は灰白色、胎芯は淡橙色を呈し、胎土は小砂粒を含んでいる。

19は凸面に平行及び斜方向の条線を組み合わせた叩き文様が見られる。凹・凸面とも微砂粒が付着している。表面は黒色、胎芯は白色を呈し、胎土は砂粒を含んでいる。

20は凸面本体部分は縄目の叩き後軽い磨り消し、玉縁部と段差部分はなで、凹面は本体・玉縁部ともなで、側面・端面・側縁部は篦削りがそれぞれ行なわれている。表面は灰黒色ないし灰色、胎芯は灰色を呈し、胎土は砂粒を比較的多く含んでいる。

21は凸面に縄目の叩き後軽い磨り消しが行なわれ、凹面には布目痕が見られる。凸面は二次的に使用されたためか、擦られて平滑になっている。灰色を呈し、胎土は微砂粒等を含んでいる。

（大河内勉）

第五章　まとめ

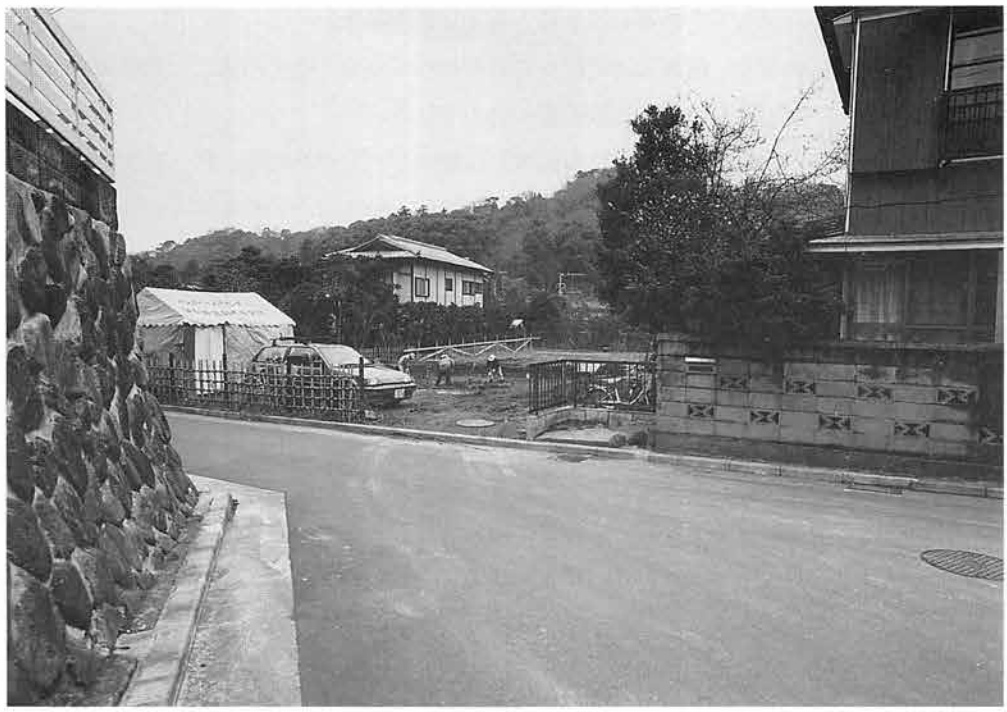
本調査は発掘対象面積も狭く、また調査深度も浅く設定されていて撹乱も多く、十分な成果が挙げられたとは言いがたい。発掘調査では中世地業層の最上部及び一部岩盤面を調査したのみでそれ以下の状況はほとんど摑めなかった。そのため理智光寺との関連も明確ではない。

5T.P.で検出された岩盤は二階堂川へ向かい傾斜し、6T.P.においてはほぼ水平であった。これは本調査地点が理智光寺ケ谷の開口部に位置するために、岩盤が二階堂川に向かって複雑に入りくんでいたものと想定できる。検出された柱穴、溝の性格は不明である。また、堆積土層はいづれも二階堂川に向かって傾斜している。これは、平場を設けるために土丹を混入した粘質土によって大規模な造成を行なったためであろう。

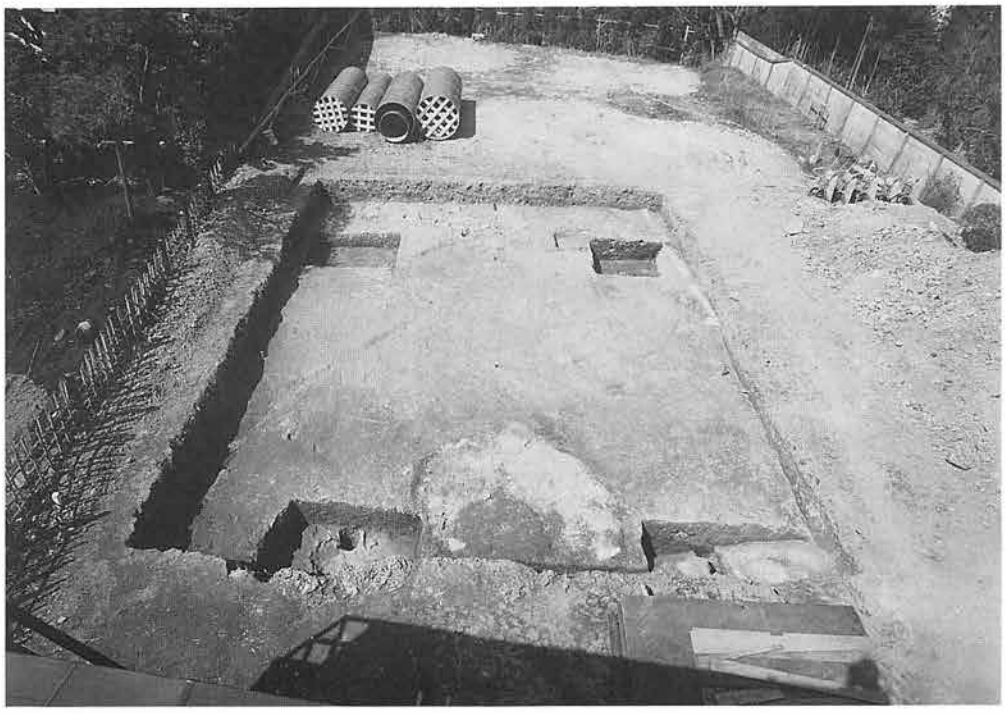
出土遺物も少量のため、全体的な傾向は知り得ないが、瓦が比較的多いのが注目される。瓦についてはどこで使われたのか同定するのは難しいが、最も可能性が高いのは永福寺であろう。出土した遺物はほとんどが中世に属するもので、それ以外には近世の「寛永通宝」が1点見られたのみである。中世ではかわらけ・瀬戸等から判断すると14世紀～15世紀前半の年代が与えられよう。

（大河内勉・瀬田哲夫）

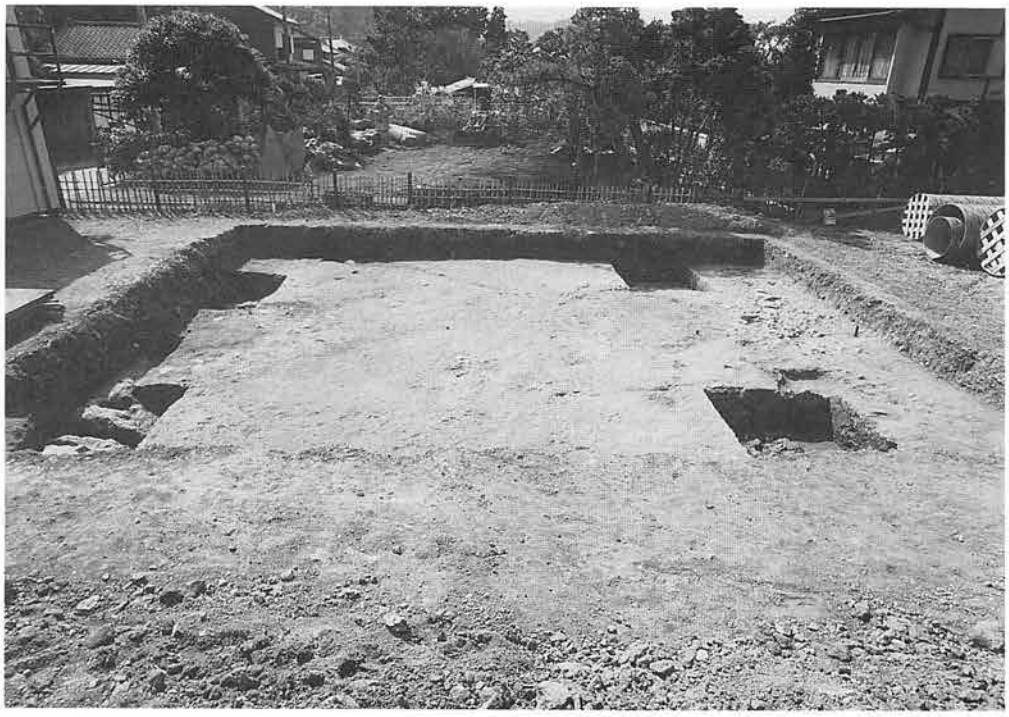
図版 1



1. 発掘調査地点近景



2. 調査区全景（南東から）



1. 調査区全景（北東から）

2. 石列遺構

図版 3

1. 5T.P.及び南トレンチ

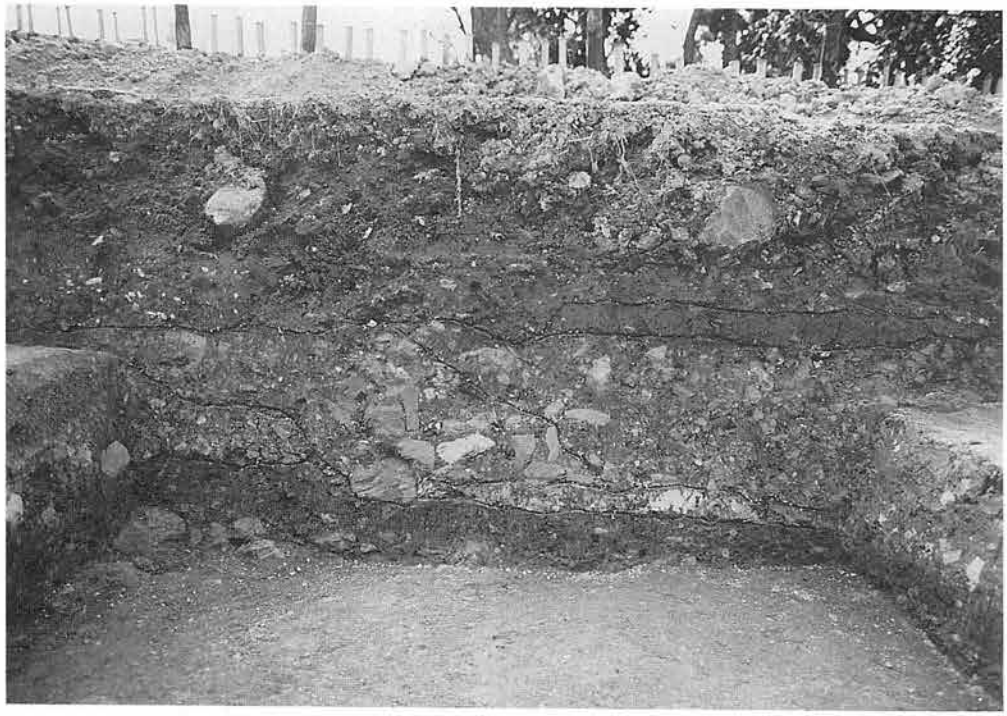
2. 同上・セクション

1. 6T.P.

2. 同上・セクション

図版 5

1. 西トレンチ

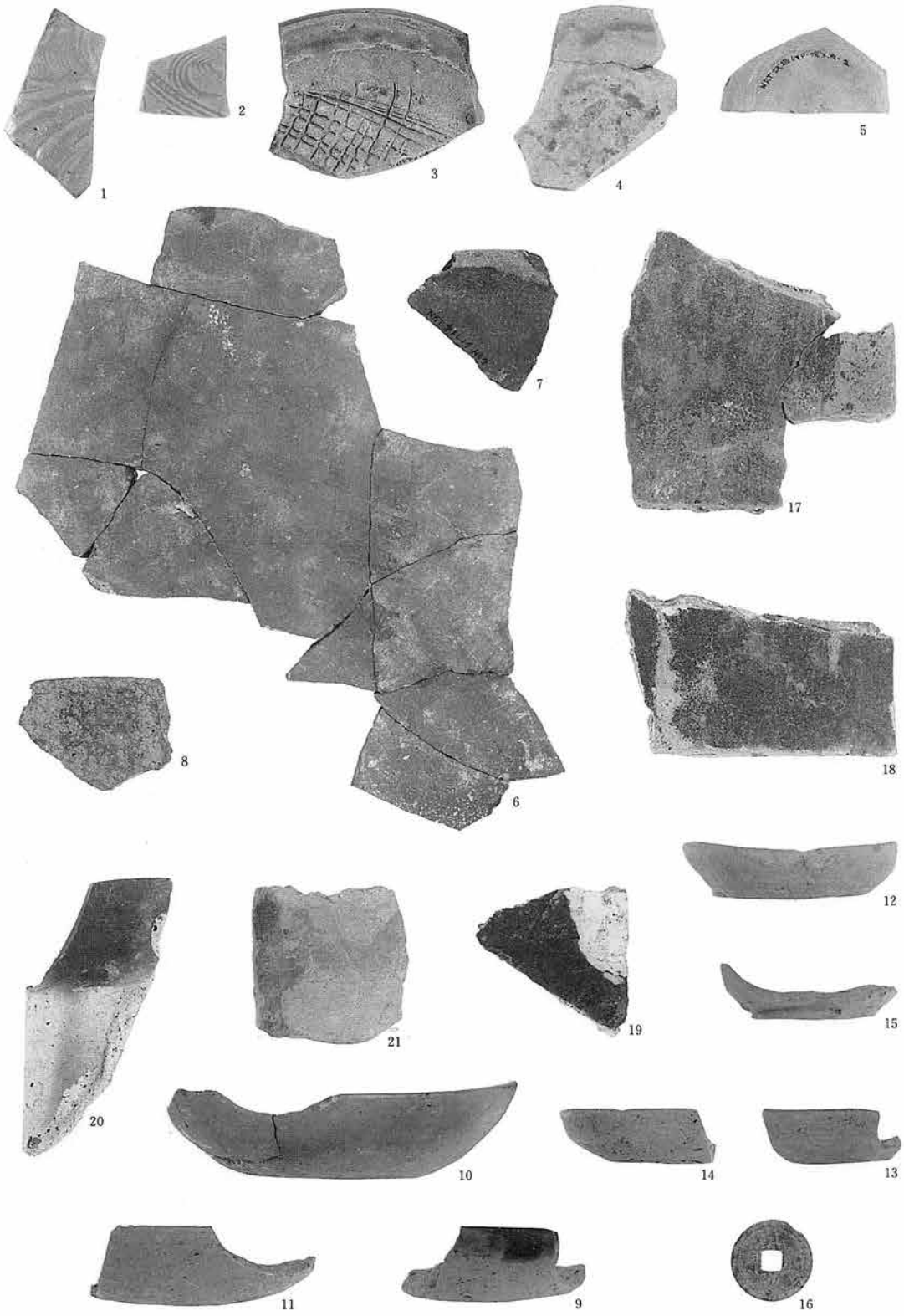


2. 同上・セクション

1. 東トレンチ

2. 同上・セクション

図版 7



9. 北条泰時（ほうじょうやすとき）・時頼（ときより）邸跡（No.282）

雪ノ下一丁目369番地点

例　言

1．本調査は鎌倉市雪ノ下一丁目369番地点に所在する遺跡の発掘調査報告書である。

2．Ⅰ次調査は平成２年３月13日から同年４月３日にかけて、また、Ⅱ次調査は平成２年７月２日から８月14日にかけて実施した。

3．本編の執筆・編集は瀬田哲夫が行なった。又、検出遺構、遺物の実測及びトレースには瀬田の他に斉木秀雄、杉山春信、稲田桂子、伊丹まどか、河野真知郎、谷下田厚子、鈴木文子の協力を得た。

4．本編に使用した写真は検出遺構を瀬田が、出土遺物を木村美代治が撮影した。

5．調査体制

調　査　員　瀬田哲夫

調査補助員　梅木信之、野本賢二、山本直孝、三浦陽一、吉川謙太郎

調査協力者　鎌倉市高齢者事業団、政所Ⅱ遺跡発掘調査団、北条時房・顕時邸跡遺跡発掘調査団、鎌倉考古学研究所

6．本遺跡の出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　次

本文目次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 242

第二章　調査の経緯と堆積土層 …… 244

Ⅰ．調査経緯 …… 244

Ⅱ．堆積土層 …… 245

第三章　検出された遺構と遺物 …… 246

Ⅰ．Ⅰ次調査 …… 246

Ⅱ．Ⅱ次調査 …… 252

第四章　まとめと考察 …… 269

図版目次

Fig. 1　遺跡周辺地図 …… 243

Fig. 2　グリット割付図 …… 244

Fig. 3　堆積土層模式図 …… 245

Fig. 4　Ⅰ次調査トレンチ …… 247

Fig. 5　A. B. C. Dトレンチ出土遺物 248

Fig. 6　E．Fトレンチ出土遺物 … 249

Fig. 7　Ⅰ次調査出土瓦 …… 250

Fig. 8　調査全体図 …… 253

Fig. 9　南北溝堆積土層図 …… 255

Fig. 10　柱穴列 …… 256

Fig. 11　磁器・瀬戸・白かわらけ …… 257)

Fig. 12　常滑、捏鉢、擂鉢 …… 58

Fig. 13　手焙り …… 259

Fig. 14　瓦 …… 260

Fig. 15　かわらけ（1） …… 261

Fig. 16　かわらけ（2） …… 262

Fig. 17　土製品、石製品 …… 263

Fig. 18　金属製品 …… 264

Fig. 19　木製品（1） …… 265

Fig. 20　木製品（2） …… 266

Fig. 21　採集遺物 …… 267

Fig. 22　若宮大路東側溝概念図 …… 269

図版目次

PL. 1　1．調査地点近景（南から）　2．調査地点近景（東から）　3. Ⅱ次調査全景（南から）

PL. 2　1．Aトレンチ（西から）　2．Cトレンチ（西から）　3．Eトレンチ（南から）

PL. 3　1．Bトレンチ（西から）　2．Dトレンチ（西から）　3．Fトレンチ（南から）

PL. 4　1．Ⅱ次調査全景（西から）　2．柱穴列（北から）　3．Ⅱ次調査全景（東から）

PL. 5　1．南北溝Ⅰ（北から）　2．南北溝Ⅲ（西から）　3．南北溝Ⅰ、Ⅱ（北から）

PL. 6　1．Dトレンチ出土角材©部分（西から）　2．Dトレンチ出土角材©部分（西から）　3．南北溝Ⅱ出土角材Ⓔ（北から）

PL. 7　出土遺物（1）

PL. 8　出土遺物（2）

PL. 9　出土遺物（3）

PL. 10　出土遺物（4）

第一章　遺跡の位置と歴史的環境（Fig. 1）

当調査地点は「北条泰時・時頼邸」として、神奈川県遺跡台帳 No. 282に記載されている区域の若宮大路東沿い南部に位置する。地番は鎌倉市雪ノ下一丁目369番である。若宮大路をはさんで西側には「北条時房・顕時邸」(同台帳 No. 278)、また、横大路をはさんで北側には鶴岡八幡宮と「政所跡」(同台帳 No. 247) の区域となり、東側は小町大路となる。

当遺跡区域内では既に7箇所（Fig. 1—2～6、8、9）で調査が行なわれており、若宮大路、小町大路、横大路とそれぞれ並走関係にある木組を伴なう大溝や掘立柱建築址、玉砂利敷きの地業面などが検出されている。また、南に隣接する Fig. 1—7 地点でも同様な遺構が検出されている。

「北条時房・顕時邸」区域では5箇所（Fig. 1—13～17）で調査が行なわれており、若宮大路西側の側溝と考えられる木組を伴なった南北大溝や掘立柱建築址、板囲い住居址などが検出されている。この南北大溝は以南の調査地点（Fig. 1—18～21）では木組を検出しておらず、若宮大路西側を南北に流れる河川との関係を検討する必要がある。

若宮大路周辺遺跡群である Fig. 1—22地点においては、若宮大路南北軸線と方向が大きく異なる大溝が検出されている。この溝は木組や鎌倉石、土丹などで護岸を施こしている。

「政所跡」区域でも3箇所（Fig. 1—10～12）で調査が行なわれ、大路の側溝と考えられる木組の溝や、多数の柱穴が検出されている。

北条泰時邸に関しては『吾妻鏡』元仁元年六月二十七日の条から、泰時の鎌倉邸は小町西北にあり、同廓内に関左近大夫将監宅と尾藤左近将監宅があり、安貞元年二月八日の条から、泰時亭が宇津宮辻子の幕府近くにあったことがわかる。また、宝治元年七月十七日の条から、「御所北面若宮大路也」と注が付される小町上の泰時亭は北条経時、重時へと相伝されたことが窺える。

北条時頼邸に関しては『吾妻鏡』建長四年四月一日の条から、中下馬橋を東へ進み、小町口から小町大路に入り時頼邸に至ったと考えられ、小町大路に面していたと考えられる。

北条泰時は鎌倉幕府の第三代執権であり、貞永元年に「貞永式目」を制定している。また、北条時頼は第五代目の執権であり、建長五年に宋から蘭渓道隆を招いて建長寺を建立している。

参考文献

『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1～6』鎌倉市教育委員会。1985～1990。

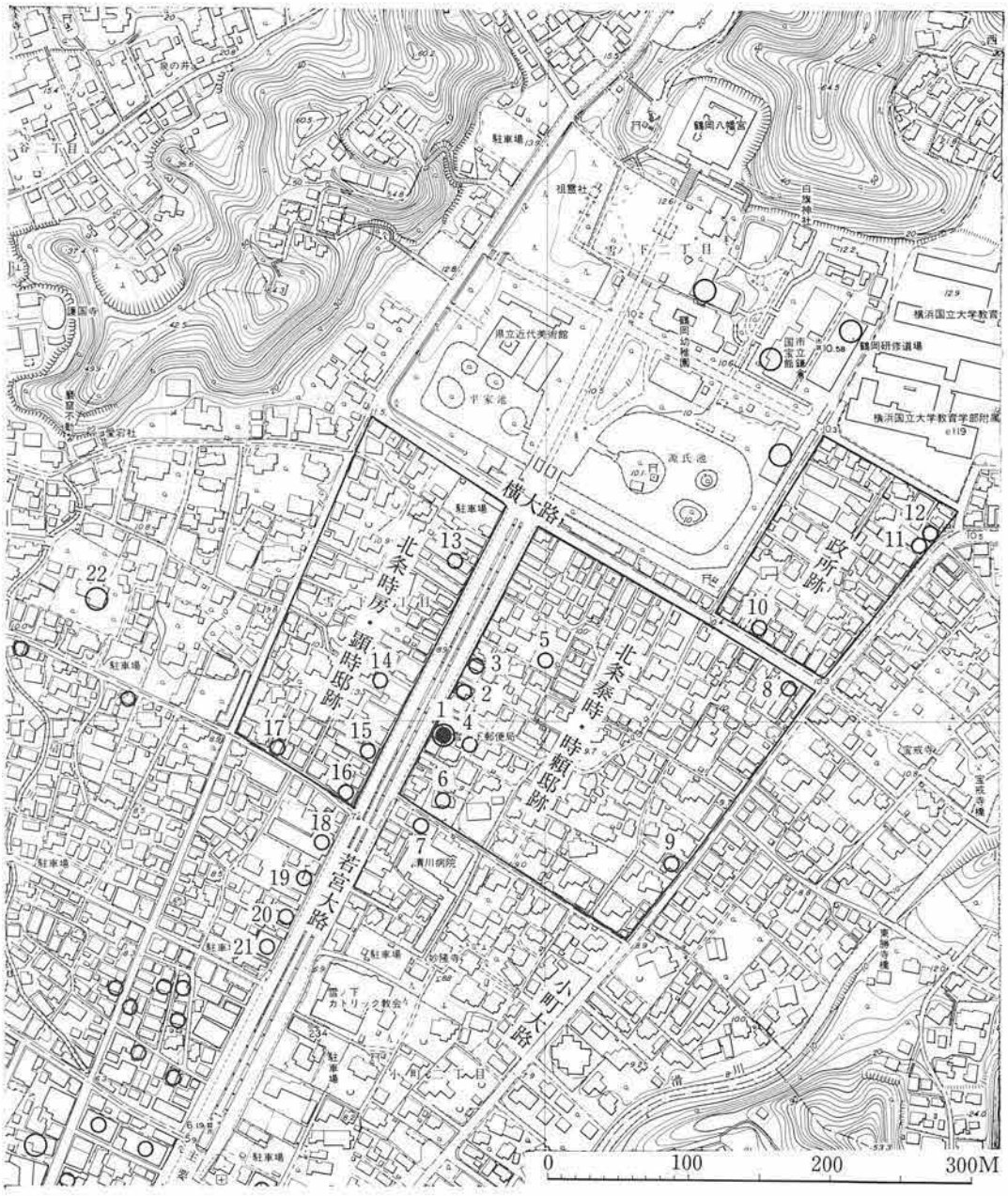
『北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下1—371—1地点』鎌倉市教育委員会。1985。

『鎌倉市史　総説編』高柳光寿編。吉川弘文館。1959。

『鎌倉事典』白井永二編。東京堂出版。1986。

『金沢文庫研究紀要　第8号』「北条氏亭址考」貫達人。1971。

『国指定史跡若宮大路遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅳ』同調査団。1988～1990。



1. 雪ノ下一丁目369番地点（調査地点）
2. 雪ノ下一丁目372番７地点
3. 雪ノ下一丁目371番１地点
4. 雪ノ下一丁目369番他地点
5. 雪ノ下一丁目374番２地点
6. 雪ノ下一丁目419番３地点
7. 小町二丁目366番他地点
8. 雪ノ下一丁目395番地点
9. 雪ノ下一丁目432番２地点
10. 雪ノ下三丁目987番１、２地点
11. 雪ノ下三丁目966番１地点
12. 雪ノ下三丁目365番
13. 雪ノ下一丁目293番１地点
14. 雪ノ下一丁目271番１地点
15. 雪ノ下一丁目273番　地点
16. 雪ノ下一丁目274番２地点
17. 雪ノ下一丁目233番９地点
18. 小町二丁目276番他地点
19. 小町二丁目279番２他地点
20. 小町二丁目280番２地点
21. 小町二丁目282番２地点
22. 雪ノ下一丁目210番地点

Fig. 1　遺跡周辺地図

第二章　調査の経緯と堆積土層（Fig. 2、 3）

本章においてはⅠ、Ⅱ次調査における調査の経緯と、検出された基準となる堆積土層について言及することにする。

Ⅰ．調査経緯（Fig. 2）

本地点のⅠ次調査は鎌倉市教育委員会による試掘調査を経て、建物基礎部分にあたる6箇所に東西約2.0m、南北約2.0mのトレンチを設定した。掘削は現地表から人力による手掘りで行なった。表土を50～60cmほど除去すると、中世の遺物包含層を検出する。平成2年3月13日から調査を開始し、4月3日に器材を撤収して終了した。調査面積は約24m²である。

Ⅰ次調査終了から基礎及び土止め工事が行なわれ、Ⅱ次調査開始まで約3ヵ月を要した。Ⅱ次調査は試掘調査及びⅠ次調査の結果から、現地表下約60cmまで近・現代の客土層が及んでいることが判明したため、この深度までは重機により掘削を行ない、以下、人力で遺構の検出を行なった。平成2年7月2日より重機を導入して調査を開始し、8月14日に器材を撤収して終了した。調査面積は約45m²である。

調査にあたり、若宮大路にほぼ平行する軸線とこれに直交する軸線を2.0mおきに設定し、前者を南北軸、後者を東西軸と呼称し、西から東にむけて算用数字（1～10）を、北から南へ向けてアルファベット（A～F）を付し、調査対象の敷地内に2.0mの方眼を配した。各々の方眼区画の名称には、その北西角の軸線交点を充てた。また、南北軸線は若宮大路と平行関係であり、真北との偏差はN—32° 50'—Eである。

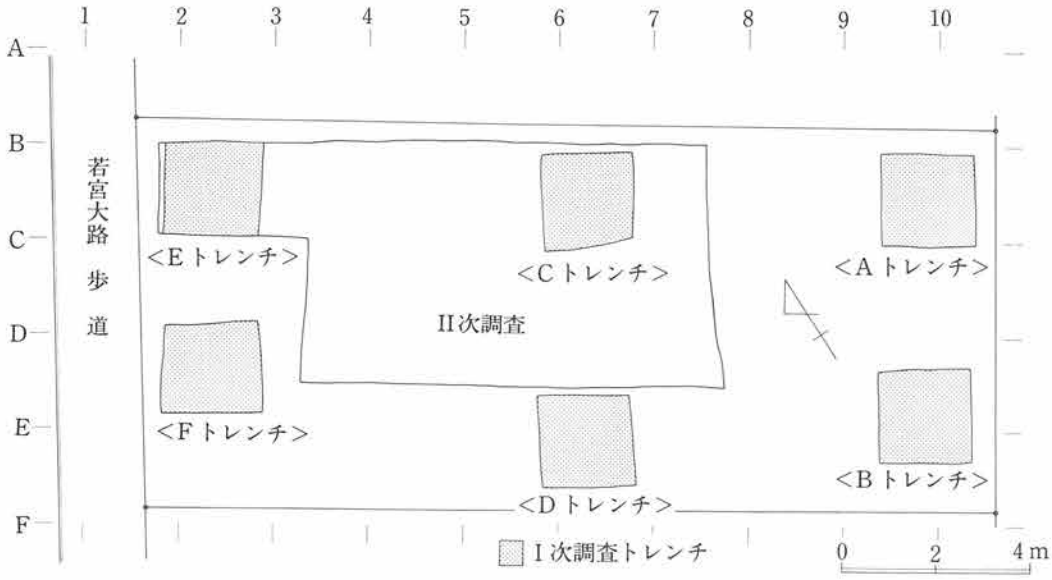


Fig. 2　グリッド割付図

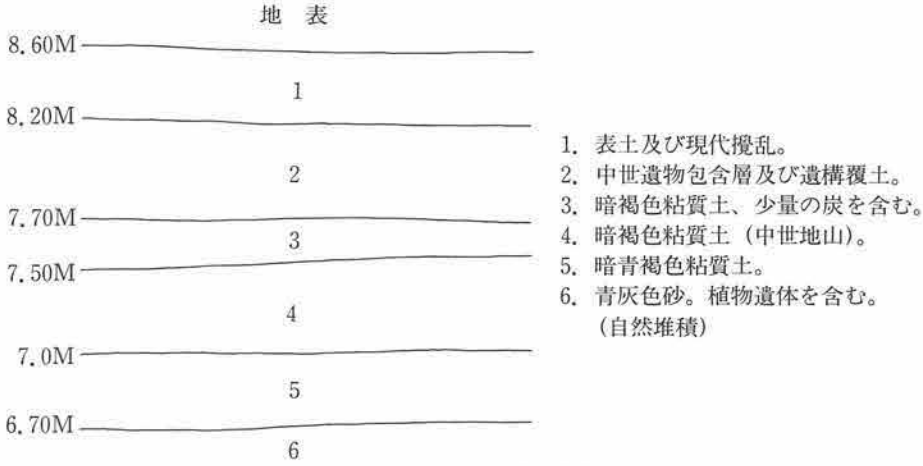


Fig. 3　堆積土層模式図

II．堆積土層（Fig. 3）

本遺跡内では大別して６層の堆積土層を確認することができた。模式図はFig. 3に示した。

第１層は表土及び現代攪乱層であり、現地表下50cm前後まで達している。

第２層は中世包含層及び遺構覆土であり、主に褐色粘質土に小土丹、炭化物、遺物を含んでいる。

第３層は暗褐色粘質土である。全体に少量ではあるが炭化物粒が確認できる。中世地山に比べしまりが弱い。

第４層は中世地山である暗褐色粘質土である。夾雑物を一切含まず、しまり良好である。

第５層は暗青褐色粘質土である。ところどころに青灰色粗砂をブロック状に含む。

第６層は青灰色細砂、粗砂層である。植物遺体を含み、粗砂と細砂は互層を成す。自然堆積と考えられる。

中世地山である暗褐色粘質土層の下に堆積する第５層はFig. 1－８、10、11、12地点でも観察されており（注１）、また、第６層はFig. 1－４、６、７、15地点でも観察されている（注２）。Fig. 1－６地点では「茶褐色土、黒色土中には川の氾乱による堆積土と推測される川砂層がいく筋か存在したが、東西南北各方向ともその傾斜をつかむことはできなかった。しかし、この地を冠水させる程の川が付近に流れていたことは確かであろう。」（鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書３）と報告されており、また、Fig. 1－４地点では、この第６層を覆土とする古代以前の低地（湿地？）が検出されている。

注１　Fig. 1－10、11、12地点は報告書未刊行である。筆者が直接調査に立ちあった。

注２　Fig. 1－４、７地点は報告書未刊行である。４地点に関しては調査担当者の田代郁夫氏に御教示いただいた。また７地点に関しては調査担当者の手塚直樹氏に御教示を頂き、筆者が直接立ちあった。

第三章　検出された遺構と遺物

本章ではⅠ、Ⅱ次調査で検出された遺構と遺物について説明を加えていく。Ⅰ次調査については各トレンチ別に遺構、遺物の説明を加え、堆積土層の名称については第２章のⅡ（Fig.3）で示した土層番号を使用した。Ⅱ次調査についてはFig.8に示したように、Ⅰ次調査トレンチと合成し、南北溝、柱穴列について説明した。

Ⅰ．Ⅰ次調査

（１）Ａトレンチ（Fig.4、Fig.5－１～４、Fig.7－３）

表土をはがすと約8.20mで第２層を検出した。ここで３本の丸柱が検出されたが近代以降の所産であると判断され掘り下げを続行し、約7.80mで第３層を、約7.70mで第４層（中世地山）を検出した。遺構検出作業はすべてこの面で行ない、柱穴12口、土壙１基を検出した。土壙１は平面円形を呈し、直径1.3m前後。壁崩落の危険のため完掘は不可能であった。壁面は確認面から緩やかにさがり、約7.50mから垂直におちる。覆土はしまりの弱い暗褐色粘質土。土壙廃絶後にPit.1が掘られている。

図示できる出土遺物はFig.5―１～４、Fig.7―３である。１―常滑窯壺口頸部片。口径13.7cm。胎土は精良。中層出土。２―山茶碗。口径15.9cm。胎土は粗らく灰白色を呈す。３―瀬戸美濃窯系皿。外面に強い稜をもち、口縁外面から内面にかけて暗褐色釉がかかる。外底面は回転糸切り。口径9.8cm、底径4.0cm、器高2.1cm。表土下出土。４―折縁かわらけの変形品。体部外面を指頭で内側に押し込んでいる。下層出土。Fig.7―３は丸瓦。凸面は指頭痕と横位のナデ、凹面は布目痕、側面、側縁部はヘラ削り。2.1cm前後の厚みをもち表面は灰黒色、胎芯は灰白色を呈す。土壙１出土。

（２）Ｂトレンチ（Fig.4、Fig.5―５～８）

約8.00mで第２層、約7.80mで第３層、約7.70mで第４層（中世地山）を検出した。遺構検出はすべてこの面で行ない柱穴14口、土壙１基を検出した。Pit.3では４枚の礎板が重なり、１枚がそれに倒れかかっている。Ａトレンチと柱穴の並びを検討したが判然としない。土壙２は東西0.8m、南北0.7mの隅丸方形を呈しPit.2よりも古い。壁面は緩やかに立ちあがり底面は平坦である。内部に２×２cm角の杭が４本検出された。覆土はしまりのない暗褐色粘質土である。

図示可能な出土遺物はFig.5―５～８である。５―青磁劃花文碗底部。高台外径5.6cm。内底面に草花文が施される。釉薬は深緑色透明。胎土は灰白色で精緻。貫入が縦横に走る。中世地山面出土。６―常滑窯捏鉢の口縁部片。口唇部は丸味を帯びる。中世地山上出土。７―山茶碗窯系捏鉢の底部片。内面は摩滅している。中世地山面出土。８―手づくね成形のかわらけ。口径13.7cm、器高2.3cm。中世地山面出土。

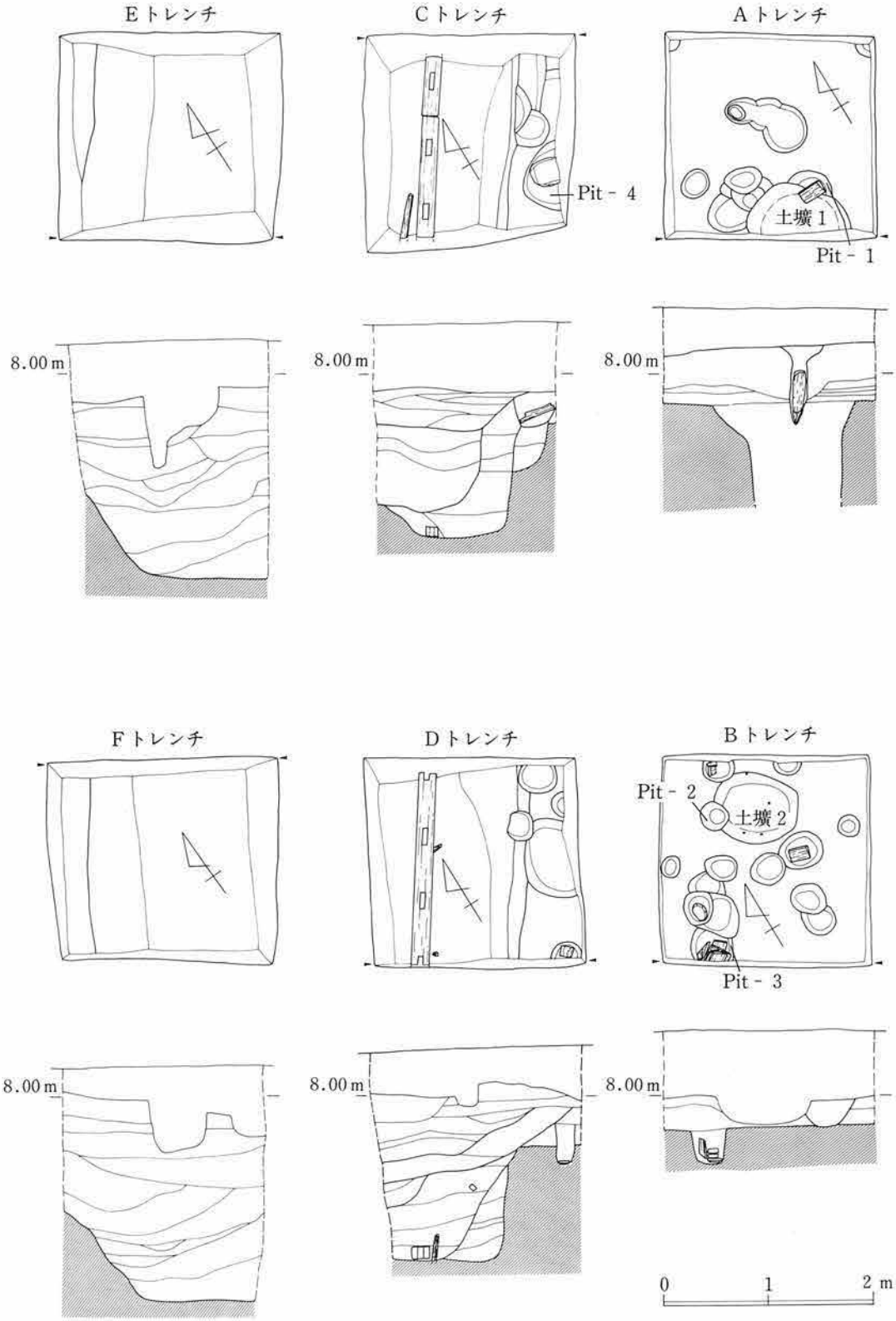


Fig. 4　I次調査トレンチ

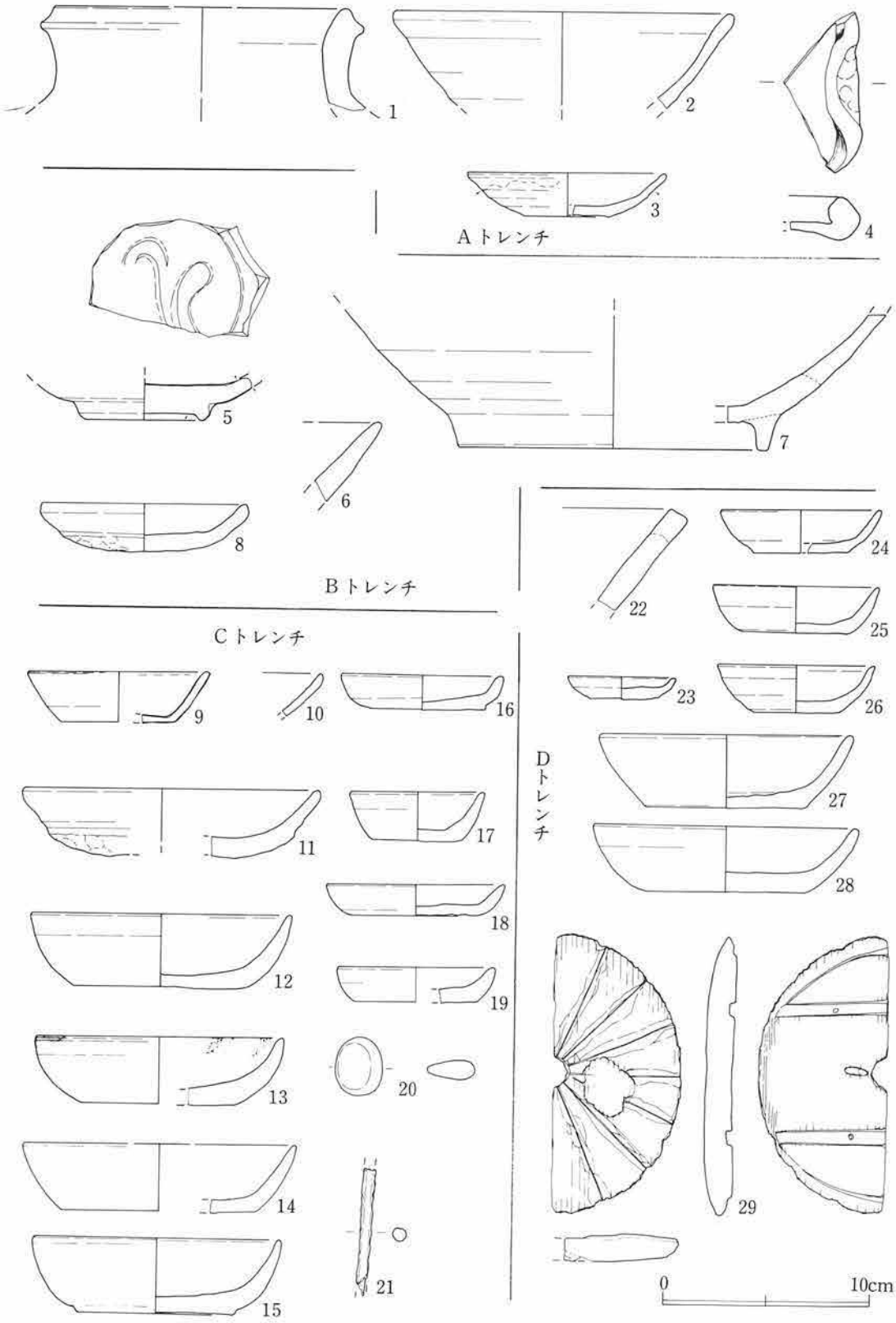


Fig. 5　A、B、C、Dトレンチ出土遺物

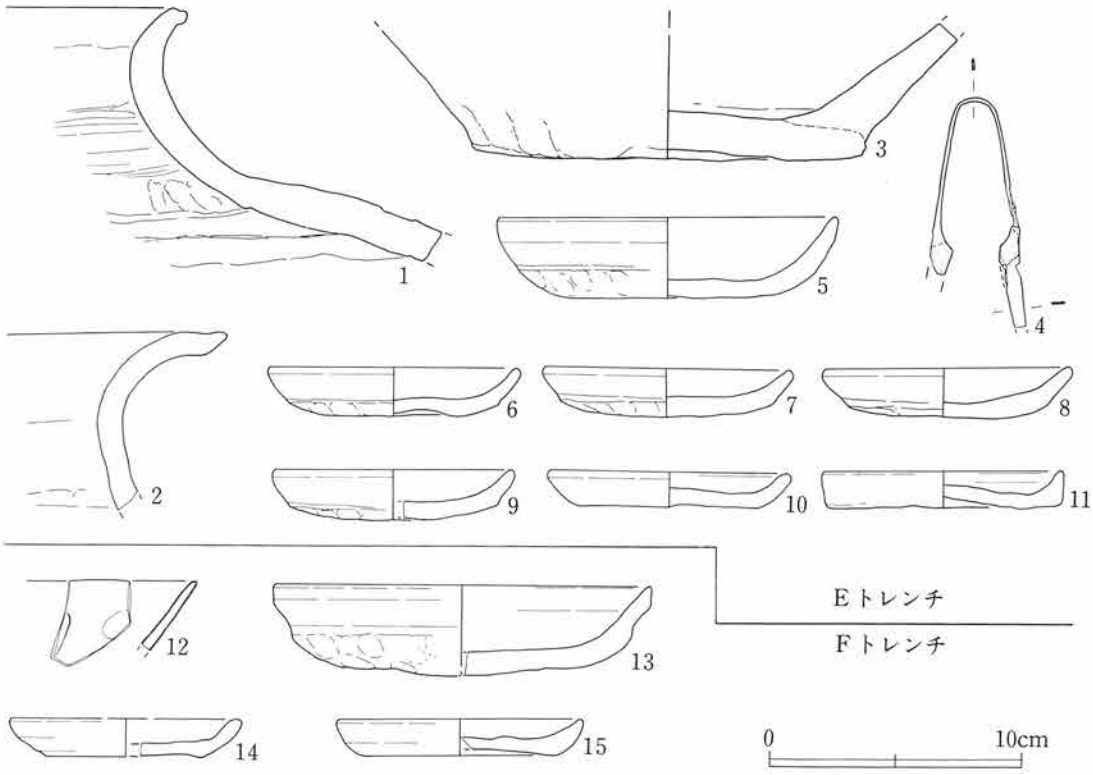


Fig. 6　E、Fトレンチ出土遺物

（3）Cトレンチ（Fig. 4、Fig. 5－9～21、Fig. 7－2、5）

約7.80mで第2層を検出した。トレンチ東部において約7.60mで第3層、約7.50mで第4層（中世地山）を検出し遺構の検出を行なった。トレンチ東部には平場が残り、直径30～50cm前後の柱穴が5口検出された。Pit. 4には約30cm大の上面が平坦な鎌倉石（砂質凝灰岩）が据えられている。トレンチ西部は南北溝の覆土である。溝の掘り方は断面逆台形を呈し、溝底には枘穴を有する2本の角材が検出された。溝東部内壁において約7.00mで第5層、約6.70mで第6層を検出した。

図示可能な出土遺物はFig. 5－9～21、Fig. 7－2、5である。9－口兀げ白磁。口径8.5cm、底径5.5cm、器高2.4cm。灰白色半透明の釉がかかる。下層出土。10－白かわらけ。胎土は微粉質で白色を呈する。手づくね成形。上層出土。11－手づくね成形かわらけ。口径14.0cm、器高2.2cm。中世地山面出土。12～15は大型で体部が内彎気味に立ちあがる。12－口径12.3cm、底径8.0cm、器高3.0cm、溝上層出土。13－口径11.7cm、底径7.3cm、器高3.2cm。溝上層出土。14－口径12.9cm、底径9.2cm、器高3.2cm。溝中層出土。15－口径11.6cm、底径7.5cm、器高3.7cm。溝下層出土。16～19は小型のかわらけで器高の高いものと底いものとがある。16－口径7.5cm、底径5.5cm、器高1.7cm。溝上層出土。17－口径6.8cm、底径4.4cm、器高2.3cm。胎土は粉質である。トレンチ上層出土。18－口径8.4cm、底径6.8cm、器高1.5cm。溝下層出土。19－口径7.3cm、底径5.9cm、器高1.6cm。溝下層出土。20－粘板岩。双六駒か碁石に用いられた可能性がある。溝上層出土。21－鉄製火箸。残存長6.1cm。トレンチ上層出土。Fig. 7－2は平瓦。凸面は縄目の叩き、凹面は

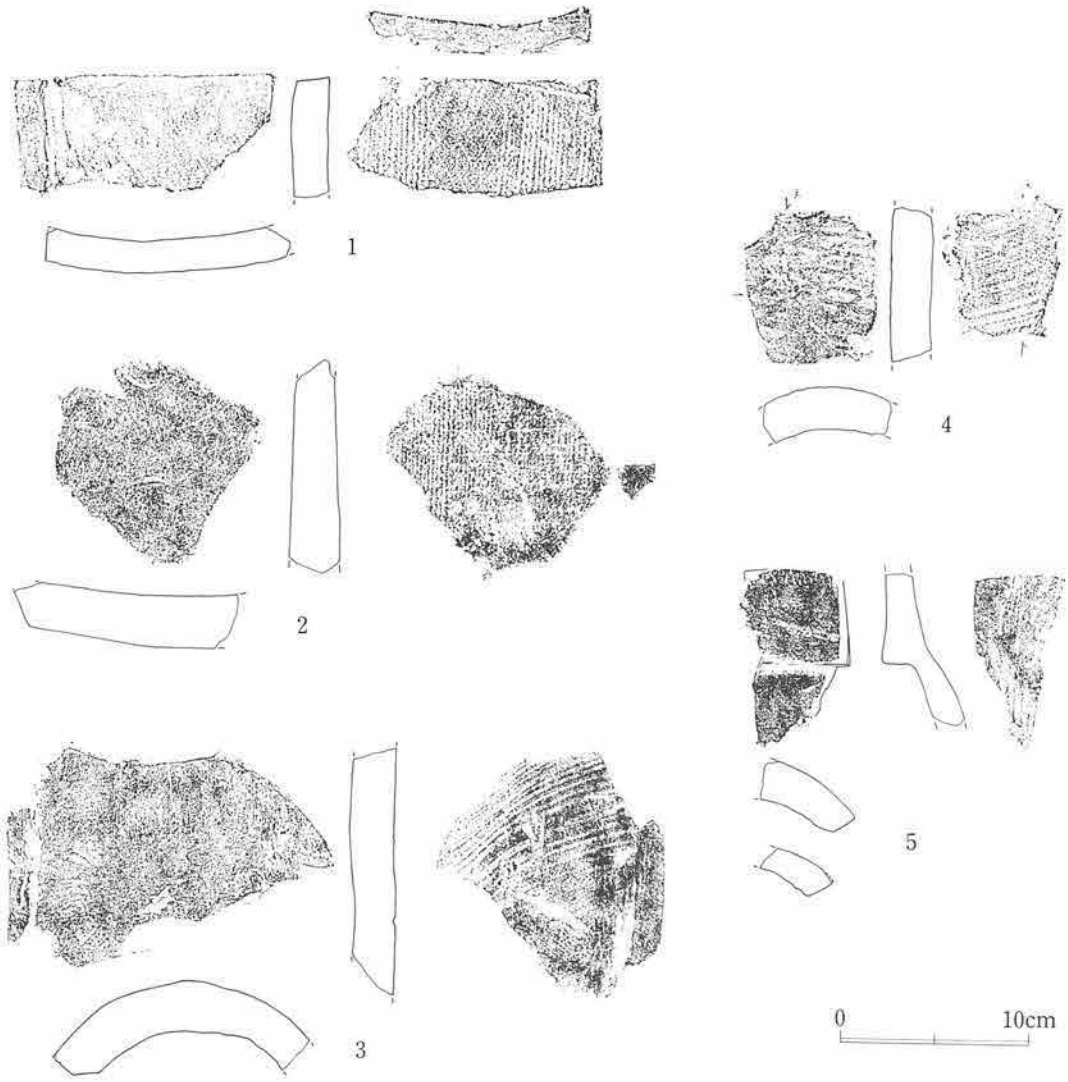


Fig. 7　Ⅰ次調査出土瓦

縦位のナデ、側面はヘラ削りを施す。表面は灰黒色、胎芯は灰色を呈し砂粒を含む。凹凸両面に砂粒が付着する。溝中層出土。Fig. 7—5は丸瓦。凸部は縄目痕、凹部は縦位のナデ、側面はヘラ削りを施す。表面は灰色、胎芯は淡灰橙色を呈す。凹面に粗砂が付着する。溝上層出土。

（4）Dトレンチ（Fig. 4、Fig. 5—22～29）

約8.00mで第2層を検出した。トレンチ東部において約7.80mで第3層、約7.50mで第4層（中世地山）を検出した。5口の柱穴を検出したが、いずれも掘り込み面は第4層よりも上である。西部は南北溝であり、Cトレンチでは西の立ちあがりを確認しているが、ここでは検出されていない。溝底には枘穴を有する1本の角材が検出された。

図示可能な出土遺物はFig. 5—22～29である。22—常滑窯捏鉢。内外面とも横ナデ。溝中層出土。23—かわらけの特小品。口縁は内折れ気味である。口径5.0cm、底径2.3cm、器高1.1cm。中～下層

出土。24～28は薄手のかわらけで体部が内彎しながら立ちあがる。24—口径7.6cm、底径4.7cm、器高2.1cm。中層出土。25—口径7.8cm、底径4.1cm、器高2.3cm。中層出土。26—口径7.4cm、底径4.2cm、器高2.5cm。上層出土。27—口径11.9cm、底径7.5cm、器高3.5cm。中層出土。28—口径12.5cm、底径7.6cm、器高3.1cm。中層出土。29—木製の蓋。直径13.3cm。表面は輪花状に彫られ、中央に直径2.0cmほどの孔が穿けられる。断面には3口の木釘穴があり、中央のものはつまみの固定、他の2口は本体の接合のためのものである。裏面には平行する断面方形の溝が2本とその中に木釘穴が2口あり、蓋のずれを防ぐための角材を固定したものと考えられる。溝中層出土。

（5）Eトレンチ（Fig.4、Fig.6—1～11、Fig.7—1、4）

約7.90mで第2層に達する。以下、良好な地業層を検出できず、トレンチ西端において約6.90mで第6層を検出した。以下、東に向かい傾斜し、約6.10mで底となる。東側の立ちあがりは検出されなかった。検出された包含層は全て溝の覆土と考えられる。

図示可能な出土遺物はFig.6—1～11、Fig.7—1、4である。1—常滑窯甕。口縁端部を小さく外反させている。中層出土。2—常滑窯甕。頸部が直線気味に立ちあがり口縁端部を水平に反らせている。下層出土。3—常滑窯甕底部。底径15.3cm。体部下位から板ナデ痕が残る。中層出土。4—鉄製の鋏。中層出土。5～9は手づくね成形のかわらけである。いづれも砂質でよく焼き締っている。中層出土。5—口径13.1cm、器高3.1cm。6—口径9.6cm、器高1.9cm。7—口径9.6cm、器高1.9cm。8—口径9.5cm、器高1.9cm。9—口径9.8cm、器高1.4cm。10、11は胎土が砂質で黒色砂粒を含み焼成良好なロクロ成形のかわらけである。10—口径9.2cm、底径5.2cm、器高2.0cm。下層出土。11—口径9.3cm、底径7.0cm、器高1.4cm。下層出土。Fig.7—1は平瓦。凸面に縄目の叩き、凹面にナデ、側面はヘラ削り。全体に1.9cm前後の厚みをもつ。凹凸面に微砂粒が付着。表面、胎芯ともに灰白色を呈す。中層出土。Fig.7—4は丸瓦。本体部凸面に縄目の叩き、凹面は布目痕を残し粗砂が付着する。表面は灰白色、胎芯は黒色を呈し微砂粒を含む。全体に1.9cm前後の厚みをもつ。下層出土。

（6）Fトレンチ（Fig.4、Fig.6—12～15）

約8.00mで第2層を検出する。Eトレンチと同様、西端部において約6.90mで第6層を検出した。以下、東へ向かい傾斜し、約6.05mで溝底となるが東側の立ちあがりは検出しなかった。この溝は明らかにEトレンチで検出されたもののつづきである。

図示可能な出土遺物はFig.6—12～15のみである。12—青磁碗。胎土は灰白色を呈し緻密。深緑色の釉がかかり内面に渦文をもつ。下層出土。11—手づくね成形のかわらけ。口径14.7cm、器高3.5cm。胎土は砂を含み焼成良好。下層出土。12、13はロクロ成形のかわらけである。胎土は砂質で焼成良好。下層出土。12—口径8.8cm、底径6.1cm、器高1.5cm。13—口径9.4cm、底径7.5cm、器高1.4cm。

II．II次調査（Fig.8～21）

南北溝は何度も掘り直されており、溝覆土の堆積状況から16条に分けることができるが遺構説明にあたり、便宜上、I～IIIに分けた。また、出土遺物の説明で用いられている溝番号は南北溝堆積土層図(Fig.9）を参照されたい。

（1）南北溝（Fig.8、9）

Iは調査区東部のB～E－5、6グリットに位置する。掘方は上端で1.3～1.5m、下端で0.6～0.7mである。断面は上部の開いた逆台形状を呈する。深さは確認面から約0.9m。底面の標高は北で6.50m、南で6.48mである。溝底には3本の枘穴を有する角材が南北一直線に連らなって検出された。Ⓐは角材のほぼ南端部であり、長さ53cm以上、幅14.5cm、厚さ10cmを測る。南端部から約25cmのところに長さ15.5cm、幅4.0cmの貫通した枘穴が穿たれている。底面の標高は北で6.48m、南で6.48mである。南端部は平らに切断されている。Ⓑは全長44.6cm。幅14.5～15.0cm、厚さ9.0cmを測る。46.0cmの間隔で長さ15cm、幅4.0cmの枘穴が穿たれる。この枘穴は北から貫通、未貫通を交互に配し、未貫通のものは約6.0cmの深さをもつ。北端部は平らに切断されるが南端部は長さ7.5cm、幅4cmの未貫通枘穴になる。底面の標高は北端で6.48m、南端で6.47mである。Ⓒは長さ178cm以上、幅17.0cm、厚さ11.0cmを測る。45cmの間隔で長さ16.5cm、幅4.5cmの枘穴が未貫通、貫通を交互に配している。未貫通のものは約6.0cmの深さをもつ。北端部は長さ7.5cm、幅4.5cmの未貫通の枘穴を呈し、Ⓑの南端と接合して1つの枘穴を形成する。底面の標高は北端で6.47m、南端で6.46mである。材の横ずれ防止のために3cm×3cmの角杭が東側に2本打ち込まれている。また、枘穴には最大厚1.0cmほどの楔が残存するものもある。

IIは調査区中央部のB～D－4、5グリットに位置する。掘方は上端で3.2～3.4m、下端で1.4～1.8mである。断面は上部の広い逆台形状を呈する。深さは確認面から約80cmである。底面の標高は北で約6.20m、南で約6.10mである。溝底には1本の枘穴を有する角材が南北に置かれる。Ⓓは長さ425cm以上、幅12.5cm、厚さ約8.0cmを測る。46cmの間隔で長さ15cm、幅5.0cmの枘穴が穿たれている。この角材も未貫通、貫通を交互に配し、未貫通のものは約5.0cmの深さをもつ。底面の標高は北端で6.53m、南端で6.52mである。北端部は長さ7.5cm、幅5.0cmの未貫通の枘穴である。また、4ライン北壁際にも角材Ⓔが検出された。長さ98cm以上、幅10.0cm、厚さ6.0cmである。35cmの間隔で長さ15.5cm、幅5.5cmの枘穴を有する。枘穴は検出部では全て貫通している。底面の標高は北端で6.90m、南端で6.90mである。

IIIは調査区西部のB～D－2、3グリットに位置する。掘方は上端で約3.2m、下端で約2.1mである。断面は上部の開いた逆台形状である。底面の標高は北端で6.10m、南端で6.05mである。

また、5ライン上に東西に横たわる残存長約90cm、幅約8.0cm、厚さ約5.0cmの角材が2本検出されている。（Ⓕ、Ⓖ）2本とも西端面に二次的な切断痕が認められる。ⒶⒷⒸは9溝、Ⓓは10溝、Ⓔは3溝に伴なう角材である。

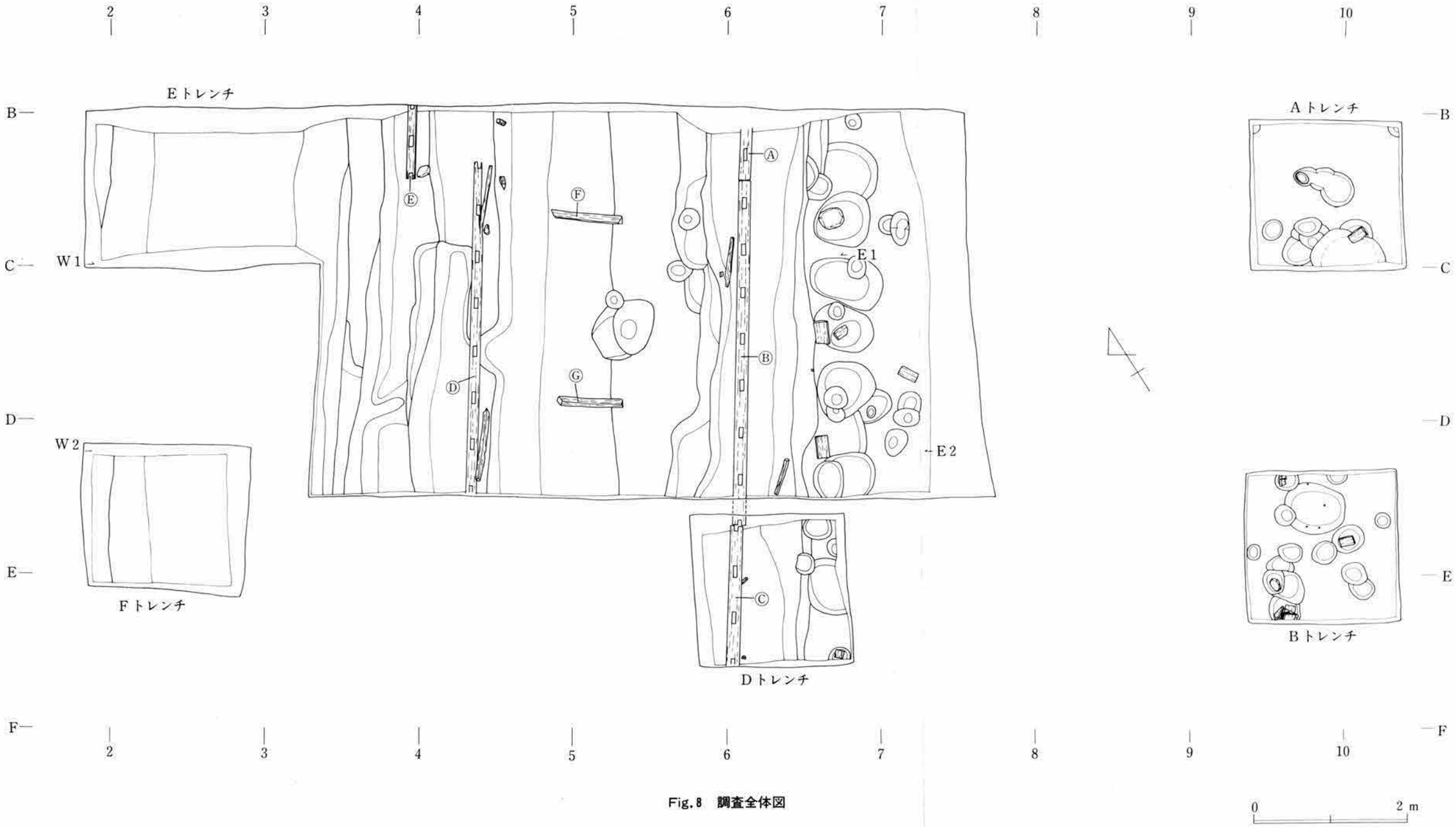
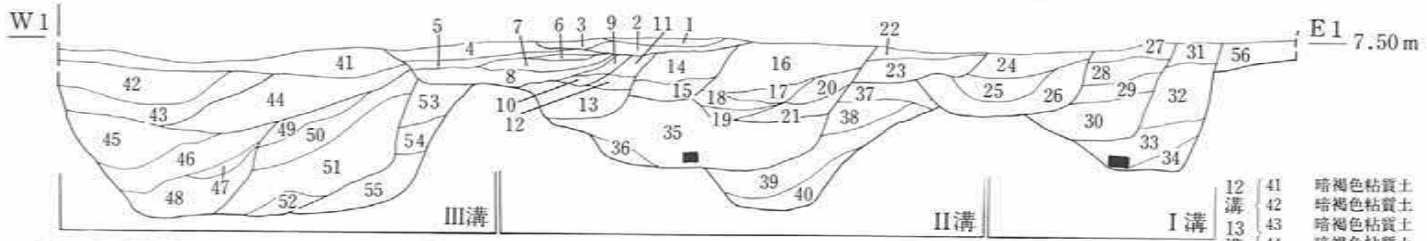

Eトレンチ
Aトレンチ
Bトレンチ
Cトレンチ
Dトレンチ
Fトレンチ
W1
W2
E1
E2
A
B
C
D
E
F
G
2
3
4
5
6
7
8
9
10
B
C
D
E
F
0
2 m

Fig. 8　調査全体図



1溝
1 褐色粘質土
2 褐色粘質土 炭混入
3 灰黄色粗砂 土丹、砂利混入
4 褐色粘質土 土丹混入
5 褐色粘質土 灰青色粗砂混入
6 褐色粘質土 土丹、灰青色粗砂混入
7 灰黄色粗砂 灰青色粗砂混入
8 灰黄色粗砂 土丹粒混入
9 褐色粘質土
10 灰青色粗砂 遺物混入

3溝
11 褐色粘質土
12 褐色粘質土 灰青色粗砂混入
13 灰青色粗砂 遺物、土丹混入

4溝
14 褐色粘質土 灰青色粗砂、土丹混入
15 灰青色粗砂 細砂、木片、土丹混入
16 褐色粘質土 土丹粒混入、しまり強
17 灰青色粗砂 遺物混入

5溝
18 灰青色粗砂 細砂、貝粒子混入
19 灰青色粗砂 細砂、土丹粒混入
20 黒褐色粘質土
21 灰青色粗砂

6溝
22 灰褐色粘質土
23 灰青色粗砂 小砂利、土丹混入

7溝
24 灰青色粗砂 灰褐色粘土、土丹混入
25 灰青色粗砂 灰褐色粘土混入
26 灰青色粗砂 灰褐色粘土、遺物混入

8溝
27 褐色粘質土 遺物、貝粒子混入
28 褐色粘質土 貝粒子混入、しまり強
29 褐色粘質土 灰青色粗砂混入、しまり強
30 暗灰色粘質土

9溝
31 褐色粘質土 貝粒子、木片混入
32 灰褐色粘質土 土丹粒混入、しまり強
33 黒褐色粘質土 粗砂、土丹混入、しまり弱
34 黒褐色粘質土 しまり弱

10溝
35 暗青灰色砂
36 青白色砂

11溝
37 灰青色砂 黒褐色粒土混入
38 黒褐色粘質土 灰青色粗砂混入
39 黒褐色粘質土 灰青色粗砂混入
40 黒褐色粘質土 貝粒子、土丹混入

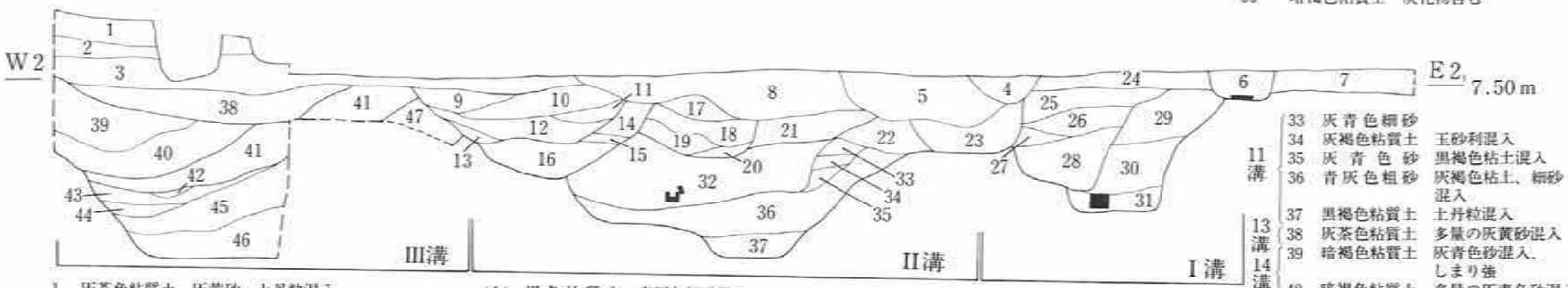
12溝
41 暗褐色粘質土 しまり強
42 暗褐色粘質土 遺物混入、しまり強

13溝
43 暗褐色粘質土 土丹粒、貝粒子混入
44 暗褐色粘質土 土丹粒混入

14溝
45 暗褐色粘質土 貝粒子、土丹粒混入
46 暗褐色粘質土 土丹粒混入、しまり強
47 暗褐色粘質土 灰褐色粗砂混入
48 黒褐色粘質土 灰青色細砂、貝粒子混入

15溝
49 暗褐色粘質土 貝粒子、土丹粒混入、しまり弱
50 褐色粘質土 褐色砂、貝粒子混入、しまり弱
51 暗褐色粘質土 土丹粒、木片、遺物混入
52 黒褐色粘質土 土丹粒混入

16溝
53 暗褐色粘質土 灰青色砂、土丹混入
54 暗褐色粘質土 土丹混入
55 暗褐色粘質土 貝粒子、土丹、木片混入
56 暗褐色粘質土 炭化物含む



6溝
1 灰茶色粘質土 灰黄砂、土丹粒混入
2 明褐色粘質土 (地業)
3 灰茶色粘質土 しまり強
4 褐色粘質土 しまり強
5 褐色粘質土 粗砂混入
6 褐色粘質土 遺物混入
7 暗褐色粘質土 炭混入
8 褐色粘質土 多量の土丹粒混入、しまり強

2溝
9 灰褐色粘質土 シルト混入
10 灰褐色粘質土 灰黄色粗砂、玉砂利、土丹粒混入
11 灰褐色粘質土 灰黄色粗砂、炭混入
12 灰褐色粘質土 灰黄色粗砂混入
13 灰褐色粘質土 灰黄色粗砂、遺物混入

3溝
14 褐色粘質土 青灰色粗砂混入
15 褐色粘質土 多量の青灰色粗砂混入
16 青灰色細砂

4溝
17 灰褐色粘質土 灰青色粗砂混入
18 灰褐色粘質土 灰黄色粗砂混入
19 灰青色細砂 灰青色粗砂混入
20 灰青色細砂

5溝
21 黒褐色粘質土 灰青色細砂混入、しまり弱

7溝
22 灰青色粗砂 多量の遺物混入
23 褐色粘質土 灰青色粗砂、細砂多量の遺物混入

8溝
24 褐色粘質土 土丹粒混入、しまり強
25 灰黄色細砂 粗砂、多量の玉砂利混入
26 黒褐色粘質土 灰黄色細砂混入
27 褐色粘質土 遺物混入
28 暗褐色砂質土 暗褐色粘質土混入

9溝
29 暗褐色粘質土 土丹粒混入、しまり強
30 暗褐色粘質土 灰青色砂、多量の木片混入

10溝
31 黒褐色粘質土 しまり強
32 青灰色粗砂 灰褐色粘土混入

11溝
33 灰青色細砂
34 灰褐色粘質土 玉砂利混入
35 灰青色砂 黒褐色粘土混入
36 青灰色粗砂 灰褐色粘土、細砂混入

13溝
37 黒褐色粘質土 土丹粒混入
38 灰茶色粘質土 多量の灰黄砂混入

14溝
39 暗褐色粘質土 灰青色砂混入、しまり強
40 暗褐色粘質土 多量の灰青色砂混入
41 黒褐色粘質土 青灰色砂ブロック混入

15溝
42 黒褐色粘質土 馬糞混入
43 暗褐色粘質土 馬糞、木片混入
44 暗褐色粘質土 土丹粒、馬糞混入
45 黒褐色粘質土 多量の馬糞混入
46 暗灰黒色粘質土 青灰細砂混入、しまり強
47 暗褐色粘質土 青灰細砂混入

0 2 m

Fig. 9 南北溝堆積土層図

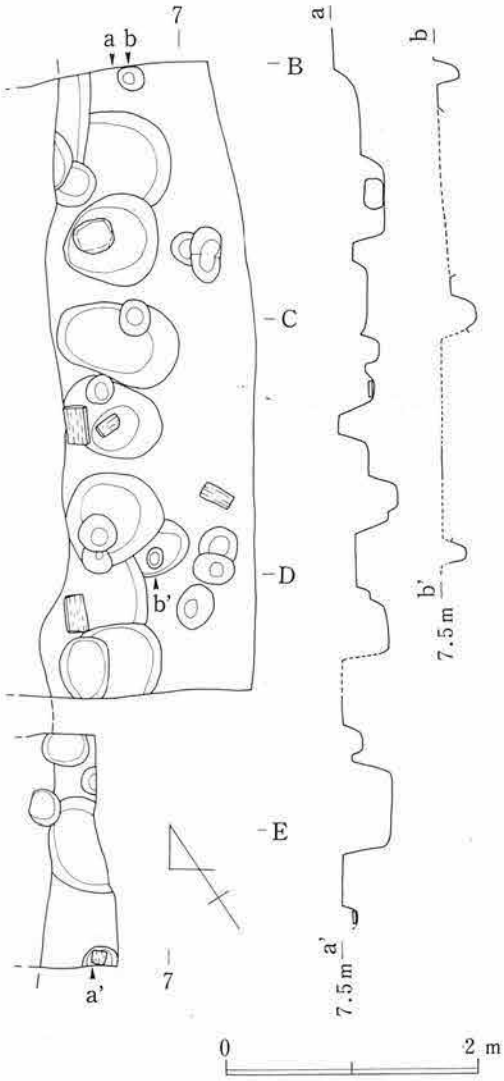


Fig. 10　柱穴列

（2）柱穴列（Fig. 9、10）

調査区東部のB～E－6、7グリットで検出された31口の柱穴のなかで、南北一列に並ぶ柱穴が2列検出された。西側の列をa—a'列、東側の列をb—b'列とする。　a—a'列は直径60～80cmの柱穴が5口、南北溝とほぼ平行に並んで検出された。深さは標高7.10～7.30mであり、柱間は1.3mである。他の礎板や礎石を伴なう柱穴8口と切り合っている。これは同じような規模の柱穴列が存在していることを示唆している。軸方位はN—35°—Eである。

b—b'列は直径約20cm、深さ約20cmの平面円形を呈する柱穴が3口並ぶ。柱穴間は1.9mである。方位N—31°—Eであり南北溝、a—a'列とほぼ平行である。

A、Bトレンチでも多数の柱穴が検出されている。また、明らかに南北溝覆土を掘り込む柱穴も確認されており、この柱穴列は南北だけでなく東西にも連らなる可能性は十分にあると言えよう。

（3）出土遺物

Fig. 11—1～6は磁器。7～9は瀬戸。10、11は美濃。12～15は白かわらけ。1—青白磁碗。高台径5.2cm。内底面に櫛描文が施される。1溝。2—青磁碗。高台径5.1cm。青緑色釉がかかる。1溝。3—青磁碗。高台径5.1cm。釉は暗緑色透明。7溝。4—青磁天目茶碗形の小碗。釉は暗青色失透。10溝。5—口兀白磁。口径2.1cm、釉は灰白色失透。7溝。6—口兀白磁。口径9.8cm、釉は灰白色、4溝。7—瀬戸天目茶碗。釉は鉄釉で胎土は灰白色。1溝。8—瀬戸縁釉皿。釉は灰釉で胎土は淡灰褐色。2溝。9—瀬戸入子。素地は精良で灰白色。外底面はヘラ削り。2溝。10—美濃系山茶碗。胎土精良で黄灰色を呈す。口径15.4cm。4溝。11—美濃系山茶碗。底径3.9cm。胎土は黄灰色を呈し精良。畳付部に籾痕がつく。6溝。12—白かわらけ質の蓋。4溝。13—白かわらけ。口径11.4cm。胎土が板状剝離する。口縁及び内外面上部に煤が付着する。10溝。14—白かわらけ。口径9.7cm。全体に薄く仕上げている。10溝。15—白かわらけ。口径11.8cm。胎土は粗らく底部は糸切り。10溝。

Fig. 12—1～11は常滑。12、13は山茶碗窯系捏鉢。14、15は瀬戸系擂鉢。16は備前擂鉢である。

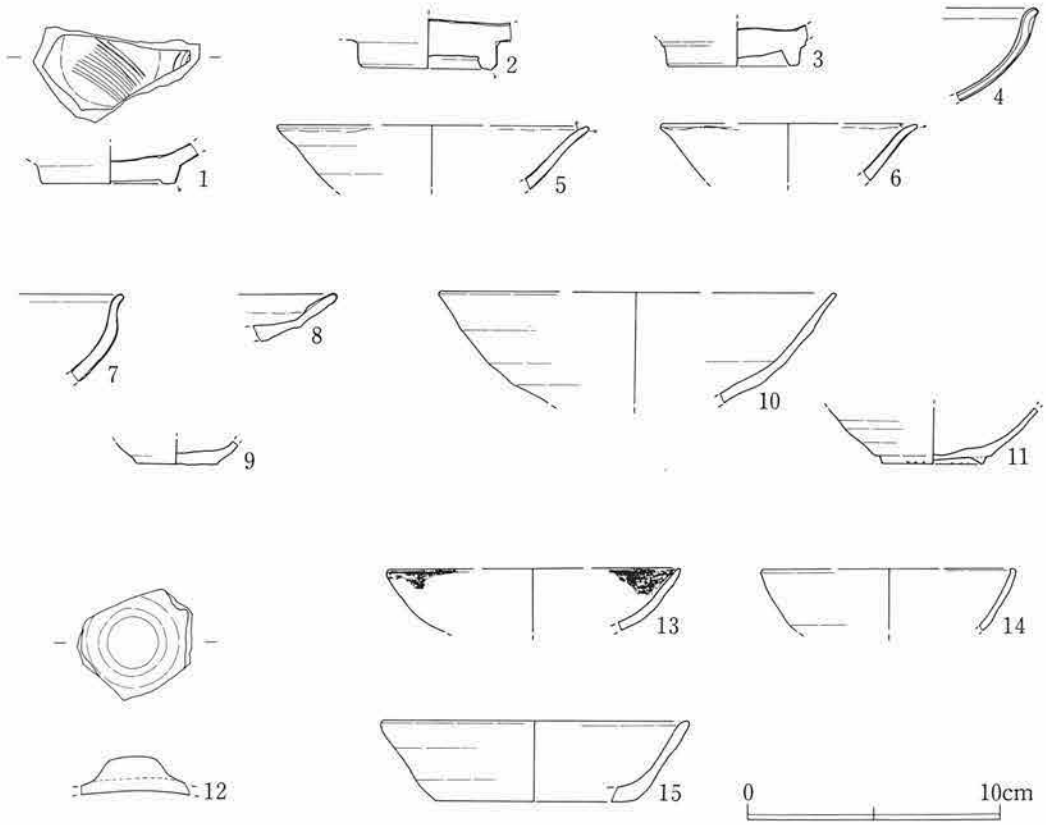


Fig.11　磁器、瀬戸、白かわらけ

1－常滑甕。口径39.8cm。口縁端部は上方につまみ上げられる。7溝。2－常滑甕。口縁は外反し、端部は緩く上を向く。11溝。3－常滑甕。縁帯は頸部に付着する。6溝。4－渥美甕。口縁端部に沈線状のくぼみができる。6溝。5－常滑甕底部。1溝。6－常滑甕底部。5溝下層。7－渥美甕底部。底径15.7cm。外面は板ナデ、内面は指頭痕を残し横ナデにより仕上げる。焼成不良の為、灰白色を呈する。16溝。8－常滑甕底部。内面には炭化物が付着している。7溝。9－常滑鉢。胎土は灰白色を呈し精良。体部は内彎し端部は角ばる。1溝。10－常滑捏鉢。口縁端部はほぼ平らである。5溝下層。11－常滑捏鉢。口縁端部が内外に張り出す。7溝。12、13は山茶碗窯系捏鉢。12は口縁下に強いナデが施される。8溝。13は焼成不良のために灰橙色を呈す。9溝。14、15は瀬戸美濃系の擂鉢である。14－底径10.9cm。23本の沈線を1単位とする。全体に薄く紫色を下塗りし、内面から外面体部下半まで紫色釉を上塗りする。胎土は淡赤灰色を呈し粘性強し。1溝。15はほぼ14と同質である。口縁部の折り返し幅は広い。1溝。16－備前擂鉢。4本の沈線を1単位とする。胎土は灰赤色を呈し精良。1溝。

Fig.13－1～6は手焙りである。1－口径30.0cm。内面、口縁部は横ナデ。胴部外面には指頭痕が残る。胎土は赤褐色を呈し粗らい。3溝。2－かわらけ質で焼成不良。内外面とも横ナデ。7

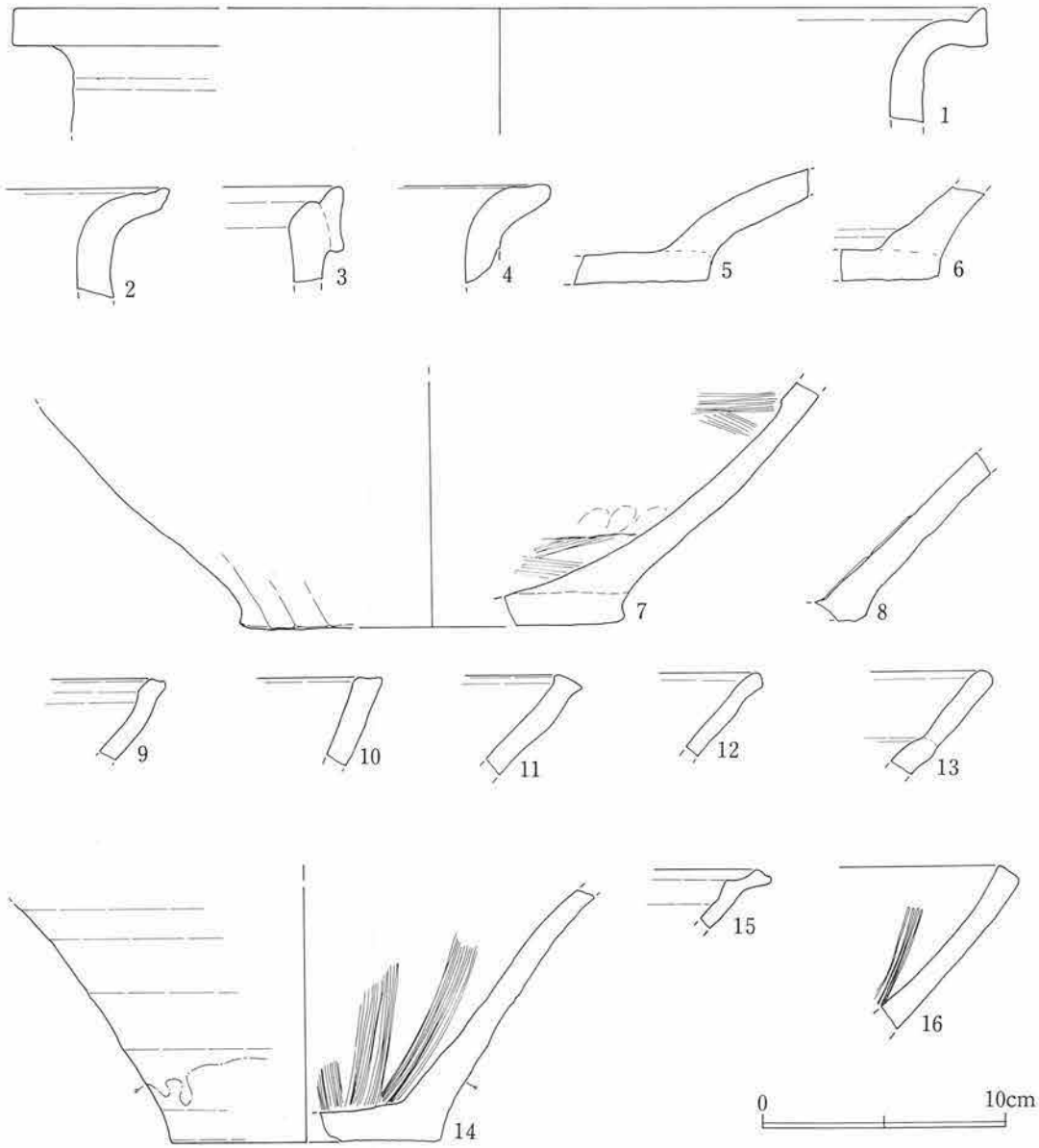


Fig. 12　常滑、捏鉢、擂鉢

溝。3—胎土は灰白色を呈し粗らい。内外面とも横ナデ。1溝。4—灰黒色を呈し白粒を多量に含む。口縁から内面にかけて磨きが施される。6溝。5—胎土は灰白色精良、表面は黒色処理される。口径29.2cm。口縁に広い鍔がつく。4溝上層。6—菊花スタンプの押印のある瓦質手焙り。4溝上層。

Fig. 14—1～7は平瓦、8～12は丸瓦である。1—凸面に格子目の叩き、凹面はナデを施こす。胎土は灰白色を呈す。2溝。2—凸面は格子目の叩き、凹面は横位のナデ、側面はヘラ削りを施こす。焼成不良の為、胎土は赤橙色を帯びる。3溝。3—凸面は格子目の叩き、側面、端面、端縁はヘラ削り、凹面は縦位のナデ。胎土は灰白色。7溝。4—凹凸両面に縦位のナデ、端面はヘ

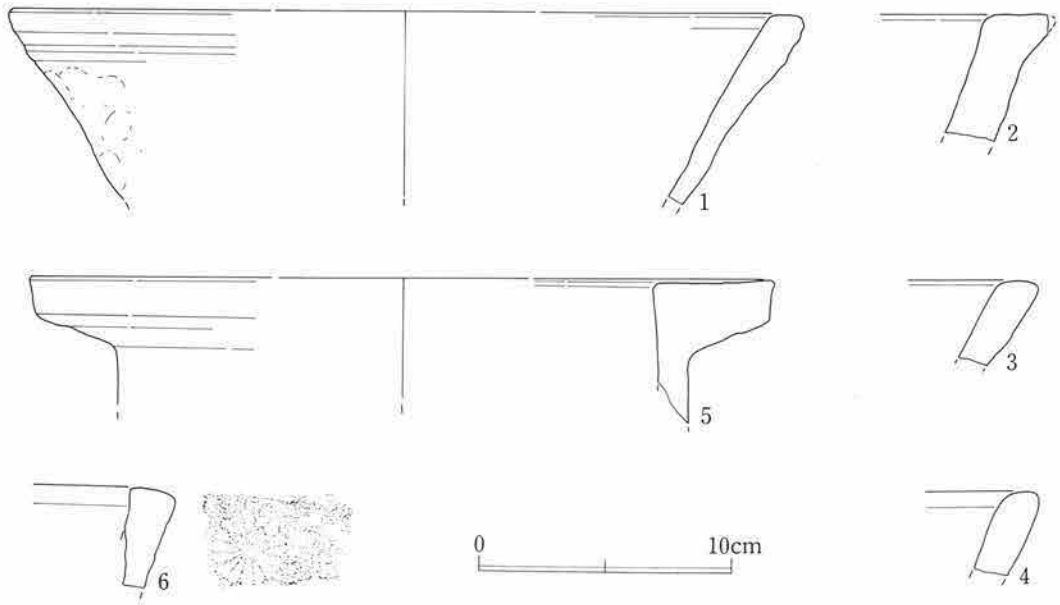


Fig. 13　手焙り

ラ削りを施こす。胎土は灰白色を呈す。6溝。5—凹凸両面に縦位のナデ、側面、端面、端縁はヘラ削り。胎土は灰白色。7溝。6—凸面は縄目の叩き、凹面は縦位のナデ、側面はヘラ削り。胎土は灰白色を呈す。3溝。7—凹凸両面は横位のナデ、側面はヘラ削り、胎土は淡赤灰色を呈す。11溝。8—凹面に布目を残す。凹凸両面は縦位のナデ、側面、側縁はヘラ削り。胎土は灰白色を呈し黒色砂粒を含む。10溝。9～12は凹面に布目を残す丸瓦である。9—瓦当面との接合部である。胎土は灰白色を呈し緻密。3溝。10—凸面は横位のナデ、側面、側縁はヘラ削り。凹面には多量の粗砂が付着する。3溝。11—凹凸両面ともに縦位のナデ、側面、側縁はヘラ削り。胎土は灰白色を呈し黒色砂粒を多量に含む。2溝。12—丸瓦玉縁部。凸面、側面、側縁は丁寧に磨かれる。胎土は赤灰色を呈し精良。6溝。

Fig. 15—1～38及びFig. 16—39～74は南北溝出土のかわらけである。図示し得た以外にも多量のかわらけ片が出土している。ここではFig. 9で示した南北溝堆積土層図を参照し、1溝から16溝に分け、出土したかわらけの主たる器形の傾向と法量について報告する。1溝ではロクロ成形のかわらけが2点出土した。1—体部は直線的に立ちあがり、薄手で器高3cm近くある。2—内彎する薄手タイプで器高2, 2cm。2溝出土は3～5でありいずれもロクロ成形である。3、4は大型の薄手で器高の高いものである。小型は厚手で器高は1.5cmと低い。3溝出土は6～12でいずれもロクロ成形。6—薄手で体部が開く。7—やや薄手で内彎する。8、11—体部中位に屈曲をもつ。9、10—薄手で内彎し、器高の高いもの。12—胎土に黒色砂粒を含み外反気味に立ちあがる。13—折縁気味の特小品である。全体的に大型品は薄手で器高が高く、小型品は器高の低い厚手が混入するが、薄手タイプが主流である。4溝では図示し得たのは1点のみである。14—ロクロ成形の厚手で器高の低いものである。5溝出土は15～18である。15—体部中位に屈曲をもつ。16—体部は直線的に

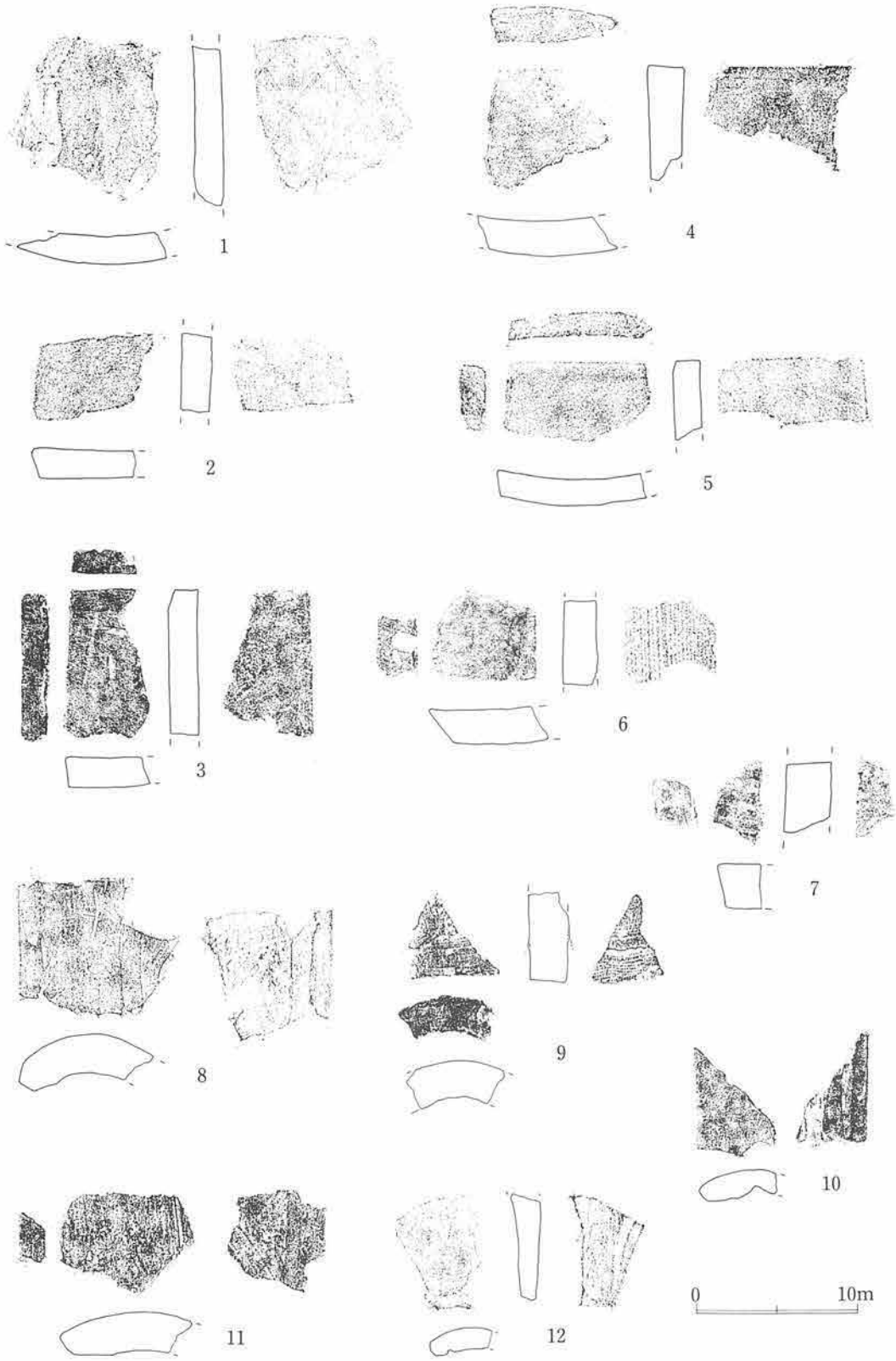


Fig. 14 瓦

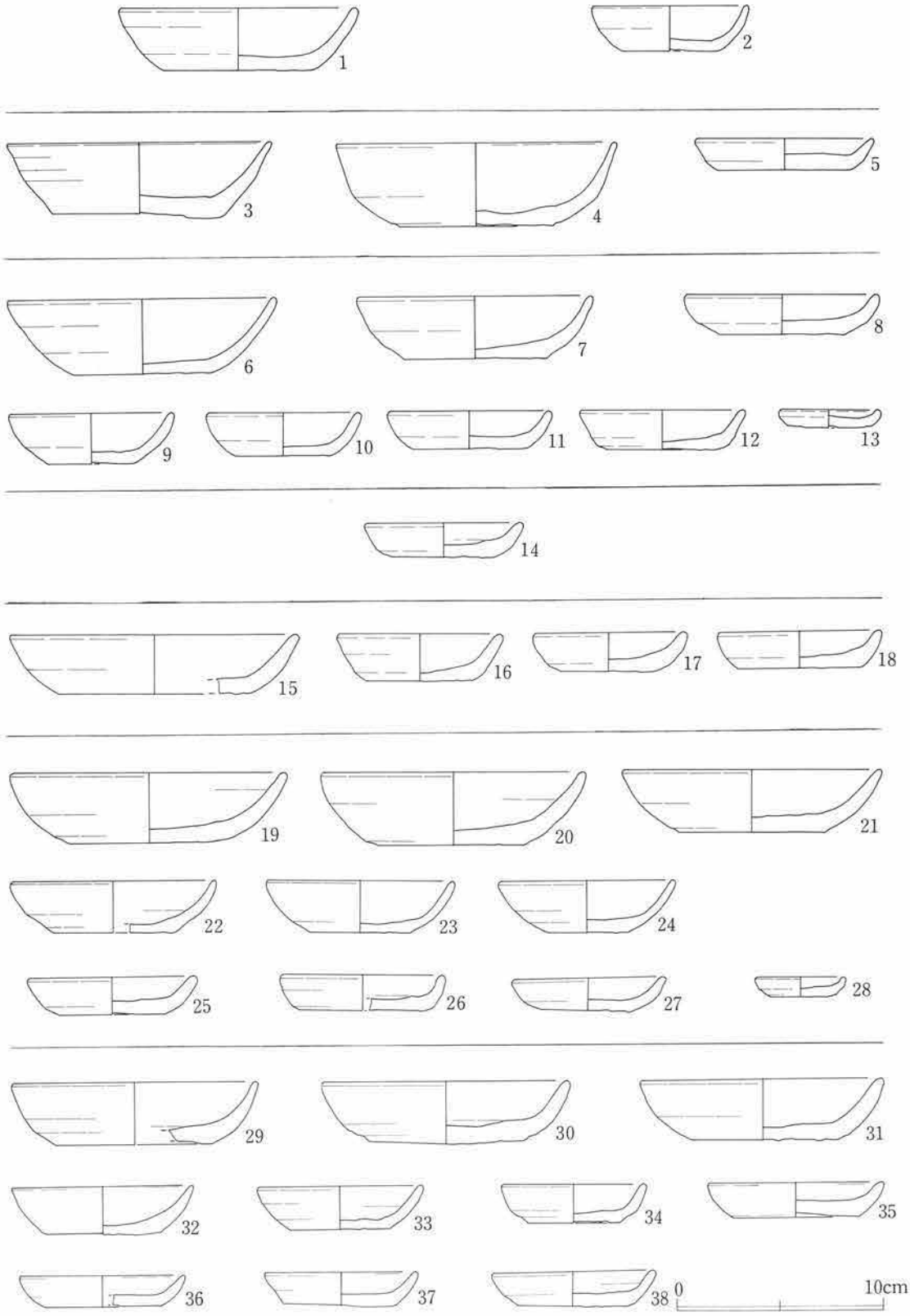

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
0
10cm

Fig. 15　かわらけ（1）

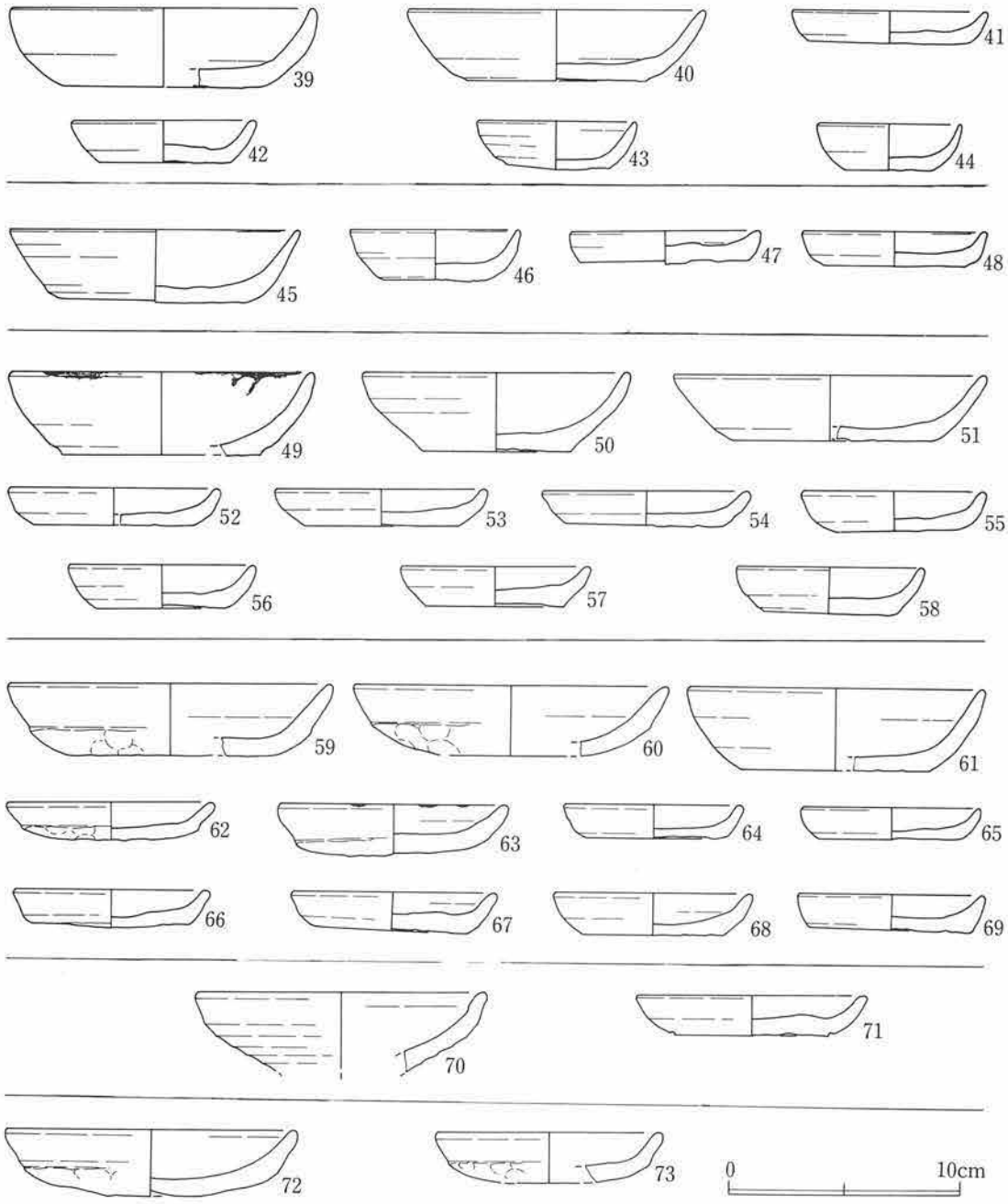


Fig. 16　かわらけ（2）

立ちあがる。17、18―厚手で器高の低い内彎するもの。いずれもロクロ成形である。全体的に大型品は薄手のものはやや厚くなり器高は3.5cm程である。小型品は厚手で器高が2.0cm前後のものが主流である。6溝出土は19～28である。19～21―体部が内彎するやや薄手タイプ。22～24―胎土が精良で器高の高い薄手。25―体部下位で屈曲し開き気味に立ちあがる。26、27―体部中位で屈曲し上方に立ちあがる。28―胎土に黒色砂粒を含む特小型のかわらけである。いずれもロクロ成形。全体的に大型は器高3cm程、小型は器高2cm前後のものと、1.5cm前後のものとが出土している。7

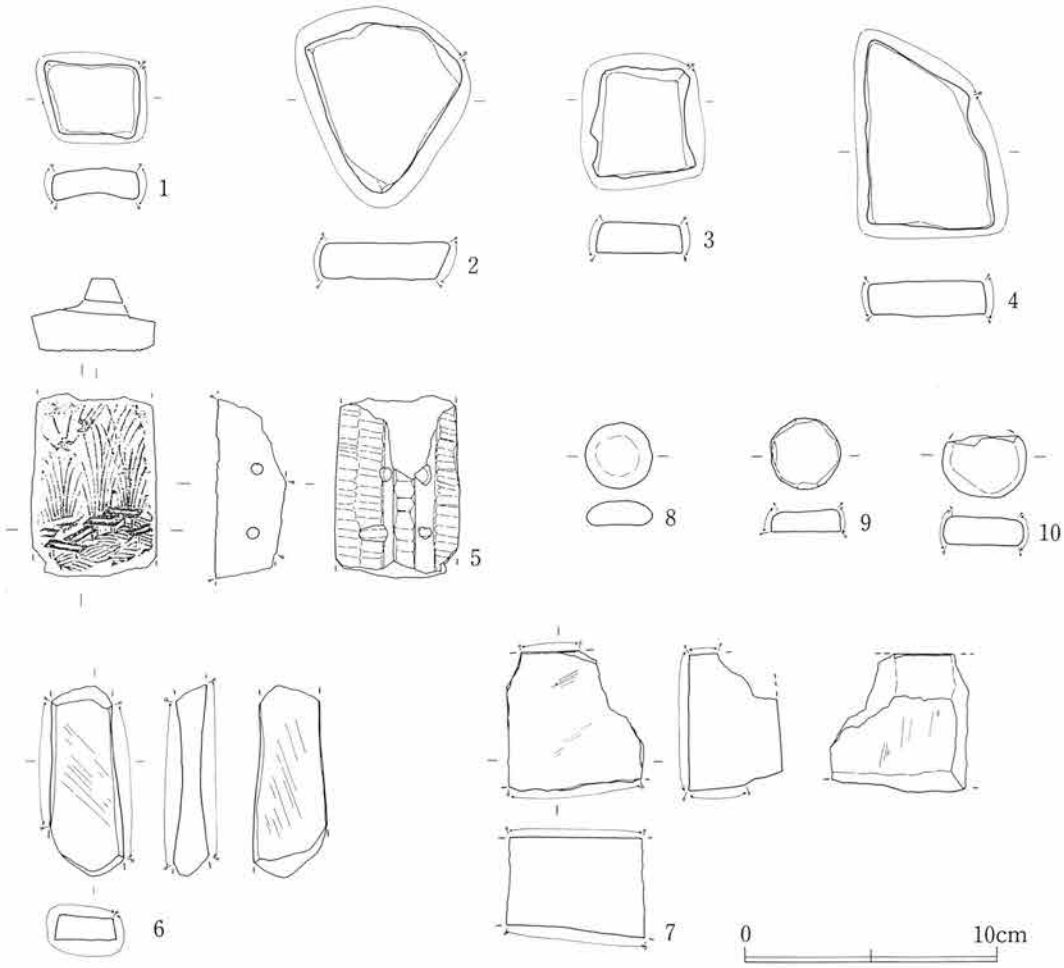


Fig. 17　土製品、石製品

溝出土は29～38である。29～31―体部が内彎する厚手。32、33―内彎する器高の高い薄手。34―体部下位で屈曲し上方に立ちあがる。35―内彎する厚手タイプ。36～38―彎曲が弱く、やや開き気味に立ちあがる。いずれもロクロ成形。全体的に大型は厚手で器高3㎝前後、小型は器高2㎝程のものと1.5㎝前後のものである。8溝出土は39～43。39―体部中位に屈曲をもち内彎する。40―薄手気味で開くもの。41―胎土に黒色砂粒を含み器高の低いもの。42―薄手で開き気味に立ちあがる。43、44―薄手で内彎する器高の高いもの。いずれもロクロ成形。全体的に大型は器高3㎝程度、小型は径が小さく器高が2㎝程度のものと、器高が1.7㎝程のものがある。9溝出土は45～48である。45―薄手で開くもの。46―内彎し器高が高いもの。47、48―黒色砂粒を含み、径が約8㎝程と広く、口径、底径の差がほとんどない。いずれもロクロ成形。全体的に大型は器高3㎝程、小型は器高2㎝程のものと1.5㎝程のものである。10溝出土は49～59。49―黒色砂粒を含み厚手で内彎する。50―開き気味に立ちあがり体部中位で内彎する。51―ほぼ直線的に開く。52～54―口径約9㎝、底径約7㎝と広く、器高は低い。黒色砂粒を含む。55、56―内彎するタイプ。57―体部中位に屈曲

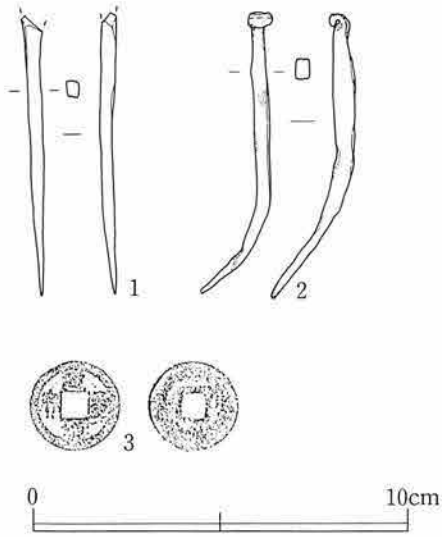


Fig. 18　金属製品

をもつ。58―内彎し、やや器高の高いもの。いずれもロクロ成形である。全体に大型は器高3.2cm程、小型は1.5cm程のものが主流である。11溝出土は59～69。59、60―手づくね成形でいずれも稜は弱くのっぺりとしている。61―内彎しながら立ちあがりやや器高が高い。62、63―手づくね成形で62は器高が低く稜は強いが63はのっぺりとしたものである。64、69―直線的に立ちあがる。65、68―体部中位に屈曲をもつ。66、67―黒色砂粒を含み体部は緩く外反する。全体に大型は厚手で器高3.5cm。小型は器高1.3～1.8cmであり厚手のものである。手づくねタイプも混入している。12、13、14溝では出土かわらけはごく少量で図示できるものはない。15溝出土は70と71である。70―体部外面に強いロクロ痕を残す。開き気味に立ちあがり体部上位で内彎し口端部は外反する。口径12.2cm。71―黒色砂粒を含み体部は開き気味に内彎する。口径9.7cm、底径6.6cm、器高1.7cmを測る。16溝出土は72、73であり、いずれも手づくね成形である。72―体部の稜は弱く開き気味に立ちあがる。73―体部の稜は強く上方に立ちあがる。

Fig. 17―1～10は擦り常滑、石製品、土製品である。1～4―常滑片の割れ口に研磨痕を残す。1―2溝。2―5溝。3、4―6溝出土である。5―滑石鍋転用のスタンプである。7×4.5cmのスタンプ面に二羽の鳥、波紋、垣根、草を陽刻する。背面の取手（鍋鍔）には穿孔が二穴ある。7溝。6―砥石。中砥であり4面を使用している。1溝。7―砥石。荒砥であり4面を使用している。6溝。8―円形の粘板岩である。碁石として使用された可能性がある。2溝。9―かわらけ底部片を加工した円盤である。周囲の削痕が明瞭である。11溝。10―かわらけ円盤。周囲の仕上げは丁寧。10溝。

Fig. 18―1、2は鉄釘、3は銭である。1―残存長5.3cmである。断面方形を呈する。15溝。2―長さ8.3cm。頭部は一度平らに叩き折り曲げられる。7溝。3―北宋銭「元豊通宝」。6溝。

Fig. 19―1～13、及びFig. 20―14～39は木製品である。1―木簡。残存長28.6cm、残存幅2.5cm、厚さ約9㎜。左半部及び下部を折損しており判読は不可能。6溝。2―呪符。圭頭型である。長さ24.5cm、幅2.7～4.7cm、厚さ7㎜。板の先端を両脇から削っているが尖らせてはいない。頂部から約2.0cmの場所に直径4㎜の穿孔がある。墨痕は「蘇民将来子孫家也急□□律令」と判読した。5溝砂層。3―陽物。残存長14.4cm、直径1.2～2.0cm。体部断面は八角形を呈する。亀頭部は半分ほど欠損している。11溝。4―刀形。長さ23.1cm、幅2.6cm、厚さ5㎜。縦割り板に削りを加えて切先、刃を削りだしている。柄は表現されておらず端部は山形になっている。7溝。5―木製硯。

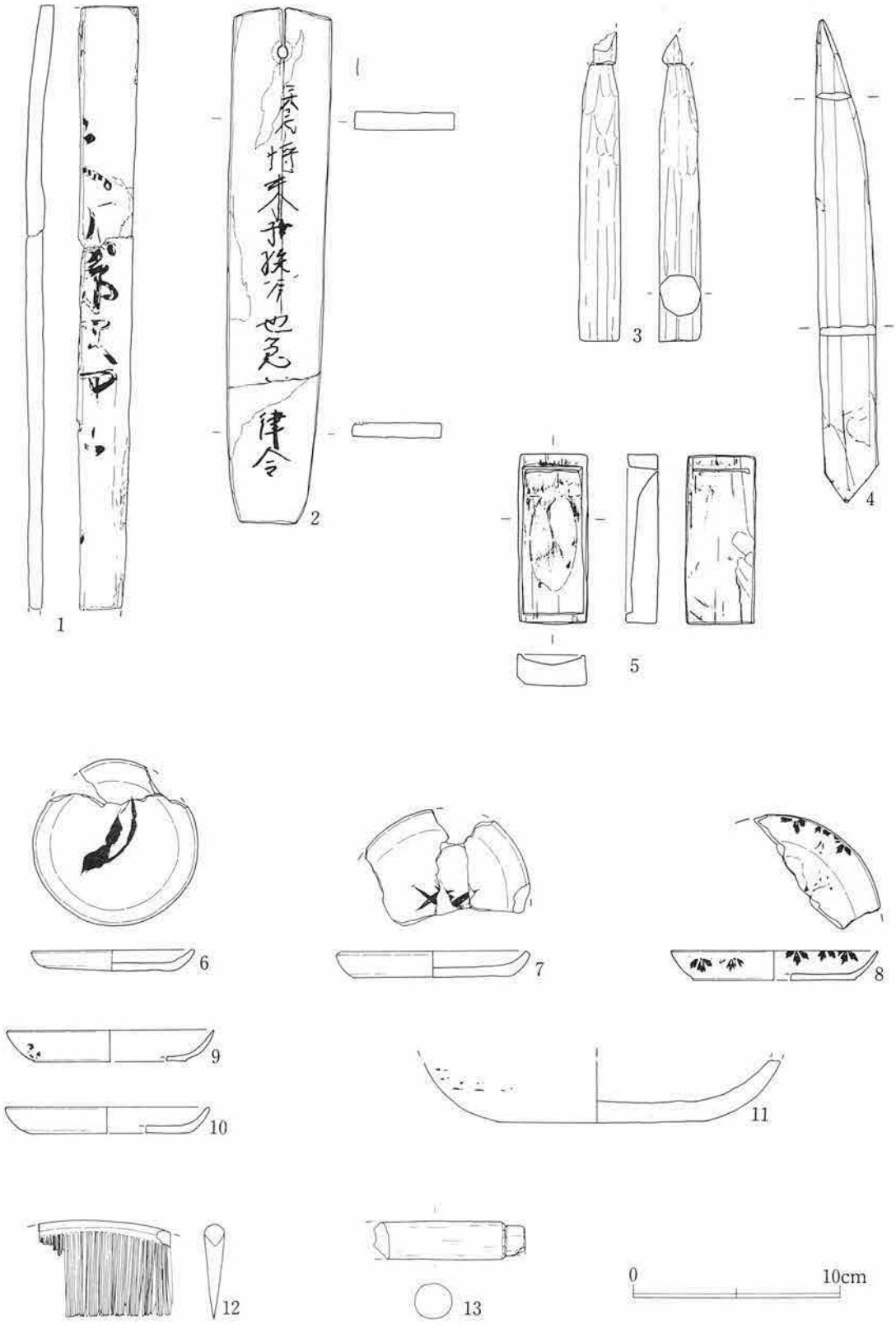


Fig. 19　木製品（1）

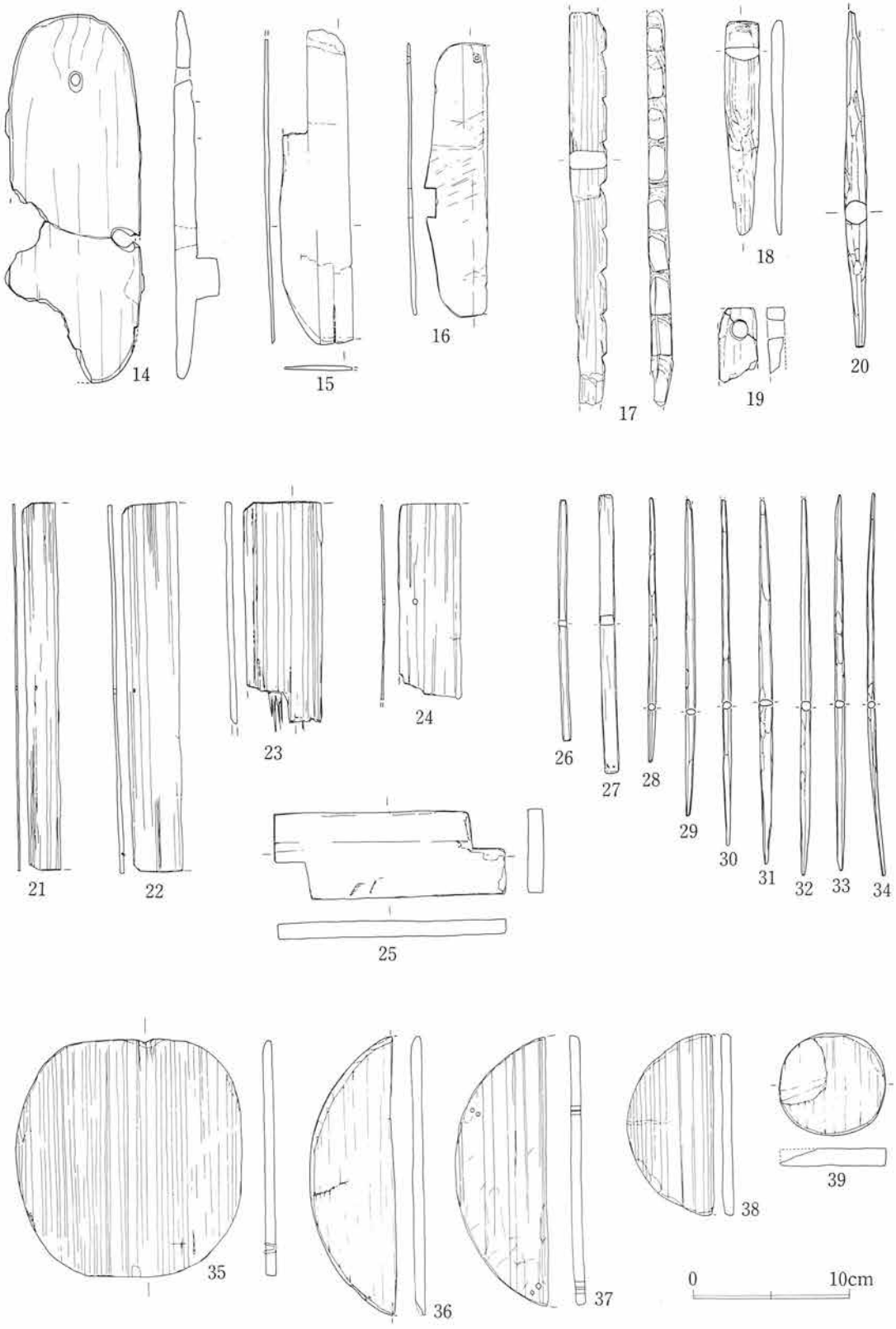

14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
0
10cm

Fig. 20　木製品（2）

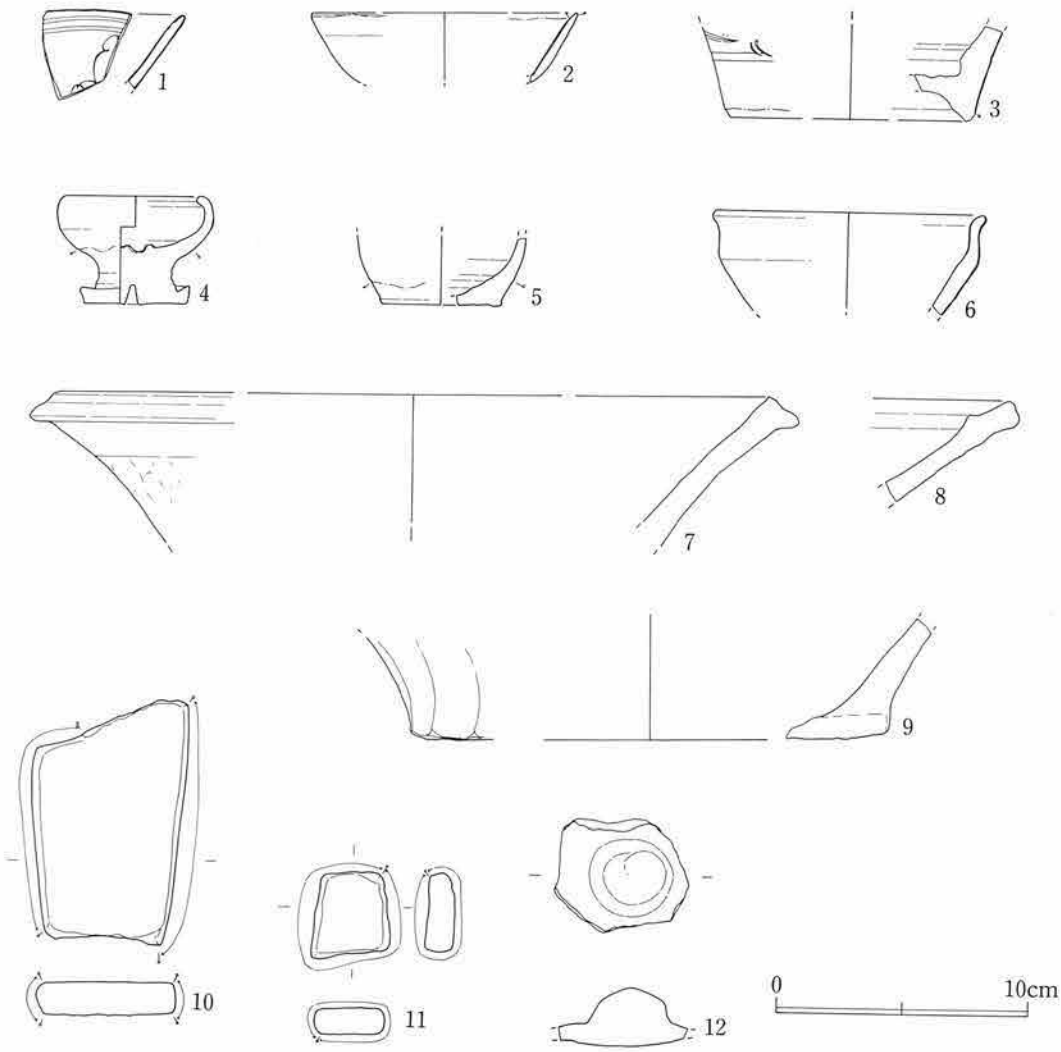


Fig. 21　採集遺物

長辺8.1cm、短辺3.3cm、高さ1.5cm。海及び陸部には墨が残る。陸部の凹みは著しい。5溝砂層。6～10は漆皿。6－口径7.7cm、底径6.2cm、器高1.0cm。内底面に朱漆による手描き文様がある。4溝。7－口径8.8cm、底径7.5cm、器高1.2cm。口縁部は欠けているが切断面にも黒漆が施されている。内底面には朱漆による手描きの菱形（？）文が描かれる。4溝。8－口径9.9cm、底径7.8cm、器高1.4cm。体部外面から内面にかけて朱漆で草花文が描かれる。10溝。9－口径9.8cm、底径7.3cm、器高1.5cm。輪高台をもつ。体部外面には手描きの菊花文が施される。5溝。10－口径9.7cm、底径7.1cm、器高1.3cm。黒漆地に内面だけ朱漆が塗られる。5溝。11－椀。底径9.7cm。外面のところどころに黒漆が残存する。11溝。12－黒漆塗りの横櫛。歯は1㎜以下の間隔で挽き出されている。棟厚9㎜、棟高1.0cm、歯の長さ3.8cm。7溝。13－栓状木製品。残存長7.1cm、直径1.8cm。丁寧に面取りされており、端部の直径は1.4cmである。7溝。14－下駄。台幅8.4cm、長さ23.4cm、

厚さ1.4cm。歯はほとんど残っていない。前緒孔は歯に向かい、横緒孔は内側に向かうように穿孔されている。7溝。15—板草履の芯。残存長19.8cm、残存幅4.3cm、厚さ3㎜。6溝。16—板草履の芯。長さ17.0cm、幅4.0cm、厚さ3㎜。先端部に一穴の穿孔があり、側面には長方形の切り込みを有する。7溝。17—自在鉤状木製品。残存長24.7cm、幅2.0cm、厚さ1.0cm。9箇所に歯の刻みを削りだしているが5㎜前後である。自在鉤としては小型であり、縄を編むような道具の可能性がある。7溝。18—用途不明木製品。長さ14.5cm、幅0.8cm～2.1cm。断面は半円形を呈す。7溝。19—用途不明木製品。残存長4.5cm、幅2.5cm、厚さ1.1cm。直径1.1cmの穿孔が施される。7溝。20—用途不明木製品。箸状木製品に類似する作りをしているが、かなり太い。長さ21.2cm。最大径1.5cm。両端は尖らずに平担に仕上げている。6溝。21～24は折敷である。21～23は角を直線的に切り取ったものである。厚さは2～5㎜程度。21、22は11溝、23は10溝、24は7溝出土。25—用途不明木製品。長さ14.6cm、幅5.4cm、厚さ1.1cm。6溝。26～34は箸状木製品である。26、27—断面は方形状を呈す。26は長さ15.2cm。27は17.7cm。7溝。28～34は断面が円形、楕円形を呈する。長さは16.7cm～24.3cm。11溝。35—隅丸方形を呈する曲物の底部である。14×14cm。厚さ6㎜。桜皮が通される箇所がある。3溝。36～39は平面円形を呈する曲物の底である。36—復元直径21cm前後、厚さ6～7㎜。側面はやや斜めに削られている。11溝。37—復元直径19cm前後、厚さ6㎜。周縁部に2穴で1対を成す穿孔が2箇所にみられる。側面はほぼ直角に削られている。14溝。38—復元直径12cm前後、厚さ5㎜。6溝。39—長軸6.8cm、短軸6.3cm、厚さ1.2cm。11溝。

（4）採集遺物（Fig.20）

重機による表土掘削時に採集された遺物をここに含めた。図示可能なものはFig.20—1～12である。1—青磁劃花文碗。口縁部内面に2条の輪花様の刻を施し、その下に飛雲文を施す。釉は暗緑色を呈し、胎土は灰白色で緻密。2—口兀白磁。復元径10.4cm。釉は灰白色透明、胎土は灰白色で堅緻。3—青白磁梅瓶の底部片。底径9.5cm。胴下部に1条の沈線と唐草文を配する。釉は水青色透明、胎土は灰白色を呈する。外面の露胎部は赤褐色を呈する。4—瀬戸系秉燭（ひょうそく）。口径5.2cm、底径4.1cm。胴部最大幅5.7cm。器高4.2cm。釉は鉄釉、脚部は無釉。外底面は回転糸切りされ、焼成前に穿孔を施すが、内底面までは達しない。内底面には灯芯を立てて使う突起をもつ。胎土は灰白色を呈し粗雑。5—瀬戸鉄釉壺。底径4.7cm。胴部下半から外底面は無釉。胎土は灰白色を呈し粗雑である。外底面は回転糸切りである。6—瀬戸鉄釉の天目茶碗。口径10.4cm。胎土は灰白色を呈し粗雑。7—常滑捏鉢。口径28.0cm。口縁端部は外方に引きだされる。胎土は灰色を呈し粗雑である。8—瀬戸美濃系の擂鉢。口縁端部の折り返し幅が広い。肚土は乳白色を呈しやや粗らい。紫褐色釉がかかる。9—常滑捏鉢。底径は18.5cm。10、11—割れ口に研磨痕を有する常滑片である。12—白かわらけ質蓋。側面観は帽子形を呈する。

第四章　まとめと考察

本遺跡からは調査面積が狭いことにも拘らず若宮大路の東側に構築された南北溝、柱穴、土壙等の遺構と多種、多量の遺物とを検出することができた。なかでも調査区西側で検出された溝(III溝)は今までの調査では全容を把握されていなかったものであり、今後の資料の蓄積を期待したい。ここでは、以上の調査により把握された事実から遺跡の年代、南北溝、柱穴等について考えたい。

南北溝

本調査地点（以下、A地点）で検出された南北溝は、既に調査されている雪ノ下一丁目371番1地点（以下、B地点）と、雪ノ下一丁目372番1地点（以下、C地点）とにおいて検出されている。南北溝について考察するにあたり『北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目371番－1地点発掘調査報告書（市教育委員会。1985。）』に記載されている溝対比図をもとに、若宮大路東側の南北溝概念図（Fig. 22）を作製した。A地点からB地点まで約27m、C地点までは約48mほど離れており、また、3地点は同一の座標基準を使用していないため、各地点の溝上端ラインを直線で結んだだけである。I、II溝は3地点ともにほぼ同規模で検出されている。また、C地点西端の落ち込みはおそらくIII溝のものと推測される。

ここで、本調査地点における年代観について考えたい。南北溝の堆積状況はFig. 9に示したが、I、II溝に関しては、標高6.8～6.9mで上層と下層の溝群に大別できる。出土遺物からも上層の溝である1溝では瀬戸、備前などから15世紀以降の年代があたえられる。2～8溝で出土したかわらけは全てロクロ成形であり、器肉が薄く、深い

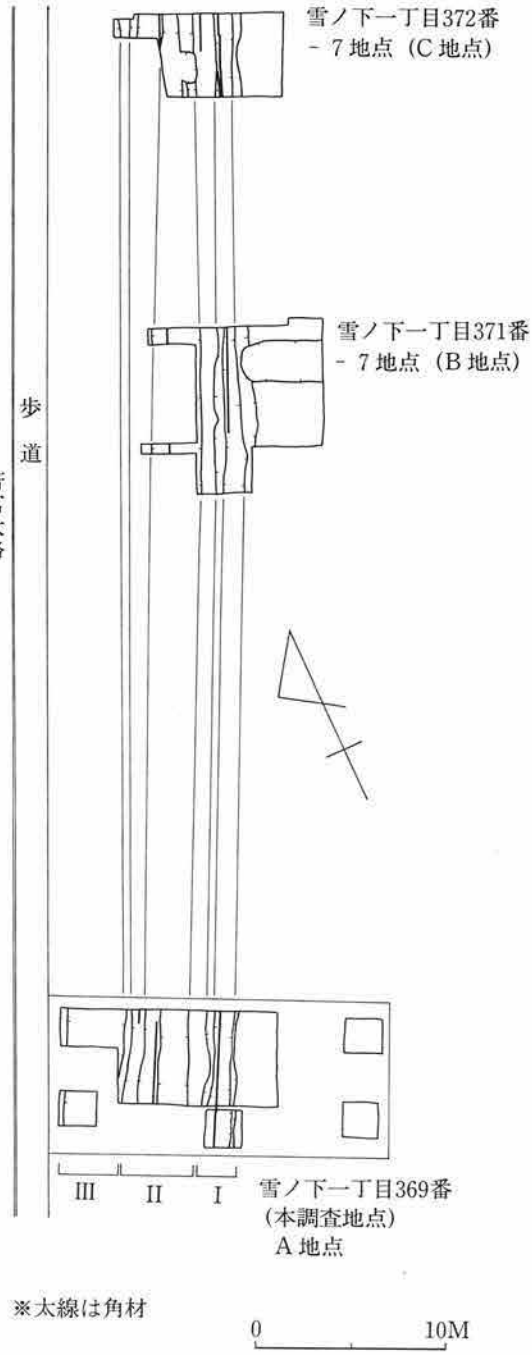


Fig. 22　若宮大路東側溝概念図

器形で側面が丸味をもつものであり、器肉が厚く直線的に外反する15世紀代のタイプが出土しないことから14世紀中葉～後葉の年代があたえらよう。また、覆土堆積状況から判断すると溝は東から西へ（若宮大路側へ）改修されていったものと考えられるが、遺物からは明確な時期差を確認することは不可能であった。下層の溝である９～11溝に関しては、９溝出土のかわらけはいずれもロクロ成形であり、やや厚手で器高の低いものが中心であり、13世紀後葉～14世紀中葉の年代を充てたい。10溝では９溝とほぼ同じタイプのかわらけが出土しており、さらに10溝底で検出された角材Ⓓと９溝底で検出された角材Ⓑの距離は芯～芯で3.45～3.48ｍを測り、南北軸方位はＮ－34°－Ｅでほぼ平行し、また、検出レベルは約6.60ｍであり、同時期に構築された可能性もある。しかし、両溝の新旧関係は切り合いの部分が上層から掘り込まれた溝により削平されているために、土層断面からは判断不可能であった。11溝ではロクロ成形のかわらけは黒色砂粒を含み、厚手の器肉をもち、口径、底径が広く、器高は低い。手づくねタイプは厚手のものであり、13世紀中葉～13世紀後葉の年代を充てたい。また、Ⅲ溝においても、12、13溝を上層、14～16溝を下層溝として考えられるが、12、13溝に関してはごくわずかの遺物小片が出土しているだけであり、年代の判断は不可能であった。14～16溝においてかわらけは厚手の手づくねタイプと砂質で黒色粒子を含み、体部は開き気味に立ちあがる器高の低いロクロ成形のものが出土している。わずか２片だけであるが体部に強いロクロ目をもつタイプも出土しており、13世紀中期の年代を充てたい。以上若宮大路東側に構築された南北溝（14～16溝）は13世紀中葉頃に廃絶され、東側に掘り直され（11溝）たが、14世紀初頭頃にさらに東側に構築（９、10溝）されていった。14世紀中葉以降は掘り込み面が高いためか以前よりも溝底は浅く西側へと掘り直され、15～16世紀頃までは溝として存続していたものと推測される。

ここで、若宮大路西側で検出されている南北溝との比較を試みたい。「北条時房、顕時邸」で検出されている南北溝の構築方法は、逆台形の掘方を造り、溝底の両脇に枘穴をもつ角材を、枘穴が対応するように平行させて置き、枘穴に束柱を立て、その裏に土止め用の横板を並べる。束柱の上部、下部には内側への倒壊防止の為に梁（突張り）を施している。「北条泰時、時頼邸」では、逆台形の掘方を呈しているが、溝底のほぼ中央で枘穴をもつ角材が検出されている。これは、２本並べられていた角材の１本が溝廃絶時にぬきとられたのか、もともと角材は１本であり、単独で用いられたものか、９、10溝で指摘したように２つの溝が同一遺構として構築され、例えば角材Ⓕ、Ⓖを梁として使われていたかは明確ではない。いずれにせよ、枘穴を有するということは束柱を支える根太状の角材ということであり、柵列、護岸施設等、何らかの上部構造があったことを示している。

柱穴

今回の調査では多数の柱穴が検出されたが、柱穴列として確認されたものは２列にすぎない。本遺跡周辺には多数の掘立柱建築址が存在していたことは過去の調査からも明らかである。今回検出された柱穴のなかには南北溝の覆土を掘りぬく例もあり、溝を埋めたてて敷地空間を広げ、建物を構築したことが窺え、また、柵列、塀（築地塀）といった構築物をも想定することができよう。

◀1. 調査地点近景（南から）

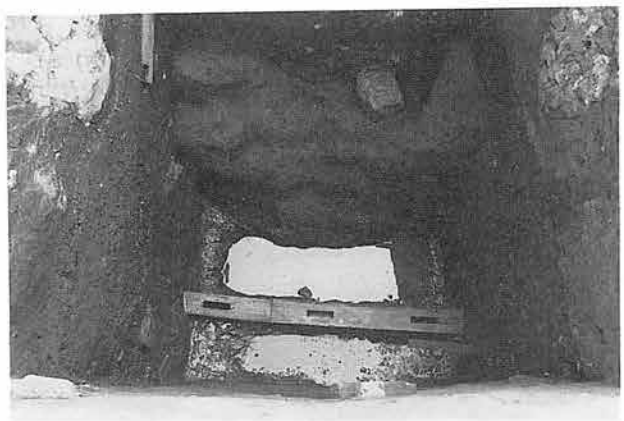
2. 調査地点近景（東から）▶

▼ 3. II 次調査全景（南から）

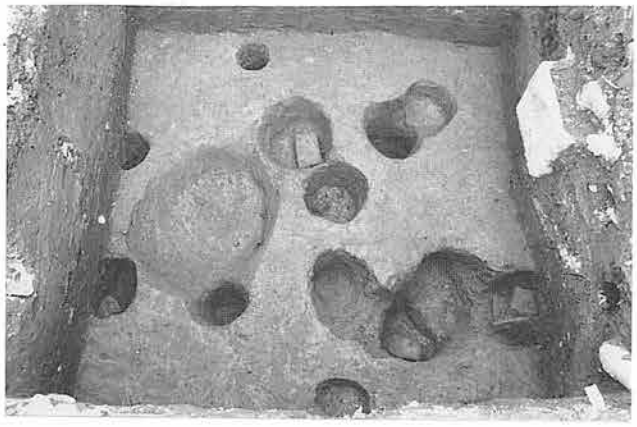
PL. 2

◀ 1. Aトレンチ（西から）

2. Cトレンチ（西から）▶



◀ 3. Eトレンチ（南から）



◀ 1. Bトレンチ（西から）

2. Dトレンチ（西から）▶

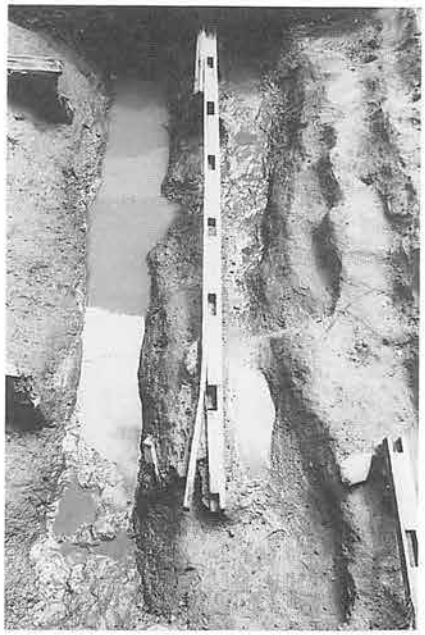
◀ 3. Fトレンチ（南から）

PL. 4

◀ 1. II次調査全景（西から）

2. 柱穴列（北から）▶

▼ 3. II次調査全景（東から）

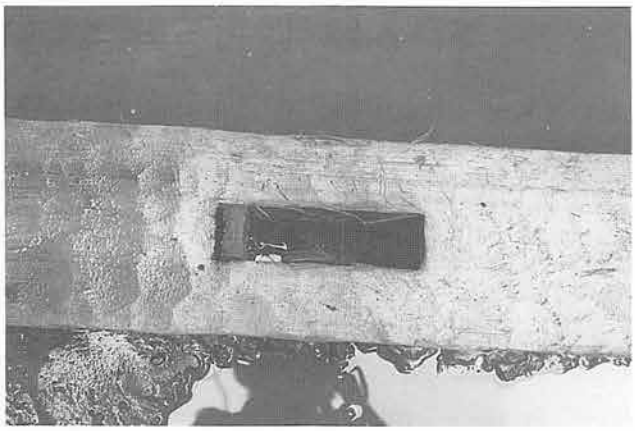


▲ 1. 南北溝 I（北から）

▲ 2. 南北溝 III（西から）

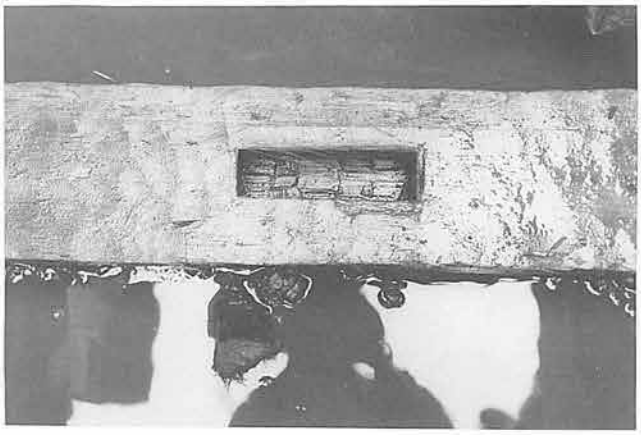
▼ 3. 南北溝 I、II（北から）

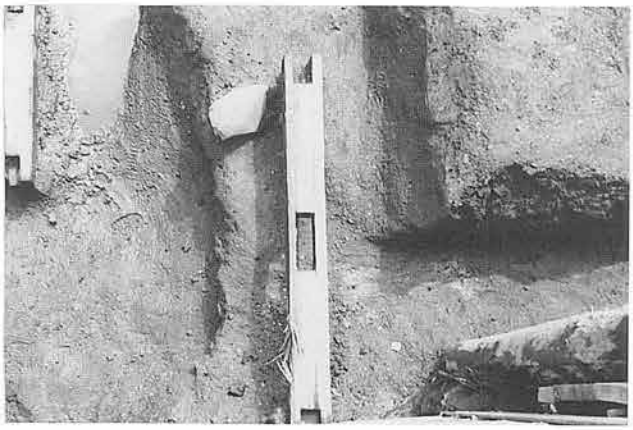
PL. 6



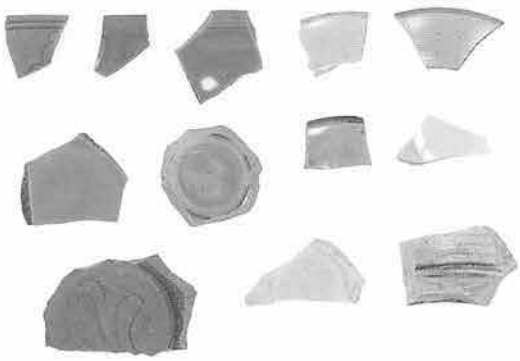
◀1. Dトレンチ出土角材Ⓒ部分
（西から）

2. Dトレンチ出土角材Ⓒ部分 ▶
（西から）



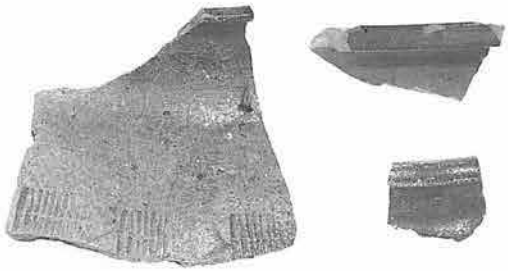


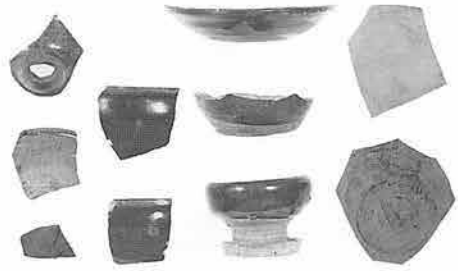
◀ 3. 南北溝II出土角材Ⓔ
（北から）



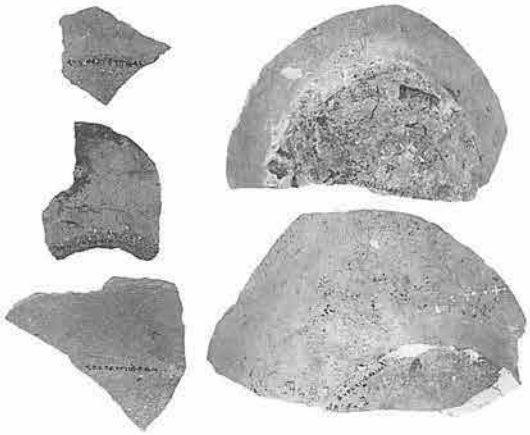
▲舶載陶磁器（内面）

▲舶載陶磁器（外面）

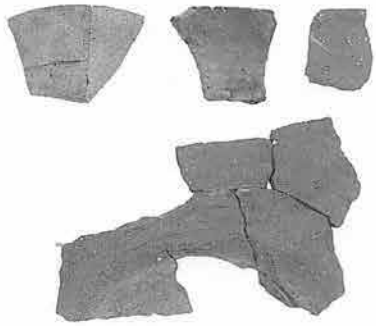




▲瀬戸、美濃

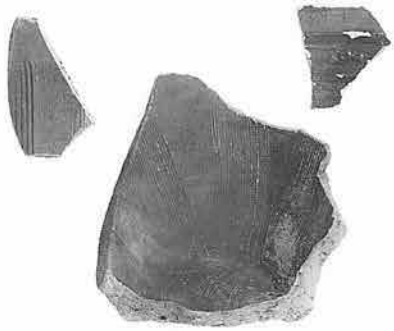


▲常滑甕



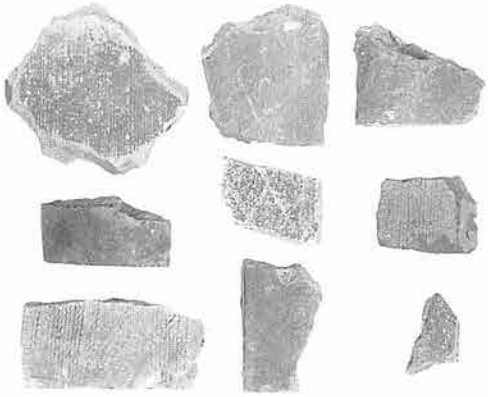
▲山茶碗窯系捏鉢

▲常滑捏鉢

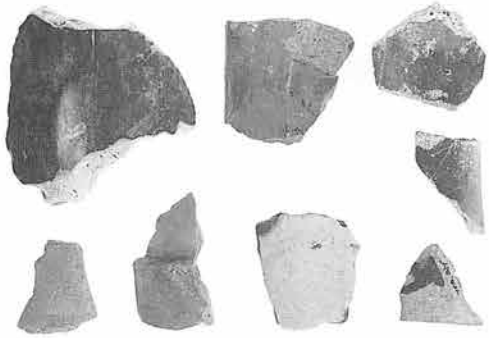


▲擂　鉢

PL. 8



▲平　瓦



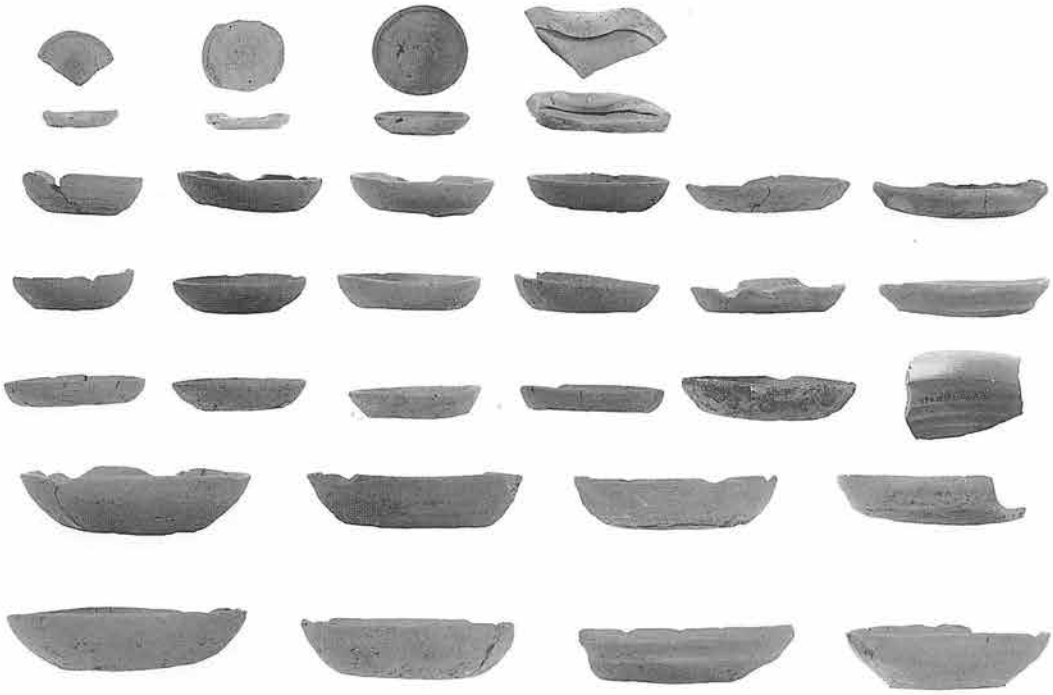
▲丸　瓦

▲白かわらけ

▲かわらけ質土製品

▲白かわらけ質土製品

▲手焙り

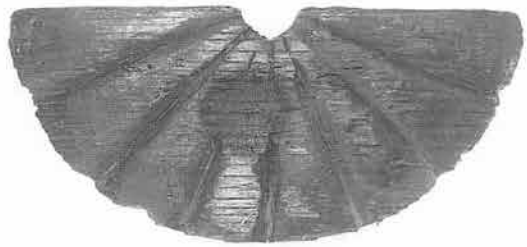


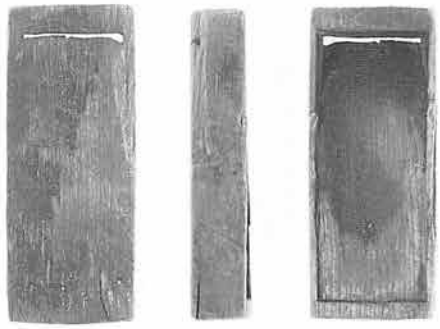
▲かわらけ

▲石製品

▲鉄製品・銭

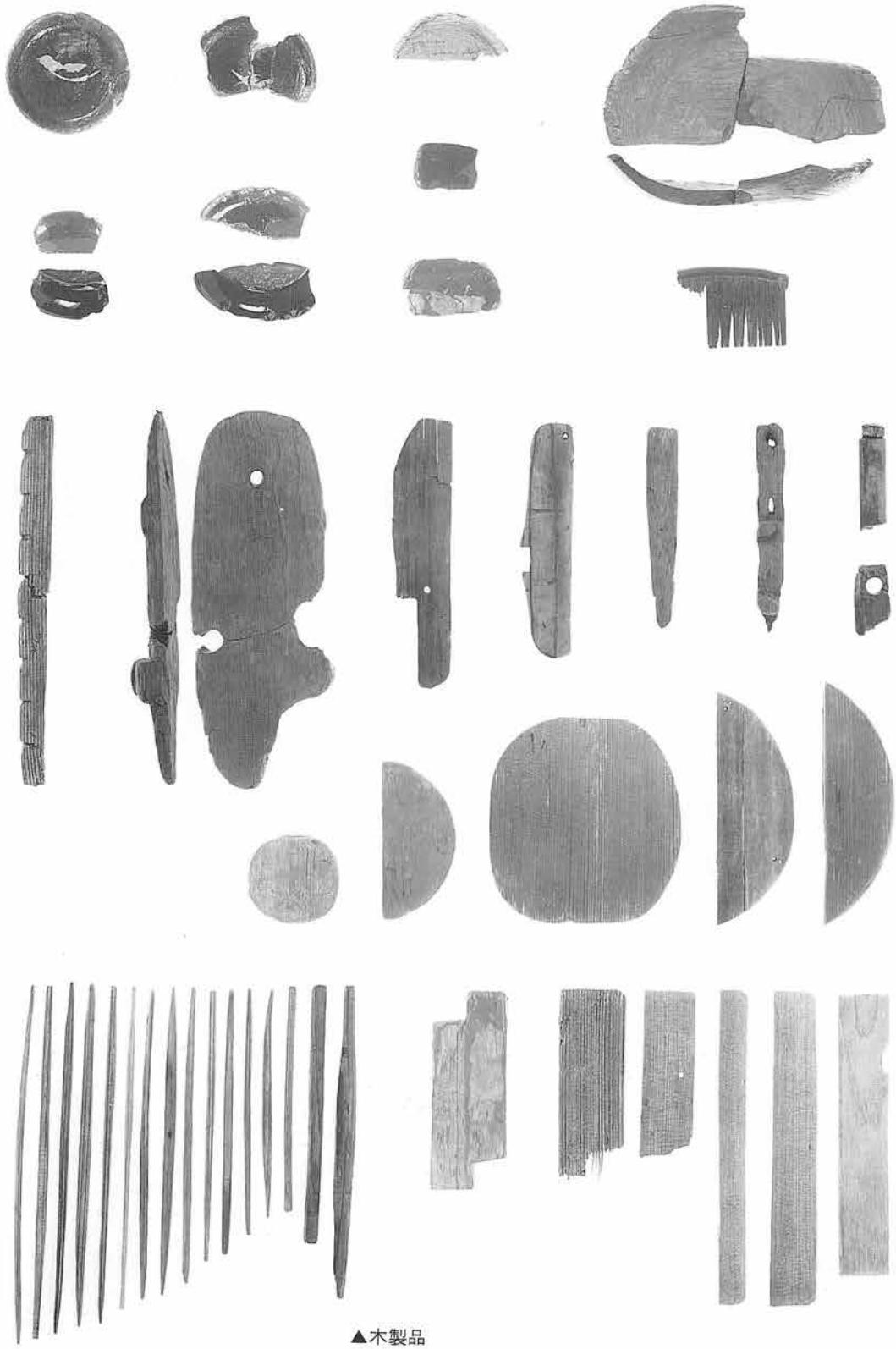
▲研磨常滑片





▲木製品

PL.10



▲木製品

10. 桑ケ谷療病院跡（No. 294）

鎌倉市長谷三丁目630番１地点

例　言

1．本報は鎌倉市長谷三丁目630番１に於ける住宅建設に伴なう発掘調査の報告書である。

2．本報の執筆は田代郁夫、原　廣志が行なった。

3．図版写真は遺構、遺物とも木村美代治が撮影した。

4．調査体制は以下のとおりである。

主任調査員　田代郁夫・原　廣志・木村美代治

調　査　員　継　実

調査補助員　大畑明子・伊藤朋子・佐藤仁彦

5．出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

本 文 目 次

第一章　歴史的環境 …… 285
第二章　検出した遺構 …… 288
（1）層序 …… 288
（2）第1面 …… 288
（3）第2面 …… 290
（4）第3面 …… 290
第三章　出土した遺物 …… 291
（1）包含層中出土のかわらけ …… 291
（2）第1面出土のかわらけ …… 291
（3）第1面構成土(黒色土) 出土のかわらけ …… 291
（4）第2面構成土(黒色土) 出土のかわらけ …… 291
第四章　まとめ …… 293

挿 図 目 次

図1　遺跡位置図 …… 284
図2　調査地点位置図 …… 286
図3　調査区配置図 …… 287
図4　第1面遺構図 …… 288
図5　第2・3面遺構図 …… 289
図6　出土遺物 …… 292

図 版 目 次

図版1―1・2 …… 294
図版2―1・2 …… 295
図版3―1・2 …… 296
図版4―1・2 …… 297
図版5―1・2 …… 298
図版6 …… 299

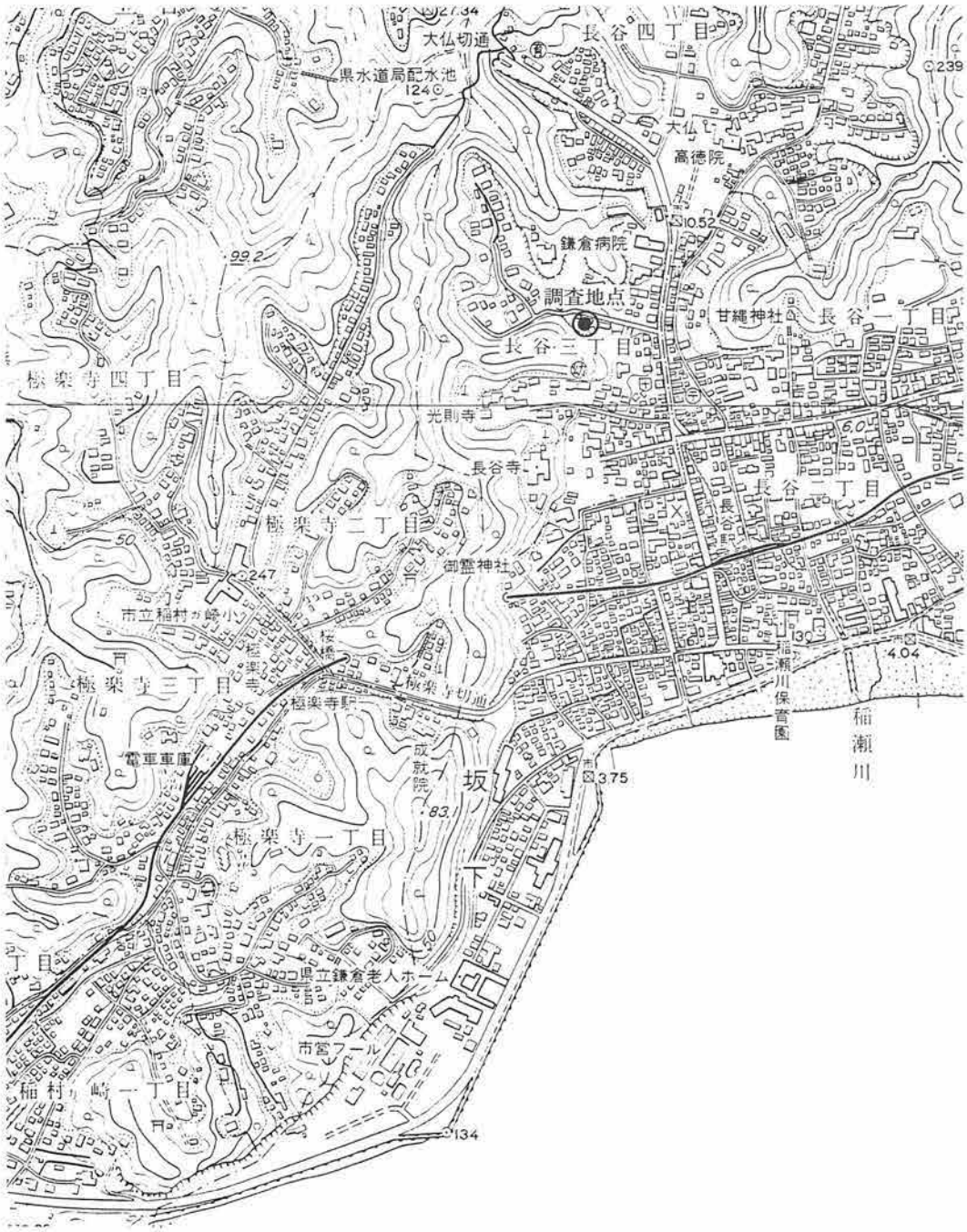

大仏切通
県水道局配水池
長谷四丁目
大仏
高徳院
鎌倉病院
調査地点
甘縄神社
長谷一丁目
長谷三丁目
極楽寺四丁目
光則寺
長谷寺
長谷二丁目
御霊神社
極楽寺二丁目
市立稲村ヶ崎小
桜橋
極楽寺三丁目
極楽寺駅
極楽寺切通
電車車庫
成就院
坂下
稲瀬川保育園
稲瀬川
極楽寺一丁目
県立鎌倉老人ホーム
市営プール
稲村ヶ崎一丁目

図１　遺跡位置図

第一章　歴史的環境

桑ケ谷療病院跡遺跡は鎌倉市長谷三丁目630番１にある。

当遺跡は鎌倉の西南に位置する。鎌倉には鎌倉七口と称する出入口が七箇所あり、その内の二つが桑ケ谷近くにある。すなわち極楽寺坂の切通しと大仏坂の切通しである。これら切通し周辺は所謂、中世都市の「周縁部」で、ここは都市へ流れ込んだ人々が集中する「場」であった。こうした「場」を宗教活動の拠点にしたのが、極楽寺坂上にある極楽寺であり、その開山である忍性であった。忍性は各地で慈善救済事業を行っているが、弘安十年（1287)、忍性71才のときここ桑ケ谷に療病所を開き、永仁六年（1298）には極楽寺坂の東、坂の下に馬病舎を設けている。桑ケ谷療病所は、20年間に癒ゆるもの四万六千八百人、死するもの一万四百五十人といわれている。この療病所の建立は前執権時宗の発願に係り、時宗は土佐の国大忍郷を以って長くその費にあてさせたといわれている。

忍性は多宝寺止住五年の間に数ケ所に悲田を開いているが、この悲田というのは慈悲の田という意味で、困窮者の一切を含め布施供養するための建物そのものを意味しない。悲田院という場合には建物を構えたのであろうが、その所在の明らかなものは鎌倉にはない。桑ケ谷の場合には谷戸内であり、忍性の行った慈善救済事業の関連施設のあったところとして、場所を限定できる少ない例であろう。

いずれにしても、文永十一年（1274）の飢饉のときに難民を集め、五十余日に渡って粥を施した大仏谷に近接し、大仏、長谷観音に近いこの遺跡は、なかなか歴史の表面に現れてこない人々の姿を垣間見せてくれる遺跡のようである。

図 2　調査地点位置図

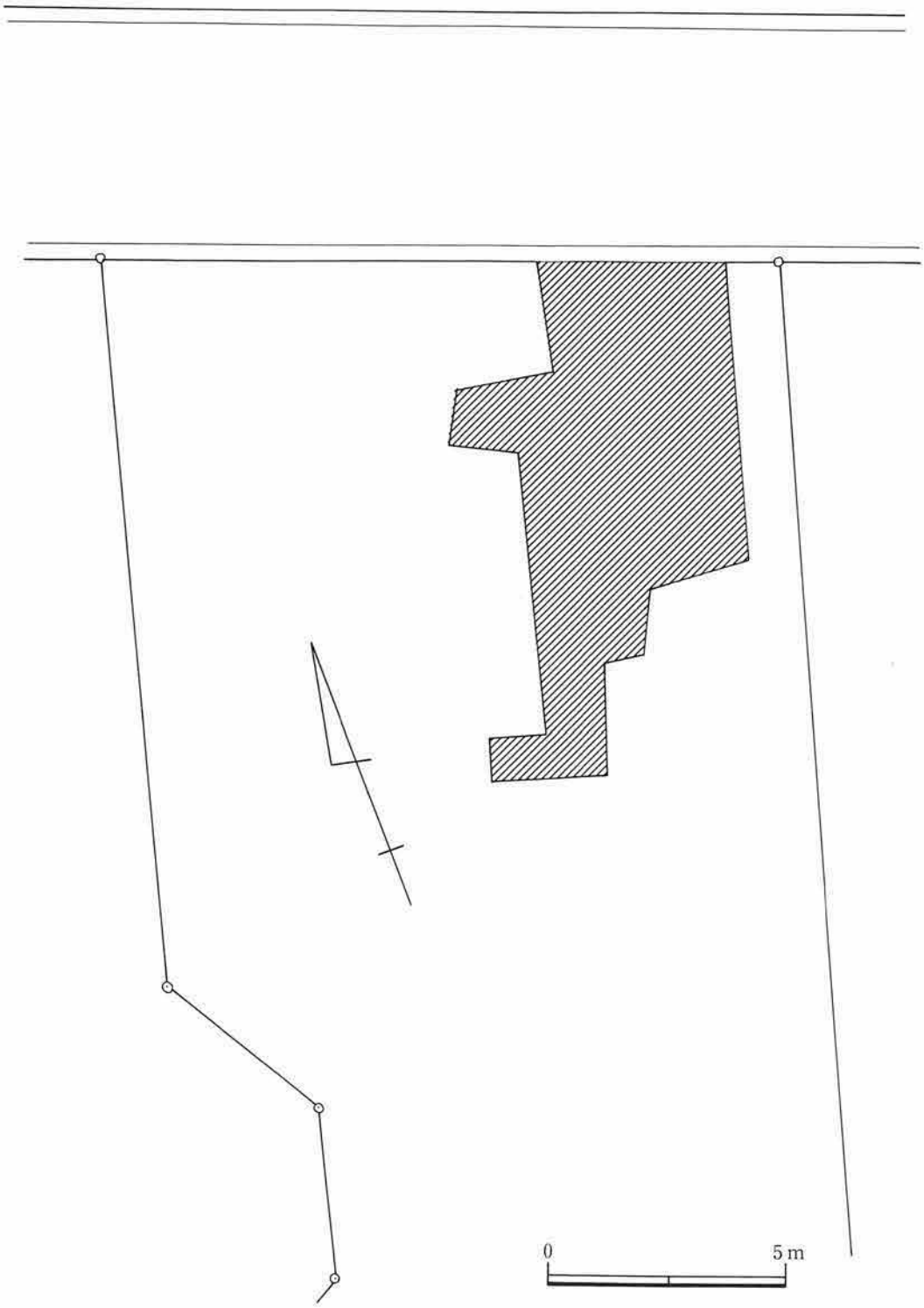


図 3　調査区配置図

第二章　検出した遺構

（1）層序（図版―5）

調査地点は谷戸奥へ通ずる道路の南側に面していて、石垣を積んだ一段高い場所にあたり道路面との比高差が約1.8mほどもある。現地表下100～180cmまでは石垣構築時の裏込め土や表土が厚く見られ、これを除去すると近世の耕作土が顔を出す。この耕作土は調査区東側で薄く道路側へ向って傾斜したところに厚く堆積している。現地表下130ないし180cmで大型の土丹をつき固めた地業面に達する。これを第1面と称する。第1面は調査区西側では耕作土の直下で確認されたが、東側では50cm程の中世包含層に覆われていた。第1面下には殆んど間層を挟まずに土丹をつき固めたきわめて良好な地業面を検出した。これを第2面と称する。第2面は厚さ30～40cmの堅緻な地業層から成っており、その下には暗褐色土の薄い堆積がみられ、これを除去すると褐色粘質土に小形の土丹を混入した堅い地業面に当った。これを第3面と称する。この面の深さですでに予定深度に達していたので、第3面以下は一部にサブトレンチを入れて掘り下げ下方を探査したところ、第3面の下20～30cm程で褐鉄分を多く含んだ硬化した面を検出した。現地表下190ないし230cmで南から道路側に向って緩やかな傾斜を有する黒褐色粘質土の地山を検出した。その標高は調査区中央で10.35m程である。

（2）第1面（図4、図版―2）

遺物包含層や近世耕作土の直下で検出した第1面は大・小の土丹塊を段状に積み上げて構築された平場である。段状に造られた平場面の東縁部は調査区東壁に近接して北側にすすみ、北縁部は道路境界から内側に約3.6mのところでL字形に曲がり北側道路と沿うような形で調査区外に延びる。北・東縁部は急な傾斜をもち、北・東側に向って落ち込んでいて、北縁部では70cm程の段差があり、東縁部ではそれより一段高く作られ約50cmの段差が認められた。このことは谷戸中央に向って傾斜し、谷戸開口部（東）に向って傾斜した現地形にあったかたちで比高差の異なる二段の平場面が構築されていたと判断されよう。

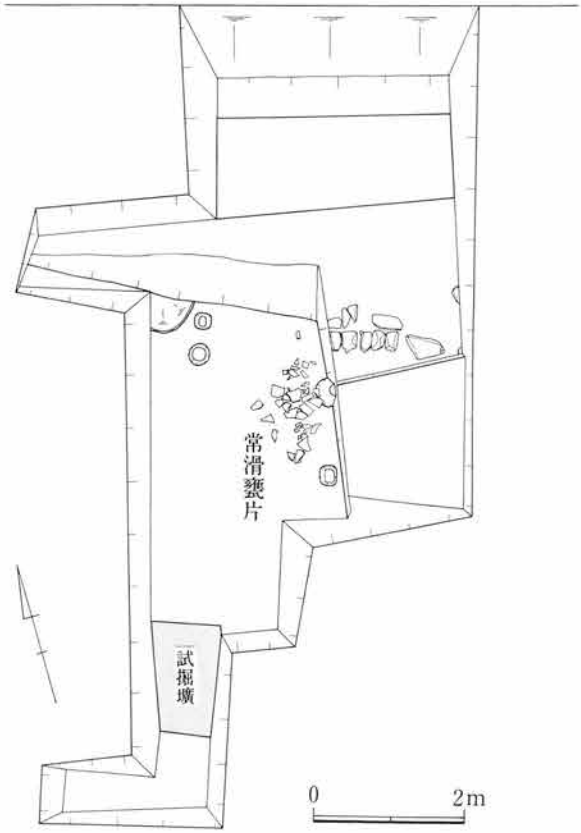


図4　第1面遺構図

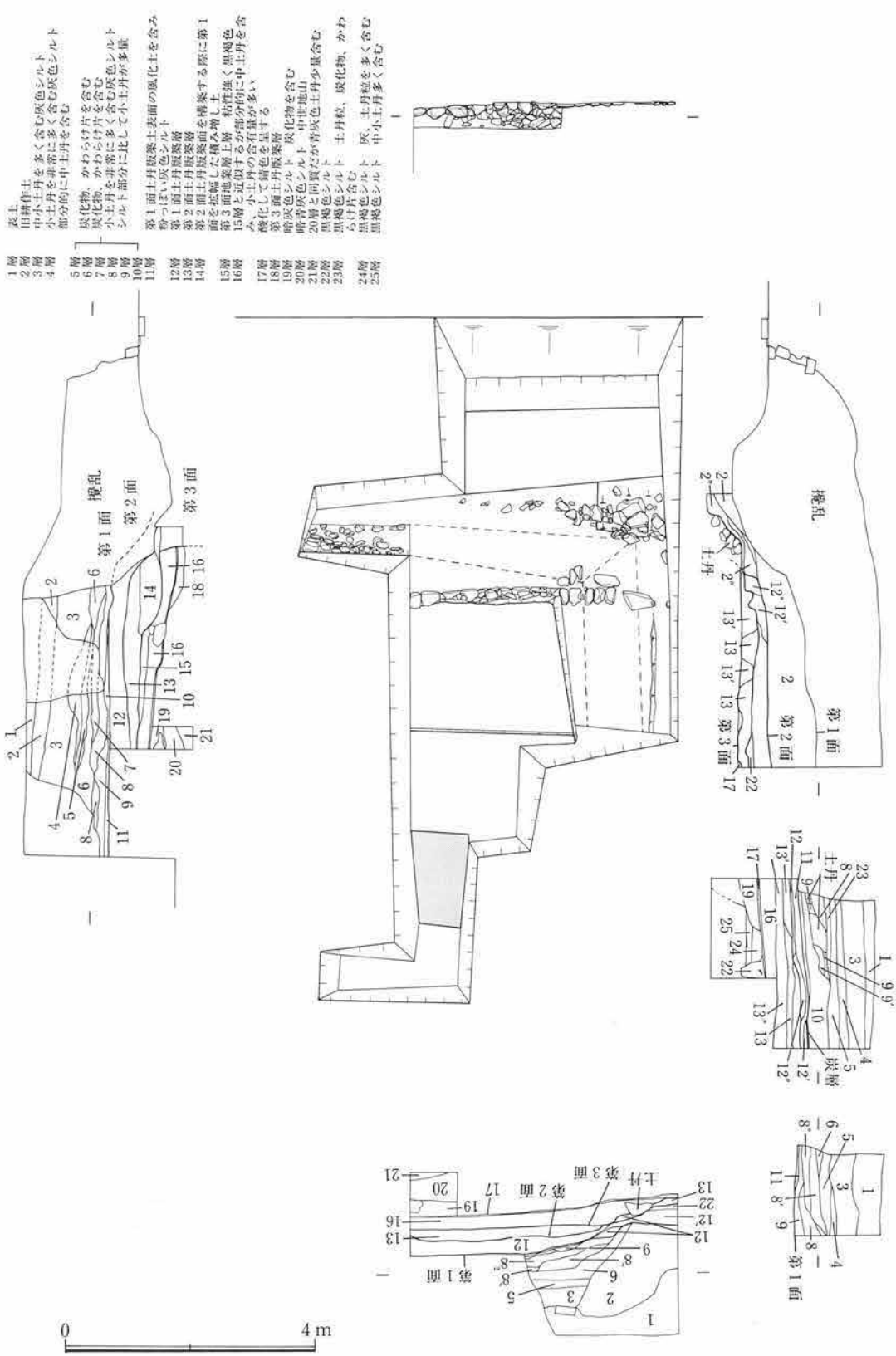

1層 表土
2層 旧耕作土
3層 中小土丹を多く含む灰色シルト
4層 小土丹を非常に多く含む灰色シルト部分的に中土丹を含む
5層 灰化物、かわらけ片を含む
6層 灰化物、かわらけ片を含む
7層 小土丹を非常に多く含む灰色シルト
8層 シルト部分に比して小土丹が多量
9層
10層
11層 第1面土丹版築土表面の風化土を含み粉っぽい灰色シルト
12層 第1面土丹版築層
13層 第2面土丹版築層
14層 第2面土丹版築面を構築する際に第1面を拡幅した積み増し土
15層 第3面地築層上層 粘性強く黒褐色
16層 15層と近似するが部分的に中土丹を含み、小土丹の含有量が多い
17層 酸化して褐色を呈する
18層 第3面土丹版築層
19層 暗灰色シルト 炭化物を含む
20層 暗青灰色シルト 中世地山
21層 20層と同質だが青灰色土丹少量含む
22層 黒褐色シルト 土丹粒、炭化物、かわらけ片含む
23層 黒褐色シルト 炭、土丹粒を多く含む
24層 黒褐色シルト 中小土丹多く含む
25層 黒褐色シルト
撹乱
第1面
第2面
第3面
土丹
炭層
0
4 m

図5　第2・3面遺構図

この面上で検出された遺構は、調査区中央部で据え甕と考えられる常滑の大甕がつぶれたような状態で発見され、また段差の肩の部分からは柱穴状のピット４口と土壙と覚しき円形の浅い掘り込みを確認したが、いずれもあまりしっかりしたものではない。

（３）第２面（図５、図版―３）

第１面で検出した段状の平場面を構築する地業層を30～40㎝程取り除くと、第１面と同様の土丹版築で積み上げた二段の平場面が検出された。二段の平場の平坦部は細かく破砕した土丹を密につき固めきわめて良好な地業面を構築し、上段の北縁側斜面には割合大型の土丹を乱雑に積み上げた土留めが確認されたが、この面上からは遺構らしきものはなにも検出することができなかった。平場の標高は東西方向で上段平坦面が11.0m、段差の肩が10.7m、下段平坦面が10.5m程であり、調査区中央南北方向の標高は平坦面南側で11.1m、段差の肩が10.8～10.9m、段差下面が10.3m程である。

（４）第３面（図５、図版―３・４）

第２面下20～50㎝程で検出した第３面は、小さな土丹を密に含む締った褐色粘質土を厚く版築した地業層であり、上層と同じく斜面を石（土丹）で積んだ一段高い平場が構築されている。平場の東側限界はさほど変化していないものの、北縁部は1.2m程南側（内側）へ寄った位置である。石積みは東縁部が後世の撹乱を受けて消失していたものの、北縁部においては良好な状態で検出された。それによると、上面の平坦な土丹を基底面に据え、その上に大型の土丹を置き更に小さなものを斜面に貼り付けた比較的丁寧な作りである。石積みの北側には幅約１ｍの平坦な面が認められ、その外側は急激に落込んでいたが、掘削深度の関係から確認するまでにはいたらなかった。この面上からも建物跡などの遺構は検出されていない。

以上のように今回の調査で検出した平場は、谷戸内及び南側山裾を掘削し雛段状の平坦部が南・東側から徐々に構築され、埋め立て・地業がくり返され、近世までには現在のような地形が形成されたと考えられる。調査では前後の時期を含めて５期に亘る埋め立て・地業が確認されている。これらが構築された年代は、今回の調査区に限っていえば、13世紀後半から14世紀前半頃までの時期が考えられよう。

第三章　出土した遺物

大半が第１面を検出するまでの包含層中から出土している。以下法量を中心に形態の主たる傾向について述べ、最後に大まかな年代観を述べたいと思う。

（１）包含層中出土のかわらけ（１～19）

１は口径7.4cm、底径4.3cm、器高2.2cm。２は口径7.6cm、底径4.4cm、器高2.3cm。３は復元口径7.2cm。４は復元口径8.0cm、復元底径5.6cm、器高1.3cm。５は復元口径9.0cm、復元底径5.4cm、器高2.4cm。６は復元口径11.0cm、復元底径6.5cm、器高2.8cm。７は口径12.0cm、底径6.0cm、器高3.3cm。８は復元口径12.4cm、復元底径6.4cm、器高3.2cm。９は復元口径13.0cm、復元底径7.0cm、器高3.1cm。10は復元口径13.0cm、復元底径7.8cm、器高3.0cm。11は復元口径13.0cm、復元底径6.6cm、器高2.8cm。12は復元口径13.0cm、復元底径7.0cm、器高3.4cm。13は復元口径13.0cm、復元底径6.8cm、器高3.9cm。14は復元口径13.6cm、復元底径7.0cm、器高3.5cm。15は復元口径12.4cm、復元底径6.6cm、器高3.1cm。16は口径12.1cm、底径7.2cm、器高3.1cm。17は復元口径13.0cm、復元底径7.2cm、器高3.3cm。18は復元口径12.8cm、復元底径8.0cm、器高3.3cm。19は口径12.4cm、底径6.3cm、器高3.4cm。色調はいずれも、肌色か橙色で多くはその中間色である。全ての底部に糸切り痕とスノコ状の圧痕が認められ、内底部は横方向のナデが施されている。体部側面観は緩やかに内弯しながら立ち上がりそのまま開くタイプが多い。19などは内弯傾向が強く、この中ではやや古手かも知れない。全体に薄手のものが多い（１・２・５・６・８・13など）。

（２）第１面出土のかわらけ

20は復元口径8.2cm、復元底径6.0cm、器高1.6cm。 21は復元底径8.2cm、復元底径6.0cm、器高2.0cm

（３）第１面構成土（黒色土）出土のかわらけ

22は復元口径8.2cm、復元底径5.2cm、器高1.8cm。

（４）第２面構成土（黒色土）出土のかわらけ

23は口径8.4cm、底径5.8cm、器高1.7cm。24は復元口径13.6cm。

以上のかわらけ以外に口兀の白磁小皿が１点包含層中から出土し、第１面から３個体分の常滑がまとまって出土している。(25・26)

これらの遺物からみて各遺構の年代を考えるには、調査面積及び遺物出土量が少なすぎるが、あえて述べるならば、第３面が13世紀後半、第２面が13世紀末、第１面が14世紀前半、その後第１面が埋められていくのが14世紀中、後半といったところであろう。

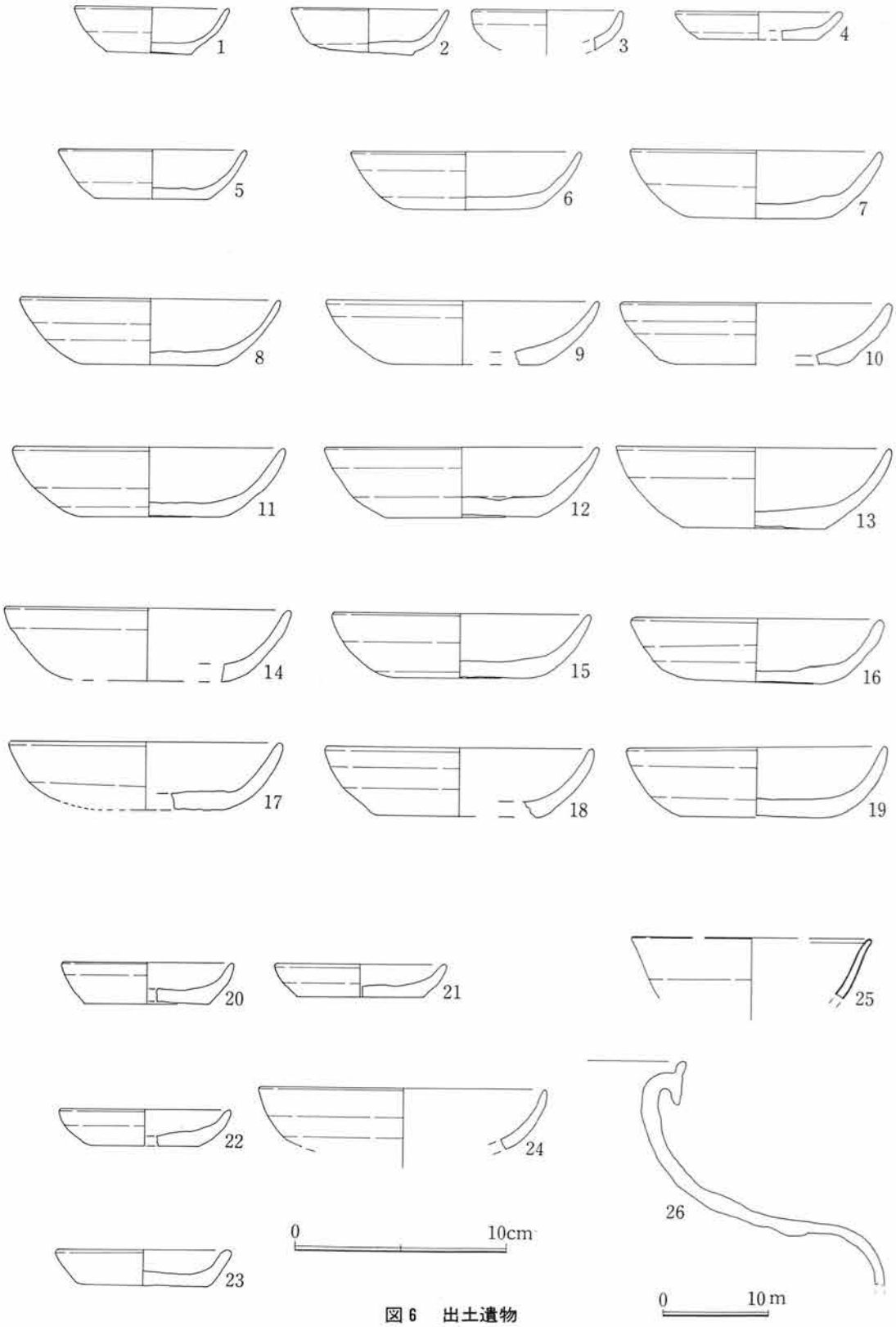

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
25
22
24
26
23
0
10cm
0
10 m

図6　出土遺物

第四章　まとめ

調査範囲が極めて狭小なため、遺跡の性格どころか、遺構の性格さえも把握しがたい。この小範囲から検出された遺構から考えると谷戸内の小流に向かって傾斜し、谷戸開口部に向かって傾斜する地形に土丹による石垣を組み平場を構成したものと考えられる。そしてこの石垣は今回確認した限りでは3期以上にわたって構築されている。出土遺物から判断して13世紀後半から14世紀前半にかけての事と思われる。今回検出されなかったが、この平場(南側山裾まで現地形でも平場が構築されている）上に建物跡の存在が想像される。この様な石垣は本調査地点のみならず谷戸奥の試掘調査によっても確認されており、この石垣による平場は谷戸内全体に幾段にも構成されていた可能性が高い。この谷戸の環境は歴史的環境の項でも述べたように弘安十年（1287）に忍性によって療病所が開かれたところといわれており、今後の調査によって更にその実体が明らかになるものと期待したい。

図版 1

▲1. 調査前の状況

▲2. 調査区全景

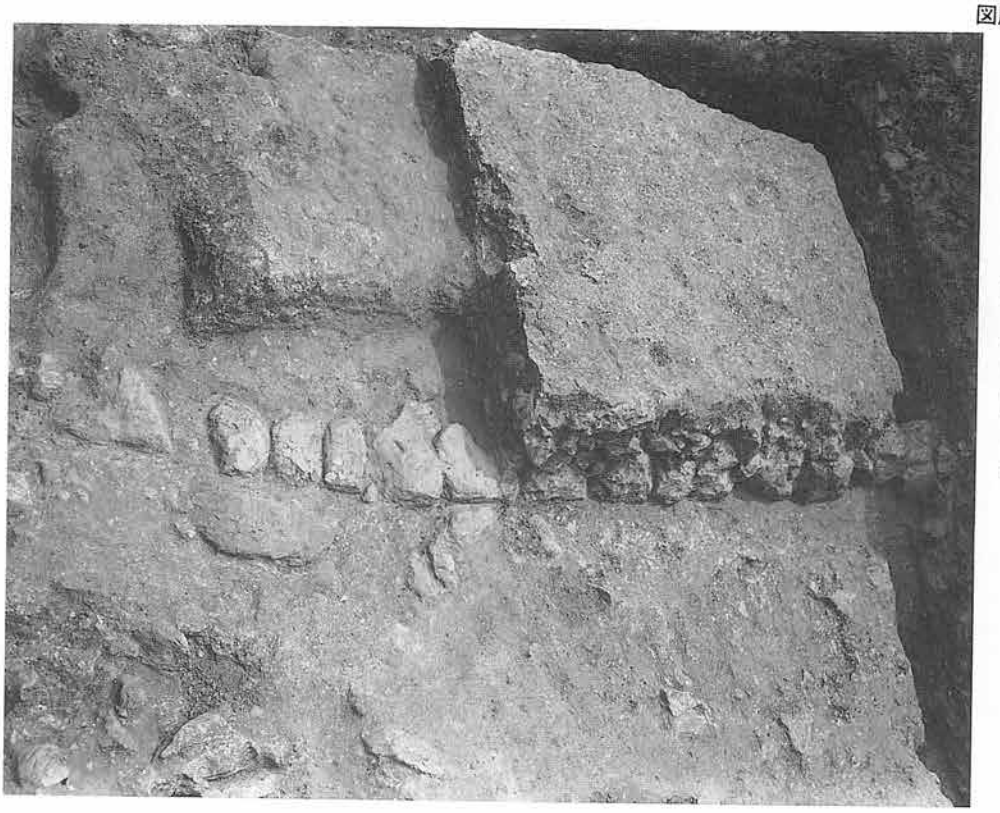
◀ 1. 第1面全景（北から）

◀ 2. 常滑甕出土状況

図版 3

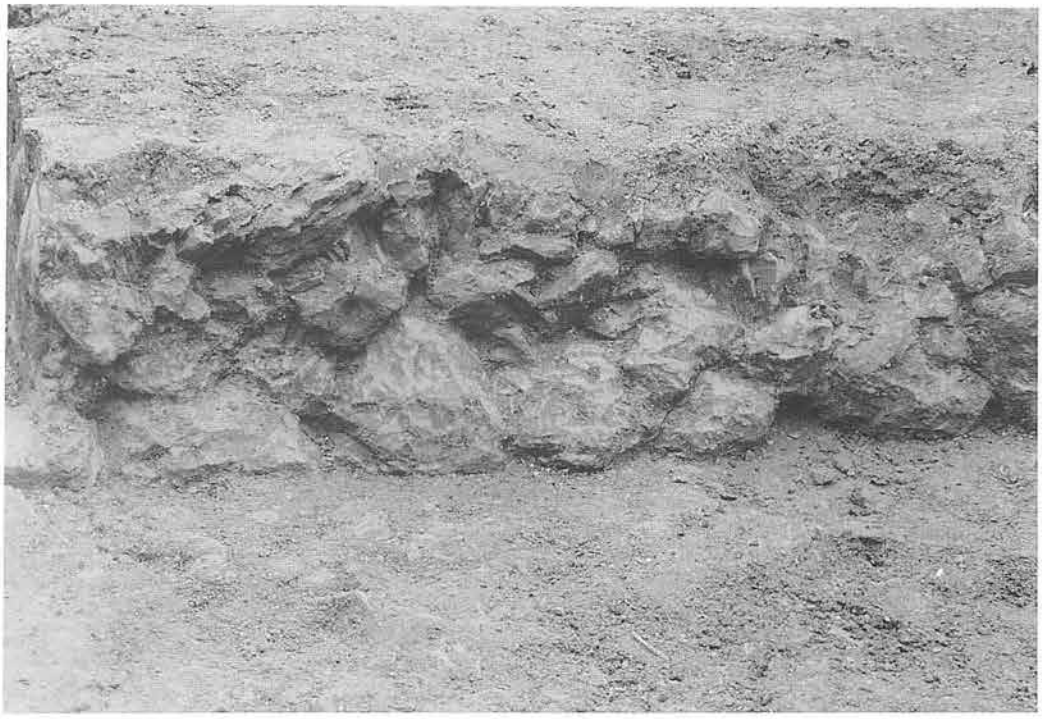
▲1. 第 2 ・ 3 面全景（北から）

▼2. 第 2 ・ 3 面全景（東から）



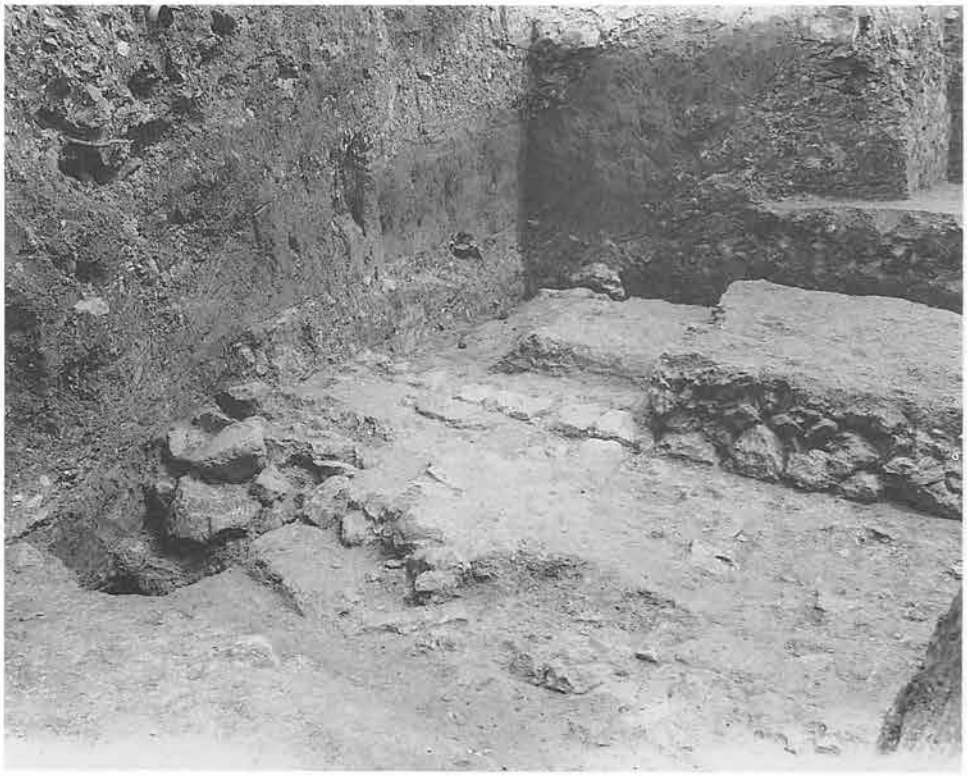
◀1. 第3面の石積み平場（北から）

▼2. 同上　石積みの状況（北から）



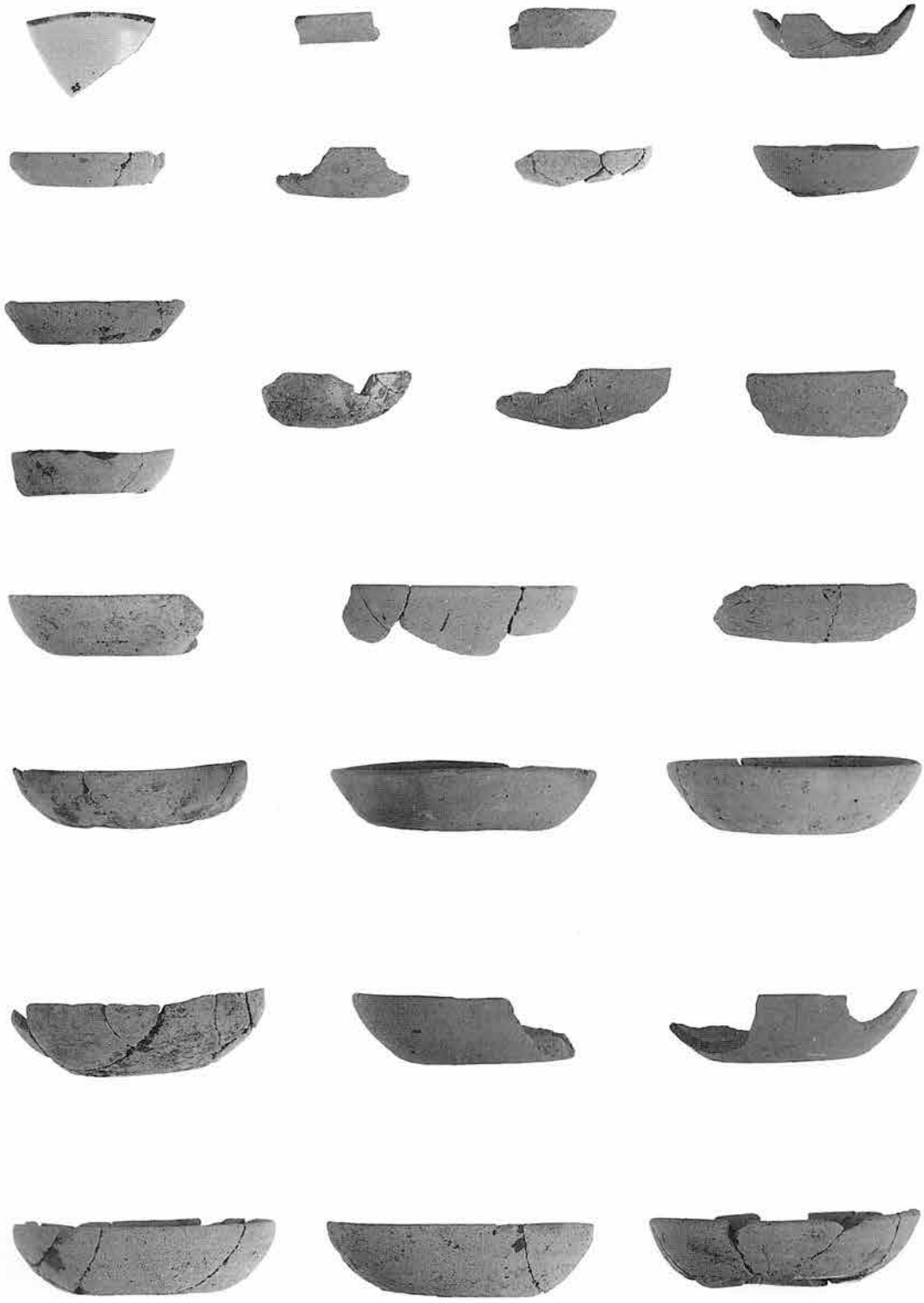
図版 5

▲1. 調査区西壁土層堆積（東から）



◀2. 調査区東壁土層堆積

▼1. 出土遺物（口兀白磁皿・かわらけ）



11. 桑ケ谷療病院跡（No.294）

くわがやりようびょういん

鎌倉市長谷三丁目630番17

例　言

1．本報は鎌倉市長谷三丁目630番17に於ける住宅建設に伴う発掘調査報告である。

2．発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施し、調査期間は平成２年９月25日から10月３日までである。

3．本報の執筆は第１・２・３・５章を木村美代治が、第４章を田代郁夫が行い、木村が編集した。資料整理、図版作成に片岡睦枝のほか原　廣志の協力を得た。

4．本報に使用した写真は木村が撮影した。

5．調査体制は下記の通りである。

主任調査員　木村美代治
調　査　員　片岡睦枝
作　業　員　斉藤政蔵・鈴木英次・菅野五郎
高井富三・箕田孝善・山本国雄
（社）シルバー人材センター
鎌倉高齢者事業団

6．出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

例言 …… 302
目次 …… 303

本 文 目 次

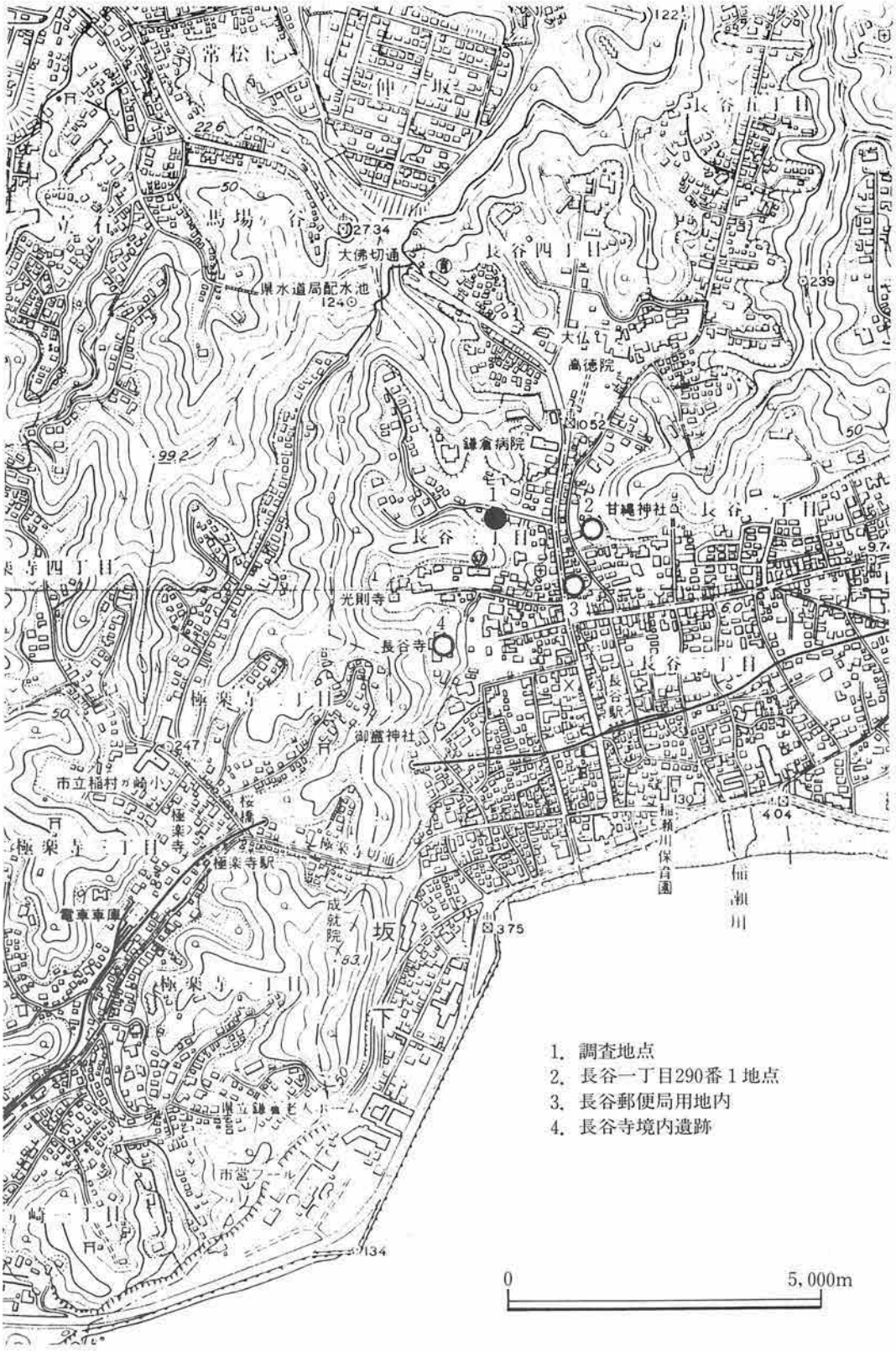
第一章　調査地点の位置 …… 306
第二章　調査の経過 …… 307
第三章　層序と検出した遺構 …… 307
第四章　出土した遺物 …… 309
第五章　まとめ …… 311

挿 図 目 次

第１図　調査地点の位置 …… 305
第２図　トレンチ配置図 …… 306
第３図　遺構全測図 …… 308
第４図　出土した遺物 …… 310
第５図　遺構模式図 …… 311

図 版 目 次

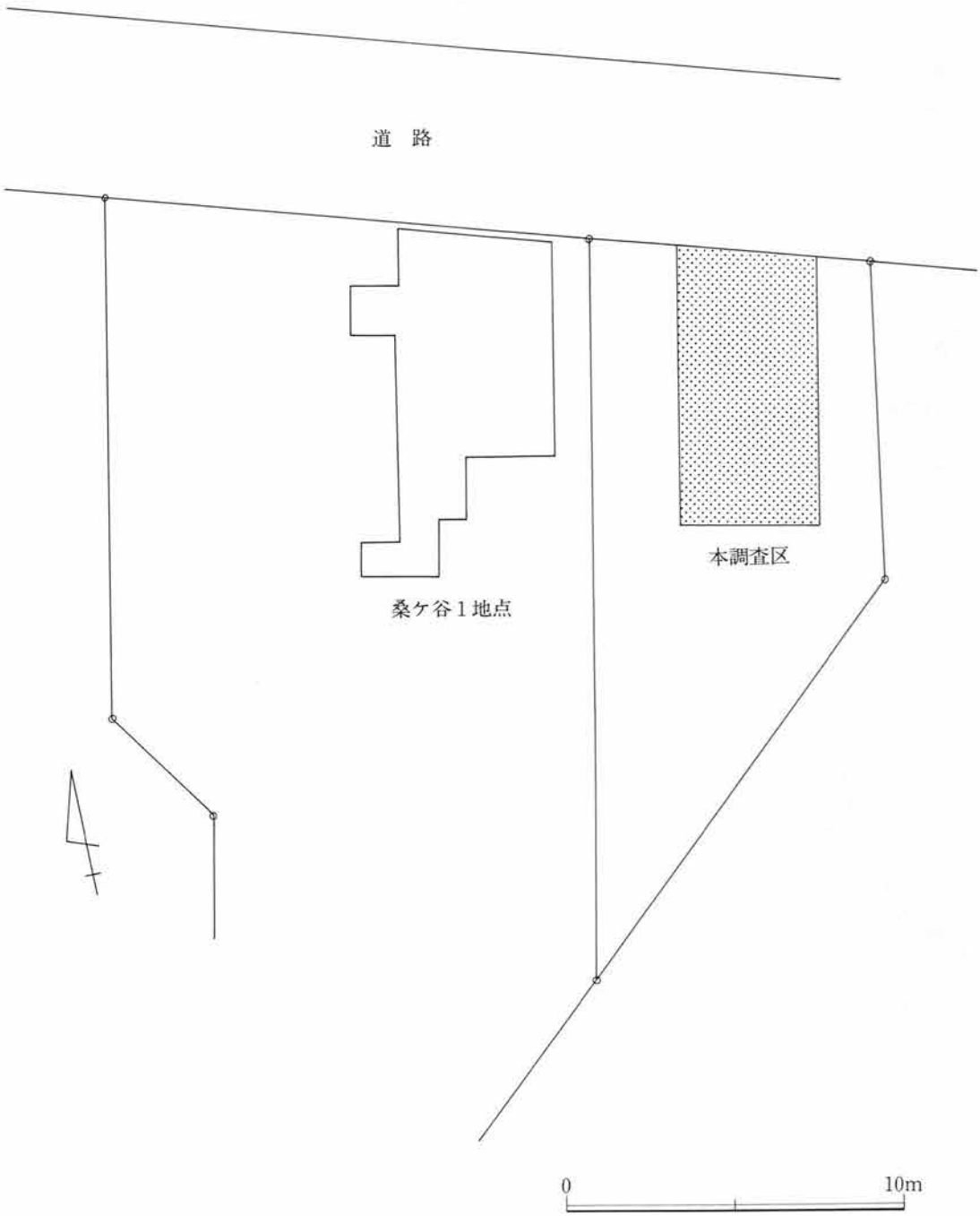
図版１ …… 312
図版２ …… 313
図版３ …… 314
図版４ …… 315


1. 調査地点
2. 長谷一丁目290番1地点
3. 長谷郵便局用地内
4. 長谷寺境内遺跡
0
5,000m
大佛切通
県水道局配水池
大仏
高徳院
鎌倉病院
甘縄神社
長谷一丁目
光則寺
長谷寺
御霊神社
長谷駅
極楽寺
極楽寺駅
桜橋
市立稲村ヶ崎小
電車車庫
成就院
坂
稲瀬川保育園
稲瀬川
市営プール

第1図　調査地点の位置

第一章　調査地点の位置

本遺跡は鎌倉市長谷三丁目630番17に所在する。平成２年６月に発掘調査が行われた地点（桑ケ谷１地点・長谷三丁目630番４）の東４ｍに位置している。詳細は本報285ページを参照されたい。



第２図　トレンチ配置図

第二章　調査の経過

本調査は住宅建設に伴う発掘調査であるが、先行して行われた隣接地（桑ケ谷１地点）の試掘調査及び発掘調査の結果、遺構面まで約1.5mあり住宅建設に際して遺構面を損傷する恐れがないため全面調査は行わず掘削深度が遺構面に達する駐車場部分に限って調査を実施することにした。

調査区は駐車場予定地の東西幅４m、北側道路から南へ８mとし、北側道路面レベルまで調査することにした。地表下１mまで小型重機を使って掘り下げ、その後人力により遺構面まで掘り下げ遺構の検出を行った。大別して３時期の地業面が確認されたが開発による根切り深度の関係で平面的な遺構検出は２面までにとどまり３面は土層観察を行ったに過ぎない。平成２年９月25日から重機による掘削を開始し１、２面の遺構検出を行い10月３日機材を撤収して調査を終了した。

第三章　層序と検出した遺構

層序

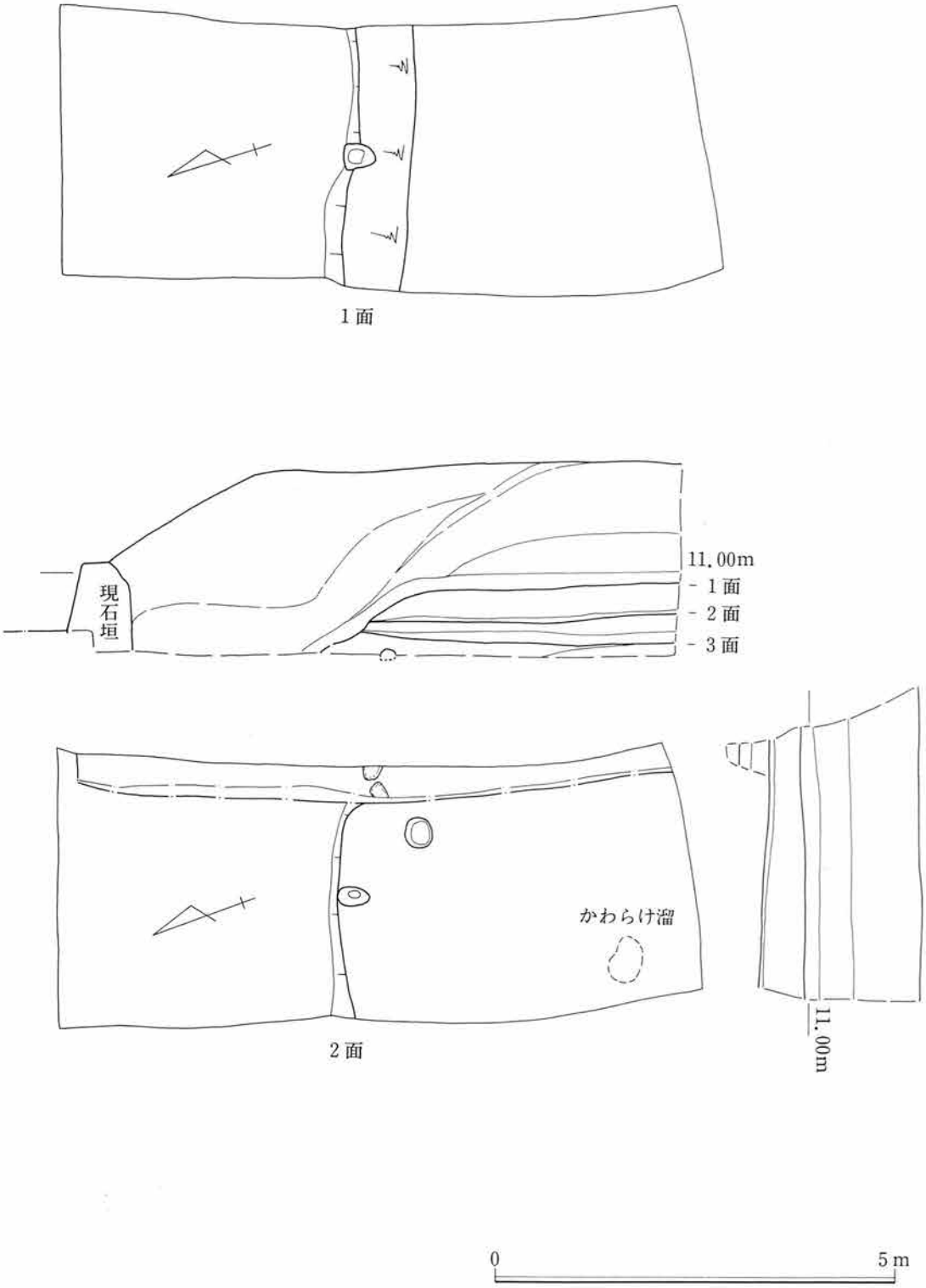
建設予定地の現地表の標高は約12.3～12.4mで北側道路面との比高差は２m程ある。道路境界から３m程までは現在の石垣の裏込め土及び石垣構築前の表土の崩落土が堆積し調査範囲に於いては掘削深度の関係もあり遺構面は確認できなかった。調査区の南半分では現地表から1.3m程で厚さ20cm程の近世耕作土の堆積がみられ道路側へ向かって落込んでいる。近世耕作土の直下で大型の土丹を乱雑に積んだ地業面が確認されこれを第１面とした。第１面の構成土は40cm程ありこれを取り除くと褐色粘質土の堆積が10cm程ありその下に小さな土丹をつき固めた地業層が検出されこれを第２面とした。さらに第２面の下20cm程に黒褐色粘質土の堆積が20cm程みられこれを取り除くとトレンチ東側で地山に似た褐色粘土の堆積がみられ、中央付近ではこれと水平に小土丹で地業された生活面が確認されたためこれを第３面が検出された。

第１面

近世耕作土の直下に検出された第１面は、20から50cm程の大型の土丹を30cmほど積み上げた地業層からなり調査区中程までは平坦面をなし北側に向かって落ち込んでいる。この落込みの直上には一様に近世耕作土がかぶっており、後世の削平による可能性も考えられるが判然としない。落込みの比高差は北側部分が掘り下げられなかったため不明であるが50cm以上はあろう。面上で確認された遺構は落込みの肩の部分で直径20cm、深さ50cm程のピットが１穴検出されただけである。

第２面

第２面は第１面の下40cm程で検出された。第２面直上には薄く褐色粘土が堆積している。第２面構成土は小さな土丹を密に含む褐色粘土による版築層で締りは良い。第２面上で検出された遺構も少なく直径20cm程のピットが２穴と30cm四方程のかわらけ溜りが１箇所に過ぎない。第２面の下40cm程のところで第３面が確認できたが平面的な調査は出来なかった。



第3図　遺構全測図

第四章　出土した遺物

包含層及び各面から少量の遺物が出土しているがその多くは小片で図示出来たものはかわらけ26点、その他の陶磁器が５点、砥石が１点に過ぎない。

１は口径７㎝、底径４㎝、器高2.1㎝を測るいわゆる薄手タイプのかわらけである。２は口径6.8㎝、底径5.4㎝、器高1.4㎝。３は口径8.2㎝、底径5.6㎝、器高1.4㎝を測る。共に包含層から出土している。この他包含層中から出土した遺物は31の備前の捏鉢があるが小片のため口径は復元出来なかった。内面に６本以上を一単位とする条線が認められる。

第１面の大型土丹による地業層の直上からかわらけが３点出土している。

４は口径7.8㎝、底径5.6㎝、器高2.1㎝。５は口径8.2㎝、底径6.2㎝、器高1.5㎝。22は口径13.6㎝、底径8.4㎝、器高3.15㎝を測る。１面上からはこの他に27の白磁口兀小皿が出土している。復元口径10.6㎝で、胎土は白色で粘性があり気泡を多く含んでいる。

第１面を構成する大型土丹の地業層中からは５点のかわらけが出土した。

６は口径7.2㎝、底径4.6㎝、器高1.45㎝。７は口径7.6㎝、底径4.6㎝、器高1.8㎝。８は口径8.2㎝、底径5.2㎝、器高1.5㎝。23は口径13.0㎝、底径7.0㎝、器高3.5㎝。24は口径10.6㎝、底径5.4㎝、器高3.1㎝。25は口径13.2㎝、底径7.0㎝、器高3.4㎝をそれぞれ測る。23、24はいわゆる薄手タイプであり、24はやや口径が小さく中型の部類にはいるであろう。

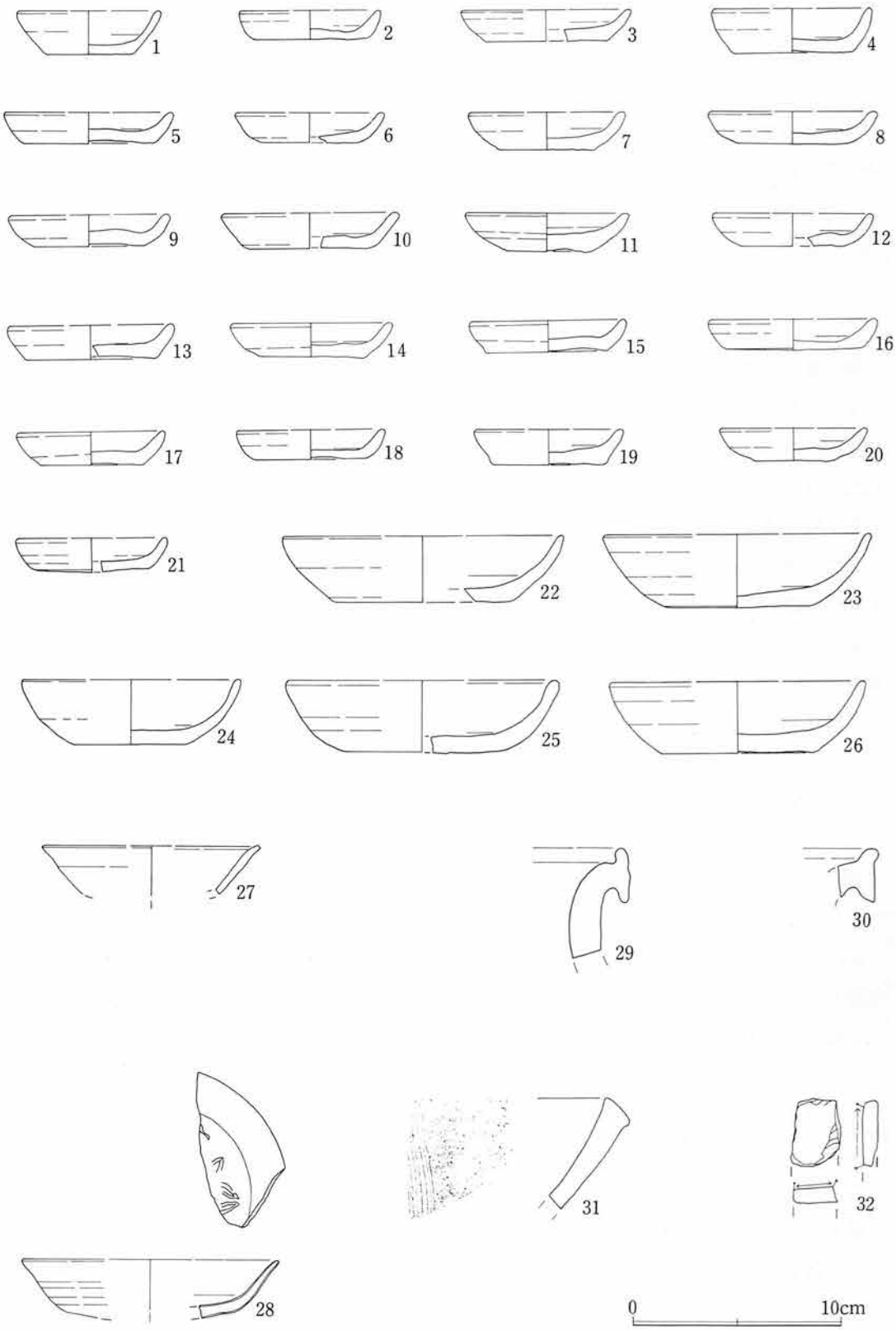
２面直上からは11点が出土した。このうち12～20は浅い凹み状のかわらけ溜りから一括で出土した。

11は口径7.9㎝、底径4.0㎝、器高1.8㎝。12は口径7.8㎝、底径4.8㎝、器高1.65㎝。13は口径8.0㎝、底径6.2㎝、器高1.65㎝。14は口径7.8㎝、底径4.9㎝、器高1.6㎝。15は口径7.6㎝。16は口径8.2㎝、底径6.4㎝、器高1.5㎝。17は口径7.2㎝、底径4.9㎝、器高1.6㎝。18は口径7.2㎝、底径5.2㎝、器高1.6㎝。19は口径7.2㎝、底径5.2㎝、器高1.7㎝。20は口径7.2㎝、底径3.4㎝、器高1.55㎝。何れも器高が低くいわゆる薄手精製のタイプは１片も含んでいない。26は口径12.4㎝、底径7.2㎝、器高3.4㎝。

２面以下は調査区東側に土層確認のため幅50㎝のトレンチを開けただけであり出土遺物はかわらけ１点のほか白磁皿が１点出土したにすぎない。

21は口径7.3㎝、底径5.4㎝、器高1.65㎝を測る。28は白磁の小皿で内底面に蓮華文を型押ししている。

以上出土したかわらけは、すべて底部に糸切り痕を残しスノコ状の圧痕も認められる。内底面には横方向のナデ調整がなされている。１、23、24は何れも薄手で精製されたタイプで包含層からと１面構成土から出土している。この他の同一層から出土しているかわらけを含めて考えると、きわめて狭い範囲の調査であるが第１面及びその構築時期は14世紀前半と考えられる。また２面直上のかわらけには薄手のタイプは含まれておらず13世紀末から14世紀初頭と考えられる。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
29
30
31
32
28
0
10cm

第4図　出土した遺物

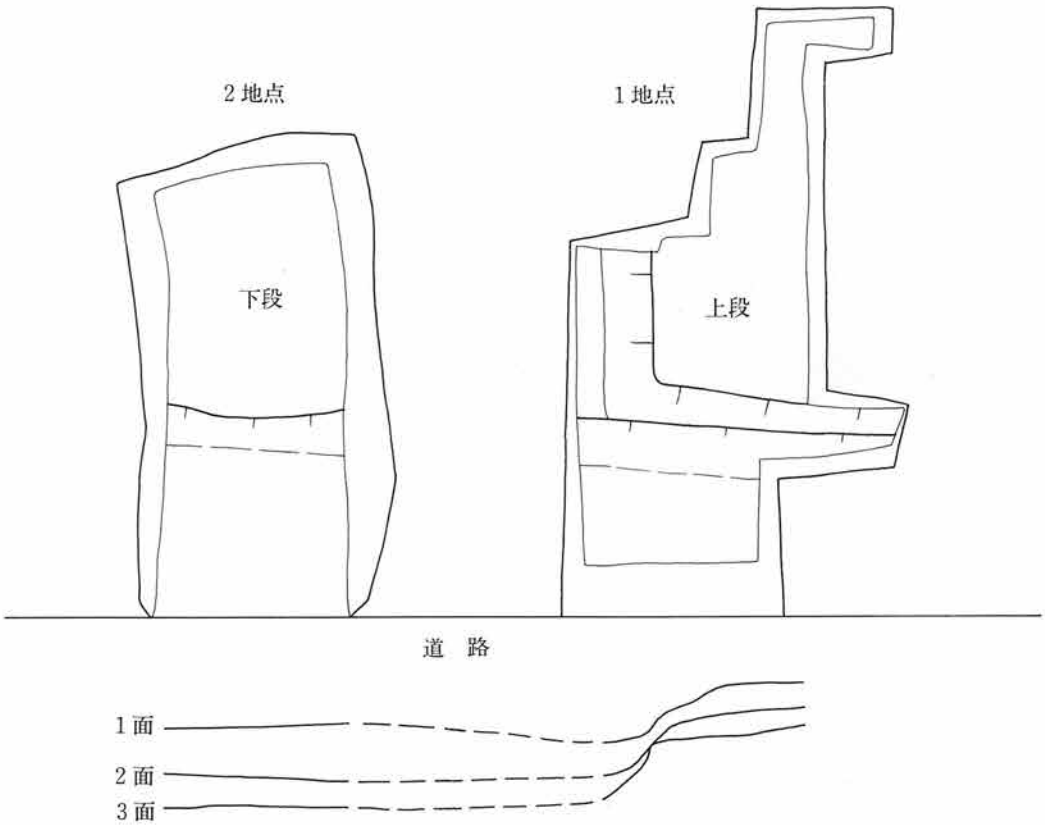
第五章　まとめ

今回の調査で検出された遺構面と桑ケ谷１地点の遺構面のレベル対比は次のようである。

	桑ケ谷２地点		桑ケ谷１地点 段下		桑ケ谷１地点 段上
１面	10.7～10.8	——	10.7	——	11.2～11.3
２面	10.3～10.4	——	10.5	——	11.0
３面	10.1～10.2	——	10.3	——	10.8

単位（海抜・m）

今回の調査では３時期にわたる地業層が検出され（平面的調査は２面までであるが）北側道路に向かって段差をもつ以外は特に遺構は検出されなかったが、先行して行われた桑ケ谷１地点では北側道路にむかった段差のほか西側に50～60㎝程高まる段差が検出されており、大型の土丹を厚く積み上げた地業の様子からして谷戸の中をひな段状にかなり大規模に造成していることが考えられる。出土遺物から13世紀後半から14世紀初頭にかけて第２面が造成され、その後14世紀前半に第１面が構築されたものと考えられる。今回の調査では具体的な遺構の検出は出来なかったが今後の調査により、より具体的な遺構の検出が期待される。



第５図　遺構模式図

図版 1

▶第Ⅰ面（北より）

手前半分は掘削深度関係で遺構面は検出されていない。

◀第Ⅰ面（北東より）

▲第 I 面（南より）

▲調査区東壁

図版 3

◀第2面（北より）

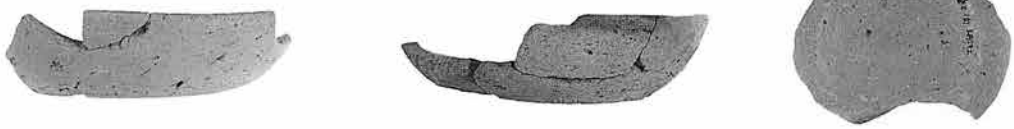
手前半分は掘削深度関係で遺構面は検出されていない。

▶第2面（北東より）

磁　器　　瀬　戸

常　滑　　備　前　　骨製円盤　　砥　石

包含層　　1面



1面

2面まで

2面直上

2面かわらけ溜り

12. 妙本寺遺跡（No. 232）

大町一丁目1158番5地点

例　言

1．本報は、鎌倉市大町一丁目1158番５地点における個人専用住宅建設にともなう発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は1990年12月３日から同15日までである。

3．本書は、宗臺秀明が執筆、編集した。

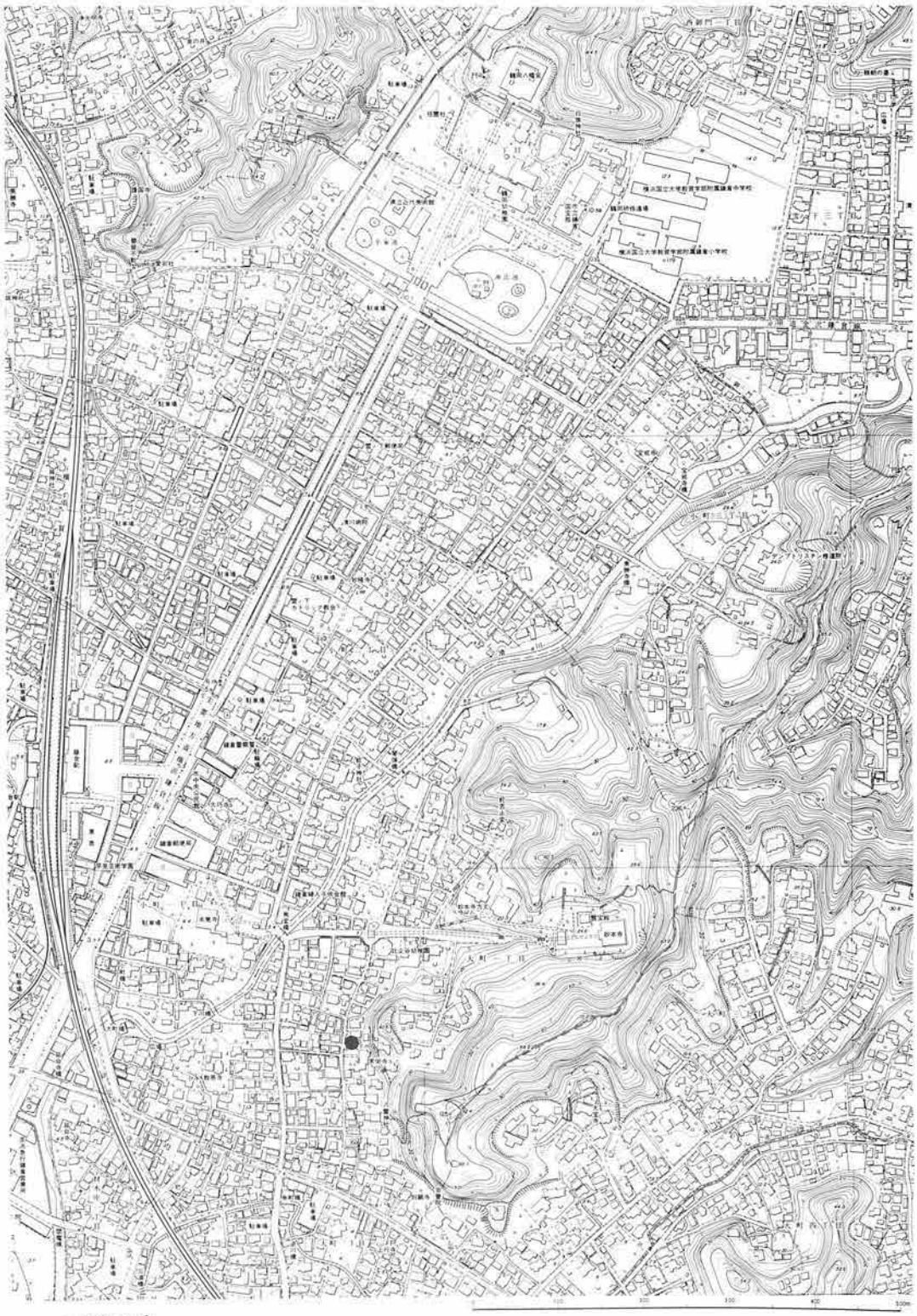
4．調査参加者は下記の通り。

主任調査員　宗臺秀明

調　査　員　宗臺富貴子

協　力　者　（社）鎌倉市高齢者事業団

（箕田孝善・御園生正民・野尻　栄）



● 調査地点

Fig.1　調査地周辺地図

第一章　調査地点の位置と歴史的環境

調査地点は、妙本寺惣門前から南に道をとり、100メートルほど行った左手に西面して位置する。露地を挟み、南隣りには日蓮宗常栄寺がある。調査地点は現在、この常栄寺の寺域内にあるが、常栄寺は慶長十一年（1606）に妙本寺の末寺として、妙本寺十四（あるいは十三）世・自澄院日詔が創建したとされるところにより、本来は妙本寺の寺域内であったと思われる。

妙本寺は長興山妙本寺と号する日蓮宗本山。開山は日郎、開基は比企大学三郎能本。文応元年（1260）開創と伝えられる。

この妙本寺は、建仁三年（1203）9月、比企一族滅亡の地といわれ、今もこの地を比企ケ谷という。調査地は、比企ケ谷の谷口、妙本寺惣門の南西にあたる。妙本寺惣門前から調査地点に至る小路は、南行すると、八雲神社前を通り、かつての大町大路を横切って、さらに南へと進むが、ほどなく西へ曲がり、逆川橋あたりで現在の小町大路に合流している。また小路を北へ向かうと、妙本寺惣門から200メートルほどで西へ折れ、やはり現在の小町大路に合流している。

調査地点の背後には、比企ケ谷を抱えた丘陵の崖面が間近に迫っている。この丘陵は、南を大町大路に限られて、東の名越へと続く。途中、妙法寺の位置する谷戸を抱えている。調査地点は、若宮大路を中心とする鎌倉の平野部の東限に位置し、材木座海浜地域と内陸地域との接点である。

また、調査地点の北西にある本覚寺の山門前を流れる滑川には、本覚寺夷堂に由来を持つ夷堂橋が架けられている。地域名として、この夷堂橋を境として、北は小町、南は大町と呼ばれる。

第二章　検出遺構

調査は、調査地点の西を走る現在の道路面より2メートルほど高い敷地内を掘り下げて作る車庫の、範囲に限って行われた。ただし、当初に設定した調査範囲を掘削したところ、調査区の北端にはガス管が残っており、また南端には隣地との境をなす石垣が現道路面まで深く遺存していた。これらの状況から、発掘作業中の危険を回避するため、やむをえず調査範囲を縮小し、本来の調査範囲の北端と南端部は調査区より除外せざるをえなかった。

調査に先だって、鎌倉市教育委員会が行った試掘調査は地表面下130センチに道路状遺構を確認し、それより上層は近年の盛土であるとした。そのため、調査にあたっては、1メートルほどを重機をもって掘り上げ、以後を人力によって発掘を行うこととした。

検出した遺構

検出した遺構は、試掘調査で発見した第1面から、現道路面と同じレベルまでの間に、第6面までの、計6枚の道路状遺構と数個の土壙であった。

調査区西端は、現道路にそって、土止め用の石垣を築くために盛り土を切り崩した後にもどした近年の攪乱土層が現道路面より下まで続いている。

第1面　　地表下130～170センチに検出した。道路面は、黒褐色の弱粘質土に小型の泥岩塊を混

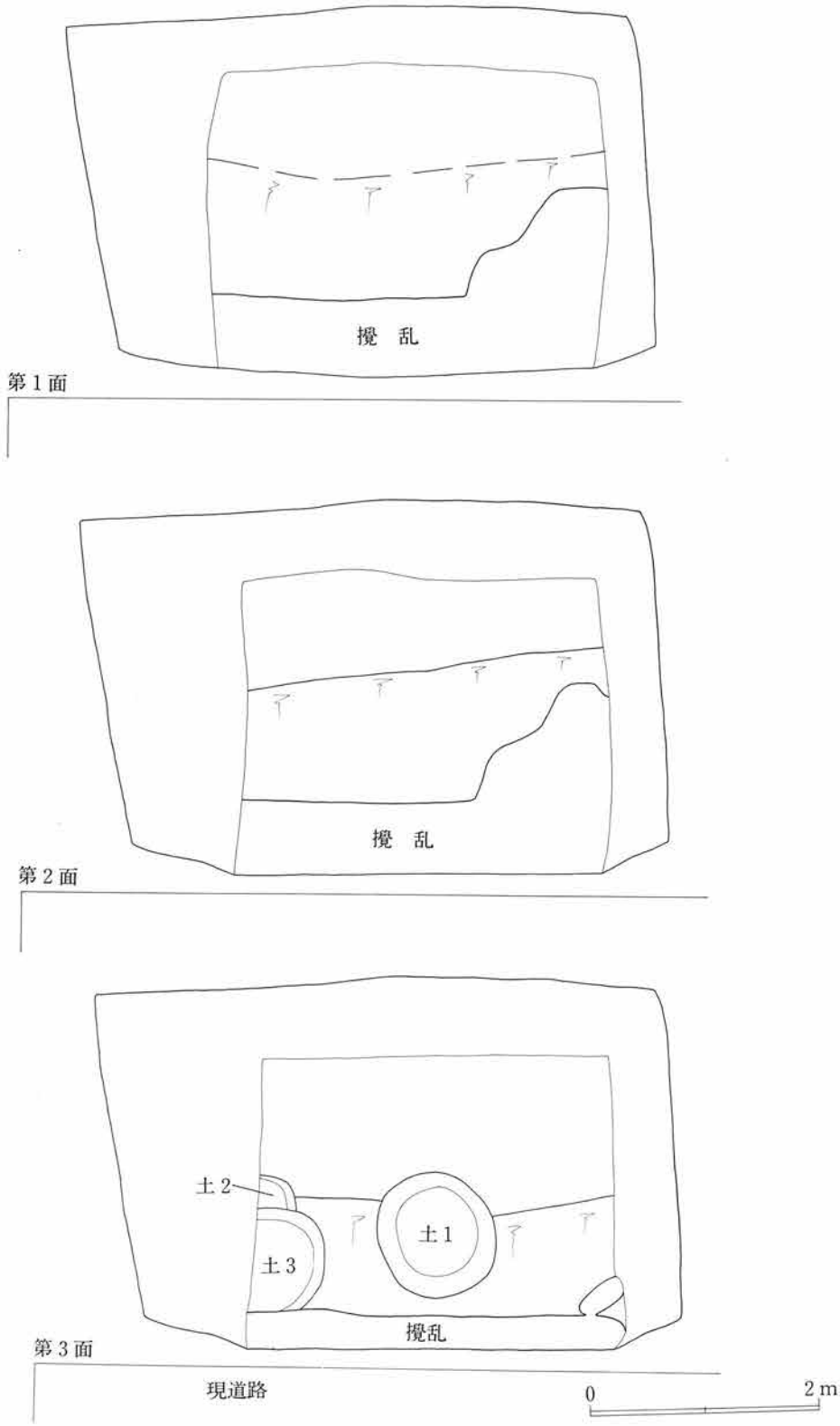


Fig. 2　遺構平面図

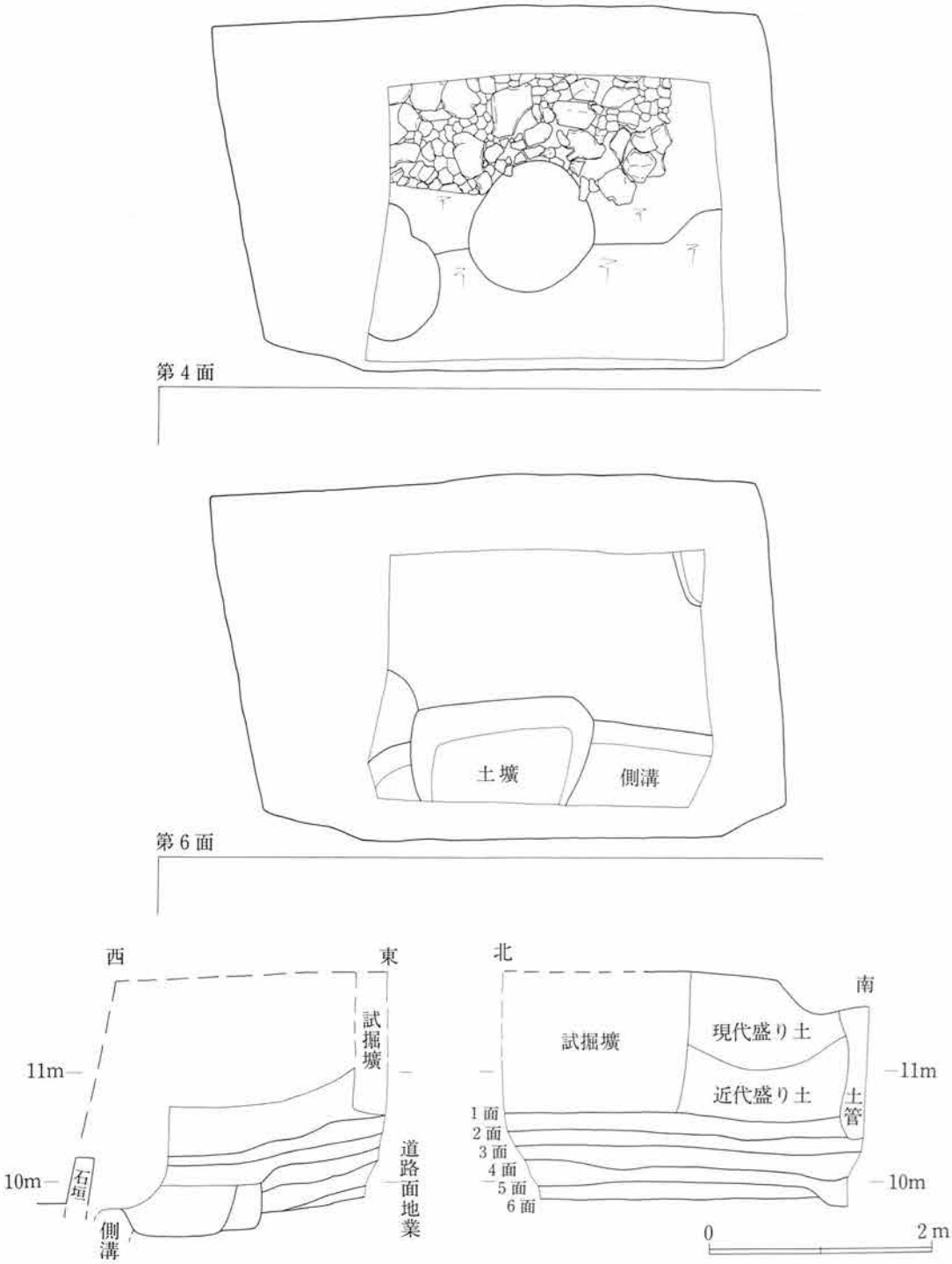


Fig. 3　遺構平面図および土層図

じえ版築面をなしている。ただし、やや軟弱な感じであり、簡素な作りであると同時に利用期間も短いように思われる。

版築面は、北から南へやや下がり、東から西へ傾斜している。西への傾斜は強く、版築もより弱くなっている。道路面の主体は調査区の東半から東外へ拡がっているものと考えられよう。

第２面　地表下150～180センチに検出された。版築面は、緑灰色の粘質砂と５センチ大の泥岩塊からなる。版築面は、やはり北から南へ、東から西へ傾斜している。版築面下には、緑灰色の弱粘質砂が薄く堆積している。この堆積層中からは、何ら出土遺物はなく、道路面構築に際して、敷かれたものと思われる。

第３面　第３面の道路状遺構の版築面も第２面と同様に、土岩塊と緑灰色の粘質土からなる。地表下160～190センチに検出され、やはり北から南へ、東から西へ傾斜する。この面からは３基の土壙が発見された。土壙はともに、版築面が西へ向かって下がりはじめ、版築面の泥岩塊混入の少なくなるところに掘られている。土壙の覆土は、炭化物を多く混じえ、水分の多く含んだ暗灰褐色土である。３基の土壙相互に何らかの関連性を認めることはなく、道路脇に掘られたゴミ捨て穴であろう。

第４面　第４面は、今回の調査において、最も良好な状態で発見された版築面である。地表下170～200センチに検出された。北から南への傾斜は他の版築面に比べて強く、狭い調査区においても、15センチほどの高低差がある。

版築面は、20センチほどの泥岩塊を敷き並べ、それらの泥岩塊の上面を平坦に加工している。泥岩塊の下にはやはり緑灰色の弱粘質砂が敷かれている。

第５面　第５面の版築面は、地表下190～220センチに検出された。この面は、西へ向って傾斜するに従って、次の第６面につながる。

第６面　第６面は地表下210～220センチに検出された。南北方向は水平で、西に向って少し下っている。この版築面は破砕泥岩塊と緑灰色の粘質土で作られている。また、この面において、初めて側溝が道路状遺構の西に発見された。しかしながら、検出された側溝は攪乱壙によって大方が壊されていた。

出土した遺物

１～８は１面上より出土した遺物。１は、かわらけのとりべ。内面が溶融し、発泡している。２～５は瀬戸窯産品。２は、黄釉の平碗。高台内中央付近が砂目状に荒れる。３は天目茶碗。４は黄釉の盤。釉は、内外面ともに下半部には施されず、全体に白色化している。５は鉄釉のすり鉢の細片。６は平瓦の断片。凹面は布目。凸面から端面にはヘラ削りが施されている。胎土は、石英粒および細石を混じえる粉質土。７は凝灰岩製の宝塔の塔身。扉部は屋根形に窪むが、内側に彫り出された造形はないようである。

８～12は２面下および２面直上より出土。面直上からの出土は８と12。８はかわらけ。粉質胎土。９は瀬戸の灰釉碗。磁器のような細粒胎土で、粘りが強い。10は常滑の甕の底部片。この底部片は、

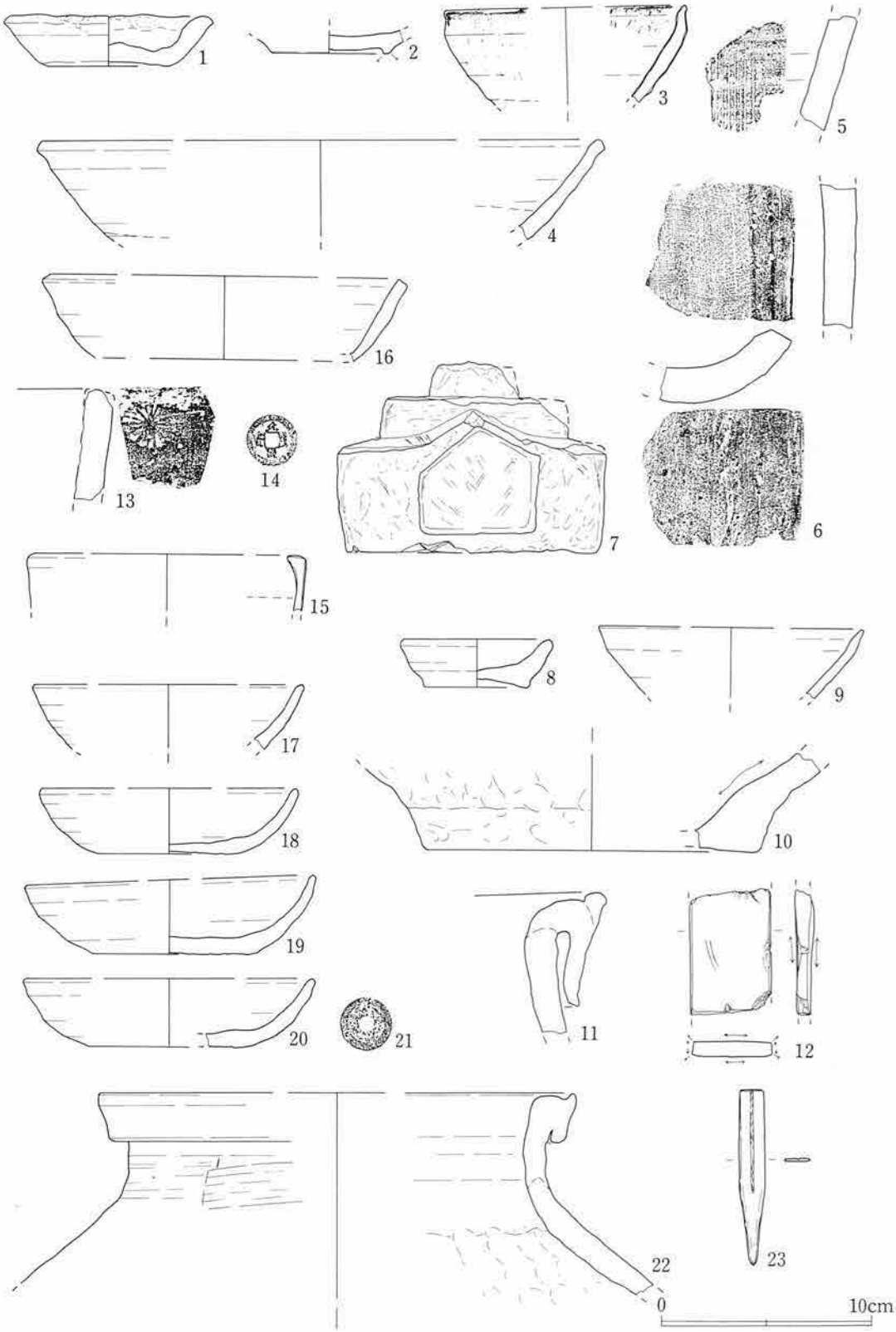


Fig. 4　出土遺物

甕がこわれた後に、こね鉢の機能に転用されたため、内面がすれている。11は常滑の甕の口縁の細片。縁帯が大きく発達している。12は泥岩製の砥石。上下端部が破損している。

13は3面下、14は3面土壙、15は3面直上出土。13は瓦質手焙りの口縁片。口縁から内面の器面はハゼていて、本来の器表面を残す部位は少ない。内面にヘラミガキが施され、外面口縁下に菊花文のスタンプが見られる。14は土壙2覆土内より出土。「元豊通宝」と読める。15は青磁の香炉の口縁片。

16は4面下より出土。瀬戸の灰釉おろし皿。釉は刷毛塗りによる。口縁外部端に、重ね焼きによると思われる釉だまりがみられる。

17と18は5面下より出土。2点ともに、かわらけ、胎土は粘質。左回転糸切り。

19～21は6面の側溝内覆土より出土。19と20は、かわらけ、粉質胎土。左回転糸切り。21はサビの付着がはなはだしく、文字は不明瞭。「皇宋通宝」と読めるだろうか。

22と23は攪乱壙内より出土。22は常滑の甕の口頸部片。23は骨製こうがい。

第三章　まとめ

今回の調査で発見された遺構は、6枚におよぶ道路状遺構と数基の土壙であった。道路状遺構は、本調査地点から北へ10メートルの地点で行われた昭和62年度の調査でも発見されている。先の調査では、東側溝が確認され、一方今回の調査では西側溝が確認され、道路状遺構の東西の限界が確認されたことになる。ただし、今回の調査におてい検出された側溝は調査区北端で西へ屈曲しているため、道路自体はやや曲線的なものと考えてよいだろう。遺構の年代は62年度調査より全体に新しい。

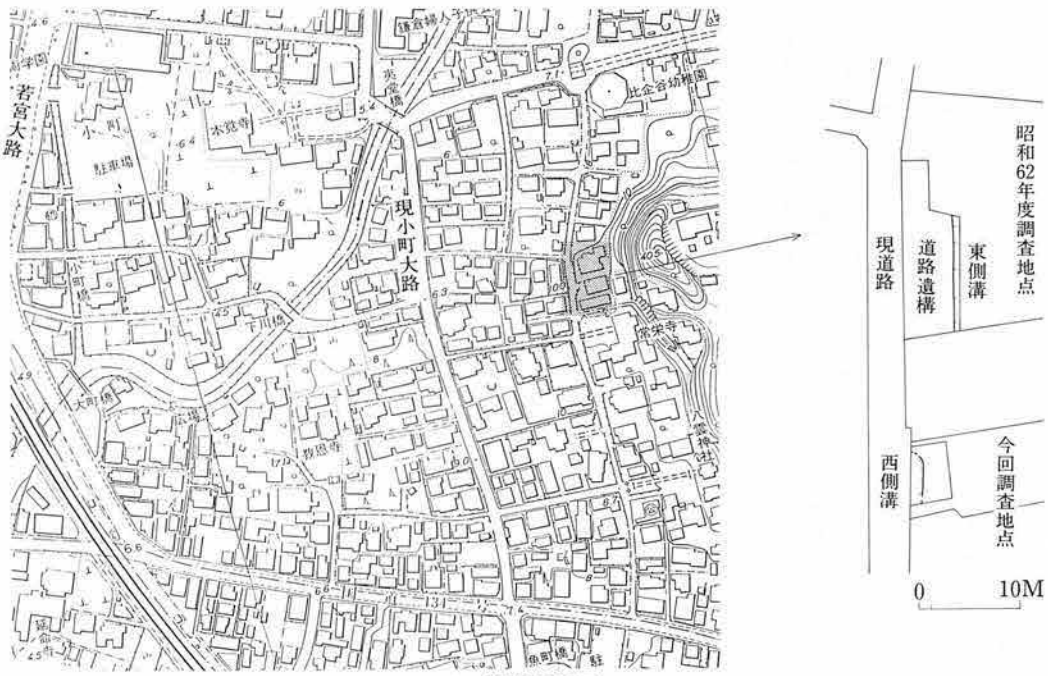


Fig. 5　遺構関係図

PL.1

第1面（北から）

第2面（北から）

第3面（北から）

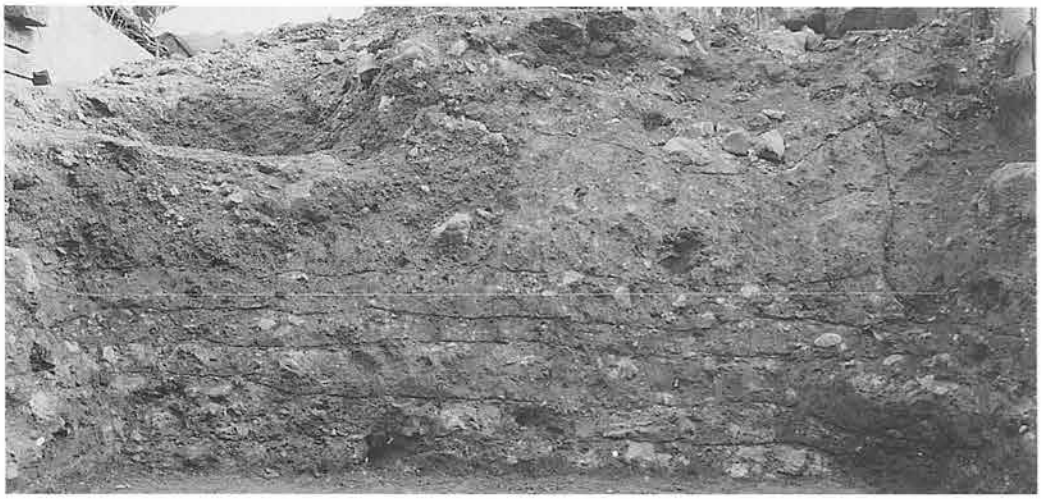
第4面（北から）

PL. 3

▶ 第6面（北から）

◀ 側溝内出土かわらけ

▼ 調査区土層図（東面）



8

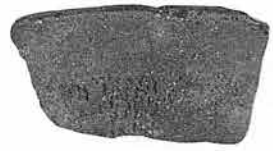
内

外

18

19

内



外

10

11

22

番号は挿図と同じ

PL.5

2

9

3

16

4

5

13

23

14

21

15

6

12

7

番号は挿図と同じ

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　7

平成２年度発掘調査報告

発行日　平成３年３月

編集
発行　鎌倉市教育委員会

印刷　㈱稲元印刷